

奇譚クラス

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

4



1972

※ 創刊以来 毎月 文芸春秋 ※

雑誌 2805-4

4月号 ¥350

定価 1,000円 (送50円)

天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄	前田真知子
首縄横臥二態……	前田真知子
典型的後手縛り……	前田真知子
自由な肢のもたえ……	前田真知子
麻縄と絨肌の明暗……	前田真知子
眩しい視目を味う……	前田真知子
準備態勢OK……	前田真知子
股間縛りの表情……	前田真知子

・本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケニ	関谷富佐子	洗腸賣の序曲	長井葉津子	龜甲縛りの美腿	左近麻里子	關を溶びた柔肌	左近麻里子	狼ぐつわに喘ぐ	中河恵子	賢禪裸身の囈り	梨花悠紀子	賢禪疲れの放心	中河恵子	没我の心境	中河恵子	痛打の末の悦虚	関谷富佐子	沖縄美人の緊縛	座間明子	剣玉子の縛り	佐々木真弓	狂変する裸女	佐々木真弓	狂めくたびれて	佐々木真弓	紅毛驢眼の白人を責める	シラ・ケニ	海老賣の狂態	川路義子	波リウムに挑戦	座間明子	鞭打の下に	関谷富佐子	祭壇の人身御供	渡部好美	開妻は縄を知りぬ	金原加奈子	華麗な開股責め	中河恵子	イルリガートルを前に	長井葉津子	非情な責めの終末	長井葉津子	両手吊りの晒し	中河恵子	柱縛りの完了	川路義子	処女縛りとまどう	三浦純子	麻縄に身をゆだね	中河恵子	盗視するSMの目	佐々木真弓
---------	-------	-------	--------	-------	---------	-------	---------	-------	---------	------	---------	-------	---------	------	-------	------	---------	-------	---------	------	--------	-------	--------	-------	---------	-------	-------------	-------	--------	------	---------	------	-------	-------	---------	------	----------	-------	---------	------	------------	-------	----------	-------	---------	------	--------	------	----------	------	----------	------	----------	-------

·編集部構成

両手挙げ棒責め……川路 義津子
 柱宙縛りに浮く……長井 葉津子
 後手吊りに苦む……佐々木 真弓
 どことも責めて……関谷 富佐子
 鞭の法悦境、許して
 ムチが痛い、
 柱を挟んだ連縛……関谷 富佐子
 花と蛇の静子です……中河 恵子
 針責めをして頂戴……渡部 好美
 二つ折りの女体……長井 葉津子
 猿くつりの哀歌……中河 恵子
 日本式縛りの白人……シラ・ケ丁
 マソの女王に首を……関谷 富佐子
 柱しばりに恥らう……金原 奈加子
 夫婦パレイの慈味……渡部 好美
 長襦袢の艶姿……花坂 道子
 豊満ボインを誇る……愛川 悦子
 美女今縛られる……梨花 悠紀子
 折入態勢充分……前田 真知子
 折檻にも汚れず……関谷 富佐子
 海老責への展開……佐々木 真弓
 責めてみたい猫眼の女……シラ・ケ丁
 日本式高手小手縛……シラ・ケ丁
 猫の目のような女……絹川 文代
 足吊りのある風景……中河 恵子
 亀甲縛り媚態……中河 恵子
 亀甲二輪の花……渡部 好美
 奇責に乱れた黒髪……中河 恵子
 開股縛りの幻想……前田 真知子
 餓悦の前の放恣……川路 義津子
 ハリツケ晒し……左近 麻里子

これから、どうするの？

美しき吊り	前田真知子
苦痛が悦楽か	関谷富佐子
逆エビの魔術	三河純子
愛撫の締め	渡部好美
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	関谷富佐子
浮上した女体	座間明子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄	金原奈加子
高手小手本縛り	川谷木真弓
實味の陶醉境	川路義子
失神したマゾ女	関谷富佐子
前手縛り悶悦	関谷富佐子
往時の彼方天国	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	前田真知子
はげれた狼嚙	梨花悠紀子
可憐な動物	長井美津子
ながし目の天使	川谷木真弓
酒の肴になる	川路義子
妖蛇の洗礼	関谷富佐子
弄弄されるままに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路義子
柱につなげた女	長井美津子
痛さをこらえる異国	関谷富佐子
責の果の詩観	前田真知子
痛打の一瞬	関谷富佐子
ホステス探人生	佐々木真弓

▽賞金△

選外佳作	佳作	選作品	入作品	入作品	入作品	入作品	入作品
作品	作品	第五席	第四席	第三席	第二席	第一席	第二席
五千元	一萬元	二萬元	三萬元	五萬元	十萬元	十萬元	十萬元
10篇	15篇	10篇	5篇	3篇	1篇	1篇	1篇

▽内 容△

[illegible][illegible]

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇氣を奮つて御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国幣、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下さい幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はブレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真をお手元に適当なものがないければ、なくとも差支えありません。

大阪市住吉郵便局私書箱第41号
曉出版株式會社編集部宛

〔緊縛フォト珠玉落穂抄〕

高

手

小

手

佐々木真弓



奇譚クラブ

四月号目次 八昭和四十七年

八第二十六卷第四号通刊第二九〇号

本文

フォト「荒縄の狂奏曲」	八梨花悠紀子	田宮	一	(9)
SM随想「我が意を得たり矣」		柴	利好	(10)
残酷美談「腰元の赤い長襦袢」		牧	高志	(24)
連載S大河小説パロディ「花と蛇」	(五)	山光	純	(26)
パロディ「花と蛇」		提案と願望	大西弘明	(36)
M女通信「被虐の初夢」		高村	浩子	(38)
小説「拷問クラブ」	ク果てしなき虐待	鶴見	浩一	(46)
シリウスII4		谷山久美子	姉告白「私とプレイした人達」	雑感・扇
読みかた・とり	あぶ・らぶす・こんと	水沢	登	(60)
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」	(28)	鬼山	絢策	(66)
切腹研究夜話「花のいのち」		中康	弘通	(80)
佐野みさを責める「ピッコロ狂詩曲」		ロマン	派生	(84)
連載・時代S小説「紫蘭の門」	(8)	風流極道軒		(96)
修飾シ・オートシ・オート	密航者は殺せ	小倉	幸男	(111)



奇クサロン

(228)

私感「躍進二月号を読んで」	北川	好大
想句「M女のお正月」	北川	好大
鼻責めの自作フォト	真鍋	五十二
美しき鼻孔の追求を望む	山田	二
洗腸マニヤの手記	山田	二
イメージ「実」	山田	二
サロン楽我記「第九十四回」	山田	二
フォト「好美の立ち回り」	山田	二
イメージ「巨木の花」	山田	二
希望「辻村隆先生へお願いしたい事」	山田	二
短信往来	山田	二
「プレイへのお願い」	渡部	好美様へ
「表現の楽しき」	田尻	長州様へ
「愛美弘美のフォト」	三浦	敬一様へ
告白「縛りと狼ぐつわ」	安本	
フォト通信「御指導下さい」	安本	
手記「メンスバンドなどのこと」	小倉	
シーズンに想う「縛られた花嫁」	小倉	
大西様に曳き出されて「お願いします」	小倉	
編集部だより	小倉	
フォト撮影がしたい	小倉	
資料を求めて「女斗美雄考」	小倉	
夫婦SMプレイの体験	小倉	
イメージ「縛られるより怖い」	小倉	
劇場面に見る「緊縛シーン」	小倉	
新聞を読んで「この投書に思う」	小倉	
フォト「被虐のポーズ」	小倉	
好きな拷問「石抱き責め」	小倉	
フォト「マゾ男の法悦」	小倉	

美美代のお喋り

「妊娠したって、嘘じゃないでしょ」 福井 桃子 (11)

M男の切腹「福井桃子女王様に捧ぐ」 西村 六夫 (11)

連載小説「大噴火」 八第四十三回 千葉 青鬼 (11)

SMカメラ・ハント「夢多智子の巻」 辻村 隆 (11)

「悦楽の倫理」 辻村 隆 (11)

布告と命令「女王からM男へ」 佐藤 満代 (11)

SMハード・ボイルド「ノイズ・メイカーズ」 佐原陽一郎 (11)

告白「京都慕情」 前田真知子 (11)

連載創作「幻想帝国」 花影 霞 (11)

緊縛プレイ撮影行「白い露台で」 城 章夫 (11)

青春の陥穽「白衣のサディステイン」 芳野 眉美 (11)

読者通信 編集部通 (11)

イメージギャラリー「可憐な花」 志羽利也 (30) ・「カミソリ」 岩波大介 (50) ・「反抗嬢嬢折檻」 岡たかし (55) ・「石抱き寸前」 市原幸三郎 (11) ・「クジびき」 岡たかし (11) ・「運座」 春川サニオ (11) ・「悦びの時」 間たかし (11) ・「吊られるウー」 小川茂正 (11) ・「子守の折檻」 室井亜砂路 (11) ・「よく来たわね」 春川サニオ (11)

緊縛フォト珠玉落穂抄 (目次裏)

「高手小手」 佐々木真弓

「喰い込む縄」 長井葉津子

目次フォト「しびれる手首」 関谷富佐子

〔緊縛フォト珠玉落穂抄〕

喰 い 込 む 縄

長井葉津子



奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年4月号

＜第26巻第4号・通刊第290号＞



古びた雨戸、そして隙間のある床板。無理矢理ぬがされた腰巻を下に敷いて、全裸の若い女が、トゲトゲしい荒縄でガンジガラメに縛られているというSの血が沸きさわぐ光景である。雨戸の合間からの洩れ陽のような巧みな配光に依って浮かび上がった呆然と諦めきったような表情の中に、言うに言われぬ神々しいばかりの美しさが漂っている。

(田宮一・記)

荒縄の狂奏曲 モデル 梨花 悠紀子

我が意を得たり矣

— S —
— M —
— 随 —
— 想 —

—
柴

—
利 好
—



1 小手縛りのこと

人を縛ると言えば、先ず手首の拘束から始められるのが通例で、これを基本として身体その他の部位に及ぶ。従って緊縛プレイでも、その面白さと言う点では多面的ではあるが、重点は矢張り、両手の処理方法にあるように思う。その両手の処理にも色々な方法が認められ、古来の縄法を列挙するまでもなく、身近のプレイの中でも、各人各様の工夫や嗜好習慣が窺われる。K誌、最近号から気のついた例を二、三、拾って見よう。

大橋美代子夫人は「強盗残酷記」の中で、普通の姿勢と柱を背負った姿勢とで、二度の後手縛りを受けておられる。その小手縛りの縄の掛け方が、何れも組み合わせた両手首を単にロープで縦に巻き締められている。つまり縄目が水平に、横に走ってはいないし、十文字の縄掛けでもない。これは或は、この時限りの偶然であったのかも知れない。しかし「組手」方法も、必ず右手を下にし、左手が上に来る一定した小手縛りの習慣を堅守されている位のマニヤ振りなのだから、こうした簡単な縄掛け一つにしても、ある程度、習慣

化しているのではなからうかと想像される。

小田原一郎氏夫人の後手、小手縛りを見ると、初めの時は右に挙げた大橋夫人同様の、縄目が縦に掛けられているだけだった。処が二度目に発表されたフォトでは、組み合わせられた手首の交点に、縛り縄が盛り上がったような、複雑嚴重な緊縛が行なわれている。写真が不鮮明で、それが正確な十文字縛りかどうかは分からないが、少なくとも、その辺に夫人のM化の進み具合を認められる。小弛みもしないであろう、これだけの小手縛りの上に、上膊部の二段の高手縄も嚴重を極めている所から推察して、この姿のままで、二時間余りも「縛られ酌婦」を勤められた、その時の夫人の両掌指は、必ずや赤紫色に変色した事だろう。

紀川和歌子夫人の小手縛りは特徴的で面白い。背中に回した両腕を、いつも思い切り深く組み合わせてあるから、手首がピッタリと合致しないまま、夫々を反対の下膊部に縛りつけてある。しかも、その縄筋の数が左右不均等で、一本だったり、二本だったりしている。時には小手には無関係に、肘下を縛ったりした場合もあり、手首を合わせた正十文字の小手縛りは、少なくともフォトでは、お見

受けされない。

和歌子夫人のこうした小手縛りは、勿論、二の腕の高手縛りが併用された上での事だから恐らく高手小手、後手縛りの完璧を期するために随分と苦心なさった結果として到達された独自の方式だと思う。夫人の全身を覆う他の部位の緊縛状況から見ても、形式や定型には余り拘らない、自由奔放な緊縛プレイを楽しんでおられるご様子と推察される。

処で、後手、高手小手縛りを行なう場合、上膊部を上体に嚴重に縛りつけながら、同時に手首を十文字縄で正確に緊縛する事は、なかなか至難である。即ち、小手の十字縛りを嚴重にすれば両肘が左右に張って腕が開き、折角の高手縛りは二の腕が胸に密着しない。逆に、高手縛りを厳しくすると、小手の十文字縛りが、むつかしくなる。こんな場合、両腕を深く組み合わせて手首から、いくらか上方を組んで十字に縛る事が、しばしば行なわれている。しかし、高手縄が緩くて両腋が空いているのも、小手縄が手首から外れた所に掛けられているのも、マニヤにとっては好ましい光景とは言えない。それで、高手縄を嚴重に締め上げた時は、小手縄を打つ手首は、そのまま真直ぐに降ろして縦長の状態に組み

合わせ、縄目を横に走らせる縛り方が普遍的のようである。

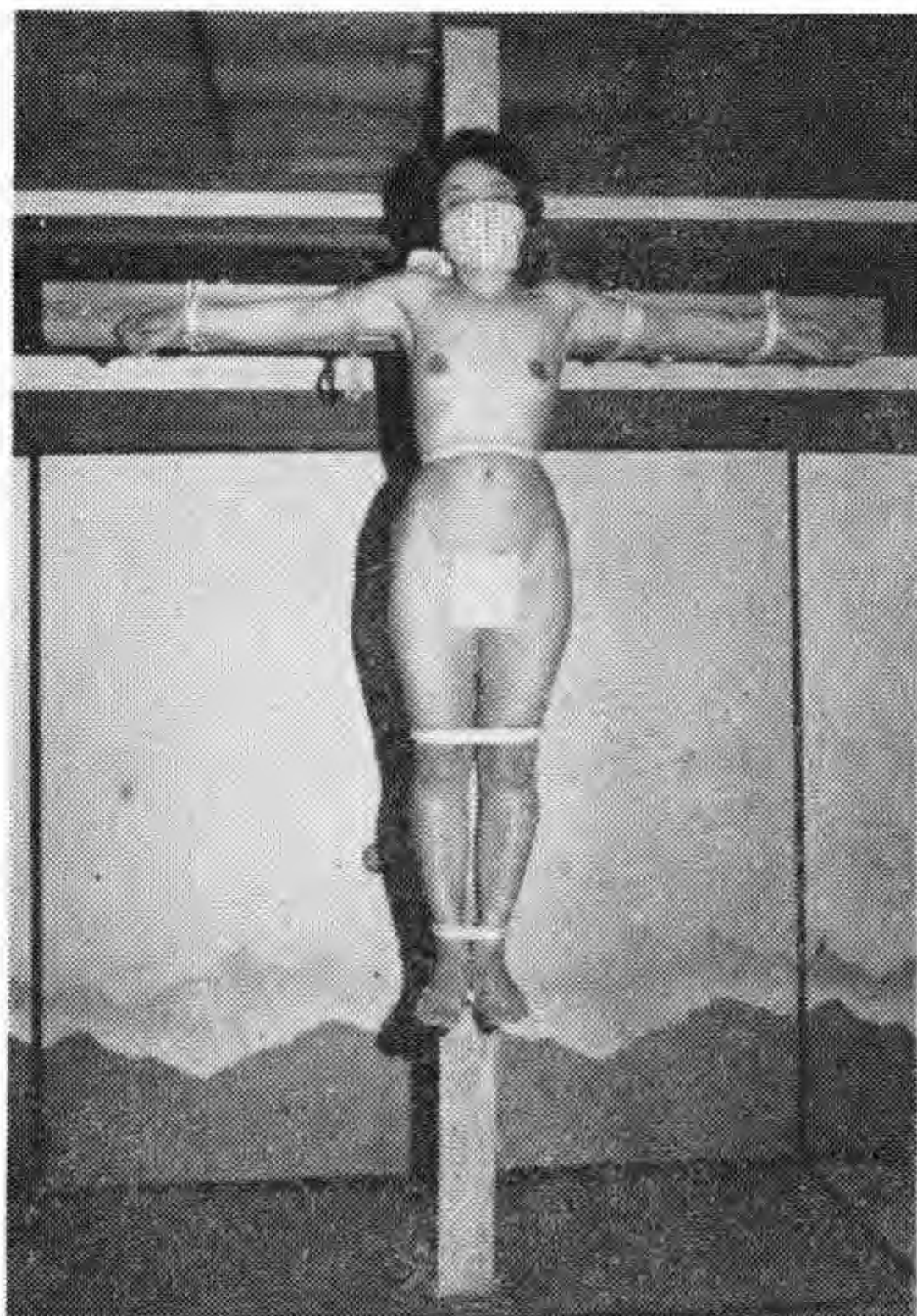
これとは逆に、手首を背中に高々と振り上げて十文字に組み合わせる方法は、元より理想である。十月号のイメージ画「細腰無残」で、こうした両腕逆振りの高手小手縛りが描かれていたが、それは無残に蜂のように細々と締め絞られた細腰の形状と同様、一種の絵空事と解するのが無難である。しかし、山田恭一氏は「縛りの基本方針」の中で、後手縛りの手首を、肩先からのぞくまで高く引き上げる事を主張され、その実行は、初めは腕のつけ根、両腕が痛い、くり返すと馴れてくると説明しておられるから、こうした理想的緊縛に堪えられる方もあるに相違ない。しかし、これは余程、人並外れて柔軟な体質の持主でない限り困難な作業であり、少なくとも万人向きとは申されない。

そこで、嚴重な後手、高手小手縛りを、どなたにでも無理なく完成させる一つの手段として、私は嘗て拙稿「縛り方教室」で、滴水流の緊縛法を紹介した事がある。滴水流と言っても、そうした古縄法がある訳ではない。挿絵の石井滴水画伯が昔よく描かれた縛り方だから、私は左様、勝手に名づけたに過ぎな

いものだ。

この方法は、後手を深々と組み合わせ、両の手首を、夫々反対側の肘近くまで引き寄せる。そして右手首と左肘、左手首と右肘を縛りつける。そうすると、厭でも両上膊部は上体に密着せざるを得なくなる。従って高手縄も思う存分、厳しく締め上げられるのである。

る。背中横に重ね合わされた左右の下膊部の中央も一括して縛り上げ、尚これに高手縄を経由した首縄に連結させる事によって、この後手縛りは一層、完全なものとなる。この方法だと、手首を組み合わせた十文字縛りの美しさが見られないのが欠点だが、兎に角、こうする事によって、力一杯の高手小手縛り



が実現出来る最善の策であると言えよう。

右の緊縛方法を誌上に紹介した折に、誌上でも、モデルを使って試みられるようにお勧めめしたと記憶するが、ついぞ最近まで、この緊縛法による高手小手の写真を見る機会がなかった。処が四十五年十月号「悦虐の甘き戯れ」の中で、辻村隆氏によって、誌上で初めてその完全な実況に接する事が出来たのは愉快であった。被縛者は渡部好美夫人である。

写真によれば、夫人は鏡台前の丸椅子に、裸身を後手、高手小手縛りに縛られて、背面を晒しておられる。この時の小手縛りが問題の滴水流なのである。特筆したいのは、縛り縄の縄筋の数の多い事である。左肘に縛られた右手首に三筋縄。右肘に縛られた左手首に四筋縄。重ね合わせた下膊部中央に二筋縄が厳重に締めつけられていた。そして、二の腕には実に八筋の高手縄がギリギリと喰い込んでいる素晴しさなのであった。

翌四十六年三月号では、須坂旭氏のイメージ画「木馬」で、この滴水流が描かれていたのも楽しかった。この絵では、首縄から降ろされた縄目が×字状に背中を締めつけ、二の腕に喰い入る高手縄に連結している。下膊部中央の緊縛こそなかったが、左右に絞って組

み合わされた小手縄の緊縛度から、充分この折檻の激しさを知る事が出来た。

須坂兄は実際に、こうした方法による緊縛を実行しておられるものか、あるいは、どういうヒントで、この珍しい方法を採用なさったのかは分からない。先に挙げた辻村氏による緊縛にしても、真逆、嘗ての拙稿がお役に立ってというようなことは夢にも思わない。けれども、従前から誌上には是非にと期待していたこの縄掛けを、引き続き二度までも見る事が出来たのは、私にとって、すこぶる嬉しい限りであった。

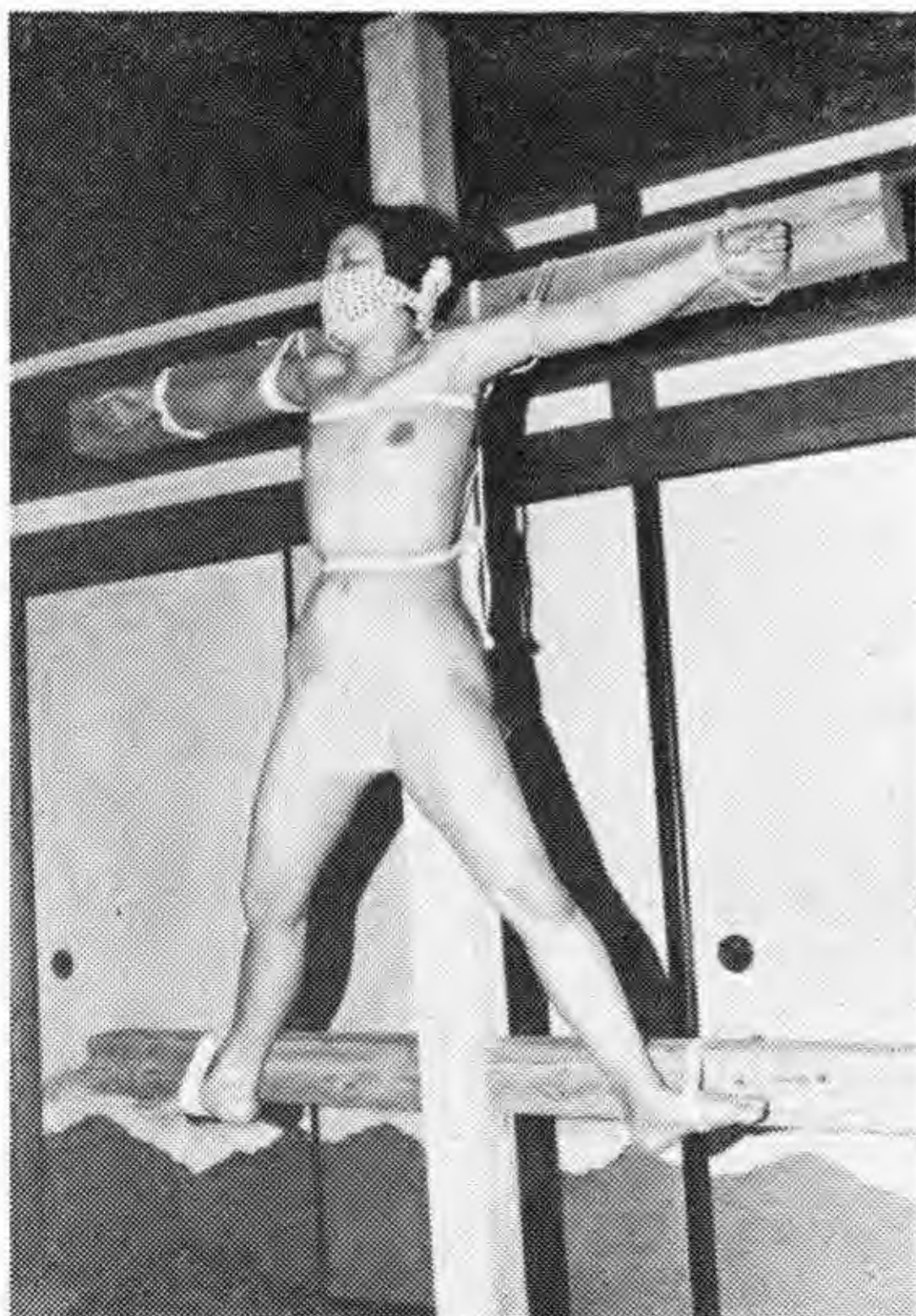
この小手縛り法を、私は「コの字縛り」又は「逆背囊」とも称している。それは、左右の肩から連繫した上膊部、下膊部の形状が、仮名のコの字を上向きにした風にも見え、又兵隊のマントを括りつけた背囊を逆さまに背負ったら、多分こんな姿になると思われるからでもある。何れにしても、この方法を好美夫人の実例のように嚴重に敢行なさって、後手、高手小手縛りの醍醐味を心おきなく満喫される事を、お勧めしたい。

尚、小手縛りに関連して、最近、新宿コマ劇場前に開館したジョイパックスビルの蜷人形館入口に、映画ソルジャーブルーの宣伝写真

で衆知の、インディアン娘の後手、小手縛り人形が飾られて人目を引いている。これは入場しなくてもロハで見られる。流石に良く出来ているのでギョツとする眺めである。お閑の方は最寄りにお出掛けの折にでも立ち寄られるのがよろしい。

2 吊るし責めのこと

私は拙稿「吊るし責め」の冒頭を借りて、吊るし責めが緊縛プレイの到達する一頂点であると指摘した。しかし、その実際については、被吊者に極度のM性と体力がない限り、



満足な結果は得られない。殊に、それが映画演劇の場合は、所謂、補助縄の使用を必要とする事は、それが肉体に及ぼす影響や、苦痛の度合から見て当然と、うなずける。事実、本当の吊るし責めを舞台の上で実行してくれた女性は、私の乏しい経験では忍妙子さんぐらいなものである。彼女については、私はS Mショー実見記として記した事もあり、他の同好の方からも、その凄絶な艶姿に関するレポートも寄せられていたから、ご記憶の方もあろう。

さて、先日公開された東映映画「性倒錯の世界」で、辻村隆氏による見事な吊るし責めの美しさを観賞する事が出来た。映画そのものは一時間半以上にも及ぶ長いものだが、お目当ての「緊縛」シーンは、わずか十分前後に過ぎなかったのは残念である。しかし、その内容は全く見応えがあり、十分に吊るし責めの実態を描写し、成果を挙げていたのは流石であった。この件は既に演出、実技者である辻村氏の直接の筆によって、詳細に語られているから、ここに多言はしない。が谷山、渡部両女史を存分に駆使しての緊縛経過の実景と、吊るし責めの実際の素晴らしさは、いくら褒めても言葉は尽せない。

ご兩人を全裸に剥いて、吊り縄を足首に直接、縛った逆さ吊るし、それに水車への大の字縛り、並びに梯子逆さ縛り吊るし。これらは未だ嘗て映画史上に見られなかった程、深刻な責め折檻の実技であった。これは勿論、緊縛師、辻村氏と二人の真性M女性を得て、初めてなし遂げられた壮挙である。この場面の撮影に要した実際の時間は、相当、長時間であっただろう。ご兩人が本当に縛られ、吊るされた正味時間は、二つの折檻を合わせるに優に一時間以上と推測される。苦痛に歪む谷山久美子さんの逆さになった額に寄せられた深い皺が誠に印象的だった。私は、この僅か十分程のシーンを見て、年甲斐もなく昂奮した。

処で、一月号の杉本弘志氏のご意見では、この両女史について「美しく魅力的というには、ほど遠い醜女で体も汚く、そして顔の表情も、ただ暗く歪んでいるだけなのは、悲しいでした」と述べられている。しかし、私は左様とは思われなかった。外見的に美しいモデルや女優を使った形ばかりの責め写真では到底、味わい得ない真実の残酷美を、両女史の痛ましい姿の中に見出したからである。伊藤晴雨翁は緊縛美女の中に残酷美の極致を

探究された、いわば我々の大先達なのだが、嘗て一度、実際に女が責め折檻されている現場に遭遇された時の感想では、それは美しい処か到底見るに堪えない光景であったとか。所詮、折檻などと言うものは、本質的には美しさとは無縁のものであろう。若しも実際の責め場に美を見出すとすれば、そこに見目、形良い美人画風の美しさではなくして、一般的、美意識から外れた異質の何ものかの発現に俟たなければならぬであろう。その異質の存在の中に何を認め、それをどう解釈評価するかは元より個々の人の任意であるし、それが様々に意見が分かれる所以でもある。

この責め場での両女史が、杉本兄ご希望のように花を欺くような美女であったならば、勿論それに越した事はないのは事実である。けれども、その期待通りではなかった事が、直ちにこのフィルム価値を減少さすものではない。私は、この両女史によって行なわれた場面の中に、言葉では言い現わせない美しさを見出す事が出来たのである。その美しさは単に表面的な美観ではなく、強度のM性嗜好者のみが持つ肉体と精神の内奥から湧き出る恍惚の歓喜によって、立派に裏づけられた美しさとして私の目に映じた。これこそ私が

折に触れて言う本物の価値、あるいは本物と贋物との相違でもあろうかと思う。すなわちこの二人のM性が本物であればこそ、そして、そこで行なわれた折檻が本物であつたればこそ、初めて創り出された哀れにも美しいマゾの妖花であつたと信ずる。それにしても人の心の働き、感覚の相違が個々にどれ程、差があるものか、思えば不思議な気がする。こうした見解の岐路は、S的とM的という立脚点の相違から起こる場合もあり得るかも知れないと考えたりしている。

不思議と言えば、この折檻シーン中、ここから、失笑めいた笑い声が起こった事である。その笑いの主たるや、レスピアンシーンでは目の色変えて息を殺していた連中らしい事を思うと、全く人間の嗜好、物の判断分別の仕方など、正に世は様々と悟らざるを得ない。右に述べた「吊るし責め」に関する美醜についても、何も、めくじら立てて七面倒臭く考える必要もなかったようである。事は、ただ単に、それを美しいと思うか思わないかの相違に過ぎないのであり、どう思おうと勝手なのだから……。左様言えば近頃、手近のショー舞台では、レスピアンが大人気らしく、所謂、残酷物が影を潜めているのは、

マニヤとして寂しい限りである。従つて忍さんや青木順子さんにも絶えて久しくお目に掛かる機会がない。

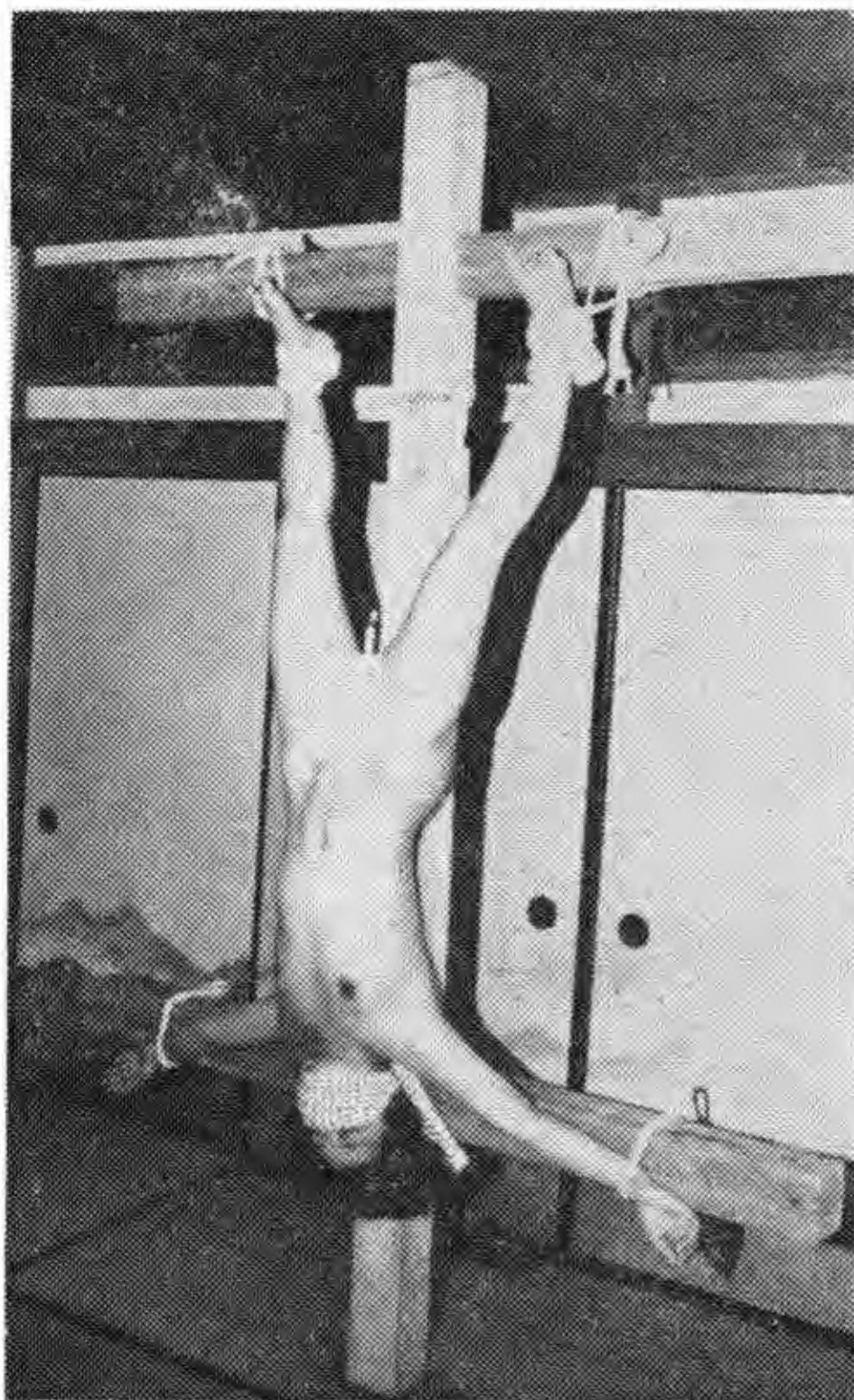
話を戻して、「吊るし責め」こそ、緊縛プレイの精華と断定出来る実証例として、最近の誌上に、この種の吊るしプレイが大層、頻繁に現われる様になった事実を挙げられる。

拙稿「吊るし責め」の実演者例にも見られるように、モデルやエセ者ではない、真性のM女性の多くが、数々の責め苦に堪え、被虐の悦びに浸っておられる。こんな事は以前の誌上では見ようにも見られなかった。私の記憶では、川端多奈子さんが、その先駆者として僅かに挙げられるに過ぎない。川越美佐子さんに至つては、従前は単なる緊縛モデルとして登場なさつたものが、竜珠子と化身された最近の変貌振りに驚かされる。彼女は実に、半日のプレイの中で、至難な、吊るし責めを五種類（膝折り逆吊り、直線逆吊り、四ツ手吊り、俯向けハンモック吊り、Y字開脚逆吊り）も甘受、陶醉されている実情を拝承出来た事は喜びであつた。こうしたモデル嬢のM性向上もさる事ながら、事実、読者側の嗜好そのものも漸次、SM化の度合を深めて来ているのであろう。時代の推移を痛感せざるを

得ない。

それかあらぬか読者からの通信に見られる夫婦プレイの實際に於いても、思いもよらない位、素晴らしい吊るしの実景を拝見する事がある。福井太郎氏は、ご結婚以前から現在の夫人を相手に緊縛プレイを楽しんでおられたと「縄に酔う」の中で述べられているが、夫人が両足を二つに折って、後手、雁字搦めに縛られた上での正位宙吊りの光景は、忘れようにも忘れられない。大橋美代子夫人の如きは、最近では室内に組立式の磔柱さえ特設され、正位、逆位の磔刑を甘受しておられるが以前のご通信によつて拝見した直線逆さ吊るしの素晴らしさは圧巻であつた。誌上に挿入された写真は小型ではあつたけれども、縄目といい、吊り姿勢といい、非の打ち処のない実景として、未だに眼底に灼きついて離れない。逆さ吊るしといい、磔刑といい、夫人のM化進行振りには、全く目を瞠らせるものがある。

田宮寿子夫人は、ご結婚当初、仲々夫君のSM嗜好に追従出来ず、五年目にして、ようやくK誌の直送購読を納得された程だった。それが現在では、夫人の聡明な稟質と夫君の愛情とがSMの花園に美しく結合開花して、



奴隷妻としての典型的貞女振りを示されている。夫君恭介氏によれば、「妻は小柄で吊りには最適です」（夫婦で撮んだ幸福）と述べられているにつけても、撫かき楽しい日常をお過ごしのことと拝察される。拙稿「吊るし責め」の挿入写真として、特に寿子夫人の麗姿数葉を提供して下さった編集子のご好意を心から感謝せずにはいられない。寿子夫人については嘗て台所の柱縛りの余りのいじらしい

お姿に魅了されて、幾つかの駄句を献呈した事があった。それ程、印象の深い方なのだがその後、どうしておられるのだろうか。近況を承りたいものである。

これからも吊るし責めは、多くの夫婦プレイヤーはじめ、マニヤ各位によってしばしば実行される事と思うが、吊るしの中で最も至難な逆吊りに関しては、先号で小竹一浩兄に捧げた一文の中に記した副縄の使用法を重ね

てお勧め申し上げる。これは誰方にでも、至って容易に実行出来る方法である事、請合いだから。それから記録としては、吊るし時間を必ず付記して頂きたいと思う。これは半日位の間に数種のプレイを急がなければならぬ場合は別として、一つの責めに目的を絞ったプレイの場合は、是非とも、お忘れなくお願いしたいと思う。この緊縛経過時間は、吊るし責めに限らず全てのプレイにも大切な事柄だが、特に吊るし責めに於いて重要と思われるからである。

3 胴鎖のこと

奴隷妻の証としての胴鎖の価値については多くの意見もあろうが、夫君の飼育を甘受している奴隷妻諸姉の間に、この胴鎖の常用こそ、夫婦結合の象徴であるとして受け容れ、従順に実践しておられる方々の実在を、幾度も誌上で知る事が出来たのは、この上もない喜びである。

「鎖で繋がれる」と言う事は、元より肉体的自由を束縛される拘束状態を意味する。それは多くの場合、囚人、奴隷に代表される特殊な社会でのみ実施される。しかも、その事は

大衆に何等の抵抗感もなく、当然あるべき姿として容認されている。言い換えれば、囚人奴隷の自分であればこそ、鎖で繋がれているのであって、この事は社会的自由人に対する処遇とは全く無縁の筈なのである。それにも拘らず、あえて「鎖」を求めて、自らの肉体を惜し気もなく被拘緊者としての地位に置く奴隷妻の心情に思いを致す時、その哀れさといじらしさに胸打たれるのである。

それでは、何が彼女達を左様にさせたか。緊縛、吊るし、鼻虐め等、多彩な嗜虐生活に明け暮れておられる大橋美代子夫人は、その被虐の感情の依って来るべき原点を、いみじくも夫婦の情愛に求められていられる。これについては、すでに先号の拙稿中に同夫人の告白文「被虐鼻」の中の数行を引用したが更に引き続いて「強盗残酷記」から同様の、ご高見を抜萃させて頂く事とする。

「夫にかけてもらう縄は、たとえ、それが、どんなに厳しくかけられた縄目であっても、この苦痛の中に、ほのぼのとした夫の愛情が肌で感じられるのです」

この言葉こそ、世の多くの奴隷妻諸姉の偽りのない情感の発露だと思う。この純真な愛情と感覚があればこそ、甘受出来る被虐の陶

酔であり心の中に燃え上がる歓喜でもある。従って反対に、こうした感覚的資質を持ち合わせるせない女性は、奴隷妻としての飼育には当然、不適当と言わざるを得ない。とは言え、こうしたM化に対して全く理解を持たない、あるいは、それを嫌悪さえする妻があったとしても、それを理由として夫のS意に反する悪妻として非難するべき性質のものでは決してない事を、お断わりしなければならぬ。思い起こせば数年前、例の「憎縄の記」が発表された時、この一文に対する多くの議論が沸騰した事があった。当時の、その批評文の内で非常に心打たれた能美積氏による次の文章を掲げ、夫の愛を身体一つに受け止め、ひたすらSMの世界に幸福を追求する妻の姿を偲ぶ、よすがとしよう。

「あなたのように優しく愛してくれるのだったら、あたしは、どんなに、きつく括られても平気よ。あなたを愛態だと思ったのは事実よ。でも今は、そうは思わない。あなたに喜んで貰えるのなら、どんな辛い事だって辛いとは思わないわ。あなたの愛を一番、惨めな姿態で受け止めても、そうすればするほど、素晴らしい赤ちゃんが、授かると思うの……」
(女と縄のある限り)

ここで明確に言える事は、奴隷妻に甘んじ得られる女性に限って、少なくとも悪妻である筈がないと断定出来るのではあるまいか。国川栄一氏が、嘗て今田夫人はじめ、悦虐生活に身を委ねる妻女諸姉に対して「貞女」と言う言葉で称讃されたのは、決して理由のない事ではない。私は敢えてここに、奴隷妻貞女説を声高く主張するものである。そして、奴隷妻の細腰深く喰い込む胴鎖こそは、夫婦プレイに於ける一般的緊縛行為が更に一段と進化したものであり、愛情によって浄化されたM性が、より一層、強く発揮された物的証拠であると解するのである。

処で、紀川正信氏から初めての玉稿を拝見したのは、四十五年十月号であった。立ち縛りで頭からパンティーをかぶせられたり、細引が乳首を横断する和歌子夫人の責め写真を楽しく鑑賞してから半年の後。夫人の腰に、いくつかの鈴をぶら下げた腰縄が締められているフォトを発見した時、私は一つの可能性を秘かに期待したのであった。それは、この腰縄が、私だけの偏見からか、鎖のようにも思われたからであった。たとえ、それが鎖でなかったとしても、紀川氏は今後、恐らく近い将来、必ずや胴鎖に進まれるに違いないと

直感したのであった。

果たせる哉、この私の期待は半年後に実現した。すなわち、十月号に於いて、遂に鎖パンティーが登場したのである。兄は、この号に寄せられた屋外フォトによって、鎖パンティーと白いロープとの対比を狙われたのだが今後、鎖の数を増やして緊縛感を与え、鎖ブラジャーもして見ようと申された。その上、「妻にクサリの緊縛度や、縛られ具合の感想を書かそう」とまで言明されたのだった。この時の鎖パンティーの写真で惜しまれたのは下腹部に走った横鎖が、体側の縦鎖に連絡して、ヒップを一周していなかったことで

ある。つまり、ウエスト同様ヒップにも一巻きでも鎖が一巡していれば、もっと美事な緊縛感が得られた筈であった。ともあれ、ここに、またしても奴隷妻らしい奴隷妻の新たな誕生を迎え得られたことを率直に喜んだのであった。

そして、兄のお約束の通り、一月号では和歌子夫人の告白文と鎖下着姿を拝見することが出来た。しかも、このフォトでは、十月号のような中途半端な鎖目は、最早、見られない。山本富子夫人や小竹雪枝夫人の再来かとも思われるばかりの、全身の鎖縛りが施されている。私は敢えて夫人に対し「奴隷妻第四

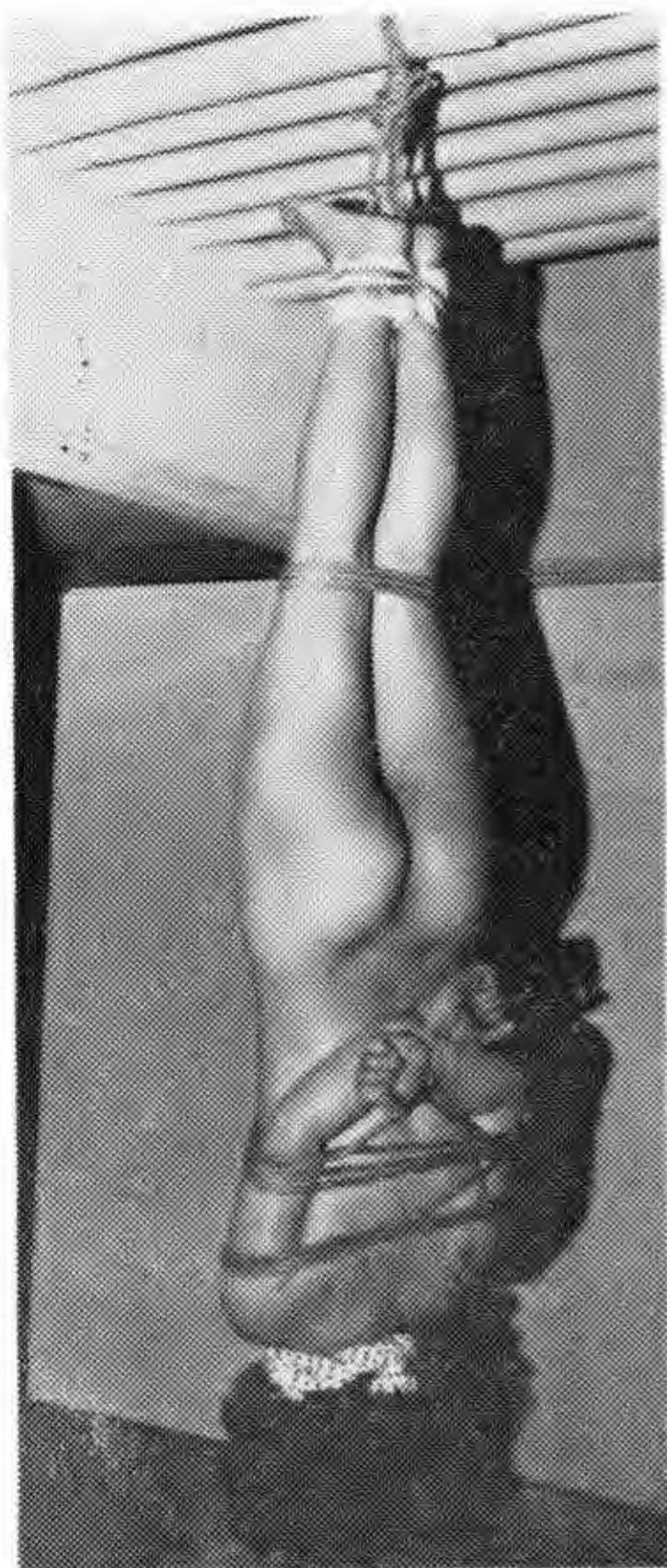
の女」と、呼びびたいと思う。夫人によれば「肉体的な責めよりも、色々な羞恥責めの方が女の身にとっては辛い」と、申されている。成る程、左様、言うものかと首肯されるが、この言葉の裏には「肉体的な責めならば大抵のことなら堪えぬかれる」との意味合いが含まれていると言う解釈も成り立つかも知れない。

更に夫人は「何卒、私たちのため、御注文やお叱りの御言葉を賜わりますよう」との謙虚さ溢れる申し出をしておられる。そこで臆面もなく愚見を述べさせて頂くならば、

1、鎖の締めつけ加減を全般的に今少し強化なさっては如何。

2、上膊部と太腿にも腿縛りを実施して、鎖スリーブ、鎖ホット・パンツをお作りになつては如何。この鎖スリーブはブラジャーの脇鎖に連結することによって高手縛りになり、鎖パンツは両腿の内側部分を連結すれば直ちに太腿錠に代用される利用価値を持つ。

左様なれば夫人の全身を覆う鎖は、すでに下着の域を脱して、それは最愛の夫君正信氏から支えられた最高の贈り物「奴隷衣」その物になると思う。



この奴隷衣は絶え間なく夫人の裸身全体を責め続けることになる。夫人が「最初、手を後ろにまわされて縛られてから」次第にエスカレートした貴ご夫妻のSMPが、ようやく到達なさった現在の境地が、この鎖による緊縛であるからには、その鎖による悦虐の成果を、尚一層、完壁化される意味で、右記の注文を是非共、実現されることを望むものである。

さて、十一月号では代表的全日制奴隷妻であられる山本富子夫人の艶姿を、久方振りに拝見出来て懐かしかった。夫君武男氏の玉稿「わが夫婦とクサリ」によれば、兄には愚生かねがねの主張を採り上げられて「夫婦プレイに於いて奴隷妻の証としての胴鎖を四六時中締めつけていることに愛情の度合を確認」なさった。そして去る七月一日から富子夫人に対して、従来の鎖下着に替えて鎖丁字帯を着用させ、施錠によってクサリの締め具合の調節を図られているとのことである。

この施錠は腹部に当たる鎖の継ぎ目に、小さな錠をつけてあるのだが、その日の気分によってクサリの締めつけが簡単に交えられることが、富子夫人に大変お気に召しているらしい。ここに述べられた「その日の気分」と

は私流の解釈では「もっと厳しく鎖を締めつけて欲しい時」と言う積極的な意味があるのであって、「苦しくて堪まらないから緩めて下さい」と言う消極的なものではないように思われる。貴山本家では、これを最早、必需品として愛用なさっておられると言うことだし、玉稿の末尾を「愛用者が多くなれば……と考えるだけでもゾクゾクしてしまいます」と結ばれている辺り、奴隷妻の証としての胴鎖緊締に対する並々ならぬご熱心と、同好者の増加に寄せられる熱意と期待の大きさを窺えて欣快に堪えない。

最近、金属、特に鎖製品の装身具が流行し始めている。従って、昔は何か特殊な物質と思われ勝ちであった「鎖」そのものが、単なる拘束具と言う觀念から脱却して極く身近な存在として容認されて来ていることは、否定出来ない。こうした鎖に対する親近感が若い世代に定着したことで、「貴方好みの女になりたい」と奴隷化を歌い上げた女性達によって割合、抵抗感少なくソフトなムードの内に胴鎖や鎖下着が愛用されるようになったと仮定しよう。そうなればS・M・Pの分野にも新たな道が開かれるのではないかという期待すら、持たれる。今日までの胴鎖愛好者を仮

に古典派、乃至、本格派と呼ぶならば、こう言う新しい傾向の人達は、さしずめ、ソフトムード派とも言えるだろう。

世の全てのM化女性の間に、本格派、ムード派の、いずれにせよ、奴隷妻の証としての胴鎖の緊締が普及一般化したとしたら、さぞかし愉快だと思う。左様なると、全国の洋品店やデパート等でも、様々な形式の意匠を凝らした施錠式胴鎖が続々と発売される。それらは、ひたすらに緊縛のみを目的とした本格物からガードルやコルセット代用の物、あるいは貞操帯を兼ねた物等々に至るまで、有名メーカーによって智慧と技術を競って製作販売される。結婚式場では、花嫁に対し、エンゲージリングの代りに「スレイブバンド」としての胴鎖が与えられることが通例化して来るかも知れない。遂には、その式場で花嫁に着帯施錠するまでになることも考えられる。銭湯とか、海水浴場、プール等では殊更、この胴鎖を誇示する風潮すら生まれ、「まあ、一寸、見て！あの女、奴隷妻よ。羨ましいワ」と言うことに、ならないかなあ。仮に私のこれらの妄想が現実化したとしたら胴鎖の緊縛は「慕情」で述べた羞恥責めとは全く趣きが違って来る。最早、胴鎖は夫の愛撫に恵

まれ、身も心も幸福の高嶺に咲き誇るM妻の証としてのチャンピオンベルトの榮譽に輝くのである。

M妻と言えは思い出される佳人、安井喜久子夫人は今、どうしておられるのだろう。ロープ・ブラジャー、腰縄つきで台所で責められたり、一頃は複数プレイまでして、あんなに活躍されていたのに、誌上から遠ざかられて久しい。無理な注文かも知れないが、ご家庭の環境さえ許されるならば、白いロープを金銀に光り輝く鎖に替えて、プロポーションの美しい瘦身も、くびれよと美々しく締めつけられた、まぶしいばかりの鎖姿を、いつの日か拝見したいものである。

尚、山本氏ご夫妻に対しては、今後は、この胴鎖の緊縛を愈々厳重に恒常化せられると同時に、これを基本として従前にも劣らぬ美しい鎖下着の製作、着用についても、ご夫婦相携えて一層、ご研鑽あらんことを切望する次第である。

4 装身具のこと

近頃、外出に楽しみが一つ、増えた。それは若い女性達の服装が、多分にSM嗜好に叶

う流行を見せつつあるからである。嘗てマニヤを虜にした「ビザール」誌には、極端に高いハイヒールや、膝元から更に高腿まで達するブーツの写真が毎号、掲載されていた。こう言うSM的製品の使用が、当時欧米の女性風俗の一般的傾向であったとは思われない。が、少なくとも左様した品々を公然と使用出来た海外の実情を、それが風俗習慣の違いとは言え、大いに羨んだものだった。

処が、どうだろう。昨今、我が国でも、これ等の商品、なかならずブーツが街中に溢れたでさえ美しさを増した若い女性達に愛好されて、女性美を、いやが上にも助長している。殊に今冬は一種のブームの到来を思わせる。

このブーツの魅力の特徴は、昔から我が国でも使われていた長靴や半長靴では味わえない緊縛美を女性達の脚線美にプラスした点にある。しかも、その美しさは、従来からある乗馬用長靴の持つ味わいと、異質のものである。乗馬用長靴に対する倒錯嗜好は、所謂ブーツフェティッシュとして早くから認められもっぱらM男に対するS女の権位の象徴であった。そして、その嗜好は変態性慾病理の中の節片淫乱症の一つとして、独立したジャン

ルを形成している。ただし、私には緊縛感を伴わない女の乗馬用長靴には一向、楽しさを感じない。いわゆる、旧態のブーツフェティッシュの側から見れば、現行のブーツもM性を掻き立てられるS的物質として受け容れられているに相違ないし、女性の中にも、これと同様の感覚を持つ人もあらうと思う。

しかし、現在流行の、このブーツは、これを愛用する女性側に、男性を征服する、つまり女性上位的感覚より以上に、自らを拘束するM的感覚が多分に感じ取られる。ただし、これは私独りの僻見であるかも知れないが、こうしたM感覚に加えて外観的にエロティックな情緒的魅力が加わっていることが、一段と強く男心を捕えるのだと思う。

これらのブーツで締め上げられた女性の足は、太ければ太いなりに、細ければ細いで、それぞれの美しさがある。その美しさは素足やストッキングで飾られた場合より、以上に魅惑的でさえあるのは、ひとえに本来の足の容姿の欠点が矯正される結果である。が、それを見る側の立場からすれば、今一つの要素すなわち緊縛感と言うSM的感覚が視覚を通じて伝達されるからに外ならない。つまりSM的美観と言えるところ。

鳩目や紐かがりの金具が二〇個も並んだ編上式ブーツでは、締め紐による緊縛感が私の心を楽しませる。特に足首が細く引き締まって腓の上下に全く革のたるみがなく、編み上げられた脚線美は堪まらない。更に伸縮性の強い擬革で作られたブーツの艶やかな光沢や緊縮感も魅力的である。しかも、それが太腿高く締めつけた上縁部を尾錠で厳重に止めたものは、肉厚の白い腿が、その緊縛でくびれたその風情が、正に最高の魅力なのである。

太腿と言えば、私は先に「慕情」の中で、羞恥責めに関連し、女性の腿の魅力について述べた。その中で、革紐だけで締め上げたサ
 ンダル・シューズの、その革紐を倍の長さにして、高腿まで締め上げることが提案した。処が先般、封切られた東映映画「手八丁口八丁」で、私の希望にピッタリ合致したサンダル風俗が採用されていたことは愉快この上ない。超ビキニで、殆どストリップの踊り子の舞台姿に近い恰好のフラワー・メグが太腿のつけ根まで届く革紐のサンダル・シューズを厳しく締め上げて暴れ回っているのである。

世は性の開放時代とかで、我々の身边でも左様した傾向が漸次、なんの不思議もなく習俗化されてくるだろう。従って、SM的傾向の衣裳や風俗も次第に繁昌するものと思われるだろう。



る。これからは何も諸外国の事例を、とやこう羨むこともなくなるに違いない。

太腿縛りに関連して、最近号で大変興味ある通信文を拝見した。それは三重の安藤氏からのご寄稿である。すなわち兄は、山本富子夫人の鎖下着に加えて、鎖による太腿縛りを提案されている。太腿のつけ根を、左右の腿の間に鎖を8の字型に掛けて緊縛すれば、一層、夫人の下着の股間鎖が生きて来る。しかも、いくら緊縛しても、それ

による歩行上の障害は余りない、とも説かれているのである。

実は、この腿縛りについては、私も、かつて四十三年七月号に、同氏のご提案と殆ど同趣旨の投稿を挿絵入りでしたことがあった。私は、これを8文字方法と呼んでいるが、その時の提案では、一旦、8文字縛りをした両腿を、更に一つに合わせ一巻きした上、両腿の間にも縄を差し入れて厳しく締め上げる中締め方式を併用したものであった。ただしこれは縄による緊縛法として記したものだから、鎖縛りでは、いささか趣きが異なってくるだろう。

安藤兄は「慕情」その他、数度に及ぶ拙稿
 奴隷妻シリーズを、実に丹念にご精読下さっ
 ておられるありがたい方なのだが、太腿縛り
 についても愚生と同様のご高見を承ることが
 出来たのは全く奇縁と言う外はない。同好の
 マニヤとして、ご芳情の程、深くお礼申し上
 げると共に、今後共、何分のご教示を賜らん
 ことを願うものである。

さて、我が国では、女性の装身具として腕
 環、足環の類が一向に常用化されないことが
 私の大きな不満であった。女性風俗そのもの
 が頓に露出度を増した現今では、健康美を誇
 示するために浅黒く肌を焦がすのも一方法に
 違いない。しかしそれだけにとどまらず、そ
 こに何等かのアクセサリーの使用が、もっと
 一般化されてしかるべきだと私は思う。それ
 かあらぬか、昨夏辺りから、多くの金属や鎖
 を素材にした装身具が市場に出回って来た。
 そして腕環、足環の類も漸次にはあるが、
 左程の不自然性なしに使用され始めた様に見
 受けられるのは将来に向かって楽しめる傾向
 である。

⑥ 処で、八月二日夜、何の気もなしに回した
 チャンネルで、思い掛けない女性の美しい
 足環姿を見ることが出来た。それはTBSナ

イトUPで、現代の服飾問題を主題として討
 論した番組であった。若い世代の数人の集ま
 りを司会したホステスが誰であろう「城下町」
 の安井かづみ氏であった。この時、かづみ女
 史の右足首に巾五センチはあろうと思われる
 金属製の足環が、固く嵌め込まれていたのだ
 であった。その時、討論者グループの背景を成
 形していた数名のモデル達の中にも、足環を
 嵌めた娘がいたように憶える。それにしても
 その時の女史の足環は、如何にも彼女の容姿
 に適合して、一種の幻想雰囲気さえ感じられ
 た。彼女は日常、時折こうした足環の類を使
 用しているのだろうか。又は、その使用は番
 組のテーマに合わせた、その場限りの姿だっ
 たのか。あるいは足環の使用に関してどれ程
 SM感覚が働いたものか。更に彼女のSM観
 は、どうであろうか等々、全く知る由もない
 事柄ではある。ただ、ここで言えることは、
 女史のような若い人達に影響力のある方が、
 こうした風俗を積極的に取り容れられるなら
 ば、それに連れて、こうした風俗が次第に流
 行する契機となるであろう、と言うことであ
 る。

八月十五日、日曜日の午下が。国電中央
 線で乗り合わせた、若いカップルがあった。

連れの女性が、ここでは問題なのである。彼
 女は濃緑色のノースリーブのボディシャツと
 同色のホットパンツに身を固めていた。靴下
 は淡い墨色、靴は流行の踵の太いハイヒール
 だったが、その色は黒か茶か憶えていない。
 身長はそれ程、長身ではないが、それなりに
 プロポーションが整い、身体つきも固く引き
 緊まって健康的である。容貌は丸顔で先ず先
 ずの当世風。それから受ける印象は従順らし
 く思われた。そして彼女は、惜し気もなく素
 肌を晒している左腕の上膊部に、巾六センチ
 ばかりの太い金色のアームレットを嵌めてい
 た。この腕環は、腕囲りの太い所を、サイズ
 の小さいものを無理に嵌めているので、腕環
 の両端が合致せず、二センチ程も隙間を残し
 たまま、ムッチリした二の腕の内側に深々と
 喰い込んでいた。しかも、その腕環には、な
 んとその外側に直径三センチ程の金環が埋め
 込まれていて、それが丁度、銅壺の取手のよ
 うに、ぶら下がっていたのであった。これを
 嵌めているご当人には、別段の意味合いがあ
 ったのことはなかったかも知れない。が、
 これを、いわゆるSMの色眼鏡で見ると
 この腕環は使い方次第では直ちに手枷にも足
 枷にも、なり得る風情を示していた。

新宿辺りで下車した、この若い二人連れはどこへ出掛けたのだろうか。ボーリングか、映画か？ それにしても、彼等二人きりで閉ざされた私生活は一体、どんな風なのだろうか。もしや、こういうタイプの若い人達がSMプレイに進むのではあるまいかなどと、私の推理は例によって根拠のない勝手気儘な白日夢の世界に、さ迷うのであった。

5 SM夫婦TV出演のこと

お茶の間に侵透するSM的TV番組は、それがご時勢とは言え、次第にその深刻さを増しつつあるようである。緊縛一つを例に取って見ても、秋山夫妻の残酷ショーがブラウン管から初めて飛び出した時のマニヤの喜びようはなかった。ついで緊縛師辻村隆氏の、ご出場に及んで、益々SM嗜好は高まったようである。しかし如何にポルノ時代だからと言っても、緊縛愛好者夫婦が、直接TVに出演しようとは思ひ掛けない出来事であった。それは九月二日、フジTV 8チャンネル「三時のあなた」と題する番組である。この番組は、高峰三枝子、山口淑子と言ったベテラン女優によって、交替してホステス役が受

け持たれ、二、三十人の視聴者代表を前に、その折々のテーマに応じた何人かのゲストを呼んで行なわれる午後のワイド番組である。

実は私は、事前にSM夫婦出演のことを知らなかった因果で、折角のこの貴重な番組を見逃がしてしまったのである。仄聞する所によれば、その時、出場されたマニヤの方は、ご主人が四〇近い瘦身、細君は二〇才代の体格の良い女性で、夫婦生活の一環として緊縛プレイを交互に縛りつ縛られつ、楽しんでおられる情況が交々語られたのだそうである。

流石に、ご兩人による実演こそはなかったようだが、そのスタジオ内に並み居る多くの観衆は一体、どんな気持で、このSM夫婦の話を傾聴したのだろうか。観衆の多くは、いつも中年の女性が多いにつけても、奥様連中が、夫々の家庭での夫婦生活の実際と引き較べてどんな感慨を持たれたであろうか。SMも遂にここまで来たのかと嘆ぜざるを得ない。正にこの一件は、SM番組としては稀有の出来事と言っても良いと思う。従ってK誌上で他の誰方かによって、その逐一が報道される事を期待しているのだけれども、未だに、その噂も聞くことがないのは遺憾である。どうか当日の番組視聴者からの詳細なレポートを望

んで止まない。あるいは、このTV番組の企画者、スタッフの方々、放映現場担当者、当日の司会者、又は当日の参会者等に極く親しい方でも居られたならば、その筋々を通じてでも、別のなんらかのルートによってでも、その日の実際の有様を窺い知ることが出来たらと思う。

辻村氏によれば、フジTVでは小川宏ショーでもM女性を登場させてSMを語らせるプランがあるとか。この方面に相当、意図的であるらしい。マニヤに取って見逃がせない番組でも、事前に詳細が分からない悲しさ。こんな場合、殆ど実見する機会を逃がしてしまうことの方が多いのは残念でならない。嘗てTV番組、首斬り浅衛門での小川真由美さんの囚衣菱縄姿を見逃がされた砌の早木夢二大兄の無念さもさこそと合点されるのである。

付記。「性倒錯の世界」刺青の場面の中に私が先号でご紹介した刺青嬢、阿部明恵さんの姿を見掛けた。同嬢の耳に穿孔して飾られたイヤリングが、美しいカラーで撮されていたことを筆のついでにお知らせして置く。

(完)

(挿入写真は橋本美代子さん提供)

残酷美談義

腰元の赤い長襦袢

文と絵 牧

高 志

「闇の中の魑魅魍魎」と云う時代劇映画の中に、不義密通の科で男と共に捕えられ、加賀まりこの扮する姫御前の前に曳き裾えられて心中同然惨殺される腰元の姿が数カット、挿入されている。

この女優は、さして鼻筋通った美しい顔の持主とは云えないが、一応お説りの紫矢耕の裾を曳き、立矢結びの黒帯に白丸ぐけの帯締めを締めたままでは無難であったが、カメラが正面を向くたびに、裾が心持ち左右に三角形に開いて中から赤い長襦袢が見えていた——その長襦袢の出し方が不思議にカット、カットで違っていた。初めから無関心ならいざ知らず、ほんの少しでも、かかる処に関心を持つ御仁には甚だ以て不満な印象を与えたものと云わざるを得ない。

これは何もこの映画ばかりでなく、芸娼妓の登場するテレビドラマでも同じことで、セ

リフの二こと三こと取り交わす間に裾のあたりが大巾に違っていたりする……だから、さではスタッフ一同、撮影の途中で然るべく息を抜いたり油を売りやがったな……などと思いたくなるものだ。

確かに女の裾から出した赤い長襦袢の量が多いの少ないの問題よりは、セリフのやり取りや、その時のムードの方が、より大切かも知れないが初めに採ったコスチュームの姿態だけは途中で崩さずに全場を通して欲しい。

最近映画や芝居での時代考証が、でたらめ、江戸時代の娘が追いつめられて裸にされると結構、現代調の白腰布のついた腰巻を締めていたり——と云っても、この白と赤の調和は誰が作ったものか、筆者は和風下着の傑作だと未だに信じているものだが、だから嘗て喜劇風に描いた町奴と旗本との対決をカラーで撮った、岡本一平原作の「刀を抜い

て」の中に、町娘が裸にされ後ろ手に縛られて満座の中で、なぶりものにされるシーンがあるが、この時の娘は白い腰布のない赤一色の湯文字をゾロリと締めていた……時代考証が余りにも忠実過ぎて色気半減と云う処。

話は、とんだ横道に入って藪から蛇が出た感じだが、総じて腰元だの芸妓や町娘などが裾を曳いて裾の間から赤い長襦袢の陰翳する風情は古今を問わず例えようのない風俗詩の白眉だと思考する次第だが、これが山窩小説の三角寛氏の推奨する赤木綿物だったりネルや人絹物だったりすると艶消物で、贅沢のようでも錦紗か一越の朱無地が何と云っても最良である。また、くどいようだが本当は、ただの赤い長襦袢ではなくて、黄色を混ぜての緋色の長襦袢なのである。

さて、「闇の中の魑魅魍魎」の腰元に戻るが、縛り方は両手首を一寸、縛っただけで、何となく観念した姿が頂けなかった。矢張り月並みかも知れないが、胸に二巻位の縄をかけるべきで、しかも例の裾から出る緋の長襦袢は腰元の最期を飾る意味から云っても、この際もろに出しても決して出過ぎたこととはなかった筈なのに……乱れた一幅の絵が絵とならずに終わったことは誠に惜しい。演っている御本人も演出役の監督さんも案外、無関心だったかも知れない。

そこで……と云う訳ではないが、およそ人

間の描く絵など云うものはレンズを通した写真と違って、奇想天外なことを筆が、つい滑ったなど云いながら、腰元を演出することが出来るものだ。

と、申しても挿絵自肅の折柄、おのずと脱線の幅にも限界があり、精一杯、暴れた処が挿入の挿絵であって、そのあきれた結末に至る迄の経過は一応、このようなのである。

どうせ「闇の中の魑魅魍魎」の腰元と共通する腰元なら姫の居る居間から曳きずり出して庭の立木に縛りつけたって文句はない筈。

ただの後ろ手だけでは生緩いから、荒縄をきっちり

胸にかけた後ろ手、高手小手に縛りあげる。

本来なら荒庭の上へと云いたい処だが、自他共に更に羞恥を増すために、自分の汚れた湯文字の上へ坐らせる。そして、それを誇張するかの様に、同じく経水のついた自分の赤い湯文字で猿轡……。

さて問題は裾のアレンジである。まず裾と呼応するには上半身肩のところを思い切り抜



いて緋縮緬の長襦袢を出させてみる。肉太の腰元なら安心だが、団鬼六先生のように何でもかんでも裸にして行くと、あばら骨の出た女性に、ぶつかるから用心が肝要だ。

男性の衆目の蒐まるところは立っても坐っても女の裾なのだから、絵師金蔵の好むと好まざるとにかかわらず、思い切って矢絰の前を真一文字に開けてしまふ。上品に行けば緋

幸か非情の雨が降って来た……と云う、一連の想定である。

猿轡からのぞく腰元の目からは悲愴感も余り湧いて来ないが、夢二式な、うつろのまなこで、あらぬ処を眺め、やがて首と胸が離れ離れになる自分の運命を想い浮かべたところが少しでも察せられたら幸いである。

の長襦袢が出たところで手を打つべきだが、筆が滑れば、その長襦袢も更に左右に拡げて真赤な湯文字を出させてみる。どうせ赤い湯文字を出す位なら序でに真白なふくら脛をのぞかせてもパチは当たるまい……。

……と描いて来るうちに、胸やお腹を突いて殺しても色気がないとするなら、残酷味のある打首の方が、よりサジスチックで面白いだろう……と来た。

腰元の前には長方形の血溜め穴が早速設けられた。もうこうなれば風前の灯同然……だが、どうした訳か斬り役が、なかなか登場して来ない。その内、幸か不幸か非情の雨が降って来た……と云う、一連の想定である。

——(おわり)——

花

と

蛇

(五)

パロ

山光

純

訣れの宴

一
昼過ぎからつづいたパーティも、ヒロインの桂子の大熱演によって、時のたつのも忘れられている。

その若く張りきった肉体を、ぐっとエロチックに誇張した奇妙な拘束具姿の、元のお嬢さんには、もはやどんな反抗も許されはしない。仮に何かで反抗的な態度をみせれば、みすみす邸の連中の術中に、はまってゆくのは知れたことである。

ただひたすらに服従の意をあらわし、逆にむしろ命じられなくとも、自分から淫らな振舞いをしてみせて、ご機嫌をとり結ぶのが、結局は色責めにかけられる時間を少しでも少なくして貰えることに通じるのである。

バスト八十八・ウエスト六十・ヒップ九十一の抜群のプロポーション。シミ一つない芳紀二十才の弾力にみちた裸身は、いま、おぞましい黒皮製の拘束具に、無残に締め上げられているのだ。もちろん、肉体の苦痛をねらうものではなく、被虐者の心に深く喰い入るように考案されたものである。

羞かしさのため、すっかり上気し、美しいピンクに染まった若い娘の軀に、まといつくベルトは、考案した朱美が企んだ通り、男心を無限にそそる効果を、あらわしている。

見慣れたヌードでいるより、桂子は、より淫蕩な、コケティッシュな変わりようをみせどこかに倒錯的な妖艶ささえ、かもしだしているのだ。

しかし、別の見方をすれば、そのスタイルは、きわめて惨めなものである。しっとりとした脂光りしている白い肌を緊縛され、乳房を丸く思いきり突きださせている桂子は、ちよっ

とした刺激にも息たえだえになりそうな風情である。

首輪にとり付けたキラキラ光る鎖は、その一端を持つものが、この女体の飼主であることを示すものである。

とりわけ——朱美は、肝心の股間をおおうT字帯を、わざと着用させない。これは、上半身を拘束し、下半身を放置することによって、性奴隷になり下がっている美少女を心理的に二重にも三重にも羞かしめる、たくらみによるのである。

「さあ、いいから俺のほうに来な——」
と森田が酒臭い息をつきながら呼ぶ。

桂子は、オドオドし、星のような瞳に涙を光らせながら、いじらしく彼の前に正座するほかはない。

こうした従順な態度をとらざるをえないように、この美しい乙女を追いこんだところに鬼源流の調教法の真骨頂がある。桂子は、もとより清純なアマチュアであったし、鬼源は海千山千の女体飼育にかけてのプロなのだ。勝負は、はじめから、きまっているようなものであるが、そのプロセスが、女たちそれぞれの個性によって分けられるところに、得もいわれない面白さがあるというわけだ。

それにしても、桂子の心と軀は、あまりにも清純でありすぎたのではないだろうか。清純すぎることは、世間の裏側にぴたりと密着しているヤクザ共の生け贄になることを承知したのと同じことになるのではないか。強い者が弱い者から奪う。悪い奴が善良な人から絞りあげる——人間の掟は、結局このような、しくみになっているのではあるまいか。

さて、森田は脂ぎった片頬をゆがめて、桂子の喉にはまった首輪の細い鎖を、ぐいと引き、まるで家畜を扱うようにたぐりよせる。

「おお、お前。そいつが本当によく似合うじやねえか。そうだな、お前も×××一本槍なんてもう嫌だろうし、俺もお前のカラダにや、ちよいと飽きがきたわけだ。というところで意見も一致するわけだから、一つ趣向をかえるぜ。ふふふ……さあ、そのでっかい尻をつき出して四つん這いになんな。これからお前はメス犬ということになる」

一糸まとわぬ姿で、次々と女の懊悩を下等な連中の前にさらけ出すのは、いいようもない悲しみだった。しかし、この奇怪な衣裳を身につけて、この上さらに変わった趣向の悪ふざけを受けるのかと思うと、桂子は齒の根もあわない恐ろしさと、羞かしさに襲われ

るのを感じる。

森田はもとより、そんな哀れな様子の美少女に同情心をよせる風は微塵もなく、

「おとなしい可愛いがって貰えるメス犬になって、愛嬌をふりまく。うまくやれば、お前の大好きなごほうびをあとで、たっぷり岩崎組の兄さんたちから頂けるぜ。ふふ……」

桂子はためらい、心の葛藤と斗うように明眸を閉じる。あたらしい涙の筋が光りながら又しても頬を伝うのである。

「……ご、ごめんなさい。桂子、泣いちゃったりして……あたくし、どんな風にすればいいのですか？」

「だから、教えてやってるじゃねえか。犬のように四つん這いで、尻を振りながら、皆さんの、ご機嫌をとる。およびがかかったら、いわゆる通り芸なんなりをしてみせる。」

——簡単なことじゃねえか、ええ？ これまでにやってきたことを、すっかり復習すればそれでいい……つまり地のままでいいのさ。かりそめにもセックス・スターを志ざしているんだ。お客あってのお前だということくらい、分かってるだろ——この薄ノロ！」

森田は、皆の手前、桂子を頭ごなしに叱りとばす。

「わかりましたわ。お許しになって……」

彼女は、解かれた両手と両膝を床の絨毯につける。盛りあがった双臀の真後ろにいる若い奴等が奇声をあげる。

朱美が、たちまち上機嫌の半畳をいれる。

「なにか、あたしまでぞくぞくしてきたわ。

お嬢さん牝の気持も、きっとそうよ。それにしても——何ていやらしい恰好なんだろう。

おなじ女性の冒瀆みたい……」

たっぷりとした肉感に富んだ双つの尻は、よくみると完全な丸さでないのがわかる。桂子の尻には、桂子だけが持っている表情があるのだ。

ウエストのほうに向かって、ゆるゆるとくびれてゆく滑らかな皮膚のうねり。丸まった頂点から逆に内股のほうへとカーブする肌。美肌に深く切れこんでいる柔らかな線。そのずっと奥のほうにつながっている、しっとりとした温かい部分が、先程たえきれない羞恥にまみれたのだった。

「さあ、どうしたの？　いつまでも我を張るつもりなら、本当の犬をけしかけるわよ。いやな臭いの、毛むくじやらの香港犬……ウソだと思ふなら、ためしてみたら？」

刺し通すような朱美の催促に、桂子はとう

とう床の上を這いずりはじめたのだ。

一と足ごとに、もくりもくりと、双臀がうねる。鎖の端を朱美が持って引く。

又しても、三下がダミ声の喚声をあげる。

口笛が、ぴゅうぴゅう鳴る。

「見えた、見えた……それそれ……いいぞう……」

恥辱にまみれるお嬢さんスターは、ただ出来るだけ秘匿するため、太腿をこすりあわせるようにしながら、野卑な視線の下を這って廻るのだった。

ところが、つつましかにしようとするほどの、豊かな尻はモクモクと右、左にゆすられ、座の嗜虐心をかきたてる効果をあたえてしまう。

「さあさあ、皆さん。ソファをどけて場所をあけてちょうだい。近くでみたり、触ったりしたい気持はよくわかるけれど、桂子が傍へやって来たときに、そうしてやったらいいじゃないの……さあ、そこをあけて」

乳房を締めあげられ、首輪の細い鎖を朱美に取られた四つん這いの美少女の姿は、見ようによっては、ずい分、滑稽にも思えないこともない。

哀れな女心などには、まったく拘泥しない

男どもの下卑た冗談、掛声などで座は弾んでいる。劣情だけをかき立てる白い玩具として桂子は床を這うのだ。

一と廻りしたところで、どっかりと床にあぐらをかいた森田の前にひれ伏すように命じられる。「伏せ」と朱美。

親分は、豊かに波うっている黒髪に太い指をさし入れ、大型の犬を値ぶみするように、恥辱の汗を流している女の首筋を軽く叩いたり、脇腹から腰にかけて、ゆっくりと撫でさすったりする。

首輪をひいて、尻のほうから三本の指を牝奴隷の股間にさし入れる。

「あっ……あっ……」と、含み鳴くのにかまわず、これみよがしに、空いた手で、乳房をねらう。たっぷりと突きだしている麗しの隆起は、気まぐれた掌で、もみほぐされる。

四つん這いになったままの女体は、そのいやらしい仕草に耐えかねて、黒髪をうちふるのである。こうした愛戯が、やがてどのようなエスカレートするのか、不安でたまらないらしい。

「さあ、芸をはじめろ。ひとつ、チンチンをやってみな……」

アブチックな仕草を強いられる裸女は、棄

鉢のように、滑稽としか、いいようのないポーズをとってみせるのだ。ご機嫌を、そこねたくない一心からである。

「どうも、そのままじゃ、可憐な牝犬って感じがしねえな。白い豚と、まちがって、いけねえや……」

などと照れもせず、酒臭い息をふきかけ、さっき、朱美が手渡したものをとりだした。

赤い、マジック・インキである。

桂子の乳量は、色白の肌に丸い花びらをおいたような、うす桃色である。

奇抜な乳バンドをつけていても、その官能美にあふれた美しさは、いささかも、そこなわれていない。むしろ、隆起が強調されているだけに男の劣情を、そその色づきを示しているのだ。

女の気持には斟酌せず、森田はマジックインキのキャップをとり、楚々とした風情にうち慄える乳首を、朱くぬりはじめるのであった。

ヒヤリと冷たいインキに濡れたフェルトが女の敏感な部分に触れる。桂子は悲しみにみちた吐息をつき、すっかり諦めきった綺麗な瞳を、ぼんやりと宙にまよわせ、むき出しの背中を男の胸に、もたせかけてゆく。

にたにたしながら、丹念に乳量まで朱く塗りつづける森田は、観念した美少女の従順さに、又しても気まぐれを起こした。空いた方の手で太腿の内側や、真白い下腹部のあたりに骨ばった太い指先を這わせるのである。

恰好のいい可愛い臍。その下の雪白な下腹は想像以上にやわらかくマシユマロのようにスベスベしている。五本の指に、ちょっと力を入れると、どこまでも沈んでゆきそうに、やわらかい。

「……う、う……」

と桂子が、思わずうめくと、

「じっとしてなと、いってるだろう。犬をけしかけられても、いいのかい。ええい、面倒になってきやがった。仕上げは、自分でやる——うまく、丸くやるんだぜ。チェッ、自家発電だって出来たんだから、それ位は朝飯前だろ」

と、ぴしゃりと太腿を平手打ちし、桂子の手をマジック・インキを押しつける。

邸の男女に、日常茶飯のようにして苛まれてきた桂子であるが、自らの手で自らの肉体を苛むつらさは、又格別の努力がいった。

「ほほう、朱い乳首か——」

あくまで白い肌をきびしく締めあげた黒い

乳バンドと、こぼれるばかりに盛り上がっている乳房の頂点の朱いグミ。ただ、成り行きを睥睨して見ている岩崎組の二人——権田と政やんも、燃えた目で被虐者の肢体をなめまわすのであった。

「さて、これでいいかな。どうでい、ぐっと色っぽくなつたろう……」

と上機嫌の森田は、女の背後から腋の下を通して両腕をさしいれ、着色された双つの隆起を、これ見よがしにユサユサと、ゆする。

次々と、まったくの面白半分に加えられてくる色責めの前に屈服しきった桂子であるがこの人を人とも思わない屈辱感はどうしても拭いさることができないのだ。しかし、ただ含み泣いて、一片のお情けをのぞむほかに何の手だてもない。

「こういうのは、どうかしらね。皆さんのお気に召すといひんだけだ——ただ、桂子がいい気持になって、お道具をガッポリと受け入れられる状態になるのは受けあいよ」

朱美は、勝ち誇っている。

この酒盛りも、関西に貸し出される桂子の送別会であることを覚えているものは、この場で何人もいないだろう。この特出し遊びも筋書きなどはまったくなく、その場その場の

イメージギャラリー——『可憐な花』——志羽利也——



ゆきあたりばったりで、際限もなく続くもので、一同が飽きるまで続くのが習慣のようにすら、なってしまうている。

朱美の取りだしたのは、どこで用意したのか、ピンク色のプラスチックの洗濯ばさみであった。それを意味深な表情でみせびらかし

あげくに自分の耳たぶを挟んでみる。

「つよくないバネだから、痛くなんかないのよ、桂子。これであんたのどこをつまむと思う？ 考えなくてもおわかりだろうけれど、お前の口から言ってもらいたいのさ。ふふふ……この通り三つしかないけれど、うんとエ

ッチなところを選んでね」

「……あ、あけみさん。もうこれいじょう、桂子をいじめないで……おねがい……もう、ゆるして……」

「何を言ってるのさ。男と乳繰りあうときはいつだって、△羞かしいめに、あわせてちゃうだい▽だの△いじめて下さってもいいの▽などと、ご機嫌ばかりとっているくせに。あたいだったら△もうイヤ▽なのかい？」

「ごめんなさい……そうじゃないの……」

「じゃ、どうなんだい？ 洗濯バサミがいいんだね？」

「……ええ、あけみさん。あたくし、もう、どうされてもかまわないわ……それを、それを……けいこの、おっぱいに……」

答えもおわらないうちに、朱美はヒョイと手をのばして、朱く塗られた乳首に、それを挟む。

アアッと、狼狽する桂子にかまわず、もう一方にも洗濯バサミが噛みつく。

みるみる紅潮して、大きくのけぞるように喘ぐ美少女の乳房の谷間に、大粒の脂汗がキラキラ光りながら浮きだした。上へつきだした額の恰好は、かたちよく細っそりし、とても夜毎の享楽にしょっぱかれる性奴隷とは思

えない稚なさがある。性戯を叩きこまれ、ぐんぐん開きつつある肉体に、純な処女のような容貌が備わっているアンバランス。三下共が争いながら好餌にしたわけは、彼女の喘ぐその仕草だけでもわかるようだ。

朱美はトウモロコシのようにもつれた毛をかきあげながら、なおも追及の手をゆるめずさあ、次はどこ、と尋ねる。圧倒的な優位に立った快感で、きつい目が細く据っている。

桂子は、こだまのようなハスキーな声で、かぼそく、

「……わかったわ。けいこの、ク、クリちゃん……でも、そこだけは、かんにんして」

乳首のムズムズする圧迫感に、しどろもどろで、ようやく答える。

「おやおや、お嬢さん。あんたは純情そうな顔でなんてことを言うの。よくも、そんな事が平気でいえるものね。破廉恥ったらありやしない——あたいは、あんたのノーブルな鼻を挟んでやろうとしていたのよ。ご希望は上じゃなく下だったのね。それ何よ？ あんたのお好みの体位なの。うふふ……」

「あ、あけみさん。ひ、ひどいわ。あんまりだわ。あたくしに言わせようとなさったくせに……」

「ふふんだ。自分ながら照れ臭くて、人に、そんないやらしい言い草を押しつけようたつて、そうは問屋がおろさないから」

「……だって……きつと、あなたがそう言えとおっしゃってるのだと思って……まちがっていたら、ごめんなさいね。けいこ、あやまります……ね、おゆるしになって」

「そんな口先だけの事じゃ無理だよ。態度で示さなくっちゃ。皆さんに、ご披露して」

「お願い……これ以上、いじめないで……」

「だから、お前は口先だけだといっているのよ。もう一度、最初から調教をやり直さなくちゃならないようね」

桂子は、すっかりうるんだ瞳を哀願するように朱美に向けていたが、力つきたように、ガツクリと頭をたれる。ズベ公は、「それにしても、ひどい汗ね。すっかり拭きとってあげるわ」などと親切そうに言い、ハンカチをとりだす。

朱美は、桂子を自暴自棄の境地におこむようなマネはしない。その育ちのいい心の底に込みわたっている純な魂を、開陳も平気だなどという、すれっからしに仕立ててはならないのだ。

それにしても、男を知ったこの体は何とい

う生々しさだろう。甘い汗の匂いは、男心をとろかせる蜜の香りである。たっぷり脂肪をたくわえている健康な若い肌。沃土のうねりのような豊饒な曲線でおおわれたこの裸身に、男たちが執着するのは当然である。

朱美はハンカチで軽くたたきようにしながら、裸女の汗を拭ってやっている。

「すみません……朱美さん……」

「それにしても、あんた大きなお尻ね」

などとコソコソ囁きあっている。

「さあ、お嬢さん。こんどは内腿よ。オヤそんなおかくしにならなくても、よろしいじゃありませんの。ホホ……。もうあたいを怒らせないようにしてね。さあ、開いて」

「……」

ふかぶかと、さしうつむいた美少女は、かすかにイヤイヤをするように首を横にふりつづけていたが、ぴたりと合わされていた太股は拒絶の意志とは別に、徐々に開かれてくるのであった。素敵な脚線の奥に秘めめられた部分を朱美は、じろじろとのぞきこみながら、

「だめね、まだこれを挟めるような状態になっていないようよ」

「じゃ、今度は、おれの番だな」

と、桂子のことにならず口をだす三下の竹田が、のっそりと立ちあがってきた。

桂子の体の扱いに関しては先程の実績があるから、千代も鬼源も口をはさまない。コップ酒をなめながら、いかにも、どぎつい淫猥な冗談を、いいあっている。

森田は親分らしい鷹揚さで、当分お別れのだから、ゆっくり楽しんでいい、と許可をあてる。

「へへへ、どうもこの女は、すっかりおれにいかれちゃってるんでさ。おれの顔をみるとすぐ上下の唇を半開きにして、すがりついてくるんだから、かなわねえんで」

などと言いながら、ゆるゆると手なれた料理にとりかかるのである。

実際、桂子の性感帯をいちばんよく知っているのは、竹田と朱美であろうか。竹田が快楽の道具として、この女体を奔放に扱うのに対して、朱美は同性として、とてもかないっこないという嫉妬心から、この女体を責めさなむ。

見方によっては、この二人の情念は歪み、ねじくれまがった愛情の発露なのかもしれない。どちらも、間接的に桂子の美肉をさいなみあって、その気持を現わしあう。それでも

ないと、同じ女性の朱美の桂子に対する陰火のようにくすぶる執念が説明できないことになる。

チンピラは、にたにた笑いながら桂子の両肢を大きく開かせて……のせる。おずおずと頬をよせてくる女にかまわず、右の掌を太腿のつけ根に滑りこませ、はつきりと露出している褪色の縦線のあたりを押すように撫でまわすのだ。

もう一方の手は双臀にまわし、くすぐるように指先を這わせている。白い背筋を指でなぞり、腋の下をさすっていたかと思うと、突然、アヌスの攻撃に転じた。

「ああ……」

と呻く間に強く唇を奪われた美少女は、下腹の二カ所へ深く侵入してきた暴行者の三××を、とうてい、よけきれないのだ。

やわらかく暖かい××の奥深く侵入したそれは、あせることはなくゆっくりと、しかし執拗にうごめく。途中でいちど抜かれ、たっぷりと指先に掬いとられたあの塗り薬がヒヤリとした切ない冷たさを××に感じさせたが、やがてそれも敏感な部分に充分なじみ、しだいに発酵してゆくころには、このいまわしい姿態でいることすら、さして苦痛には思われ

なくなったようだ。緩急自在の加虐者の指先のリズムにこたえて、うねうねとうごめく小山のような二つの尻の淫らな愛しさ……

「もういいでしょ、そのあたりで。あんたって人は、桂子だと、つい必要以上にナニするんだから……洗濯バサミを忘れちゃだめよ」言いながら、邪険にすがりついている桂子の軀をひっぱがし、充分に掂げさせる。

見物を意識した得意気な様子である。

むだ毛のまったくない幼女のようにされたそこは、うす紅に染まり、あの恥辱に耐えきれずに弛緩しきって、おびただしく溢れているのだった。内股のやわらかい皮膚に浮きだす静脈の青さが哀れさを、さそう。

朱美が蓮っ葉に高笑いし、手をさしだして濡れ光ったそこを、指で左右に押し開くに及んで、かくすこともならない桂子は胸をそらせて哀泣するのだった。

「いっそ殺して……どうか、桂子を死なせて……ちょうだい……」

しかし、懊惱の果てをさまよう美女に一片の同情を寄せるものもない。逆に、離れたところにいる者が「見えないぞ」と叫ぶと、「じゃ、アンコールね……ふふふ……さあ、お嬢さん、あーんとお口をあけるのよ。そう

ら……」

終わりに、愛液でぬめった唇の上端に、ちよっぴりつきだしている——をパネを弱く調節してある洗濯バサミで器用に摘んだのだ。

家畜でいうなら、鼻輪を押さえられたも同然である。

パネの強さは、朱美が企んだ通りの効果を生んだようだ。犠牲の美女は、もってゆきようのない両手を、いつも縛られているままに後ろに組んで、きつく齒をかねて自分の軀の底から湧き起こってくる歓声のような物狂おしい衝動に耐えようとしている。トロリとした光をたたえた瞳は遠くをさまよって、いまの自分がどんな立場にいるのかすら、よく分からぬのではないかとさえ思われるのだ。ふきだしてくる汗は、縦長の脐のあたりにたまり、筋となって下腹に消え、絨毯の上に小さなシミをつくった。

「じゃ、お好みのそいつをくっつけたまま、しばらく付き合ってやらあ。段々と効いてきて、得もいわれない気持ちになるそうだから、楽しみにしていて、いいぜ。なにを、もそもそしてやがんだ。親分のいった通り、お前は牝犬なんだぜ。すぐに芸にとりかかれるように這いな。やがて犬をけしかけられる日のた

めの練習をしてやる」

などと、からかいながら有無をいわせない調子で裸女を追いかみ、

「はじめは、△お手▽だ。それから、くるりとひっくり返って△伏せ▽……そうそう、うまいぞ。起きあがったところで、悲しげに鳴いてみる……発情して、オスの犬を呼ぶ声色でな……それから、色事だ」

拘束バンドもちぎれるばかりに全身を躍動させ、押えられた急所から、じっくりとわきあがってくる感覚に耐えながら、桂子は竹田の命ずるままに翻弄されるのであった。黒髪をうちふり、こみあげる羞かしさを押えながら必死になって牝犬の仕草を演じている女の肢体には、いま一足の性畜になり下がった雌の匂いが充満していた。すっかり竹田の術中のものとなった彼女は、馬乗りになった彼を乗せて一廻りする。男は、背にまわった乳バンドを手綱に見立て、ぐいぐいと引きしぼるのだった――

桂子を哀れだと思っても、彼女を蔑んだりする資格は誰にもない筈である。竹田の桂子へのあくなき責めは、もともと下等な劣情から発した完全な自己流のものである。

しかし、世間の常識などというものから、

はるかに隔絶した、この耽美に明け暮れる邸の中での女体調教法は、いまや自己流を脱し見事な完成ぶりを示しているといっている。

女の美しい肉体と心を愛でるには、じつに多くのやりかたがある。しかしその、いずれを取っても、ミンクのコートをもとわせるほど愚劣な、陳腐な方法はない。

森田組一家がたくましくして、とりつつあるのは、別の方法の一つである。△自由を拘束し、心理的に圧倒的な優位にたった▽続いて△その女達からミンクのコートを、はぎとった▽――女のいちばん美しい姿はヌードである時だということは、紀元前のギリシャ彫刻に学ぶまでもないのである。

……その同じ時刻だった。

送別の饗宴がひらかれている応接間から、とおくへだたった二階の一室で、遠山静子は意識をとりもどした。

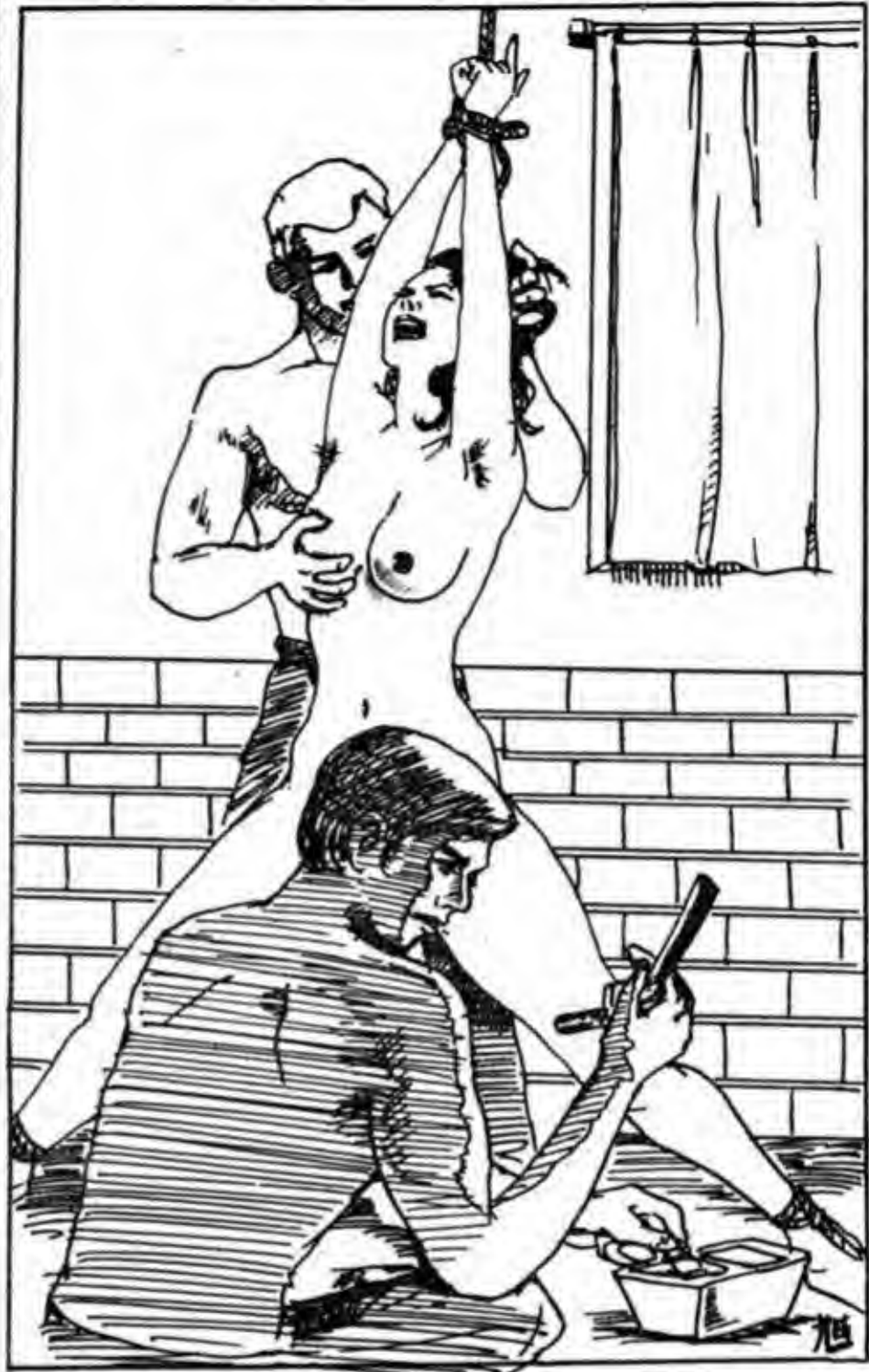
寝乱れて、よじれたシーツを手で、なおすすべはない。しびれないようにゆるんだが、しっかりと後ろ手に縛られた赤いしごきのほか、身につけているものはない。

ほのかに灯っているスタンドの明りが、静子のよりあがった両の乳房を滑る。頂に桃い

イメージギャラリー

『カミソリ参上』

須坂 旭



ろの、上をむいた乳首。
彼女は、そろそろと身をおこす。すぐそばに毛むくじやらの巨体をころがしている男がいた。

シートに泌みこんだ男の体臭が女の鼻をつ。そして、もう一種の微かな匂いは、彼女自身が、おびただしく溢れさせた愛液の香り

である。その行為は恍惚のきわみかといえは無論そうではなかった。しかし、おぞ毛を慄わせる怖ろしさかといえは、そうでもないのであった。地獄かと思えば、そうではなかった。天国かと思えば逆に地獄なのであった。こうした場所にあっても、遠山静子の容姿は、まるで月の光のなかにいるようだった。

女は哭いていた。こういう境遇におちた女だけが泣ける、そういう泣きかただった。声をしのばせ、むきだした両肩を、こきざみにふるわせる嗚咽……。

茜をさした唇のすみから、おさえきれないつぶやきがもれる。

——おわかれなのね、桂子ちゃん。

涙のしたたりは、とがった乳首で露をむすび、やがて雫となって、したたった。これまでに、この旧の令夫人が、ながしたおびただしい泪は、その一滴すら、清い小川のせせらぎに、そそぎこんでいったことはない。ただむなしく、シートにしみをつくり、調教者たちを飲ばせたばかりである。快楽のための犠牲、生ける抜群の性具……。

ずっと遠くのほうで起こった哄笑が、彼女の敏感になった耳をとらえた。やはり、耳をふさぐすべさえもない美しい女は、夜目に白い喉を、のけぞらせて、けんめいに耐える。

哄笑は、それきりきこえない。だが幻聴ではなかった。魔窟の宴の光景を、彼女ほどよく知っているものはなかった。ここにくるまえの彼女は、ただ眩しいもの、目にも綾なもの、豪奢なものにのみ、とりまかれていた。それらは、ある日の、あるできごとを境とし

で、とつぜん消えた。だが、あれらはもとより幻覚などではなかった。

涙は流れつづけ、遠山静子は、それをあふれるのにまかせた。そして、ぬれそぼった、もっともっと優しい声でつぶやく。

——おわかれなのね、桂子ちゃん。

その背に起きだした大男の気配が近づく。男の視線は、狂おしく、女の全身を灼きつくすように沸ぎっていた。

庭園の泉水の鯉が跳ねた……。

……いま、酒臭い息と煙草で、むんむんしている応接の中央で、桂子がとらされているポーズは屈辱きわまるものである。

ふり乱した黒髪を絨毯に流し、双臀をたかだかと天井に向かって、つきあげた浅ましいスタイルであった。

「桂子、すっかりできあがってしまったようね。何よ、そのいやらしい恰好。ふふ……」と、朱美。

ポーズを指定したのは彼女だが、Gパンをはいていても何だか照れ臭いみたい、と大笑いをして、挙句のはてに、桂子の股のひらきぐあいが足りないのと文句をつけたのだ。

「あたいのテクニックも相当のものね。それ

こんなに濡れちゃってる。あらいやだ、変な匂いがするみたい——」

などとふざけながら、チリ紙——といいかけて、

「いいえ、自分の汚したものを自分で始末するのはあたり前ね。さあ、お嬢さん、牝犬らしく、このヌルヌルするのを、きれいに舐めとってちょうだいな」

そういいながら、今しがたまでキャッキヤとふざけながら、桂子をいじりまわした指を鼻先につきつけるのだった。

この期におよんで、もはや抗うべくはない桂子は、ただおどおどし、すっかりズベ公の前に屈伏しきった態度で、顔をふせるばかりである。第一、逆らうには心身ともに疲労しきっていた。

浅ましい牝犬の仕草を演じているうちに、乳首などを挟んでいた洗濯バサミもどこかへいってしまい、隆起を拘束していた乳バンドもずれてゆがんでいる。その風情は、ブラジャーをひきむしられて暴行される処女のように、逆に満座の欲情をかりたててしまう有様である。

トロリとうるんだ瞳。大きく息づいている真っ白い下腹部。額にはつれるおくれ毛。そ

してセックスそのもののように見える朱い乳首と黒い革紐の色どり——。

桂子は四つん這いで、年令の割にかさかさしている朱美の指を丹念に舐める。ヌラヌラしている指は、クルミのような味がした。

「フフフ……くすぐったい……どう、ご自分の味は？ 殿方のとくらべてみて、どうなのかしら」

朱美は大笑いしながら、チャラチャラと牝犬の鎖を、もてあそんでいる。

「でも、くすぐったくて、気持が悪いわ」

これ以上、失態をすると、どんな罰が下されるのかわからない。桂子は、ただ夢中で同年輩のズベ公の両手の指の股までを、しゃぶった。可愛い唇から皓い歯がこぼれる。

一と区切りしたところで、朱美は掌をながめ匂いを嗅ぐようにする。桂子の唾液でぬれた手を、ついと伸ばして、牝奴隷の豊かに波うった黒髪をくしゃくしゃにして、拭うのであった。

牝犬遊びがはじまってから千代の発案で桂子は、いっさい口をきいてはいけない事になった。牝犬が飼主に口がきけるはずはない。自分のいいたいことは、すべて表情と身振りで訴えかけねばならないというのである。

そのため、口々に珍芸を要求するヤクザ共にこたえる桂子は、相手の表情を、たえず、うかがわねばならない。たいていは、伏目がちで、加虐者たちの目と目が会うのを避けてきた彼女にとって、それは非常に辛いことだった。

さわやかに澄んだ瞳の持主はいなかった。彼らは一様に酒気を帯び、淫猥な目つきだけをしていた。中年には中年らしい底知れぬいやらしさがあり、若い者は彼らなりに、隙があれば欲望をみたしてやろうという下等さし

パロディ「花と蛇」に期待す・・・・・・

Ⅱ 提案と願望 Ⅱ

大西 弘明

山光純氏のパロディ「花と蛇」の連載を心から慶んでいる、四十三才のSM同好者です。どなたかが誌上で、団鬼六氏の「花と蛇」が余韻を残して未完のままになったおかげで、静子夫人を始めとする美しいヒロイン達が、マニアの心の中に永久に生き続けることになったと申されていました。が、私自身も、つい先頃までそのような気持ちでおりました。しかし、今一度、よく自分の心を見つめてみますと、それは、あまりにも少女趣味のような気持が致して参りました。

かなかった。

たまらないのは、座の女たちの、かぎりない侮蔑と憐れみの表情である。直接、彼女の裸身に手を触れて、あれこれと責めぬく朱美と、それをけしかける千代の二人は、それを少しもかくそうとせず、言葉の端々に毒を含んで、それをあらわすのだった。

大組織で名を知られた関西の客人——権田と政やんの二人は積極的に、この遊びに参加してこないが、態度と目つきに邸の連中と変わる場所があるはずはなかった。

ファンは「マンネリだ！」と騒ぎながら本心は、あの美女達を、もっともっと羞恥と屈辱の底にのたうたせたかったのだと思います。また同時に、むっちりと開花し、実った女体の奥底まで描き尽す表現を望みながら満たされない想いの結果が、非難と

私としては、美しい令夫人や令嬢達の羞かしさにうち慄える絹のような纖毛の一本一本。いや、それすら剃り上げられた羞恥の肢体。さらにその奥、心の奥底までも、もっと、より以上に詳しく綿密に掘り下げ

とくに権田の表情には、憐憫の色が透きでていた。桂子ができるだけ彼の前から遠ざかるようにしているのは、そのためだった。その憐憫の気持がどのように変わってゆくかは、何よりも桂子の軀が、よく知っていたのだ。

とうとう、かなり酒に酔った千代がフラフラと円座の中央にでてきた。赤く縮れた髪を乱し、頬骨のつき出た下品な容貌と、この振舞いでは、とうてい大財閥の貴夫人にはみえない。

千代が片手にぶら下げているものを見て、満座の者たちは、待っていたように歓声をあげる。

桂子専用の道具である。

全裸の美少女は、今しも竹田と肩を組んだ朱美の前で、絨毯の上に撒かれたチーズやピーナツを這いながら口をつけて喰べているところだった。二人は、頬をつけあい、とめどもなく笑いあっている。

「桂子、こちらへおいで！」

千代は、金壺眼をむいて、よんだ。

彼女はやはり、飼育中の美女たちの支配権を確保しておきたいらしい。今夜は、あまり愛着もなかった桂子の送別会だったので、

て表現して欲しかったのです。殆どのファンも、そうではなかったでしょうか？

かといって、この大作を物された作者が珠玉のSM文学として後世に残したいと思われるであろうことも、そのためにこれ以上の赤裸な描写が出来なかったものであろうことも、また当然のことだと思います。

しかし、この大河小説が幕を閉じた以上は、その設定のもとに、なんら負った拘束を受けないで、大いに飛躍し、良い意味での無責任さでもって、自由奔放に描かれたパロディの出現があっても、団鬼六氏の「花と蛇」のイメージを毒するものではありませんまい。何故なら、それは団氏の「花と蛇」ではないからです。

鞭打ちを極端に嫌った本篇でしたが、パロディに於いては鞭愛好者の為に、あの麗わしい静子夫人の柔肌に一度ぐらい痛打の音が響いてもよいのではないのでしょうか。

また、長年の間に一度も、神酒愛飲の場がみられなかったのも周知の通りですが、オシッコを求めて迫る客人を前にして、絶句して悶えた静子夫人が遂に屈伏し、衆目の前に、悩ましい官能美溢れる恥態をさらす情景などもあってよい筈です。

縄に終始した彼女の縄を解き放ち、自由にならざる自由に涙を流し、野卑な男女の

嘲笑の渦中に悶え、女心の業火と性に泣き濡れながら、淫火にその身を投げ入れる若夫人の姿も、マニアの期待しながら満たされなかったところでしょう。

本篇では、きれいな事に終わった静子夫人の肉体を徹底的に汚しきるための犬や蛇の登場。タブーであった輪姦描写等、微に入り細に亘っての掘り下げで、見物のズベ公達が舌を巻く女体の激しい描写なども、愛好者の一人として望みたいものです。

私のイメージに浮かびあがる静子夫人はあくまでも、美しい容貌から凄惨なまでの妖艶さを漂わせ、紅唇から泡と涎を、したたらせて悶絶寸前にもかかわらず尚、かつ男の責めを求むるが如く、妖しく疼レンする豊満な肉体を露呈する牝犬の風情です。もはや抗う力はなく、男の囁るままにその体を投げ出しながら、最終的に襲いくる責めには不死鳥の如く反応する、強靱さを内に秘めた柔肌の美女なのです。

山光純氏にお願いします。提唱されたように八読者の手によるV八読者のためのVパロディとして、団氏の好むと好まざるとを問わず、ありとあらゆる角度から、読みの期待に副った大飛躍を試みられて、より妖美な、より凄艶なユートピアを形成していただきますように……。

進行を朱美にまかせっぱなしにしておいたのだが、桂子もすっかり成熟して、今後この様子で性戯演習に励めば、かなりの上玉になる見込みが大きい。このまま邸におきたいところだが、うっかり貸出すことを承知してしまったのがこちらの落度、今さら断わるわけにもゆかない。

といって、森田組のスポンサーである彼女は今後のこともあり、性奴隷たちの最高のボスは他ならぬ千代夫人であることを認識させておきたいのである。

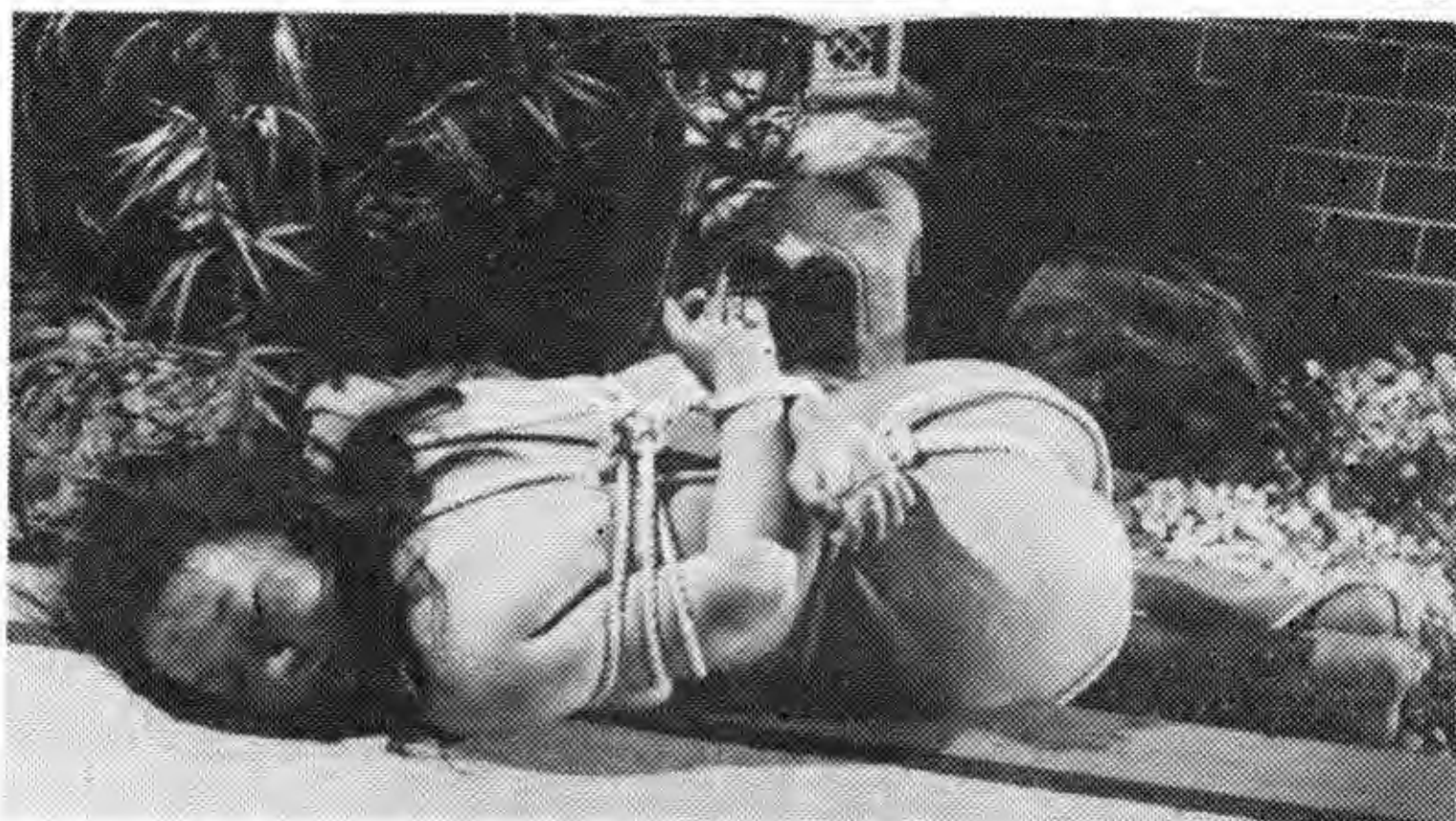
桂子は、はじかれたように千代の方へ向きなおった。朱美は、ふてくされるように頬をふくらませたが、貫録の差で、どうしようもない。

千代はニヤリと笑い、きわめて巧妙につくられてある専用の道具を「トン」と音をたて、斜めに絨毯に据えた。

大財閥の奥方である筈の女は、腰をかめ下品な口調で芝居もどきに、こう言った。

「猫にマタビ、桂子に張型。さあて、皆の衆。お嬢さんが首尾よく口にくわえましたなら、ご喝采を——」

あとは、淫らな含み笑いの渦だった。



〱 M 女通信 V 〱

被^ひ虐^{ぎやく}の初^{はつ}夢^{ゆめ}

高^{たか}村^{むら}浩^{ひろ}子^こ

お正月は故郷の女木島へ、久しぶりに帰ってきました。思い返してみますと、ここ三年程、故郷へは帰っていないことに気づきました。お手伝いさんをしている時、奥さまは私が当然クニへ帰るものと思われてお暇を下されたのですが、私はクニへは帰りたくないとお断りしたのです。

お正月でも故郷へ帰らないで、勤め先のお仕事をする忠実な使用人として、その時は大変よろこばれ、過分のお手当も頂いたのですが、それから、あとの二回のお正月も、最初から私は、もう帰らないものと、そうきめてかかれて、お仕事の割当ても

あり、年末年始の殊の外、忙しい盛りを頼りにされてしまいますと今更、帰りたいなどと言いつけられないような空気になっていました。

今度のお正月も敏子が五人ばかりのグループでスキーに行こうと誘ってくれました。費用は男の人達が割り勘で出してくれるのだし、浩子が行ったら丁度、男三人、女三人の六人で面白いんだから——と、盛んに、すすめてくれました。

スキーは持っていないと言うと、それは向こうで借りればいいと言うし、まだ一度もスキーをやったことがないと断わると、それだから面白いんじゃないの。男の人達に手をと

って教えてもらうのよ。彼たち、そんなのを
楽しみにしてるんだから——と、敏子は大は
じゃぎなのです。

でも、私にとっては、服装やなにやかやで
残り少ない貯金をはたいてしまうのは、あと
あとのことを考えて困ると思って、長らくク
ニへ帰ってないので、今度のお正月は私、

家へ帰って両親に親孝行するわ
——と、言ってスキー行きは断
わったのでした。

私の故郷といっても、そう遠
いところではないのです。高松
市大字女木町で郵便は届きます
が、俗に鬼ガ島と呼ばれる女木
島で、弁天埠頭から関西汽船で
五時間一寸、高松港へ着いて、
それから雌雄島海運の船で二
十分ばかりで行けます。周囲は
8kmばかりで、一番高い所と
いっても二〇〇mにも足りない
ちっぽけな島なのです。シーズ
ンには観光船のコースにもなっ
ていて、夏場は海水浴客で賑わ
う事もあります。冬場はひっ
そりとした漁村に過ぎません。



今、一人住居のアパートに帰ってきて、静
かに思い返してみますと、やはりお正月に故
郷へ帰ってきてよかったと思います。

僅かなお土産しか準備できませんでした
両親はじめ、妹や弟も私の元気な顔を見て大
変、喜んでくれました。殊に、三月に学校を
卒業したら大阪へ出てくることになっている

下の妹は、大阪の話を聞きたがりました。

大阪という大都会のアスファルト・ジャン
グルの中に迷い込んだ小娘であった私が、頼
る人となない苦勞を味わった経験は、妹にだ
けはさせたくないと思っていますが、妹は私
と違って、楽天家で陽気な性格ですので、案
外のんきに、のんびり考えているようです。

十二月のはじめに書
いた私の告白の文章が
三月号に掲載されると
聞いて、それに勇気を
出して又拙いペンを走
らせています。原稿料
にといって前渡しを受
けたお金で、ホームコ
タツも買いましたし、
両親へのお土産も、少
し、はずむことが出来
ました。

今、こうして温かい
コタツの中でペンを走
らせていますと、なに
がなんでも自分の思っ
ていることを書いてし
まわなければ——と、

はやるような気持の、最初の頃とは違って、この頃は、こう書いた方が読者に受けるのではないか、などと考えるようになりました。

そう言えば、やむにやまれない気持を、筆に托して編集部へお便りしてから、早いもので、もう一年近くなります。私も、とうとう二十二才を迎えることになりました。私の誕生日は、昭和二十五年一月十八日。もうあと一週間ばかりで、その日がくるのです。

この一年間、私は非常に大きな成長を遂げたと、自分でもよく自覚できます。それまでは被虐の夢と幻想にばかり酔っていた私にとって、それが現実として、自分の身で体験することが出来ましたんですもの、私の一生の中で最も素晴らしい一年だったと思います。

羞恥責めや浣腸責めに憧れ、そして、それが自分の身に加えられることを夢に描いて胸を焦がし、果てしない幻想の海の中に、小さな身を漂わしていたのが、はからずも奇ク編集部へお便りを出したことが、きっかけとなって、二度と得られない素晴らしい体験をすることになったんですから、本当に貴重な一年でした。きっと私の記憶に、はっきりと残る二十一才の青春の思い出です。

私は結婚するとしたら、S傾向の男性の方

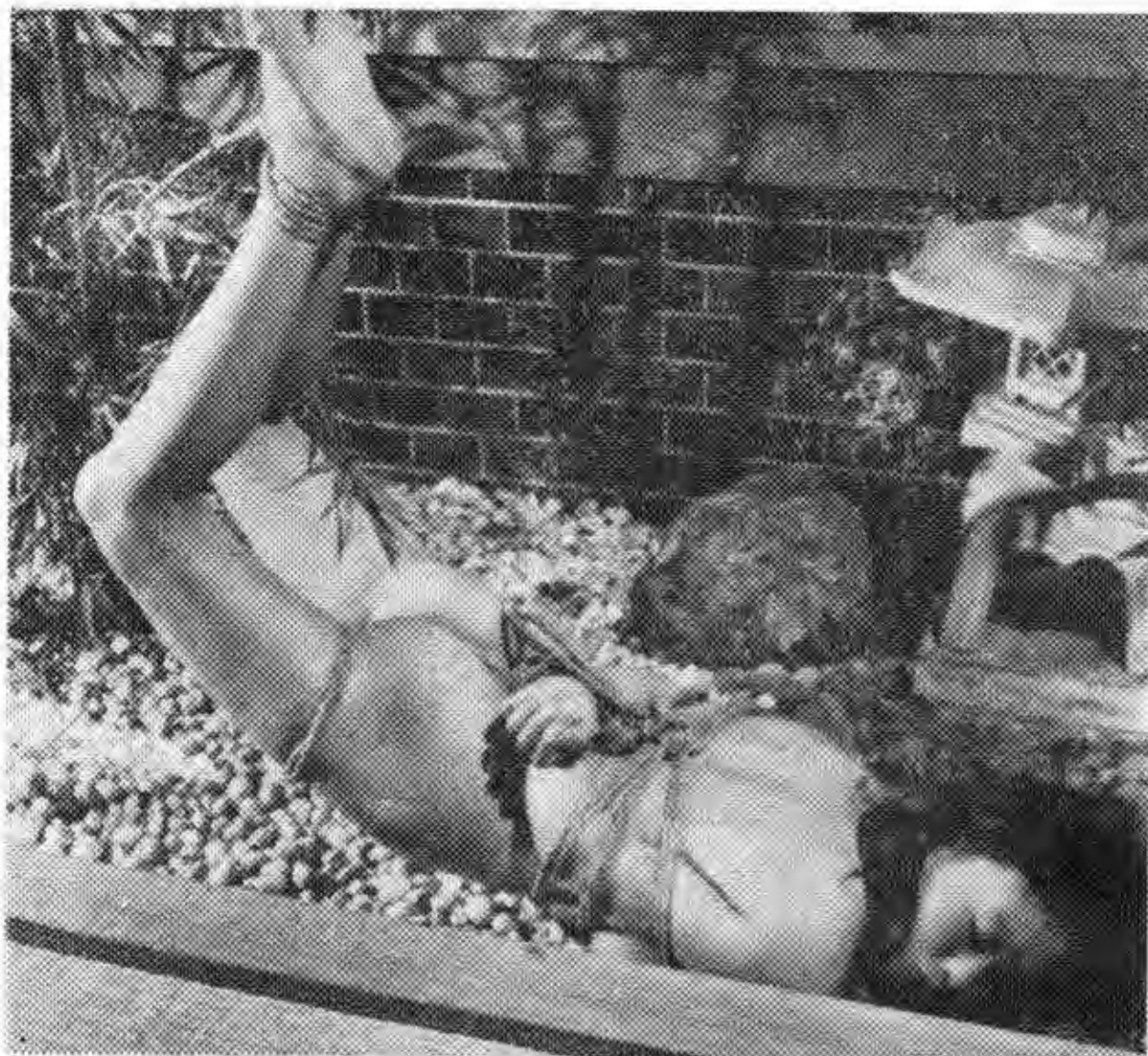
を選びたいと思います。

やはり私のようなM性格の女性にとっては結婚の相手としては、手を変え品を変えて、羞恥責めを夫婦生活の上で加えて下さるS性格の男性が理想的だと思います。その点、毎月の奇ク誌上を賑やかにしていらっしゃる夫婦プレイの実行者の方々が、羨ましくてなりません。私も結婚するとしたら、夫婦プレイの成果を、お互いに協力して誌上に載せてもらえるような方と——というような夢を胸に抱いております。

渡部光雄好美ご夫妻、三浦敬一純子ご夫妻、井上浩ご夫妻、山本武男ご夫妻、小竹一浩ご夫妻、等の記事や写真を誌上で拝見しますと、私はもう、この方達が羨ましくてたまらなくなるのです。今までの私でしたら、山の彼方の空遠く、幸いの住むという被虐の天地を夢見ていたのですが、二十二回の誕生日を目の前にした私は、被虐の夢も大分、現実的になってきました。

このような限らないマゾの幻想に





身を灼き焦がしているこの私に、温かい手を差し伸ばして下さる方って、いらっしやらないでしょうか。

羞恥責め——特に浣腸責めの大好きな私、どのような荒々しい責めも、私はその方のた

めに甘んじて受けます。いや、そういう責めを受けないことには、私の心も体も決して燃え上がらないのです。

私は自分の身体が、くびれるほど、きつく縛り上げられるのも大好きです。夢ばかりに描いていたそのような場面が、実際に自分の身体に加えられてみて、はじめて、その体験から、自分はマゾだと自覚しました。

縛りのモデルにして頂いて真実うれしかったのです。身動き出来ないくらい縛り上げられた自分の身体のすみずみまでも男の方々の視線にさらして、生れてこの方、感じたこともないような愉悅を全身に感じたのです。

男の方の視線が私の足の爪先に注がれたとき、私はそこに電気がかったような灼熱のショックを受けました。そこを中心

として戦慄が全身に響いたのです。私の感受性は視線が注がれるたびに電撃を受けたように全身をわななかせておりましたが、レンズの焦点ともいうような視線が、私の最も羞かしいところに注がれたとき、私の身体の中にたまりにたまっていたものが、とうとう爆発してしまいました。

縛りのモデルというお仕事は、私にとっては、本当に楽しいものでした。

最初の頃の何もわからず、胸をわくわくさせていた頃も、なつかしかったですが、二回三回と回を重ねる毎に、楽しさもまた、いろいろと増してきました。今から考えて、何カ月前にかならない、その頃のことを、まるで遠い遠い国での、遙か以前の出来事のように今の私には思えるのです。

もっともっと縛ってほしい、もっともっと激しく責めてほしい。羞かしめて、犯して、いじめてほしい——と幾度、思ったかもしれませんが。ほんとうは、私の住込みのお手伝いというお仕事の都合で、一月のうちに一回あるかなしでしたが、それでも、何回も何回も責められたような気がします。でも、それは私の幻想を混じえた回数であって実際は半年間のあいだの何回ぐらいでしたでしょうか。



皮肉なもので、その頃は、もっと暇がとれないのですか——などと言われたものですが、やっとのことで、一月ぶりに許しを得たお暇が、その日の朝になって、急に来客があつてお休みが中止になった、泣くに泣けないような日もありました。前の晩から楽しみにして着てゆく下着なんかも、真新しいものを準備して、ああだろうかと、こうだろうかと、小さ

な胸を躍らせていたのに、朝になって、電話でお断わりするときの辛さ。

それにも増して、ふくらんでいた胸が、すぼんでしまう淋しさは、その晩、一人で夜具の襟を噛んで涙を忍んだものでした。

それが、今、一人暮らしのアパート住居で、時間があふれて、いつでも、お呼び下さいとお伝えしてあるのですが、ここ一カ月以上

はお呼びがないのです。もっとも、年末でどこもお忙しいのは、よくわかってはいますが私の欲求不満は、年末も年始もないのです。でも、私の欲求不満がこのようなM女通信を書かしているのかもしれませんが。責められることで満足していたら、或は文章を書く方はきつとお留守になっていたでしょう。

昨年十一月には、三日でも四日でも、私を遠い所へ連れて行って、身体がめっちゃくちゃになるまで凌辱しつくして下さい。と、お便りを書きました。今でしたら、そのくらいの暇は十分とれます——とも書きました。でも、私のひたむきな願いを受け入れて下さる色よいお返事は得られませんでした。

幻想と空想の中に没りきって、外出や旅行に行くことなど好まなかった私。自分の孤独の殻の中にとじ籠って、自分なりの虹を描きつづけてきた私。

驚かれるかもしれませんが、上阪して数年間のあいだ、私はどこへも旅行したこともなかったのです。皆と一緒に四国の高松をたつて、なんというどのような港に着き、そこから、どうして勤め先の工場まで行ったのかさえ、私には記憶にありません。ましてや、京都や奈良どころか、大阪市内さえ、満足には

行っていないのです。

それが、敏子と一緒に男女四人で神戸までドライブしたとき、私は目の前が、ぱっと明るくなったような晴々した気持で、見る物すべてが珍しく、まるで外国へでも来たときのような気持になったのです。きっと、皆さまは、こんな私を笑われることでしょう。

年こそ二十一才十一カ月になっていますが世間知らずの私は、やはり周囲8kmばかりの離れ島に育った小娘なのです。

それからは、今までとは逆に、急に旅がしてみたくなったのです。どなたかが書いておられた「被虐の旅」。そうです。私を旅につれて行って、その旅の先々で、変わったいいじめ方をして下さいたら——そう願いました。

先ず手初めに、奈良でも京都へでも、三日四日、ぶっ続けて「責めの旅行」へ連れて行って下さい——と願ったのです。この私の切なる願いは、すぐにでも、かなえられるものと思っていましたが、こんな小娘のまるで突飛なひとりよがりには、かなえられない方が当然なんでしょうね。

三日も四日も貴重な時間を費して、私におつき合い下さる価値が、私にあるのだろうか——と、今では反省しています。



それで私は、お正月に故郷へ帰って、大阪へ戻る際、高松から神戸へ寄りました。はじめてモデルに使って頂くときに着物姿で参りましたが、この日も思い出の着物姿で、ポータワーの見える埠頭に上陸しました。

風がなくてお正月にしては暖い日でした。

着いた船から人の群れが吐き出されて、その人たちが三々五々に散らばってしまいます

と街路は時々タクシーが走り交うだけで、人影も、まばらです。私は中突堤の岸壁にじっと立ちすくんで晴着姿の混じる人混みの動きを呆然と眺めていました。神戸の街々の向こうには、六甲山の蒼い山脈が、頭の上におおいかぶさるように迫っています。

神戸の街の地理は、かいても私は知りません。でも、一方は山で、一方は海です。この

前に買った本の地図で、海岸線に沿った細長い街の格好は私の頭の中に入っています。

お正月なので、街の中は至って静かです。

私は山手へ向かって、ぶらぶらと歩いてゆきました。鉄道の線路を渡ったり、大きな倉庫が立ち並んだ屋並みの間を抜けたりして、やっと噴水のある公園まで辿り着きました。ここは、この前、車で通って一時停ったので見覚えがあるのです。フラワーベースのふちに腰をおろして私はホッとしました。

目の前に建ち並んだ、いくつもの大きなビルの林の彼方には、そのすき間を埋めるように山肌が見えます。まるで、たった一人、外国の街に放り出されたような孤独感が、ひしひしと身に迫ってきました。

このいたたまれないような孤独感が、琴糸



のように張りつめた私の心を、快くしびれさせてくれました。

たった一人、お正月の神戸の街角で、ぽつんと佇んでいる私。もし誰かが

「高村浩子さん」

と、言葉をかけてくれたら、私はわけもなく、その方の胸に顔を埋めて、きっと泣き

ずれていたことでしょう。わけもなく淋しく、孤独の快感の中に浸りきっていないながらも、人恋しさに耐えきれなかったのです。

時たま通り過ぎる人達も楽しげに語りあう若いアベックか、家族連ればかりです。私の様に、たった一人で歩いている人は余り見かけません。

三宮駅まで三十分もかけて歩いたでしょうか。私は夢遊病者のようにフラフラと歩いていながら、心の魂は身体を抜け出して、やはり被虐の世界をさまよい歩き続けていました。私にとりましては、これが今年の初夢になるのかもしれない。三月号に載せていただいた「私は誘拐されたい」にも書きましたように神戸という街は、私にとっては空想を働かすお膳立が揃っているように思えます。三宮の雑踏は、やはりお正月だという感じを受けました。幻想の中では、知らない秘密の場所に



無理矢理、連れ込まれて、それこそ口では言いあらわせないような、ひどい、いじめられ方をするのですが、実際には、私はこの見知らぬ街は恐ろしいのです。

阪急三宮駅の乗場を確かめておいて、ここから乗れば大阪まで帰れるという安心感から私は歩いて行ける範囲のところを、ぐるぐると回ってみました。細い路地の様な両側に、バーやスタンド、クラブといった店がぎっしりと並んだ裏通りも歩きました。勿論全部扉は閉じられておりますが、夜だったら、どんなだろう——と想像してみます。酒場やスナックの夜のムードは私には、さっぱりわかりません。でも、そんな妖しい雰囲気は、いつも私の被虐の幻想の中に出てくるのです。そうした頹廢的な世界に、とっぴりと全身を浸してみたい

——という気持が強く私を誘います。もし、きっかけさえあれば、私のような小娘は一も二もなく、そうした世界へ溺れてしまうようにさえ思うのです。無理に私を、ひっ拐ってゆく力強い男性があったとしたら、私は神戸の港から、香港の魔くつへ売り払われたとしても悔いはない気持すら抱いているのです。遠く響いてくる船の汽笛の音さえ、そうした被虐の夢に酔っている私には快く感ずるのは、どうしたことでしょう。

でも、私は阪急三宮駅から無事、電車に乗って、このアパートの一室に何事もなかったように帰ってきました。

まだ乾ききらないペンのあとに、右手の小指をこすって、黒いシミをつけながら、やっとな何枚かを書きました。文才の乏しい私。思っていることは沢山あるのに、どうしても思うように書けない悲しさ。もっともっと、勉強しなければと思いつながら、知らない字を引く字典さえ満足に買えない貧しさ。

でも、とにかく、平和で新しい年を迎えました。本年は私にとって、どんな一年になりますかしら。私の前に、白い馬にまたがった素晴らしいSの騎士が現われますことを念じながらペンをおきます。



カット・柏木真佐男

小説「拷問クラブ」シリーズ(4)

果てしなき虐待

鶴見浩一

真理子の可愛らしいピンク色の乳首は、恐
れのために豊かな肉の中へ埋没していた。

その米粒程の乳首を、松山老人は悪戯っぽ
く細く長い針金でつついていた。その度に、
真理子の裸体がピクッと反応する。

松山老人は薄笑いを浮かべて口を開いた。
「さて、準備も完了したようだし、そろそろ
始めましょうかな……」

「お願いしますッ。許して下さいッ。もう勘
忍して下さい!」

哀願する真理子の口調は必死だった。
無理もなかった。昨朝の、あのすさまじい

拷問を思い出すと、身体中の毛穴から恐怖と
苦痛の汗が滲み出てくる。

可能な限りに捻じられた、真理子の両足の
間の部分に、鋭い針を差し込まれた時、神経
という神経が全て逆立ち、感覚は激痛を超え
て躍り狂った。

その地獄の苦痛は、今なお、肉体の奥で、
うずいている。

拷問の衝激が収まらないまま、今朝再び、
この恐怖の部屋へ引き出されたのであった。
今日の縛られ方は、何時もと違っていた。
両足は閉じられ、両手も脇腹に押さえつけら

へ気違い歯医者」という名の拷問が始まろう
としていた。

何時もの特殊ベッドに縛りつけられた真理
子は、身体の奥底から湧き上がってくる不安
と恐怖に震えながら、無意味な哀願を繰り返
していた。

相変わらず与えられた衣服はパンティ一枚
なので、ライトに反射している白い裸体に無
数の粟が見られる。

れていた。ただ、首から上だけが、嚴重に固定されつつある。

——頭を責められる！

真理子の危惧は当たっていた。

頭の両側——可愛らしい真理子の耳を押さえつける様にして二枚の鉄板が固定された。左右にも上下にも頭が動かぬよう、それは締められていく。

「な、何をするのッ。やめてッ」

真理子は天井を向いて悲鳴をあげた。顔が動かせないので、真理子の視線は天井だけにしか走らない。

その限定された視界の中に、松山老人の顔が入ってきた。

碧く澄んでいる目を笑わせて、松山老人は言った。

「今日はですな、歯医者者の真似事でもしてみようと思ひましてな……」

「歯医者？」

真理子の背筋に、冷たいものが流れた。

種々の医者があるが、真理子にとって歯医者ほど怖く、嫌なものはない。子供の頃、電気ドリルで穴を開けられ、泣き喚いた記憶が強烈に湧き起こってきた。

——その歯医者、この人達が！

真理子の表情が、泣きそうに歪んだ。

「嫌！ 馬鹿な事はしないでッ」

が、その悲鳴は途中で消された。後に回った信次が、真理子の口の中に脱脂綿の山を積み入れたからである。

「ウウッ……」

真理子の悲鳴は、呻き声と変わった。

信次は、「ク」の字型の先に、鎖がついた鉄板を二個、持ってくる、それを真理子の上下の前歯に嵌め込んだ。

「アッ……」

冷たい鉄の感触が、真理子の歯齦を刺激した。

信次の手が動き、上下の歯が引き離され、大きく口が開いた。真理子の意志に反して、それは驚く程、広げられた。

ベッドが少し傾き、ライトの調節によって真理子の白い奥歯が露わにされた。

「アアッ……」

喉の奥から不安の声をあげる真理子の視界に、松山老人の顔が近づいた。

「本当は、歯医者用の椅子が欲しかったんですがね。今回は間に合いませんでしたので、このベッドが治療台です……。でもね、お嬢さん、電気ドリルだけは手に入れてきましたよ……」

よ……。ほら、この通り……」

薄笑いを浮かべた松山老人の顔が消えて、代りに電気ドリルの不気味な姿が、真理子の目に映った。

カマキリの手足のようなステンレスの棒の先に、鋭い鎌状の針が光っている。紛れもなく、歯の芯に穴を開ける、あの歯医者で使用する道具である。

「ヒイッ……」

長いマツゲに被われた真理子の目が、カット見開かれた。

——歯を削られる！

もちろん、麻酔なしだろう。真理子の神経は、ゾッと逆立った。

「ウッ……ウウッ」

真理子の絶叫は、大きく開かれた口の奥で転がった。

ねちねちとした松山老人の声が、再び真理子の耳に飛び込んできた。

「御承知のように、歯というものはですな、中に鋭い神経を内蔵しています。脳が近いために、その感覚は非常に鋭敏です……」

真理子の不安を逆撫でする様に、松山老人は囁いた。

「そこをですな、細い針金でつついてみよう

と思う訳です。拷問としての、苦しみの効果を試してみたいのです……」

——針金で歯の中の神経を！」

松山老人の嬉しそうな表情に反比例して、真理子の美しい顔が恐怖に歪んだ。

ジ、ジジ——と電気ドリルの先が回転を始めた。真理子の視界に、無表情な信次の顔と不気味に光るドリルが飛び込んできた。

身体と同じく、真理子の白くきれいな奥歯にドリルの先が当てられた。

ガ、ガガッ……という衝撃を真理子は奥歯に感じたが、痛くはない。

が、その後に続くであろう激痛を怖れて、真理子の心臓は潰れる程高く、波打った。

ドリルが歯の中心部分を貫ぬく時間は、僅か十秒程であったが、真理子にとって、それは発狂しそうな無限の時間に思えた。ねっとりとした油汗が全身に浮かんだ。

歯を貫ぬいて、柔らかい鋭敏な神経にドリルが突き刺さった。

「ウアグッ……」

喉の奥から、異様な呻きが洩れた。

真赤に燃えた火で神経を切られるような鋭い激痛が、真理子の脳髄を襲った。

真理子は大きく身体を突張らせ、絶叫をあ

げ、泣き、哀願した。

が、そのどの行為も、固く縛られた鎖と脱脂綿によって、表現は許されなかった。

その代りとして、真理子は髪の毛が総立ちになる激しい悪寒に似た、鋭いケイレンを繰り返した。

ドリルが引き抜かれてからも、真理子の四肢は小刻みに震えていた。

「まだ、これからですよ……お嬢さん」

松山老人は目で笑った。

口を大きく開け、涙をこぼしている真理子の美しい顔は、松山老人に満足を与えた。

「今の穴へ、この針金を入れてみます。痛い事は痛いでしょうな。むき出しにされた神経をつつくんですから……」

言語的責めを楽しみながら、松山老人は細く鋭い針金を、ちらつかせた。

「ウウッ……」

ズキン、ズキンと、うずく歯の苦痛に耐えながらも、真理子は悲鳴をあげた。

——ここは地獄だわ！ 地獄以外の何ものでもないッ……。

理由もなく、無差別に与えられる苦痛——それも想像を絶した拷問の連続である。いやへ拷問の場合、それでも救いがある。強

制する自由を為せば、責めが許されるからである。しかし——真理子の場合は、自由する何ものもなかった。ただ、美しき処女であるという名目のために、果てしなき責めが続いているのだ……。

そう考えると、真理子のデリケートな乙女の神経は、発狂するが如く震え、戦慄した。細く鋭い針金が、開けられた奥歯の中に差し込まれた。

「ギャアッ！」

真理子は精一杯の絶叫をあげた。が、もちろん声とは、ならない。

ガクンと四肢が突張り、白い裸体が苦しみに躍った。

鋭敏な神経が、細い針金でかきまわされ、突かれた。

脳に近いその痛感に敏感な神経は、想像を絶する激痛を真理子の肉体に与えた。

体内の血が逆流する苦しみに、真理子のつぶらな瞳が、異様に大きく見開かれた。髪の毛が逆立ち、油汗が水の如く落ちた。

それでも松山考人は針金を抜かなかった。科学者のような真剣な目で、真理子の苦痛の表情を見詰めている。

鋭い針金が、真理子の奥歯の中でグルグル

と回され、突き刺さった。

ギイッと言うような呻きが、真理子の肉体から洩れた。

真理子の目は、カッと見開かれてはいたが何も見えてはいなかった。ただ、口の中から鉄の長い棒を突込まれ、それが心臓を突き抜け、肛門まで届く程、貫ぬかれている自分の肉体を見た。

すでに神経の激痛は、肉体への苦痛と変化し、真理子の白い裸体は小刻みなケイレンを正確に繰返していた。

——海底へ沈む……。

そう思った時、真理子は失神していた。

「凄いですねえ……」

失神してしまつた真理子を見て、信次は驚歎の声を出した。

「ああ、我々の想像を絶する苦痛らしい」

針金を真理子の奥歯から引き抜いて、松山老人は答えた。

「政治犯の拷問として、使用する気持が分かる……。これでやられたら、例え嘘の自白でも話したくなるだろう……」

ふと、松山老人は澄んだ瞳を光らせた。

——また何か、アイデアが浮かんだな……。

その顔を見て、信次は思った。こういう表情をする時は、松山老人の脳裏に残酷な考えが横切るのである。女体責めに慣れている筈の信次が驚く程、松山老人のサドに対する思考は、新鮮で残酷であった。

果たして、松山老人は新しい責め方を説明し始めた。

「私が調べた限りでは、この拷問は、これで終わるのだがな、それじゃあ、我々にとって面白くない……」

松山老人は言葉を切ると、ニヤリと不気味に笑った。

「せっかく奥歯に穴を開けたんだ。もう少し虐めてみよう……」

「どういう方法で？」

「今、彼女の歯の神経は、むき出しになっている……。そこに電気を通してみようと思うのだが……」

「電気！ 歯の中へですか？」

「ああ……」

松山老人は、子供みたいに嬉しそうな表情で頷いた。

「脳に近いために、一番鋭敏な神経と、電気のコードを直結させる……これは強烈だぞ」

それは非道いッ、と言いかけて、信次は口

を閉じた。言いだしたら止めても後に引かない松山老人の事である。

——それにしても……。

と信次は思う。電気という奴は、肌の表面に触れただけで、もの凄いショックを放出する。それが、針で触っただけでも飛び上がる様に敏感な神経に直結されたら、その衝撃は計り知れない程、強力であろう。まして、脳に一番近い歯の神経である……。

信次は、底が知れない松山老人の残酷性に一種の恐怖を感じた。

——これは、よほど旨くやらないと、こちらが先に殺される……。

復讐の計画は、静かに慎重に進行させねばならない。もし、途中ででも発覚したら、自分には虐殺されるだろう……。

信次は、チラリと、そう考えて、何時もの忠実な助手の顔に戻った。

「分かりました。電気コードを用意します」

「ああその前に……」

去りかけた信次を、松山老人は止めた。

「スポイトと熱湯と氷水を用意して欲しい」

「……？」

訝し気な信次に、松山老人はニヤリと笑いかけた。

イメージギャラリー……怪盗サドンマ『緊縛美強奪』……岩波大介



「電気の前の、予備的な責めだよ……」
成る程と信次は頷いた。齒の神経を徹底的
に虐めるのらしい……。
信次が去ると、松山老人は失神している真

理子の腕に、強心剤を打った。
ピクンと真理子は気付く。気付いた時が地
獄への始まりである。
「アアッ……」

キリキリと痛んでいる齒の中に意識を取り
戻した時、真理子は絶望の悲鳴を洩らした。
サタンの化身である松山老人が、真理子の
視界に、はいってきた。その顔は明るく笑っ
ている。

「お目覚めですか……。起こして悪かった
とは思いますが、今から面白い事を始めます
ので……」

真理子には、もう何も言えなかった。言葉
の代わりに、真珠の様な涙と粘っこい涎が、と
めどもなく流れ落ちた。

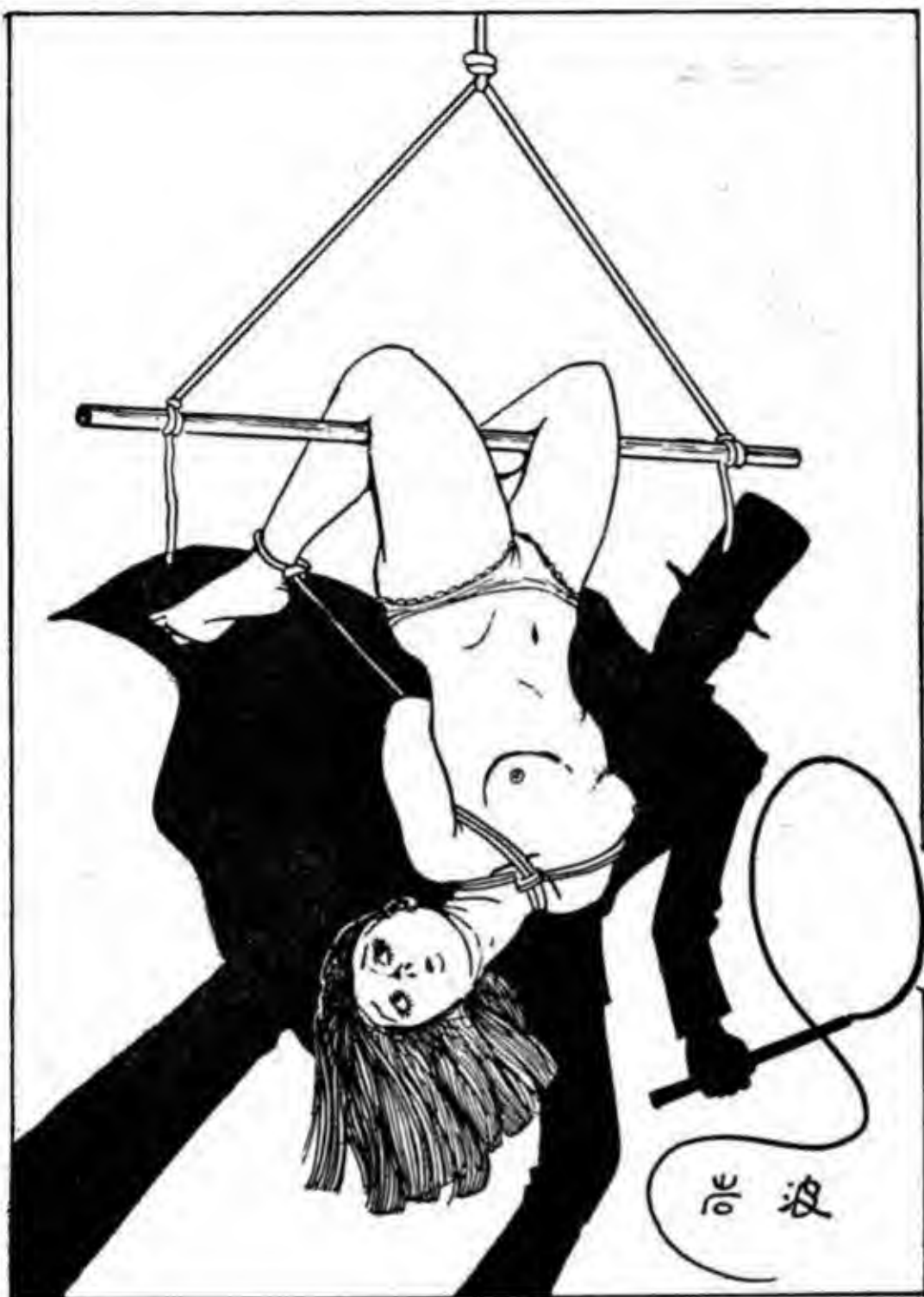
すでに、この地獄の家から逃げようという
夢を、真理子は失っていた。現在の真理子に
とって、唯一の望みは、苦しまずに死ねる事
のみであった。拷問の苦痛と恐怖から逃げる
事ができるならば、これから先の人生は終わ
ってもいい、と乙女の心は悲壮な決意をいだ
いていた。

しかし、それは許されない願望であった。
「おう、できたか」

信次が運んできた道具を見て、松山老人は
嬉しそうな声をあげた。
煮えたぎった湯と氷水とスポイト、それに
むき出しの電気コードが、ベッドの横のテー
ブルに並べて置かれた。

もちろん、真理子には見えない。見えないだけに、真理子の恐怖は暗く躍った。
「歯の神経というものは、熱さや冷たさの感覚には、非常に鋭いものです……。さて、氷水の反応を見ますかな……」

スポイトに氷水が吸い取られ、真理子の痛み続けている奥歯の穴へ、それが差し入れられた。
鋭い勢いで、氷水が神経を洗った。
「ウアッ！」



イメージギャラリー

怪盗サドンマ『苦悶美強奪』

岩波大介

真理子の身体が、ガクンと突張り、絶叫が喉の奥から、ほとばしった。

ギーンとした痛みが、真理子の奥歯から脳髓を突き刺し、全身を駆け躍った。

熱した血液のために、氷水はすぐに温くなり、一時的な休息が真理子に与えられたがそれは僅か数秒間の平和であった。

続けて、煮えたぎった熱源が奥歯を襲ったのである。

「ギアア——ッ」

身体中から苦痛の悲鳴をあげた真理子の四肢は、鉄のベッドが揺れる程、のけぞった。

熱湯と氷水——その正確な注入が三分程、繰り返された時、真理子の顔面は、白く引きつり、つぶらな双の目は瞳が上方に隠れ、白目に血道が走っていた。

大きく口を開いたままの苦痛の表情は、松山老人に深い快感を与えた。

二

肩で息をしている真理子に、強心剤と精神安定剤が打たれ、最後の地獄絵が始まった。

すでに、松山老人と信次の瞳は、異様に輝いている。

松山老人の合図で、信次は黙々と作業を開始した。ギラギラと光る剥き出しの電気コードが、真理子の頭部にセットされた。一方は奥歯の神経の中にねじ込まれ、一方は耳の穴へ差し込まれた。

真理子の瞳は、これから襲ってくるであろう地獄の衝撃を恐れて、白目を示したまま異様に見開かれていた。もうすでに、哀願の絶叫も、苦痛の呻き声も出ない。ただ、混乱し痛感を伝える脳の中で、苦しまずに死ねる事のみを描いていた。

電気のスウィッチが入れられた。

「……」

瞬間、鎖で固定されている筈の真理子の裸体が、信じ難いほど弓なりに輪を描いた。

鉄の鎖が激しく音を立て、鉄製のベッドすら、異様にきしんだ。

「……」

真理子の心臓が、形容し難い悲鳴をあげ、耳から黄色い粘液が流出した。

碧く澄んだ松山老人の瞳がキラリと輝き、電圧が上げられた。

「グエッ」

怪鳥の哭き声に似た絶叫が、真理子の喉から洩れ、口中の脱脂綿が泡状の液体とともに

押し出された。

すでに真理子の裸体は、粘っこい油汗で被われ、唯一の衣類である小さなパンティすらも驚くほど濡れている。

一分近く経った時、真理子の肉体は、おこりの様なケイレンが果てしなく襲っていた。やっと、電気が止められた。

緊張していた真理子の四肢が、スッと崩れ落ちる。乳房と白い腹が山のようにうねり、全身で呼吸している。

美しい真理子の顔は、無残なほどに歪んでいた。

松山老人は、その激しい苦痛の表情に、久し振りに性的興奮を憶えた。男性としての衝撃が、老いた体を力強く貫ぬく。

「信次、向こうの部屋へ下がっていてくれ」
声が喜びに震えていた。

信次は、ジッと松山老人の瞳を見詰めていたが、意味が分かったらしく、一つ頷くと黙って部屋を辞した。

松山老人は、真理子の口を拡げている鎖を少しゆるめ、急いでズボンを脱いでいく。

激しい喘ぎを繰り返していた真理子は、ふと、唇に異物を感じて目を見張った。

「アアッ……」

真理子の目の前に、醜悪な松山老人の下腹部が現われたのである。

「キヤッ」

処女の本能が、激しい拒絶の悲鳴をあげ、思わず目を閉じた。

その耳に、ゾツとなる松山老人の声が聞こえてきた。

「この可愛い口の中で愛して下さい……」

「嫌！ 嫌！ 嫌！」

悪寒を伴う羞恥と屈辱に、真理子は絶叫をあげた。が——それは声にならなかった。忌むべき異様な肉塊が、真理子の声を奪い去ったのである。

「……」

真理子の背筋から粟が立った。

半開きの間隔で上下の歯を固定されているので、口を閉じる事も、大きく開く事も許されない。

喉の奥と舌が、羞恥のために燃えるように熱く震えた。気が遠くなる屈辱の中で、松山老人の囁き声が命令した。

「唇と舌を使って……」

後の言葉は、処女の真理子が聞く性質のものではなかった。

拷問の苦しみで流れ出ていた油汗が、今度

は冷たい汗へと変化している。

再び、松山老人は催促した。が、もちろん真理子は聞く耳を持たなかった。

「私の言う事が聞けないならば、もう一度、奥歯に電気を流しますぞ……」

サタンの使者は、冷たく囁いた。

「……」

真理子は震えた。心の底から震えた。先刻の地獄の苦痛が脳裏に横切り、全身が小刻みに震えた。

——あの電気さえ許してくれば、もうどうなってもいい！ 何をしてもいい！

真理子は夢中で、松山老人の命令を実行した。目に一杯の涙を貯めながら、忠実なサタンの奴隷になっていた。

激痛という肉体の破壊から逃げる彼女の自己保存本能は、乙女のモラルよりも強く、激しかった。二十年間、彼女が育ててきた人格の破壊よりも、今の真理子にとっては拷問の苦痛からのがれる事の方が、より重要だったのである。それ程、拷問の恐怖と衝撃は、彼女の思考を侵し、変化させていた。

老人と美女の凄残な地獄絵は、限りなく続けられた……。

三

翌日から本格的な拷問が、真理子の肉体を襲った。拷問ショウの開催日が、あと八日と迫ってきたのである。

第一日目の〈全身責め〉を始めようとする寸前に、信次は松山老人に休暇を乞うた。

「何、田舎へ帰る？」

松山老人は、キラリと目を光らせた。これから一週間が、助手である信次の手が必要な期間である。

「はあ、忙しいのに申し訳ありませんが、親類に不幸がありまして……」

信次は、デタラメな口実を口に出した。

「どうしても帰らねばならないのか？」

松山老人は、あきらめきれずに追求した。信次を助手にして二年目だが、今はこの天才的な助手がいないと不便きわまりない。信次は松山老人の手足というよりも、思考そのものとなってサドの快楽を準備してくれる、貴重な人材であった。

「すみません。拷問ショウの前日までには戻りますから」

そう言って、信次は松山家を辞した。

その足で信次が目指した所は、郊外にある小さな一軒家である。今日から一週間の契約で、先日、農家から借りている。

その家には、すでに京都の叔父宅へ行くと父親を騙してきた松山美佐が待っている筈であった。

信次から、二人で一週間程、ゆっくり暮したい、と言われて美佐は、いそいそと家を出てきたのである。

美佐は知らない。父親への復讐のために自分の肉体が調教されているのを……。

信次の交差的なプレイも、二人の愛を高める手段と、美佐は心の底から信じていた。それ程、信次への愛は強く、世間知らずの箱入り娘であった。

それ故に、信次がドアを小さくノックした時、新妻の如き振舞いで、彼女にとっては不幸の使者である信次を迎えたのである。

美佐の夢は、戸口に立っている未来の夫の笑顔を描えた。

「信次さん……嘘ではなかったのねッ」

美佐は信次の胸に飛びついた。

「嘘など言うものか。これから一週間、誰にも邪魔されず二人切りだ……」

信次は、そう言って笑った。この美しき娘

を一週間でマゾヒストに変える……。心の底から楽しくなるような仕事である。サドの権化である松山老人の目の前で、一人娘がマゾ的倒錯性欲にのたうち回る痴態を見せつけるのも、そう遠い日ではない。

信次の胸の中の復讐計画は、着実に進行しつつあった。

信次は、美佐の肩をやさしく抱いて、家中へ入った。その手には、大きなスーツケースがある。中には、S・Mプレイ用の、あらゆる器具が詰め込まれている。

ボタンと音がして、玄関の錠が内部から締められた時、この家は完全に外部から隔離された二人だけの密室となった。セックス・プレイという名の、マゾ教育の教室となったのである……。

それは、美佐の正常な道德の破壊と、肉体的変化を意味する教室であった。

四

その日から、信次の調教は始まった。

まず、二人だけの床に着いた信次は、美佐の期待を裏切って、普通の愛撫のみを繰り返した。優しく乳房を吸い、裸体に指を這わせ

るだけの行為に没頭したのである。

すでにマゾ的な快楽に冒されている美佐の反応を観察するためであった。

果たして、美佐は燃えなかった。

「ねえ……」

鈍く目を光らせながら、美佐は鼻声を出した。

「もっと……強くしてえ……」

信次は薄笑いの表情で、とぼけた。

「どうすれば、いい」

「バカ……先日のように……」

美佐は裸体をくねらせている。明らかに、美佐の全身は刺激を待っていた。

「そうか、虐められたいのか、美佐は……」

「意地悪……」

美佐は、羞恥で裸体を赤く染めながらも、表情で哀願と媚態を示した。

「よし、虐めていいんだな」

顔を伏せて小さく頷く美佐に、信次はニヤリと笑った。

——これで、マゾ教育が堂々とできる……。

美佐の意志のように見せかけて、その実は指導権を信次が握った事になる。あくまで、計算された信次の行動であった。

「徹底的に責めてあげる……」

信次は美佐の耳を噛むようにして囁くと、部屋の中央にある大きな机に、美佐の裸身を縛りつけた。天井を向かせ、両手両足を拡げたまま、卓の足へ固定する。

大きな机ではあるが、仰臥した美佐の膝下と頭部は、はみ出して畳に垂れた。

「痛くないでね……」

自由が効かない羞恥の姿態に、美佐は不安そうな声をあげた。その反面、柔らかな四肢は期待に震えている。

ふふ、と信次は薄く笑うと、スーツケースの中を調べた。

種々雑多な責め具が詰め込まれている。

鞭、針、筆、ブラシ、浣腸具、ゴムのチューブ、縄、ローソク、腔鏡、毛ぬき、耳かき洗濯バサミ、大人のオモチャ……等々、あらゆる女体責めの小道具が揃っていた。

——さて、これから始めるか……。

一週間で、これらの全ての甘い責めを教え込まねばならない。すでに美佐の肉体は、針と鞭の軽い刺激は経験している。

まず最初に、信次はブラシを取り上げた。

針金の山が無数に植えられている。

「少し痛い、我慢するんだな……」

自由がきかない美佐の目の前に信次は、そ

れを見せつけて言った。

「それで何をするの……」

美佐の瞳が、不安そうに開く。

「ふふ……段々と身体が熱くなっている。いい気持ちにしてあげる……」

信次は、大きく広げられた美佐の全身に、針金のブラシを這わせ始めた。

「あッ、痛あい……」

ブラシの先端が鋭いため、美佐は裸体を、よじった。触れられた跡から、ピリピリとし



イメージギャラリー

『反抗娼婦折檻』

岡 たかし

た小さな痛感が伝わってくる。しかし、我慢できぬことはなかった。

が、柔らかな内腿の肉を急に強くこすられた時、美佐は悲鳴をあげた。

「やめてえッ」

執拗に白い腿を撫でられると、ズン……と鈍い痛みが走る。その場所が、カッと熱くなった。

信次は無表情に、ブラシを移動させた。形よく盛り上がった美佐の白い乳房を、それで責め始める。

「ア……アッ……」

白い、豊かな肉に針金が喰い込むたびに、美佐は熱い息を吐いた。

信次は、その表情に薄笑いすると、乳房の頂点に針金の山を押しつけた。とび出た乳首を、数本の針金が襲う。

「アッ……」

美佐は呻くと、四肢を突張った。

ジーンと、痛感と快感が混合した、電気のような、しびれが走る。

針金のブラシは、乳首と乳房の肉を突き、引っかき、撫で回した。

「信次さんッ……ああッ……」

鋭い刺激は、美佐の全身を駆けめぐり、何

時しか燃えるような快感へと変化していた。

美佐は、体の奥深い所が熱くなる自分の肉体を意識し、微妙に裸体を蠢かしていた。

「ふうッ……ア……」

美佐の熱い吐息が、信次の頭にかかった。

満足そうに顔を歪めた信次は、乳房を被っているブラシを、強く押した。

「あッ……ああッ」

強い痛みと甘美な電流が、美佐の乳房を圧迫し、腰がうねった。

「ねえ……もう許してえ……信次さん……」

濡れた目で、美佐は哀願する。

信次は口を歪めるだけで、美佐の声に構わない。

美佐の哀願に対して、信次はブラシを下へ下げていった。

ゆるやかな脇腹から、きれいな曲線を描いている下腹へと、蛇行しながら針金の刺激が移動していった。しかしブラシは、燃え上がる期待に躍っている美佐の望む所へは、意地悪く触れない。その周辺を挑発し、Uターンを繰り返すのみである。

美佐の裸体は、耐えられないように躍り震えた。

「お願い……ねえ……」

哀願する声も、熱く濡れている。

信次の手が動いた。大きく開かれている美佐の両足の間に、針金のブラシが走った。

「ウアッ……ああッ……」

美佐の全身が、ガクンと突張り、悶えた。

敏感な場所一面に、鋭い刺激が集中し、痛く甘い電流が、そこから放出された。

美佐にとって、気が遠くなりそうな甘美な感覚が、全身を翻弄する。

信次は、ブラシを前後に撫でつけた。

「アッ……」

鋭い呻き声が、美佐の唇から涎と一緒に洩れた。始めて経験する異常な快感である。美佐の思考は、その強烈な電流に混乱し、流された。

「お願いッ、もう……私は……ねえッ」

発狂しそうな肉体のうずき、美佐は悲鳴をあげ、次にくるべき信次の行為を促した。

羞恥も理性も、ドロドロと身体の内奥で燃えあがる甘い欲望の前に消え去っている。

「まだ我慢するんだ……」

信次は、興奮しそうな自分を抑えて、美佐に咬いた。

ブラシを捨てた信次が、次に手にしたもののはプラスチックの洗濯バサミである。バネは

少しは緩めてあるが、ギザギザになった先端で摘まれれば、かなり痛い。

美佐の耳に、一つ挟んでみると、美佐は飛び上がりそうに悲鳴をあげた。

「痛いわッ……何、それ」

「洗濯バサミだ……」

「ど、何処に使うの」

不安そうに美佐は聞いた。

「ふふ……三カ所を挟む……」

「三カ所？」

美佐の疑問は、すぐに解決された。

固く突き出た乳首の一方を、突然それで挟まれたのである。

「ああ……」

美佐は鋭い悲鳴をあげた。

すでに燃え上がり敏感になっている、充血した美佐の乳首から、強烈な刺激が伝わってきたのである。

ガクンと身体を突張った美佐の顔は、全身が溶けるような甘美な痛感に大きく歪んだ。

「ああ……信次さんッ」

プランと洗濯バサミを胸につけたまま、美佐の裸体は狂おしく、のけぞった。

もう一つの乳首に、別の洗濯バサミがつけられた時、美佐は異様な声で呻いた。二つの

乳首から、想像を絶する快感が、強烈に全身を駆けめぐった。

「ううッ……う……」

もはや、痛感は無かった。ジーンと肉体の奥まで、しびれる歓喜の潮であつた。

信次の手に、もう一個の洗濯バサミが残っていた。それは、つけるのに困難な個所——美佐の身体の中で一番恥かしい個所に、無理な恰好で挟み下げられた。

「ウア——」

女体の中で、最高に敏感な神経を挟まれた時、美佐の四肢は躍り、そり返った。鋭い痛感が鋭い快楽と変化し、美佐の喘ぎ声は犬のように激しく熱くなった。

甘い刺激に変わる痛覚の元である三個の洗濯バサミは、美佐の肉体を鮎の如く溶かし、体中の甘い水を、したたせさせた。もう美佐には我慢がでなかつた。柔らかく白い腹が山のように、うねり狂った。女体の三個所からズーン、ズーンと脈打つ強烈な感覚に、美佐

の裸体は小刻みに震えた。のたうち回る裸体を、科学者のような目で見つめていた信次は美佐の肉体に突立っている三個の洗濯バサミを、ピンと指で弾き始めた。

「ウアッ！ ああ……ッ」

すさまじい感覚の波が、そのたびに美佐を襲う。失神しそうな快楽の絶頂感が、めまぐるしく肉を責めた。

信次の弾き方が強くなると、それに比例して、美佐の呻きは激しくなった。

むしり取るようにして、三個の洗濯バサミが外された時、美佐の思考は完全に混乱していた。身体中が溶けて流れる甘美な戦慄に、呻き声をあげ、涎を流し続ける美佐の痴態は狂人に近かった。久し振りに興奮した情感を美佐の肉体にぶちまけながら、信次は美佐の悲鳴を心ゆくまで味わった。それは、全身で叫ぶ女体の歓喜の悲鳴であつた。——この女に比べて地下室の真理子は地獄の悲鳴を……信次は、狂態を示す美佐を抱きながら、地下室の地獄絵を想い浮かべていた。すでに、残酷な拷問が、真理子の白い肉体を襲っている時間であつた。教育第一日目のへ全身責めの苦痛に、泣き叫び哀願している真理子の表情が、信次の脳裏を、かすめていた。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



谷山久美子姉告白

『私とプレイした人達』雑感

扇

由起夫

私は相当以前より「奇ク」を知りずつと愛読はしておりますが、一度も投稿など、した事もない者です。書家としてのお稽古に、加えて自身自身の勉強、作品制作に追い回されその忙しさを理由に、ただ読んでは楽しみ、思い考えては気持のまざれるのに、まかして居りました。

最近、世間全体がポルノブームとやらで、何やら、そうぞうしく、又早ごしらえのSM雑誌のハンランで何か内容のないものばかりに目移りする昨今、やはり人のれんVは一朝一夕では出来るものではなく、「奇ク」の価値は派手さではなくても、噛みしめて味わえるに足る値打ちをひめていると感じます。インスタントでは作れない手づくりの濃厚な味わ

いが「奇ク」にはあります。

その伝統の「奇ク」の中で、東浦ひかる、絹川文代、梨花悠紀子、大塚啓子と嘗ての誌面を飾っていた人達の顔が、今、なつかしく想い出されるのですが、この谷山久美子姉の見事なカムバックぶりには、何か非常にフレッシュな新人の出現とでも表現したくなる感動を受けています。

現在の誌上で、話題の頂点になっているような感のある「深田菊子さん」の若さ溢れる万人を魅了せずにはおかない近代的なフェイス、ポーズに、何かドキッとするシヨッキングな魅力を感じるのですが、谷山久美子さんは、この美貌のM女深田菊子さんと二大双璧をなす女性だと思えます。

谷山久美子姉は年令も相当いつているようですが、深田菊子嬢よりは年期的に入った、この道の職人的な年輪を感じます。それがマゾ

ヒスチックアニマルと呼ばれたりする理由の一つであるかと思えます。

この道一筋にあらゆる経験を積み、その上で、十二月号、一月号に発表された彼女の告白文は、流暢な語りかけるような文体の中にイブシ銀のような沈みが感じられます。

十二月号、一月号の両月号を通じて、実に緻密なまでの観察力で、二人のプレイメイトの相異点に冷徹な眼を向けています。二人の趣味や嗜好の違いの表現、それに彼女自身から見た感じ方の相違やプレイの状態、プレイの経過、過程の表現が、しゃちこばらずに素直に描かれているのには、大いに好感を持ち得ました。

十二月号では、やはり百五十頁トップの写真が実に素晴らしく、肩に喰い込んだ縄、それに頬もくびれるようなサルグツワ。やるせなく愁いを帯びた顔の表情といい、全く見事というより外ありません。

文中で特に好感を得たのは、私の好みから言いますと、百五十三頁の

「……ノーパンでくる事……ノーパンで駅まで迎えに……後は手に剃刀を持って、剃られてしまいました」

という、この辺のアイデアと行動が私の胸を打ちました。それに流れるような綺麗な文章が、その場の雰囲気を実に迫って描写していて読みごたえがありました。



一月号は写真は両方とも、あまり感心しませんでした。文章も十二月号の方が良かったと思います。一月号の文章は急いで書かれたような臭いを感じました。ただ、「雨が降っていたので映画館に入って、その中で後手に縛られた」という一節は、何か貴女らしいものを感じ、ほのぼのとした被虐の親愛感に、ニッコリとせずにはおれませんでした。

谷山久美子さん

貴女自身の表現の中で「私は勝気な女だ」とか、「ノーマルな人とは違い、痛さの中に喜びを感じる女なのだから」といった表現を用いていて、現実に大変、強い縛りや責めに

十分、耐えてこられた貴女。それが鮮烈な印象として私の頭に残っております。

しかし、貴女はノーマルな極く一般的な女性として、いや、それ以上にノーマルな女性として大変、女らしい人間的には温かい人柄のように、私には見受けられます。

それが、このSMの美酒に酔い、実に心の奥底から楽しんでSMプレイに身を投じておられる事を、十二月号一月号より知り、貴女に強くひかれるものを感じ、はじめて、このような雑文を書いてしまいました。

今後、更に一層、誌面での活躍を祈ってやみません。



読みかた・とりかた・解しかた

あぶ・らぶす・こんと

水 沢 登

此まりを口へ入れてとまりは泣き

末摘花川柳の一句ではあるが、あなたは、
どのような状況を想像されるでしょうか。

「どうもよく……」と考えられる方々に、よ
く似た別の一句をあげておきましょう。

猿ぐつわはめと子守泣いている。

同じ末摘花のようですが、前句と比較して

「まりを猿ぐつわにしてくれ」といつている
のが分かります。

これらの句で、子守が、なぜ猿轡を要求し
ているのか想像する段になると、各人各様な
考え方をするに違いありません。

子守は、いたいけな、まだ毯をおもちやに
しているような少女です。

当時は士農工商の身分階級の差別が、ひど
かった時代です。川柳のパレ句に、よくテー
マにとられているので分かるのですが、子守
は下女同様に身分の卑しいものとして好き者
や若者達の欲望の餌食にされていたのです。

泣いているというのは、悲しくて泣いてい

るのではなくて「よがり泣き」です。
エクスタシーに、抑えても抑えきれぬ泣き
声を羞かしがって、毯を口へ押し込んで猿轡
にしてくれと、頼んでいるところなのでしょう。

子守がマゾで、猿轡をされたいのだと解釈
できないこともないでしょうが、年端もゆか
ぬ小娘であるから、マゾだとは、きめつけか
ねるのです。

もっとも、後の句には毯という少女めいた
語がないので、度重なる経験からマゾになっ
ていったのだと考えても、いっこうに差し支
えないでしょう。

いずれにしても、萌え出ようとする若芽を
欲望のルツボにはうりこんで、のたうちまわ
らせる好事家の、サジステイックな残酷絵図
の一枚ということになりましょうか。

いつの世も変わらないものではありません。

同じ末摘花の一句に、筆者は前句よりは劣
ると考えているのですが、次のようなものが
あります。

縛りからげてした上で背負って出る

あなたは、この句の状態を「荷造りした荷

物を背負って出る」と考えましたか。もしくは家出娘を、いたぶるヤクザ、SMプレイ、強姦誘拐犯、エトセトラ……。

あなたは、どの様に想像したでしょうか。あなたが想像した情景は、あなたの性行、潜在している欲求に基づいているのです。

同じ句、同一の文章を読んでも、読む人間によって味わいは千差万別、深くもあり浅くもあります。

読後の感想を精神分析にかければ、自覚してはいない欲求が顕われてくるでしょう。

二

次のコントから、あなたは、どんなことを想像しますか。

○

〔し〕き

妻「あなた、お聞きになって。今日、坊やが教室で、先生に立たされたんですって」

夫「……」

妻「いやだって泣くのを、無理やり立たせたんですってよ、他の生徒さんの前で。あんまりじゃありません？」

夫「……」

妻「何とかおっしゃいよ。いくら若い先生

だからって、むちゃですわよ。あなたなら、どうします？」

夫「グラマーな、とても美人の先生だっていうじゃないか。余りヒステリーを起こすなよ。僕だったら、立たせられる前に、とっくに立ってしまおうよ」

○

拙作で恐縮ですが、『教育ママが、息子が教室で立たされたのを怒っているのに対し、夫は「男にはそんなことは、たまにはある。先生が美人ならすすんで立ちもするだろう」と軽く、あしらっている。若干、妻の教育ママぶりを皮肉っている』と解釈すれば、何の変哲もないコントです。

あなたは、このようには感じなかったのではないだろうか。

例えば、次にあげる三通りの、いずれかではなかったのではないだろうか。

(一) 妻は文字通り息子が立たされた信じているが、夫は、題に暗示されるハレンチな行為が、女教師によって行なわれたと考えている場合。

(二) 妻と夫が(一)の逆に考えている場合。

(三) 双方がハレンチ行為としている場合。

この様な見方をすれば、一見なんでもない

コントは、全く変貌した様相を呈しはじめるのです。試してごらん下さい。

ところで常識として、女教師、しかも若い先生が、教室でそんなことをするわけはありません。事実、ハレンチな行為がなかったのに、前にあげた三つの例のように、妻と夫がそのように受けとったとすれば、彼等の性格は次のように浮彫りされてきます。

(一)の場合。夫は、かなりマゾ性が強い。

(二)の場合。妻は、性的に欲求不満がこうじている。

(三)の場合。妻も夫も救い難い。

いろいろな場合が存在する時に、その中の一つをえらぶということは、選択者の性向に強く影響されるのです。

もし、あなたが男性で、(一)の場合をえらんだなら、あなたは、このコントの夫と同じ性向をもっているのかも知れません。

あなたが女性で、(二)の場合をえらんでおられるなら、この妻と同じ不満をもっているのではないかと思われれます。もしそうだったら夫君や恋人に早く欲求の火を消してもらおう必要がありましょう。

「私は、どの場合にも該当しない。最初から女教師が、しごきをしたんだと思っている」



と言う方は相当なSM的性格の方です。

なぜなら、先ほど述べたように「ハレンチな行為は教室では行ない得ない」という常識を踏まずに、一足跳びにアブノーマルな行為を是認したのですから。

ここで「俺は、そんなにアブかな」と心配された方のために、このような判断は、座興だと申し上げておきます。

読者は誰でも、心理的なトリックに幾分かは、かかっているのですから。

第一に、この雑誌がKK誌であること。

したがって第二に、コントの内容をノーマルに解釈することを抑制する作用が、アブノーマルなものを期待欲求する心理作用を起らせているからです。

このように、思考方向が無意識に誘導されるので、多少なりともアブ気が強くでてくるからです。

三

一般に、アブノーマルに関係するフィクションもノン・フィクションの内容も、陰湿な

もの、肩のこるものが多く、読みながらニヤつくことは、とてもできないことです。

作中の登場人物は、当然、作者の影なのですから、作者が道徳の規範におびやかされている以上、作中、人物の行動も陰花植物的になるのです。

ですから、作品の登場人物と作者とが、第三者の關係に近づけば近づく程、内容は頭花植物的に明るくなり、登場人物のアブノーマルな行為を、しゃれのめすことができるようになるのです。

しかし作品は、作者とは全然、別個の存在になり得ることはないでしょう。

作品と作者とが、全く第三者であると判断したとしても、意識下で連帯することは拒絶できないことです。

この様な作品では、どうしても「お遊び^{プレイ}」という要素が濃くなってくるものです。

SMプレイということばの示す意味、領域は、ある程度、固定化されてきました。

セックス濃度の濃い、それは微笑を誘う、たぐいのものではなく、一種の真面目さ、真

剣な顔つきでなくては接し得ない雰囲気をもったものなのです。

筆者はSMプレイを、SMのお遊びにまで拡張したいと思うのです。

もっとも、プレイということば自身に「お遊び」ということが内包されているのですから、こういう意図が起こってくるのも当然なのかも知れません。

これから、あなたがお読みになる「コント十題」は、筆者が徒然なるまま、仕事の合間にレクリエーションとして書いたものです。あくせくした、この世のウサを、一時でも晴らして頂ければ望外のサタです。

四

「ボーリング」

「ミニで行ったでしょう。すっかり見えちゃって羞かしかったわ」

仲間と話し合っている女高生の姉の話を、側で聞いていた、ちっちゃな妹。

「わたちゃんか、ちっとも羞かしくないわ」

「あなたは子供ですもの。でも、パンティが見えるって、とっても羞かしいことなのよ」

「そんなら、見られないように、はいてゆかなければいいのに」

〔夜の公園にて〕

×

「これは、なーに」

「私の目。あなたのものよ」

「これは、なーに」

「それは私の唇。キスして」

「これは、なーに」

「私のボインちゃん。敏感なのよ」

「これは、なーに」

「私のおへそ。あなたのペット」

「これは、なーに」

「私のヒップ。あなたのものよ」

「……………」

「……………」

「それは私の愛らしい子猫ちゃん。あなたのものよ」

「なんだった？ 君。僕は今、どこもさわっちゃいないんだけど……………」

×

〔拷問〕

美しい女スパイが捕えられ、素っ裸にされて椅子に縛りつけられると、鋭敏な箇所すべてに電線がクリップで、とりつけられた。

「いいな。話したくなったら合図するんだ」
女に猿轡をはめながら秘密警察官が言う。

まわされる変圧器のダイヤル。途端に硬直する女の四肢。猿轡を洩れる押し殺された絶叫。…………しばらくして、女は首をコックリして合図した。

心得た警察官はスイッチを切り、締め上げた猿轡をはずしてやると、女は電気ショックで目をトロロンとさせて言った。

「素敵。わたしシビレちゃったわ。お願い、もっと電圧、上げて」

×

〔クレオパトラ〕

もう一センチ高かったら、彼女のブラは張ち切れて、とんでしまっただろう。

×

〔モテル主人の客判断〕

一人…………ピーピング・トム氏

異性二人…………緊縛プレイ

同性二人…………ご存知ホモ・レズ

異性一人、同性二人…………SMプレイ

二組のカップル…………ワイフ・スワップ

×

〔エチケット〕

夜遅く帰宅した夫。ベッドに見知らぬ男と裸で抱き合っている妻を見つけると、舌打ちして「お前は、まったく、だらしない。他

人の前に出る時は、いつだって身なりをキチンとしていなけりゃいけないって、あれほど言ってたのに」

×

〔楽園物語（一）〕

アダム「君、僕の一番、気に入っていたスーツ、どこにしまったんだい」

イブ「あら、ごめんなさい。ゆうべサラダにしちゃったわ。オイシイ、オイシイって言った、あれよ」

アダム「困ったな。こんな格好じゃね」
イブ「心配しないで。素敵なのを、えらんできてあげるわよ」

アダム「でも君じゃ、あてにならないよ。いつも虫食いのを、もってくるんだから」

×

〔楽園物語（二）〕

「イブのやつ、また、ふくれてるな。いやになるよ。僕が浮気したと、信じこんじゃってるんだから」

×

〔楽園物語（三）〕

「いまに、われわれは偉大な発明家だって歴史に書かれるぜ。なんていったって肌のあれない接着剤を君も僕も使ってるんだからな」



〔本心は?〕

パーティで女達は姦しい。

中年の紳士、ひとりごとに、「さるぐつわしてやりたくなるような女が、沢山いるね」と呟くのを聞きとがめた未亡人が、「まあ、はしたないことを」と、とがめるのに、紳士落ち着きはらって、

「奥様。私は、さるぐつわをしてやりたくなるような女が沢山いる、と申したのですよ」

〔兇器?〕

団地の防犯懇談会で防犯委員。

「……というわけで、特に団地住いの女性が留守番中に襲われるときなどは、いつも皆さんが見馴れているもの。身近にあるもの。普段は皆さんのお役に立っているもの。日常生活にかかせないものなどが、突然、兇器と化して迫ってくるのです」

聞いていた新婚の若奥さん。ポーツと、ほほを染めると、うつむいてしまった。

「委員さんでエッチなことを……」

〔交換〕

庭先へとびだしてきた女の子。隣の坊やへ息せき切って、

「たいへんよ。今夜から、わたしのパパもママもあなたのパパ、ママになっちゃうのよ」

「そんなこと。まさか」

「ほんとよ。ママが電話で、今夜、夫婦交換しましょうって、そっと、あなたの子に話してるのを聞いてちゃったのよ」

「困ったな。どうしよう」

「それで、わたし、考えたの。わたしたちとあなたのお姉さんと、わたしのお兄さんが交換しあえば、何でもないことじゃない」

五

チリ紙交換に出すはずの古新聞のテレビ番組を見ているうちに、いたずら心からか、題名が次のように語りかけているように思えてきました。いくつか、あげてみましょう。

どんな時、どんなものでもSMプレイができるという例です。

カメラリポート……カメラハントの別名。限りなき青春……若い時は激しいからね。協議する七人の夫婦……ワイフ・スワッピングか。

映画「血斗! 荒野のサボテン」……砂漠にニョッキリ。血斗。君、わかるね。

パークにまかせろ「何という死に方」……幸というか不幸というか。パーク中の死。

バレー・ボール大会……谷間で玉をもて遊ぶ大会。なんて不謹慎な。

ウルトラ・ゾーン……超極端な場所、妙な連想は、いけません。

夫よ男よ強くなれ「問答無用よ」……文句なし女の願い。

インベーター「地球脱出」……侵略者「至急脱出」「子宮脱出」は考え過ぎ?

引金を引け……もう俺は、もたない。十代と共に……たまにはこんな子ともね。

ファイトの記録……毎日、正の字で帳面につけてるわけじゃないよ。

へこたれんぞ……ファイトの記録反省。レディズ・チャレンジボウル……夜ともなれば淑女も挑戦してくるよ。

待ッテマシタ……午後八時五十六分は早い

んじゃないかな。もっとも今日は土曜日。

キイハンター……これはプロ。貞操帯脱しの名人。

華々しき一族……スゴイノナンノッテ。これも遺伝ですか。

夜の大作戦「女・男・女」……トリプル・クロス。あんた、ちょっと変態だよ。

きょうの出来事……昼間のO・Lとっても激しかったな。

今日の競馬……私はSよ。

十一時三十五分ファイティング・アワー。

その名の通り。

帰ってきた古道具屋……朝帰りのお年寄。

結婚式「あこがれのふるさとで」……いずれ、種まきに参ります。

技術研究所開所四十年……四十年も前からテクニクの研究がされていたとは知らなかったナア。

ガンマン無情……全弾打ちつくして、ようやく相手をダウンさせた男に、切なさがかみあげてくる。

おたずねに答えて……身上相談ということ、身の下相談。

サインはV……Vは何の頭文字？

映画「若草物語」……あの頃の若草は、何

も知らず純情そのものだった。

赤き血のイレブン……私も今日から大人になったんだわ。

小さな英雄の物語……ドン・ファン・テノーリオ・ジュニア一代記。

六

ハンジものコーナー。初手はやさしく、だんだん難かしくなるのがミソ。

サツとわかったヒトはかなりS重症患者。

×

ハ	で	園	た	女	は	出	に	され
ム	ガ	責	泣	責	に	され	と	声
梅	て	苦	痛					

×

(解答) ハダカで口へパンティを詰めこまれた美少女は逆吊りにされ、鞭打ち、パイプ責め、羞恥責めにされると、一声高く呻きを上げて、苦痛から気を失った。

七

最後に筆者のつくった二つの珍英文を、ご

披露します。

このチン文は何と解釈され、何と読むのでしょうか。ただし、文法的なミスは承知の上です。識者は、より巧妙な文に、ご訂正願いたいと思います。

解答を見る前に存分に、お考え下さい。

正解十名の方には、何も進呈致しません。

×

(1) Go to! A wife's matter means on pillow gay.

(2) Nine times he hands gay Joe. A eater couches son of fence neary.

×

△解答▽

解釈

(一) さて、女房の重大事は、みだらな枕で呻きを上げることである。

(二) 九度、彼はゲイのジョーの手を握る。色事師は、ようやくヘノコをねかしつける。

読み方

(一) 強盗は女房のまたもおっぴろげ

(二) 口説かれて下女あいた口へのこなり

△追伸▽ 二題とも末摘花の二句です。読み方を英語らしきものになおし、できた英文にS Mの意味をもたせるのには苦労しました。

カット・春川ナミオ



飲ましてやろうか

「ああ、畜生ッ。此奴、ぶっ殺してやりたくなつたわ！」

ひろ美は発作的に足をあげて馬場氏の頭を蹴った。いまは洋服を脱いで、ヌードになっている。

ドスンと大きな音を立てて引っくり返る程蹴倒したのだから、演技ではなく、かなり力

が、こもっていた。

蹴倒した馬場氏を上から睨みつけるひろ美の目は、ほんとに殺しかねまじき凄まじさが光っていた。

馬場氏の顔にも恐怖の色が走った。

今夜のひろ美は、かなり荒れている。

いまにも潰れそうな道頓堀劇場で踊っている、しょうがない。何とか東京へ出るチャンスをとねらう、ひろ美に対して亭主の北島は大阪のキャバレーに職場が確立しているから

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(26)

馬場庄平の巻(7)

鬼山 絢 策

大阪から動きたくない。と言って、離れ離れに生活するのは、ひろ美の方はよくても、北島は望まない。そんなこんなで、昨今のひろ美はムシヤクシヤしている。

私は昨夜、ひろ美の家に泊まって、つぶさに、その様子を見てきたから、ひろ美の荒れる原因を知っているが、初対面の馬場氏は、さぞ驚いたろう。

「ききしにまさるサジスチン！」と内心、思ったに違いない。

「お前あたしのお尻が受けとめられるかい」
あごをしゃくってひろ美は馬場氏に言う。

「ハ、ハイ、大丈夫です」

「ほんとかい、フフフ。じゃ、そこへ仰向けに寝てごらん」

床の上に長々と寝た馬場氏の顔の上にドッシリと、お尻を、のつけた。

「アッ！」

馬場氏の両手が思わず豊かな尻を支えた。

「アハハハ。アハハハ」

お尻をグリグリと、ゆする。

「そりゃ、危い。危いよ。そのくらいにしときなさいよ」

六十キロもある体重をモロに乗せられたのでは潰れてしまう。私は思わず声が出た。

「どうだ、参ったか。参ったら参ったと、お言い。どうだ、参ったか。これでもか。こん畜生ッ。これでもか。アハハハ」

馬場氏は必死に耐えている。

「この野郎ッ。ケツの下で、くたばっちまえッ。どうだッ、この野郎ッ。参ったか」

ひろ美は口をゆがめて笑いながら、尻をゆすっている。

「参った、参った。参ってる。そのくらいで勘弁してやってくれよ」

私の方が馬場氏の代弁をする始末だった。

ひろ美は私の顔をチラと見て、ヒョイと尻を持ち上げて胸の上の方へ移動させた。

「どう？」

と下から出てきた馬場氏の顔を、反応を見るように覗きこんだ。

「いい気持だった？」

馬場氏は犬のように口を一ぱいひらき、ハッハッと荒い息使いをするばかりで返事もできない。

「ふふふ。素人は、まあこんなもんね」

「素人って、どういう意味？」

私は、ひろ美に聞いた。どうも今夜はカメラのレンズから目を離す場合が多い。

「甲藤源太って知ってるでしょ。プロレスラーの……」

「サア、知らないな」

「あたし東京に居る時、甲藤源太の顔をお尻で責めたことがあるのよ。ところが、さすがプロね。十分ぐらい、うんうん言って押し潰してやろうと思ったけど、潰れないのよ。その時は、こんなもんじゃないのよ。上からドシーンと尻餅つくように、ぶっつけてやったんだから。それでもウンともスンとも言わないわ。レスリングの練習になるんだってさ。」

変なトレーニングだわね」

それから甲藤源太というのが気になって、プロレスの試合を馬場のチームと、豊登のチームと見に行ったら、なるほど前座試合に甲藤源太というレスラーが居た。豊登の方に所属していて、背は低く体重も九十キロぐらいしかなかったが、さすがガッチリとしていてひげを生やした若い男だった。

だが、これは後日に分かったことである。

「でも素人にしちゃ、よく我慢する方だよ。」

御褒美をやろうか」

ひろ美は至極無難作にヒョイと、お尻を前の方へ、ずらせた。両膝を、かなり高くあげているので、レンズから見ると、かなり熟れた、あけびは、こんもりとした肉づきを、もりあがらせて、えみわれていた。

馬場氏のおごの尖端に乗せられた、あけびを舌をのばして食べようとするが、辛うじて舌の先が届くか届かないかの位置にある。

馬場氏が頭をグイと持ちあげた。

「あッ、そのまま、そのまま。頭を上げないで」

頭を上げると、かくれてしまう。

「コラ、じっとしてろッ！」

ひろ美は足を上げて、持ち上がった額を乱

暴に踏みおさえた。

「あせるんじゃないよ。バカ！」

彼女は、ほんの少し前へ、ずらせた。私は忙しくシャッターをきった。

「右足をズッと伸ばしてみて下さい。股の間に、顔が半分、隠れるくらい……」

私は、そのままの位置で、少しずつバラエティーをつけて撮った。

「フフフ、センスは、こんなのばかり好きなのね。こんなのナニさ。子供だましみたいなんじゃないの。マゾってのは、こんなものじゃないのよ」

「そりゃ、分かってるよ」

「なめるなんて誰だってやってるじゃないのどうって事ないわよ。ねえ、そうだろう」

ひろ美は下を向いて話しかける。馬場氏は返事の代りに奉仕で、こたえた。

「こいつ、飲むんでしょ」

少し強めにおしあてながら、ひろ美は私の方を向いて、いたずらっぽく笑った。

「ウン、あんたのならね」

「飲ましてやろうか。ええ？」

かがみこんでジッと馬場氏を見下ろす。馬場氏は、かすかに首を縦に振った。

接唇の瞬間

ひろ美としては、オープンダンサーの頃に舞台で、さんざ、あけびの味を客達に味あわせているから、それ自体は、あまり刺戟の材料にはならないのだろう。

「舞台で飲ませたこと、ある？」

「そこまでは、時間が、ないわよ。一カ所で長くやって、せいぜい三十秒ぐらいでしょ。それも、いざドッキングするまでに二十秒ぐらい、かかっちゃうもん。ドッキングは、ほんの一瞬よ。長くやって五、六秒ぐらい。舞台を濡らしたりしたら、あと、踊る人が困るでしょ。それ、考えると、できないわよ」

「なるほど、そうかもしれないね」

「でも舞台でやるのは、やめたわ。どんな奴が舐めてくるかしれないもん。口に病気をもってる野郎が居るでしょ。そんなのにやったら、汚してやるつもりが、こっちが汚されちゃうからね。アハハハ」

馬場氏の舌を自由に解放してやって、ひろ美はケラケラ尻を、ゆすって笑った。馬場氏の方が、その間に、かなり昂奮度が、たかまってきたらしい。

「はじめは千人の男の顔へ跨がってやろうなんて思ったこともあったけど、馴れると、ばかばかしくなってくるわね。それに一度あげられると、こりちゃうからね。もっとも、あげられたのは、それをやったからじゃなくてオープンしただけだったけど、サツでいろんなこと、しつこく聞いてくるからね」

馬場氏がグフングフと、へんなむせたような咳をした。

私は、もうネクタールを飲んでいるのかとちよつとあわてたが、そうではなかった。

それは花蕊から、にじみ出る蜜の甘さにむせたようだった。

馬場氏は上気して、酒に酔ったような陶然とした表情をしている。

自分を圧しひしんでいる女性が、過去において、いかに多くの男性を征服してきたか、いかに偉大な女王であるかが、彼女の言葉と行為によって、ヒシヒシと感ぜられ、感激の度が急速に昂まって行ったようである。

「とにかく、ばかばかしくなってくるわよ。」

外人のストリッパーが、やり出したから、まねして、あたしにもできるかなと思ってやっただけのことなのよ。別に、そんなこと、やったからって、ギョラが殖えるわけじゃない

しね。第一、オープンなんかやってたら、他の芸ごとを勉強する意欲が、なくなっちゃうもんね。だから、あたしオープンは三年前にやめたの」

彼女が舞台でオープンをやっていた頃を、一目でも見たかった。

こんな素晴らしい女性に花道の上からグッと下を見下ろされたら、どんな男でも吸い寄せられるに相違ない。だが彼女の言う通り、オープンなんかやってたら、毎日が単調な生活になって、同じことの繰り返しで食って行けるのだから、人間としての向上がない。そこに目ざめた彼女は、やはり賢明な女性だと思った。

だが彼女の過去を聞いているうちに、一つだけ、ふっと疑問が、かすめた。

それは玉井ひろ美に始めてモデルになってもらった時、例の阿麻君と新宿のホテルで撮影した時のことだが、彼女が阿麻君の顔に跨がって、最初に接唇したとき、一瞬、彼女はしびれるように目を、ほそめた。あの時の写真は私の傑作の一つとして印象が深かったが私は彼女の表情をレンズから見て、また、伸ばされた写真から見て、

ピリッ……と感じた……

と受けとったのである。

普通の女性なら極めて当然のことである。が、毎日毎日、数人の男に接唇させ、一日

に三回興行とすれば、延べ十数人の男に舐めさせてきた彼女が、そして今は「ばかばかりになった」と言う彼女が、どうしてあの時、あのように、しびれたのであろうか。

そういう疑問だったのである。

「でもさ、たまにこうしてサツの目を気にすることもなく、プライベートに、のびのびと遊ぶってのは、いいもんだわね」

ひろ美は真珠のような歯をチラリと見せてほほ笑んだ。

そうか。クンニリングスにかけてはプロの彼女でも三年もやめていれば、久し振りで男の粘膜に触れた瞬間には、やはりピリリとくるのであろう。

男の舌が、恐る恐る「御機嫌いかがい」に這い上がってきた瞬間には、むかしのことが一ぺんに想い出されるのであろう。

長い舌、短い舌、臆病な舌、図々しい舌、弱々しい舌、タフな舌……。

経験豊富な彼女にとっては、いろいろな想い出が、一度に、よみがえるのであろう。

そう言えば私の会社にドンファンとして有

名な男が居たが、彼はプロアマの別なく百人を超える女を征服してきたと豪語するのだが彼の言うには、

「所詮、女を征服すると言っても、はじめてコックを挿入する、あの瞬間だけが、たのしみですね。それと、あまりよくない楽器に当たっても、一応こっちが最後に注入する瞬間これでこの女を征服したという満足感、それだけです。でも注入する時よりも、最初にコックが女の体内にもぐりこむ時の方が、ぼくの場合は、しびれますね。だって、そこまですれば注入は時間の問題だけですからね。コックを入れる、そのみをめざして、あの手この手で女を口説きおとす努力をしてきたわけですからね」

言われて見れば、そんなものであろう。

とすれば、女性の場合、ひろ美でも、男の舌が最初に触れた時が、征服感を満足させる一番の頂点であるのかもしれない。

そう言えば、倉田由紀さんと玉井ひろ美を比較してみると、かなりの相違点があった。由紀夫人は、プレイの最中、何度も昂まることがある。もちろん、男を押し潰す瞬間が最高ののだが、とにかくプレイの最中に、自分のペースに、はまってくると、激情が繰り返

されるのである。

それが、ひろ美の場合は「しびれたな！」

と見たのは、あの阿麻君のファーストシーンだけで、あとはサディスチックにポリュームが、あがってくることはあっても、由紀さんのようにプレイがセックスと結びついたようなエクスタシーを見せたことはなかった。

このへんが、由紀さんは何度、経験しても

やはりアマであり、ひろ美はプロなのだと思います。

レンズを覗きながら、ふと、そんなことをあれやこれやと想い浮かべると「仕事」の方がストップしてしまっていた。

目 つ ぶ し

さっきから何となく、同じようなとこばかりを、シャッターをきっている。

「このひと、おとなしいわね。いい子だわ。でも相当、女の子、なめてるね。でも、あたしは、そこらの女の子とは違うよ。いい氣になつて舐めてやがると、ひどいめにあわせてやるからね。ふふふふ……」

突然ひろ美の豊かな尻が大きくゆらいだ。

あつという間もなく、尻の下に馬場氏の顔が額のあたりまで埋没してしまった。

そこで猛烈なローリングがおこなわれた。

ひろ美は私の方を笑いながら見ている。だが口許のあたりがキュッと、ゆがんでサジスチックになった。

「アハハハ、アハハハハ」

ローリングはピッチングに変化した。

「アハハハ、アハハハ。どうだ、参ったか。参ったかい」

ひろ美は依然、私の方、レンズの方を見ているが、意識は、お尻の下にあつまっているようだった。

「目の玉へ、こすりつけてやってるの。これも氣持のいいもんよ」

突然、襲った闇黒の苦しみに馬場氏はうろたえ、あわてたであろう。だが声さえもあげ



られない状態なのだ。いや声をあげていたかもしれないが、おしつぶされて私の耳には入ってこない。

私は興奮して続けざまにシャッターをきったが、実際には、あまり絵にはなっていない場面である。あとでやいて見ると、ひろ美の顔も馬場氏の顔も全然、見えないのである。

ひろ美がレンズの方を向いて笑っているのは一枚だけで、あとは両手を前へ突張って頭を下げてしまっているの、ボーイッシュに刈った頭の脳天だけが写っているし、馬場氏の方もまた、やや薄くなった額の生え際から脳天だけが見えている。何てことはない、脳天同志のハチアワセで、これが、ほんとのノーテンファイラー……では、シャレにもならない。こんなところを四、五枚も全く同じところを写しているのだから、私も、よっぽど冷静さを失っていたに相違ない。

それというのも、今日は写真よりも別のこの方が絶えず頭にあった、せいだろう。

巻き戻しのレバーがとまって、フィルムの切れたことが分かって、私も我に返った。

「あ、フィルムが終わった。ひろ美ちゃん、休憩にしよう」

ひろ美は私の言葉も耳に入らぬように、四

つん這いのまま、尻を「の」の字に振っている。

「ひろ美ちゃん、もう勘弁してやろうよ。死んじゃうよ」

「……」

ひろ美の呼吸が、かなり荒くなっている。

私は、ほんとうに心配になってきて、傍へ寄って、ひろ美の身体を抱き起こした。ひろ美の肌はジットリと汗ばんでいた。

抱き起こされたひろ美は、私の膝の中で、乱れた髪をブルンと振って私を見、酔っぱらったような、うるんだ目で笑った。

「フフン、完全に潰してやったわ」

ひろ美は腰をずらせ、馬場氏の胸の上に跨がり直した。その尻の下から出てきた馬場氏は眉を寄せ、目をかたく閉じて、口をあけ、ハッハッと、あえいでいた。

「どうだ。参ったか、この野郎」

「大丈夫かい」

馬場氏の顔はテラテラに光っていた。このテラテラの表情を撮りたいと思ったが、いまはフィルムが、きれている。

私はひろ美の頬にソッとキスしてみた。

ひろ美は避けようとはしなかった。

「目が、あかなくなっちゃったじゃないの」

「フフ、大丈夫よ。あたし、病気なんか持っていないからね、安心おし。そのまま、じっとしてれば、あくよ」

「ひろ美ちゃん！」

私は、ひろ美を抱いてベッドへ寝かせ、私も服を脱いで裸になった。

ひろ美の身体はマシユマロのように、やわらかく、弾力があつた。

いまは、ひろ美に対しても恥かしくない状態に、私はやっとなれたのである。ひろ美は私を見ても、べつに驚く様子はなかった。

私は、ひろ美の上に全身を、ゆだねた。

ひろ美は下から腕をまわし私の背中をグッと抱きしめてきた。豊かな乳房がつぶれた。

ひろ美は私を見上げ、その目で床の上に仰向けに倒れている馬場氏の方をチラと見た。

私も誘われて見た。

馬場氏は死んだように、もとのままの姿で動かない。

私は恐れることなく入った。

ひろ美はプツと頬をふくらませ、フーッと私の顔に息を吐きかけて、目をつぶった。

クイーンツ

と締めつけてくるちからに、私は脳天がパカッと、ぶち抜けたように感じた。グイグイ

と奈落の底へ吸い込むようなちから……。

「こんなすばらしいちからがあるなら、舌でも吸いこんでもしまおうだろう」

私は舌に、とりかえなくなった。

私の背骨が折れるほど抱きしめてくる。

昨夜から、卑怯未練な私だったが、ここまですれば、もう何も考えることはなかった。

いや、それどころではない。少年の頃から夢にまで描いた構図が、いまこそ実現したのである。

私は馬場氏の立ち場に身をおき交えてもいい。どちらでもいいのだ。ともかく、このような場面を空想したことは何十回とあった。

人間は、はじめて新しいショックな体験をした時、それを確かめるような昂奮にかられるものだ。はじめて女性に接した時、結婚式の初夜、はじめて我が子の顔を見た時、はじめて外国の土地を踏んだ時、生まれてから見たこともないような大金をつかんだ時、はじめて坐る役付きの椅子、等等等……。

いまの経験も、それに似ていた。

私は、ひろ美をしっかりと抱き締め、密着したままで床の上の馬場氏を見た。馬場氏は相変わらず、仰向けのまま寝ている。目は閉じているが、瞼が、ひくひくと動いていた。

私は今にも、せきをきりそうになるのを、必死に耐えた。

私のところは、ひろ美のところに、とけ込んで行った。

ひろ美と同じ心境に移り変わっていた。

ひろ美は今、床の上にのびている馬場氏を亭主の北島に置き変えて見ている。だから私も、その気になった。馬場氏を責めることは亭主の北島を責めることなのだ。

昨夜、果たそうとして果たせなかったことを再現しているのだ。昨夜、あれだけ、ひろ美がお膳立てをしてくれたのに、私の不甲斐なさから果たせなかったことを、昨夜から今日までの短い間に、私は何回、後悔したことだろう。

今その、うつぶんが爆発したのである。

私は、ときどき馬場氏を見たが、ひろ美は一度チラリと横目で見たきり、あとは目をつぶって見なかった。見ればイメージが、かわれるからであろう。ひろ美には、そこに北島が寝ている——という想念をえがいているからだ。

餌を待つ犬

ひととき——

何もわからない時間が過ぎた。それは麻醉にかけられたように、何分ぐらい過ぎ去ったのか、時間さえ分からぬ忘我の境だった。

馬場氏は相変わらず仰向けに寝たまま、つぶれた目を、まぶたをヒクヒクさせている。

ひろ美が、もうそうに首を回して馬場氏を見下ろした。

「顔を洗っておいでよ。そうすれば目が、あくわよ」

馬場氏はノロノロと起き上がり、浴室の方へ歩いて行った。手さぐりもせず歩いて行ったところを見ると、目は見えるらしい。

私はカメラにフィルムを入れ替えた。

「まだ、撮るの。もう、いいじゃない？ 写真なんか——」

ひろ美はベッドの上から私を愚かしそうに見て言った。写真きちがいの私が子供っぽく見えたのだろう。だが私は母親に叱られてもまだいたずらをやめない、だっ子のようにフィルムを詰め変えると紋りとシャッターをセットし「三脚がないのが不便だな」と思ったりしていた。

「タオルない？ そこに」

「タオルは、ないよ」

「フフン……」

ひろ美は両腕を頭の下に組んで、遅い腋の下を毛を見せていた。片膝をスーッと、くの字に立てる。貪慾な感じをそる太腿だ。

ひろ美は、まだプレイをやめる気持は全然ないのだ。ひろ美がカメラを、うっとうしがったのは、これから起こる次のプレイに対して、カメラが、しばしばプレイを中断し、邪魔するのを嫌ったのだった。

「今夜は彼が多年、望んでいたことを実行しようと思うんだ」

にこやかに笑っていたひろ美が、急に不機嫌な顔になり、私の方に向けていた顔をそらして仰向けに向いて黙りこんだ。

「まずいことを言った」

どうも、いけない。私の言ったことは事実なのだが、「彼のためにやっている。彼の希望に従って我々が動いている」ひろ美は、そういう風にとっただけだった。

ひろ美にとっては馬場氏の気持などは、全然、無視し去ってよいのだ。

私は私で、ここまできて、まだ変な弁解めいた心理が、そう言わせたのだった。

それと、もうひとつ。普通の女性だったら「あのひとが、いやがるんじゃないの？」

という質問が、とび出す公算が大である。それを機先を制して封じる意味で言ったのもあった。

だが、ひろ美に対しては、そんな気使いは全然、無用だったのだ。ひろ美は馬場氏を全く人間として見ていないのである。

彼女はサジステインとしての資質を備えた女性であることを私は、すっかり忘れていたのだった。

もっとも馬場氏に対する私との交友は十年近く（この時点では）続いているし、彼のアウトラインは大体、知っている。ひろ美の方は今夜、初めて会った、どこかの馬の骨とも分からぬ一人の男、一匹のけだもの、一個の道具にすぎない。そのくらいにしか思っていないのだから、私とひろ美の立場の相違から、やむをえないだろう。

馬場氏は、かなり長い間、浴室から出てこないで、どうしたのか、ことによったら目が開かなくなったのではないかと、心配になってきたが、そこへヒョッコリ顔を出した。

「すみませんが、浴衣を——」

私が浴衣を投げると、馬場氏はそれを着て出てきた。ひと風呂、浴びてきたので、サッパリした表情で、もうすっかり元気を取り戻

していた。

彼は、つとめて明るい表情で、

「おかげさまで——さっぱりしました」

何がおかげさまだか、何がサッパリしたのか、よく分からなかったが、私は、ともかくちょっとテレクさかった。

だが、ひろ美は、たいしたものだった。

ひじ枕をして横向きに寝ていたが、馬場氏の方を睨みつけるように見すえた。

その太々しい腰の盛り上がりや、濡れて光る菱形の部分もあからさまに、誇示するように見せたままだった。

奴隷に対しては、いっときも、あまい顔を見せぬと言う威厳が、その放縦な姿態でありながら、全身に満ち満ちていた。

ひろ美に見据えられた馬場氏の方が、恐懼したように目を伏せた。

「その枕を、とって！」

大きなフカフカの枕が、ベッドの下へ落ちていた。私は枕が落ちていたことなど全然、気がつかなかった。いつ落としたのかさえも思い出せなかった。

「ハハハハ」

馬場氏は大切な宝物でも扱うように、大きな枕を抱え、両手に捧げ持ってベッドの傍へ

ひざまずいた。

ひろ美の、ごう然とした態度は、まさに女王の貫録があった。

「早く。くたびれるじゃないか。バカ」

馬場氏は、恐る恐る枕を頭の下へ押し入れる。

その一瞬だった。

ひろ美の裸の右足が、バネにはじかれたように高くはね上がり、膝小僧がガツン！と馬場氏の額に衝突した。

「アッ！」

と馬場氏が両手を上げようとする。それより早く、ひろ美の足がサツと下から馬場氏の首へ引っかけられた。そのままグイッと足を倒す。馬場氏は、よろけるように、横倒しになって、ひろ美の足の方に倒れた。

「裾の方から上がっておいで」

馬場氏は額に受けた膝小僧の一発で、まだ呆然としていた。

「どうしたんだよッ」

ひろ美はパツと半身を起こした。

踊りで鍛えた、しなやかな身のこなしは、いままでの、けだるそうな動きを吹っ飛ばして、生き生きと躍動した。

馬場氏はベッドの傍へ坐っていた。それは

犬がお菓子でも貰う時のように、かしこまった姿だった。

奴隷に花蜜

私は、あわててカメラを構えたが、突然の早い動きでもあり、ライトもつけていなかった。そこで、そこまでのアクションを撮る暇はなかった。

私は、さっきから馬場氏が現われたら、どういう風にして撮影のポーズを決めようかとあれこれ考えていたのだが、そんなものは不用意になってしまった。ひろ美の方で、どんな「女王と奴隷」のシーンをつくり出してくれたので、私としては大助かりだった。

ひろ美は坐っている馬場氏の首を両の太股で挟んで、上から見下ろしていた。

やっと動きが止まった。そこで私はライトをつけた。部屋の暗い照明に馴れた目には、まばゆかったが、ひろ美はライトの方を見向きもしなかった。ライトを浴びることには馴れている職業からか、まばたき一つせず、馬場氏を恐い顔をして睨みつけていた。

ひろ美の怒ったような表情は、たとえばもうもなく美しい。あの目で射すくめられたら、

大抵の男は、しびれてしまうだろう。

「どうしたい？ ホラー！」

ひろ美は、なぶるように見せびらかしていた。

私は、やっとカメラを、構えることができた。

ひろ美は、Mを扱いつけているので、そこまでの動作が極めて自然で、スムーズに運んでいる。ことによると、ひろ美は、今夜のようなプレイは、すでに、いく度か経験しているのかもしれないと思った。

彼女の両腿が、ゆるく開いた。そして直ぐまた、閉じられた。手を使う必要はなく、自動ドアのように、前にあったものは扉の中に吸いこまれるように引き寄せられていた。

そのとき——いままで一度も私の方を見なかったひろ美が、レンズの方に顔を上げてはじめてニッコリ笑った。

「こんどは、どんなポーズを、すんの？」

いたずらっぽく笑いながら、ひろ美はレンズに向かって問いかけた。

「そうねえ。一度、着物着てもらいたいな」

この天満ホテルの浴衣は、一枚一枚、柄が違っていて、馬場氏の着ているのは白い格子縞の柄だが、他に紺地に白く葛のからんだ女



柄の浴衣があった。私は、その浴衣を見た時からこれを着せて撮ろうと思っていたのだ。黒っぽい柄は写真写りがよいからである。

「着物、着んの。面倒くさいわねえ」

うつ向き加減に、上体を前かがみにしていたひろ美は、いまはベッドへ両手をついて、上体を反らせていたが、片腿が、ひょいと馬

場氏の頭の上に乗せられた。

非常に面白いポーズである。カメラから目を離していた私は慌ててレンズを向けた。

「ホラ、退きな。いつまでペチャクチャやってんだよう」

頭の上の腿が膝を立てて、足を頭にかけると、思いきり床の上に蹴倒した。

そこまでレンズに納めて、カメラを置き、紺地の浴衣をパリりと、ほぐして、ひろ美のところへ持って行った。

仰向けに倒れた馬場氏を跨いで、ひろ美は仁王立ちに立ちはだかった。

その後ろに回って、浴衣を着せかけ、後ろから首筋に接吻した。

「ウフッ、くすぐったい」

ひろ美は首をすくめ、身をよじらせた。

「ハイ、紐。うんと衣紋を抜いて、着てみてくれよ」

そこは馴れたもので、胸前を合わせず、グツと衣紋を抜いて着ると、

「あら、この浴衣、短いわ」

確かにツンツルテンみたいになった。

ひろ美が、へたな男より大きい上に衣紋を抜いたからだった。

「いいよ、いいよ。立ったところは撮らないから」

浴衣の前が合わされないように、ひろ美は両手で裾を、グイと捲くった。濡れた部分へ浴衣がつくの嫌がったのだった。

胸前がはだけて、形のいい乳房が片方、はみ出していた。

「いいな、凄く妖艶だよ。足を上げて胸のあ

たりを踏んで見てくれよ」

私はカメラを構えた。

「ハイ、次に顔を踏んでみて」

「イヤよ。ベタベタして気持ちが悪いもん」

私は浴室からタオルを取ってきて馬場氏に投げた。

馬場氏が両手でタオルを顔に当てると、

「拭いてやろうか」

ひろ美の右足がサツとあがってタオルの上から顔を踏んづけた。

足の裏は上下にピッチングし、左右にローリングした。

紅い唇から白い歯をチラリと見せて、こういう即興的なアイデアを生み出すということ、ひろ美は、やはりタレントとしての才能があるのだろう。

撫で回していた足の裏が、顔の中心で止まると、鼻を潰すように、力が入った。

「ウッ！」

と馬場氏は、うめく。その声を期待していたように、ひろ美は満足して、足の指にタオルをはさんで、傍にポイと捨てた。

タオルの下から出た奴隷の表情を見るのも彼女の楽しみの一つらしい。ひろ美は、責めながら、よく奴隷の苦悶の表情や、屈辱の動

きを確認するのが好きなのだ。

馬場氏は目を細め、口を開けて、苦しさを現わしていた。それは真実の表情だった。

ひろ美は浴衣の裾をヒョイと捲くって便器に跨がるように、しゃがんだ。

苦痛から解放されて、息つく暇もない。次は屈辱への責めだった。

ひろ美の男の扱い方は、私が考えているよりも、はるかに荒々しく、猛々しい。

ひろ美は、鼻だけを潰すのは勘弁してやっていた。

この責め方には、微妙な甘みがある。

屈辱と苦悶のうちに、泣きむずかる赤児が母親から無理矢理に乳房を口におしこめられると、泣き声を口の中にこもらせながら吸いしゃぶる、それと似た真理があるのだった。そうなることは、母親は経験によって知悉しているのだ。

「泣く子に乳房」「奴隷に花蜜」

これは全く同意義のものなのだ。母親にはそれだけの自信があると同様に、女王にも絶対の自信があるのだ。

レンズから覗いて見ると、息のつまりそうな迫力にあふれていた。ほんとうは、もう少

し距離が欲しいのである。部屋の中央でドカンと坐ってやっているために、私は隅の端の方に退るだけ退っても、辛うじて両者の顔が入るが、上と下の顔を全部、入れることは不可能で、どちらかの顔が半分、切れてしまうのだった。幸い35ミリの広角だけを持ってきていたので、半ば救われたが、本来はこういう場面は28ミリか21ミリのレンズが欲しいところであった。

私は立ったまま俯瞰の位置で撮り、寝そべって仰角のアングルでも狙った。

俯瞰の時は、女性の顔が男性の顔よりも二倍ぐらい大きく見え、無力な奴隷をひしぐ女王の逞しさは表現されるが、ポイントとなる太腿が細っそりと、にんじんみたいになってしまふのが欠点だった。仰角だと、この太腿が大根どころではなく、大理石の円柱みたいに太く、迫力は満点だが、それよりも更に奴隷の顔が大きくなり、頭の部分など、岩石のように大きくなるのがイメージをこわしてしまふのだった。そういう時は、ひらいている両腿をすばめて、顔の半分をおおいかくすようにして、奴隷の顔を、できるだけ小さく見せる工夫が必要なのだ。

太い一本の線

今夜、私はレンズを覗きながら、かなり興奮していた。

過去に、こんなことは一度も経験したことはなかった。写真を撮る時は、画家がモデルを描く時と同じように、製作に全神経を集中しているから冷静さを失わなかった。

それに、自分の設定したポーズが現われれば期待通りであり、よりよく美しく撮ることに腐心するのだが、今夜は殆ど私が設定したポーズはなかった。ひろ美が、次から次へとポーズを創って行く。すべて、ひろ美のペースで進んで居るので、次にどんなことがおこるか、私は全く分らない。それだけに映画でも見ているような状況なので、興奮するのかもしれない。

いや、それよりも、馬場氏に対するサジスチックな感情が働いていることが一番、大きな原因かもしれない。いつも傍観者の立場にあったのが、今夜は一枚、噛んでいるという意識が、いつもの私とは異質のものにしまったっているのだった。

馬場氏は、ひろ美によって、いつとき盲目

にされた。

と言っても、事実はそうでなかったのに相違ない。床にのびていた時からスッと立ち上がって浴室に歩いて行った時、手さぐりもせずに行ったから、彼の目は、ちゃんと開いていたと思ったのである。

ひろ美は、たのしそうな表情で奉仕する奴隷の顔を眺めていた。ときどきスーッと目を細める。それは彼女がエクスタシーを感じたときの、独特の表情だった。

今夜は私の方からポーズをつけることは殆ど、しなかった。

今も同じようなポーズを、アングルを変えこそすれ、さっきから十数枚、撮っていた。いろいろ慾ばるよりも、ほんとうに、いいものが一枚、欲しい。今夜は、その線で行こうと思った。

「ああ、トイレに行ってくるわ」

ひろ美が、サツと立ち上がった。

「ちょ、ちょっと待って下さい」

「ウフフ、やるの？」

ひろ美は私の方を見て笑った。

「すまないけど、ちょっと我慢しててよ」

サア、私は忙しい。

まず浴室に電球が、とりつけられるかを見

に行った。浴室の中はタイルで写真電球のグリップを、はさむ余地がない。

ふと気がつく、そんな心配が無用なことが分かった。

このホテルは浴室と寝室がくっついていて境がガラス張りになっている。そこへカーテンが掛かっていて、ちょっと見ると気がつかないが、カーテンを開けば、寝室から浴室の全景が丸見えになる仕掛けになっている。

これは、この室に入った時、室の調度や、その他を調べて気がついていたのである。そしてその時は浴室を写すのに、すぐく便利だなと思いつながら、忘れてしまっていたのである。寝室の方から浴室へ向けて照らすのは容易である。この操作は簡単にできた。

「早くしてよ。洩っちゃうわよ」

「あ、もう、いいですよ。どうぞ」

「おいで！」

馬場氏は起き上がったモソモソと、あとについて行った。

猿股一つになった馬場氏が先に入り、位置をきめる。

「その浴槽へ頭を乗せてみて下さい」

「えっ、なに？」

ガラス一枚だけだが声はよく通らないらし

い。私は声をはり上げてもう一度、言った。

馬場氏の大きな身体が、長々と浴室一ぱいに寝そべる。その身体を跨いで、ひろ美は片足を浴槽へかけた。

「これでいい？」

「ちよっとその足で顔を踏んでみて下さい」

言いかも終わらぬうちに足が顔の上に乗る。

「それから顔をお湯の中へ、めりこむようにして……」

「何言ってるのよ。もう我慢できないわよ」

「じゃ、いいです」

片足を六〇センチほどの高さの湯槽のふちにかけ、右手は腰に当てて、いく分、反り気味に身体を起こしたまま、ひろ美は微笑を浮かべて馬場氏を見下ろした。

「その一瞬前——」

という、みごとなポーズを、シャッターを切るのと同時に、一本の線が馬場氏の顔の上におちた。

私は、ちよっと意外に感じながらも続けてシャッターをきった。

前にやった由起さんの時は、ショットガンの散弾のようにパアッと散ったものだった。最初から一本の線にはならなかったので、今度もそうだと思ったのが、ひろ美のは最初か

ら太い線だった。男性のよりも、かなり太い水線だった。それは鼻の頭に突き当たり、すぐその下のあけられた口の中に、みごとなコントロールで注ぎこまれた。

見る間に溢れたと見ると、馬場氏が横を向いて、ゴホンゴホンと咳入った。

「ストップ！」

と私は声をかけたが、ひろ美は構わず横顔へ向けて続けた。私の声が聞こえなかったのかもしれない。

馬場氏は、また仰向けになったが、意地の悪い水線は、口をはずして鼻から両目を狙って叩きつけられた。

十数秒ぐらいだと思うが、意識すれば、かなり長い時間に思えた。

それから二、三カ月、経ってから、ふと見た週刊誌に、南雲ゆりの記事が出ていた。

写真を見ると、玉井ひろ美の顔だった。

いま日劇のミュージックホールに出演しているという記事を見て早速、出かけて行ってみた。

何と特別出演の一枚看板である。スターとして彼女の写真が何枚も張り出されていた。『とうとう、やったか！』

玉井ひろ美のあの素質、あの魅力、あのフアイト、たゆまぬ努力が、いまこそ実のつたのだ。私は彼女の写真を見つめながら、さまざまな感慨が、はしった。

その日は用があつて彼女の舞台が見られなかったが、二日ほど後、カメラを用意し、カブリツキ正面の席を予約して見に行った。

彼女は張りきって熱演していた。ひろ美の唄は一段と磨きがかかり、場内を魅了した。

彼女のソロの場面が二回あり、松永てるほどのデュエットや、空飛小助とのコミックなど、出ずっぱりと言ってよいほど舞台を独占していた。

私はカメラを覗き放しで何枚も撮った。

大阪の舞台に出ていた頃は、客席の客の顔を意識的に眺める癖のあった、ひろ美だったが、この日は客席に笑いかけても、特定の客を見ることはしなかった。それだけ一生懸命やっていたのだらう。だからデベソに出て来て、つい目と鼻の先に居る私にも全然、気がつかなかった。

あんまり、はりきりすぎて、唄いながら踊りのまま、客席の方へ向いて舞台の袖に引込む時、頭をぶっつけて「アイテッ」と言ったのが客席に聞こえて大拍手を浴びた。

ダンサーとしても歌手としても、日劇の舞台が踏めれば一人前である。私は彼女の成長を喜ぶとともに、私の先見性にも自信めいたものがもてた。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのは大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

小屋を出て、ちょうど飯時だったので、日劇の下のトンカツ屋から楽屋へ電話をかける。と、ひろ美は例によってレインコートのようなレザーのオーバーを羽織ってやってきた。

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切りの判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「舞台、見たよ。出世して、おめでとう」

「ありがと。もう忙しくって忙しくって。今夜も、またキャバレーの仕事があるのよ」

「結構だね。ところで御亭主はどうした？」

「え？」

「ホラ、あの北島君さ」

「ああアレ、亭主なんてもんじゃないわよ。別れたわ。センセ、その話、東京へ来たら、しないで頂戴よ」

何かソワソワと落ちつかないひろ美、いや南雲ゆりであった。

その後、彼女は舞台を止め、いまでは有名なタレントと結婚して、よい女房になっている。という噂をきいた。しかし彼女には、いろいろな野心がある。もちろん、よい意味での、仕事上の野心である。あれだけのタレントを持ちながら、このまま埋もれてしまうのは惜しい気がする。果たして、その野心を捨てて女房業にあまんじることが出来るであろうか。いや、これは余計な心配だ。

馬場氏とは、その後も交遊を続け、現在に至っている。既に二十年を越えるつきあいである。まだまだ材料は、いくらでもあるのだが、あまり長くなるから、ここで一応、打ちきりたい。

(馬場庄平の項、終)

桐原紫門・画



初版から、もうずいぶん——十年の才月が経って、小著「切腹——悲愴美の世界」が、新稿を一章加えて昨春、久保書店から再刊された。病気で入院中のことである。

おかげで四月は大阪のある財界人クラブで講演、五月は週刊誌で梶山季之さんと対談、十一月にはTVで電話の声だけ出演させてもらった。思いがけないことばかりで、もの慣れない筆者を面喰らわすに充分であった。

まとまるとあちこちの新刊紹介に取上げられ、また店頭で人目にも触れて思いがけなく夜、自宅へ電話を下さる方、あるいはお手紙を下さる方が少なくない。そして、そうした

切——腹——研——究——夜——話

花のいのち

中 康 弘 通

方々とのご交誼には、はじめて「人間探究」

に寄稿したときご書翰を下さり、以後二十年にわたり^{かわ}渝ることのないご友情を賜わっている黒部竜二氏を筆頭として、今は亡き三島由起夫氏、須藤律夫氏をはじめ、ずいぶん数多く恵まれている。文通のみの方も多いが、健康に恵まれない小生を京都まで訪ねて下さる方もまた少なくない。一期一会の別れをした三島氏の思い出は今に新たである。その思いが氏への挽歌を次のように作らせてくれた。

縁ありて一期一会の機を持ちし

君の悲報に熱しまなぶた

汐騒に似て林鳴る秋の夜を

君と語りき舟岡山麓

切腹は男のわざと云ひ切りし

言葉のままに命を断ちき

腹切りぬと聴きて浮かび来「切腹」を

論じつつ君のうかべし微笑

絶筆のテーマのごとく転生し

また訪ひ給へと我は祈らむ

同年に生れし吾は世を慨く

君の思ひを身にしみて知る

命かけし訴えののち「よく聴いて

もらえなかった」と泣きしとふ

世を慨く思ひ激して命果つれ

しかすがになほ手だてなけむや

みづからの血を流せしに人あげつらふや

三島由起夫死す四十五歳

ところで、そうした読者、後援者の方々の中で特に数少ない女性の熱心な読者に、K子さん、R子さん、N子さん、M子さん、S子さんなどがある。

そのR子さんが先年寄せられた文章を読み返してみても、ふと思ひ出されたのは、小説現代の四十四年四月号巻頭グラビヤ、フォトアシケート・男装のイメージに野坂昭如氏が選んだひと、安達瞳子さんである。しかもその第一番に挙げられた安達瞳子さんが、野坂さんの演出でであろう、腹切りの場に臨む美女像として捉えられているからである。

三方に、作法どおり切先少々巻き残した腹

切り刀を据え、その前に心もち伏せ気味な瞳を冷たく光る切先に向けている、睫毛の影もあえかな瞳子さんが、作法どおりの白装束に肩衣つけて、その肩衣を今や撥ねんとするさまに双手をかけた風情は、いつもながら生まじめに人生を直視する瞳子さんの、くろぐろと美しく見ひらかれた双瞳とともに、抽象的な悲愁の美というものを、女性に移しかえたら、女性で表現したら、恐らくこうもあらうかと思われるばかりの、すがすがしい美しさである。なまはんなかなタレント・スターでは見せられない、野坂氏いうところの「腐たけた」という古典的な表現がびったりの、美容麗姿とも云える。

その安達瞳子さん、文章家としても一流の名文をものさされる安達さんの、ちょうどその一年前ごろ開かれた制作展のパンフレットに見える文章から、こんな一節が、筆者の眼を魅いた。安達瞳子制作室、昭和四十三年四月一日、「桜旅」の一節である。

雲の流れや行く水の、とらえどころのない自然の冷酷さの中で、サクラだけが年に一度生命を持つものの哀しさ激しさを感じさせることを、昔の人は知っていたのでしょ

うか。そしてまた、一人で眺め明かすには切なすぎるゆえに、人は車座を組んでの宴に心誘われたのでしょうか。（中略）

遠く 近く 春に 冬に

じっとサクラを見つめてみたい。すがり溺れ、暴れもがいて凝視しながら、花の生命を通して人間の生命を探す自分の仕事に立ち向かって見たいのです。

爛漫のサクラに感じる生命感、決して形に示されたそれではなく、時の流れの中に自覚させられる、今生きているという存在感としての、それであるように思えるのです。

こうした抜き書きは本当は、お書きになった方に失礼だし、文章全体の流れを変え、その主旨を曲げるかも知れない。しかし、この一節だけは、どうしても記録しておきたかったのである。

これが、先に記したR子さんとどんな関係があるかという、R子さんの文章にこんなのがあって、花といのちのかかわりを記しておられるからである。

切腹 随想

切腹をする時には、唯々心を澄まして、

桜の花の散る風情を思いつつ、己が切腹をいたすべきものと存じます。

静かに正座して双肌を脱ぎ、右手に腹切刀をもった時には、心の中には恨みも苦しみも総ての煩悩を去っていなければならぬ。

さすれば、水の流れるその心のごとく、己れの生命を大きな自然の明滅する流れと観じて、己れの生き死にも、その流れの一つの白き漣の、波うつ律動と観じていけば後は作法にしたがって、おのづと見事に切腹しうるものでございましょう。

桜の花の、あのほのかに紅い^{くれな}いはいた葩^{はなびら}が、風に吹かれて萼をはなれようとしている——それと同じ生のふるえを、裸身となれるおのれの、これから切り裂くべき腹を左手におしなでている時、その手に感じる事でございましょう。

脛下一寸の、左脇に短刀を刺す時は、葩の枝をはなれし事。

右へ切り廻す時の裸身のふるえは、葩の日の光に光りつつ空を舞い流れること。又十分に切り廻して己が腸の溢出せるを左手におさえる時は、葩が水面に地にふれる事の、葩としてははじめて、その葩を空以外の

の物質にふれる事の、それぞれ情念を一つと化して切腹すべきでございましょう。

あえて、己れの心情を生きんとして死を決するに、己が腹を苦痛にたえて切つて死ぬというのは、本来みにくい、怖ろしいものである、生から死への変容の相を、美しさの秀れたるもの、刹那とは云え光華を發せしめたるものとして、発願させたいという心情でございましょう。

醜を美に転化しうるかどうか……それこそ、切腹する者の切腹する心によって決まるものでございましょう。

さればこそ小説や劇の中に、古来日本において、切腹の場面が数多く設定されて来た理由と存じます。

この人はまた、次のような感懷をも述べている。

あえて切腹を選ぶ人の情念を、一行の文章の中にこめたとすれば、次のような事でございましょう。

「日の出の断崖の上で、昇る日輪を拝しながら……かがやく海を見下しながら……けだかい松の樹の根方で切腹すること」

これは三島由起夫の「奔馬」の中にあります。そしてこの小説の最後の一行は、

「正に刀を腹につき立てた瞬間、日輪は臉の裏に赫奕と昇った」となっています。

つまり切腹は、生命の輝きの極限を實現するための死であり、其処では死は生命の喪失ではなく、むしろ生命を彩る、生命の一部としてあらわれています。

生と死の統合、悠久の生存感、自己一個の生命がもっと大きな生命に転化する契機——そのような死が、醜惡のものから花火のごとくほとばしる生命の中に融解して行くものとして、切腹という内面的な死の形式がある、と云えましょう。

切腹はそういう意味で、実は人間の一回限りの心情の象徴的演技なのです。

切腹に伴う死の恐怖、激烈な肉体の苦痛それにたえそれと戦って、なお厳格な作法をもった自己を律し、自己の精神を凜乎として輝かしく確立して行かなければなりません。

それは他人の手による死刑にも、一瞬にして致命にいたる自殺にもない、極限状態における人間の、心情とその美しさを立証

しようとする象徴的な行為なのでございませう。それは、瞼の裏に日輪を輝かしめるだけの心があって、はじめて可能でございませう。

しかし切腹は女性にこそ適わしいものと思います。それは、一つにはみずからを死なしめてはじめて生命の美しさを見るという意味で、やはり受身でございませう。己れを外へぶつけずに、己れの内面において己れを犠牲にして、生命の美しさを象徴するということは、女性の本質的なものにつながるものがございます。

R子さんはみごとに三島由起夫氏の心情的

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

死を予見し、更に女性の特質的な切腹への希求を述べ、このあと、もし自分が切腹するとすれば、という仮定のもとにその状況を記している。それは略させて頂いて、何故R子さんが切腹に魅かれたかを次の短歌に見よう。

礼津女哀詞

礼津女哀れ 己が心のひとすじに

白く極まりて腹切りにけり

礼津女哀れ たまきわる時想ひしは

おのが腹切るさま清きこと

礼津女哀れ おのれの腹を美しく

切りて死なむを本願とせし

礼津女哀れ 唯、おのが死の清きこと

切にねがひて深腹切りぬ

礼津女哀れ おのが心の清きこと

あらはすべくも腹切りにけり

礼津女哀れ おのが心のひとすじに

赤き血潮に腹塗りにけり

礼津女哀れ 汝が切なる心かも

切れし腹より腸出づるも

礼津女哀れ 裸身の腹切りゆくに

双の乳房のわななけるかも

以上の八首は、R子さんが女子高校生のころ、拙文で吉村礼津女の悲壮な切腹を知って作ったものであるという。そしてそれ以来、

R子さんは切腹の悲愴美に搏たれて来たようである。

桜、月、雪は忠臣蔵を彩り、その忠臣蔵は切腹ではじまって切腹に終わる。しかも、そうした忠臣蔵は江戸から近代へ、更に現代へと、文芸劇作の上で歌舞伎の独壇場とも云われ、戦時中には真山青果のいわゆる真山忠臣蔵を生んでゐる。

「菊と刀」はかつて日本人を解析する好著といわれた。しかしまた、ここに「桜と切腹」もまた一つの日本人剖析の手がかりを持っているのではあるまいか。

筆者は思う、終戦後の教育を受けたR子さんのような女性、現在三十才前後で女子高校から大学国文科へ進んだのち家庭人となったという、そうしたR子さんが、つまり戦後の教育で教養を積んで来た女性が、切腹をかくまで理解しようとしている限りに於いて、切腹という非論理的古典性をもった行為が、なお文芸や絵画、劇作、映画などのなかでは生命を保って行くに違いない、と。そしてそれこそが、日本人の特質ではあるまいかと。

— ○ —

(安達瞳子さん、R子さんの文章から抜き書きさせて頂いたことを深謝します)

佐野みさ子を責める

ピッコロ狂詩曲

ロマン派生



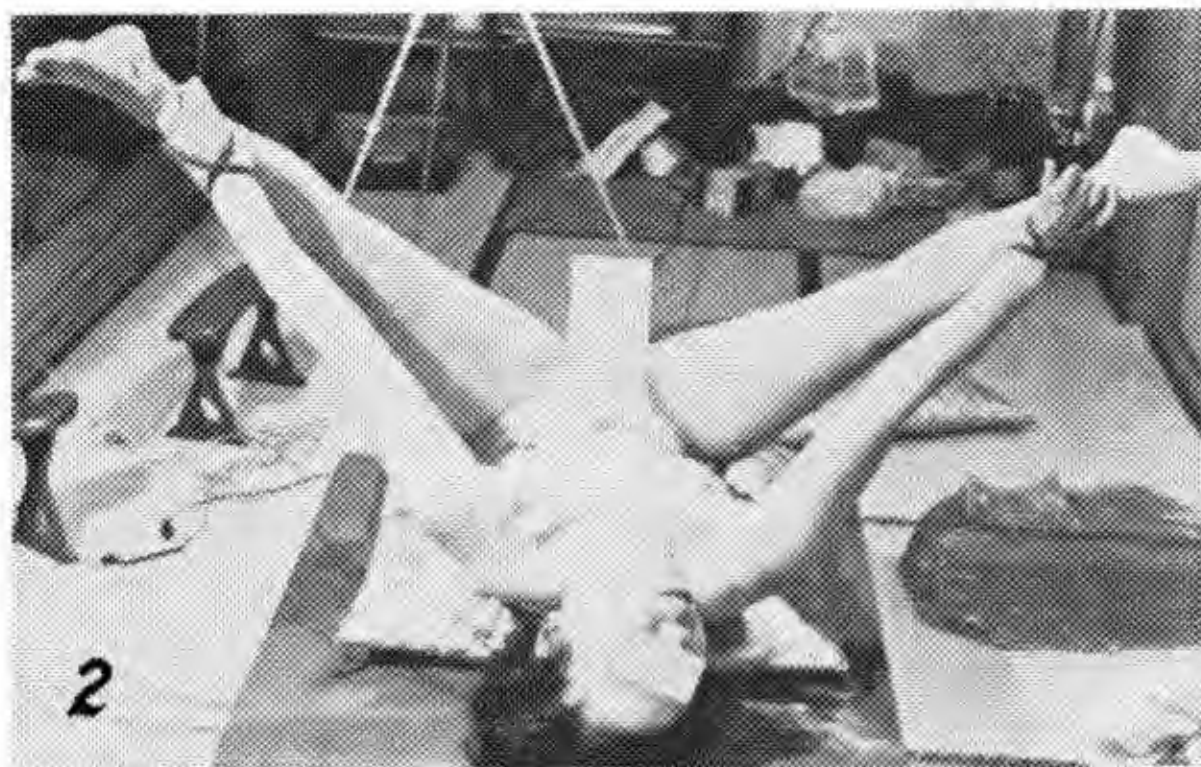
佐野みさ子さんの写真と短文は、だいぶ以前から何回か奇譚クラブに掲載されていた。確か最初の写真は、両手を一緒に頭上に縛られ、椅子の上で大きく開股していたもので、その大胆なポーズと、豊かな肉付きが強く印象に残っていた。また文章の方も「成人映画館でハントした男性に写してもらった写真です」などと書かれていて、読者の注目を惹いていた。また、最近号でもSMプレイ・セックスなどという、ぶっそうな言葉を含む文章と写真が掲載されたり、その反響が「適当な人物に早く縛ってもらえ」などという読者の投書があったりした。

こういって写真撮った人に対して、まことに失礼だが、今まで誌上に載った彼女の写真は、どうも縛りがゆるくて、みさ子さん

のマゾ性を十分に満足させていたとは思えないし、写真としても、折角の素晴らしい素材を十分に生かしていない、うらみがあつた。とはいっても、まさか私に彼女を責める大役が廻って来るとは考えてもいなかった。ので、批評家的、無責任な感想を心の中で温めていたにすぎなかった。

ところが何たる幸運か、彼女の方から私に水を向けてくれたので、私は腹の減った狼のように（というより豚のように）いった方がよいかも知れないが、彼女に、むしろぶりついたわけである。

しかし引受けてから、さてと考えてみて、自分が、いざその立場になると、果たして彼女が十分、満足するだけの責めが出来るか。そして、少しは、ましな写真がとれるか。そ



2

の上、なんとか文章にまとめられるか。いささか心もとない心境ではあった。
 打合わせのため、何回か手紙をやりとりしたが、彼女からの手紙は、その都度、生々しい被虐願望に満ち溢れていた。

例えば、「私を逆さ吊りにして、谷山久美子さんのように女体ローソク立てにして下さい」とか、「大人の玩具を、いろいろ使って私の性能を験して下さい。浣腸でもフルート吹きでも、どんなことでも致します。私を女奴隷として取り扱って下さい」とか、はては全裸の写真を同封して、「私のこの恥毛をツルツルに剃り上げて徹底的に責めて下さい」等々、文章上の露出願望とも云える、はげしさであった。おまけに、その一番激しい文章のわきには、赤インクで傍線が引いてあるという御念が入っていた。「世の中に本当のマゾ女性果たして存在するのだろうか」などと疑っている人も居るそうだが、佐野さんの手紙を一回、見れば、そんな疑いは一度で吹っこんでしまふに違いない。

ところが、プレイの前日にかかって来た彼女の電話では手紙とは打って交わって「それでは明日三時から、お願いします」などと、歯科医の診察の予約申し込みのような調子だった。これは、こちらの立場を考えた配慮でお互いに、そういうことには細心の気づかいが必要だが、幸い今までSMが御縁で、お付き合い願った方々は、皆さん慎重な人達で、不愉快な目にあったことは一度もなかった。



3

○ その日は予定の時刻より十五分ほど早く打ち合わせの場所についた。初対面ながら、目当ての人は、すぐ分かった。近づいて「佐野さんですね」と声をかけると、うなずいて小



声で「はい」と言った。私の声も一寸、かすれていたかも知れない。初対面の際は、つい緊張して咽喉が乾くものだから。歩きながらポツポツと話を始めるが、私は、あまり廻りくどいのは、みさ子には向かないと考え、すぐにホテルに直行した。

ロマン派としては珍しいことで、いつもの

のゆるいのを利用し、両方の乳房をセーターから、むき出しにする。パンストとパンティを、ずり下げる。その度にみさ子は「うっ」と小声を出す。鏡からは目を離さず、自分の姿に見

ら喫茶店でお喋りをして、私が危険な人間でないことを十分、相手に印象づけて、それからという段取りになるのだが、みさ子にとっては、そういう全人格のお付き合いは無駄でわずらわしいことと思われそうなので、ストレートにプレイに進んだ。

○

まず、スカートだけ脱がせた、みさ子を着衣のまま、平織りの紐で軽く縛った。少々粗雑に縛ったので、あちこち、ゆるんで、だらしくな

入っている。

「さあ、つるつるに剃り上げて下さいと云ったのは、どこだ」

言葉のプレイで、いろいろと、なぶりながら、あちこちと動きまわる私の手が、みさ子の身体を、なで廻す。

だいたい雰囲気の出できたところで、後手の縄尻をとって部屋の中をぐるりと引き廻す。

半分、脱がされたパンストとパンティが邪魔で、歩きにくそうにヨチヨチ歩く。

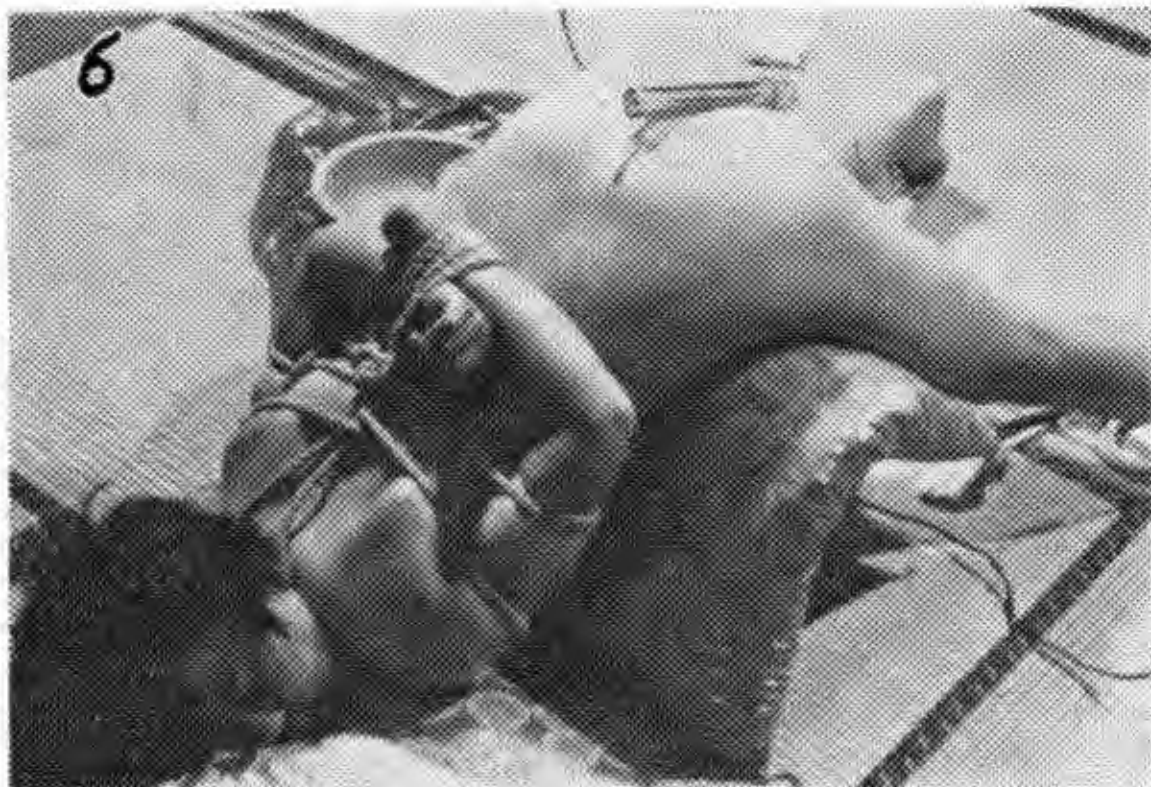
「このまま、廊下に出ようか。それとも、街の中を散歩したいか」

みさ子は返事の代りに、なまめかしく敷か



れている布団の上に自分からドタリと倒れてしまった。

私がカメラをかまえると、ふっと横を向いて、顔があらさまに写らないようにするところなど、仲々手慣れているベテラン・マゾヒスチンである（写真①）。



○
みさ子が風呂に入っている間に、私はライトの用意をした。

ストロボでは、どうも綺麗にとれないのでかさばるのを我慢してリフレクター・ランプを二本、用意して来たので、次の剃毛プレイに備えてライトを配置し、ポラロイド・カメラを三脚に乗せて、みさ子の上がってくるのを待ち構えた。

鴨居の下にテーブルを置き、座布団を一枚、載せてある。風呂上がりのピンク色に染まった、みさ子を、その上に仰向けに寝かせ、右手首と右足首、そして、左手首と左足首を一緒に縛り、大きく開いて鴨居に吊り下げる（写真②）。

みさ子の一番、恥かしい所に、ライトの照射が集中する。私は剃毛前に二、三枚、写真にとっておく。

用意して来たビニールの上に熱い湯の入った風呂桶を置き、ムシタオルを作って十分に蒸してやる。つぎに石けんを塗りたいくらい十分に泡を立てる。くすぐったいのか、みさ子は僅かに腰をふるが、十分、伸ばし



て縛られている女体は、少しでも動く手足が引き吊られて痛むとみえ、大きくは動かない。

動くとも肌を傷つけるおそれがあるので、全カミソリを使って、ゆっくりと作業を、すすめる。右半分だけ綺麗にしたところで、また写真をとる。左半分も、きれいにすると、また写真を数枚。予定では、これで次に、す



すむわけだったが、催促するかのように口をあけているのを見ると、つい何かを詰めてやりたくなる。割箸に脱脂綿を巻きつけた私の好きな詰物をギュッと押し込み、少しばかりサーヴィスしてやる。

みさ子はテーブルから、はみ出した頭を振り、身もだえする。丁度、視線の先に鏡があるので、大きな目を血走らせて自分の姿に見入っている（写真⑧）。

一寸、話がそれるが、私は剃毛された、すべすべの女に、ひどく魅力を感じる。何故か恥毛は不潔感があって、あまり好かない。無駄なもの、ない方がよろしい。しかし、振

り返って考えてみると、サド、マゾなどというものは人間の性欲の発達段階からすると、未熟な段階に固着したのか、横にそれたものだといわれている。すると剃毛された女は、すなわちまだ発毛しない幼女なのかも知れない。それで性的に幼児性の段階に、とどまっている私には、ひどく魅力的に見えるのかな。みさ子にとって剃毛は、どういう意味があるのだろうか。私と同じなのか、それとも露出願望の一つなのか。ま、あまり理屈をいっても仕方がないので、話をすすめよう。

剃毛台から降ろされた、みさ子の手首は、すっかり紫色に変色していた。ポラロイドで撮ったカラー写真でも、はっきりとそれがわかる位だから相当、痛かったに違いない。

「痛かった？」

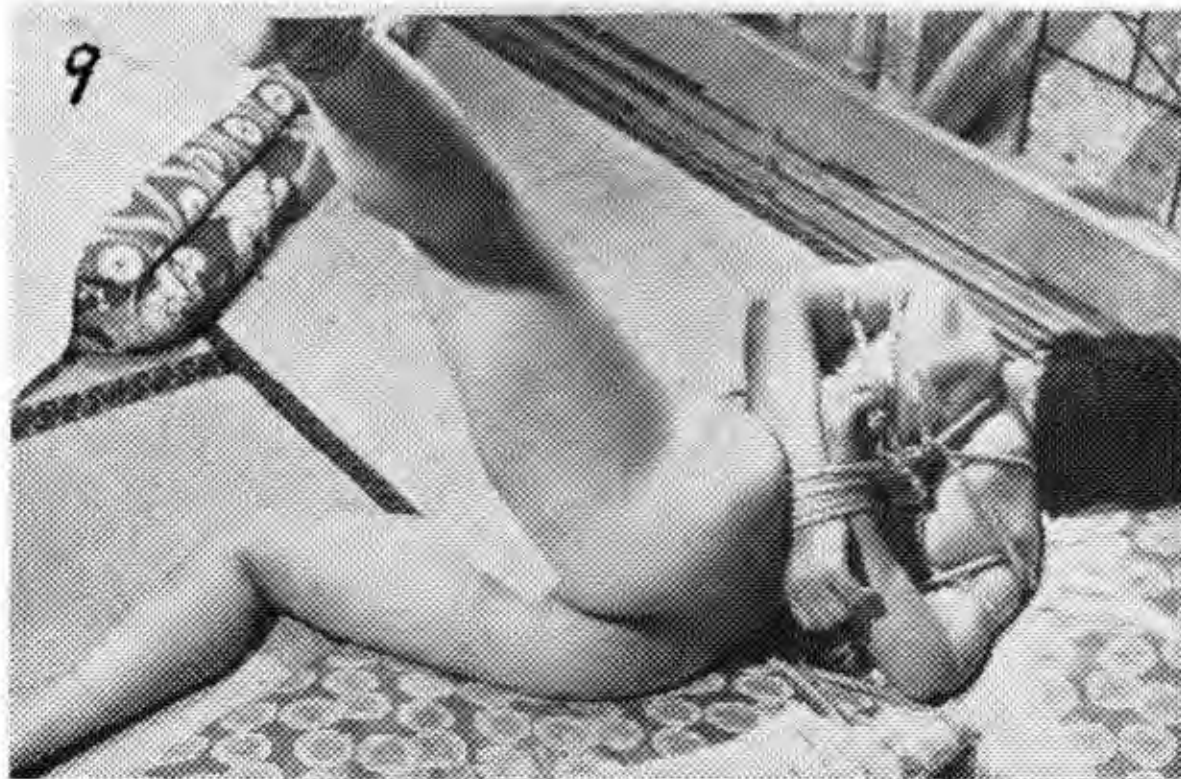
「ううん。わからなかった。でも今になったら、しびれきって、感じがなくなっちゃったみたい」

みさ子は割合、明るい性格のようだが、ど

ちらかという口無口な方だった。

○

一息入れると細引きで後手に縛り上げる。てのひらを天井に向けるように左右重ねておいて、丁寧に細引きで巻きしめる（写真⑨）。





こういう風に手首を縛ると、仰向けに寝かされた時に手首が、ひどく痛むので、慣れた女はいつのまにか掌が後ろを向くように、ずらしてしまふことがあるので、そう出来ないよう固く、くくってしまふ。胸の方は上下二つの菱縄にしたが、多少、変化をつける意味で

縄の結び方を変えてみた。

みさ子は布団の上に正座して、おとなしく縄に身をまかせている。例の如く、口にも脱脂綿を詰め込んでその上から白布で猿轡をかける。下の方も白なので、上の口も白がよく似合って可愛い縛られ人形が出来上がった(写真⑤)。

脇息の上に座布団を掛けそこに、みさ子を、うつ伏せに乗せる。尻が高く上がって浣腸に最適の姿勢となる。みさ子は自ら両足を開いて浣腸を待つ(写真⑥)。

私は排便させるのが目的ではなく、責めとして浣腸するので、なるべく大量に入れられるように、なにも入っていない、ただの微温湯を注入する。五百ccや六百ccは、わけなく入り、そうすぐには排出しない。適当に時間をかけて、ゆっくりと入れてやる。一回毎にピクリと尻をふるわせ低声で「うっ、うっ」とうめく。三脚にカメラを乗せ、セルフタイマーで写しながら注入する。残念ながらこれは発表出来そうもない。排出の瞬間もストロ



ボを使って写したが、どうもあまり美的ではない。この辺がロマン派の限界らしい。

すっかり軽くなったみさ子は、まだ先ほどの縄付きのままである。縛り目は一つもゆるんでいないが、手首の色は先程のように紫色にはなっていないのでまだまだ耐えられる。私は、みさ子を柱の前に坐らせると、太股に縄をかけて柱の後ろに回し、十分に拡げる。更に足を縛ってこれも柱にかけて開かせる。またまた白布の猿轡をはめて、写真をとる。奇くに発表出来るよう、髪を一寸垂らして顔半分を隠し、局部に脱脂綿を当てて一枚とる

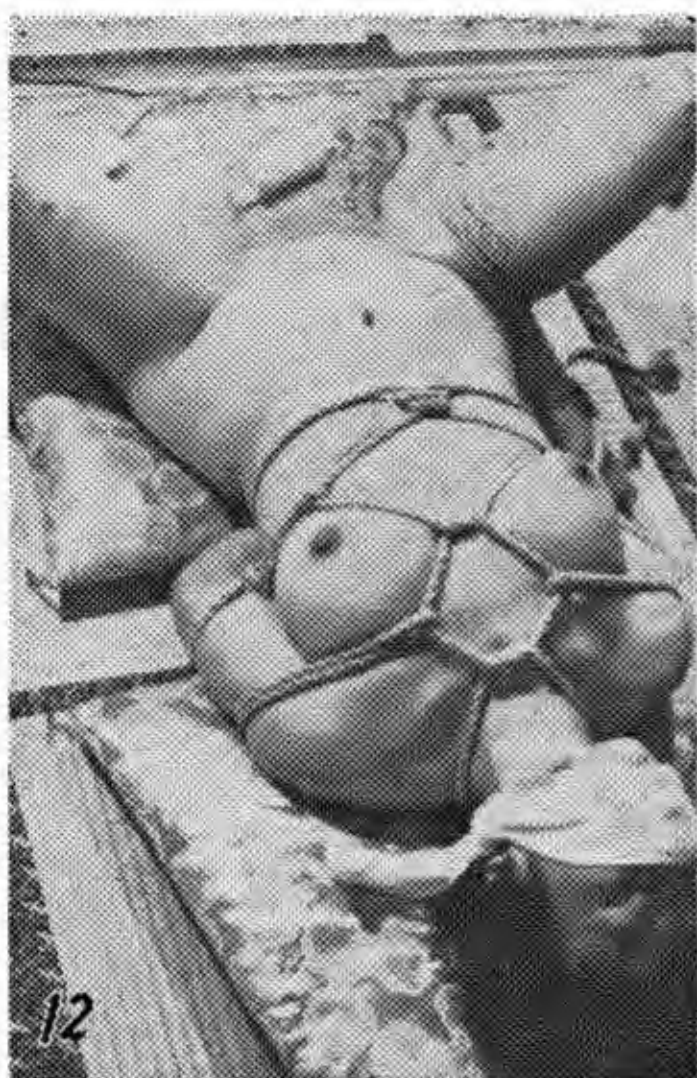
(写真⑦)。プライバシーの問題があるので顔を隠すのは止むを得ないが、本当は表情に最も味があるので、表情がわからない写真は面白味が半減してしまう。せめて、みさ子の豊かなバストと下腹部の曲線美をアップで鑑賞して欲しい(写真⑧)。この姿勢で鳥の羽根やらパイプレーターなどが活躍したのは云うまでもない。その現場の一つ一つをセルフタイマーを使い記録して行く。

カラーは現像の問題があるのでポラロイドで写すのだが、いちいち、プレイを中断して一枚ずつとるので、やや、わずらわしい。しかし、その場で、すぐ見られるのは、失敗の

時すぐ、やり直しがきくので、ありがたい。

○

柱から解きはなすと、休む間もなく左足首に細引きを巻きつけ、片足を高々と吊る。背後の手首が痛むのだろう、みさ子は横向きになり、乳房を突き出すようにしてあえいでいる(写真⑨)。後ろから、前から、近づいたり離れたり次から次へとシヤッターを押しつづける。その合い間に、何種類かのパイプを



とりかえ引きかえ、お見舞い申し上げる。みさ子は言葉にならぬ言葉を発しながら身体をよじるが、頭のは殆どどこも動かさない。太股の筋肉が、ピクピク動く。よく見ると膝の上に、さっき縛られた時についた縄の跡が、くっきりと残っている(写真⑩、⑪)。パイプの音が、やけに大きく



隣室に聞こえやしないか気になるので適当に切り上げると、今度は、みさ子のパンティを持って来て、それを詰めてやる。別に濡れているので拭いてやる気でもなかったが、結果としては、そうなってしまった。

○

十分に濡れた、みさ子のパンティを今度は上の口に詰め込もうとした。みさ子は従順に口を開いたが、口の中はカラカラに乾いていた。足の縄を一旦、解いてコカコーラを一本



吞ませ、さきほどのパンティを口に押し込み白布で、ふさいだ。今度は仰向けに寝かせたが、手首が痛むと不可なので、二枚の座布団のすき間に手首が入るようにしてやった。「大丈夫、痛くない?」

ときくと、口のきけない、みさ子は目で大丈夫と合図をした。足を折りまげ、片足だけ

縛る(写真⑭)。パイプを使う前に一寸、思いついて、

「少し腰を上げてごらん」

と命令した。みさ子は、縛られていない足を上手に使って腰を浮かした。

「ほら。お前の尻の下に画鋲を五つ、置いたぞ。もし腰が下がればブスリと尻に刺さるぞ。それが嫌なら、ずっと腰を上げていろ」

そう云うと、みさ子は必死になって尻を浮かせている(写真⑮)。しかし不自然な恰好にくくり上げられている、みさ子の努力が、そう長く続く筈もなかった。間もなく尻を降ろしたみさ子は、そこにある筈の画鋲がないので、喜んだのか口惜しかったのか尻を左右に振って身もだえた。それから、またまた例によってパイプのお世話になる。首をふるコケシ人形が一番、性能がよいらしく、反応が大きい(写真⑯、⑰)。

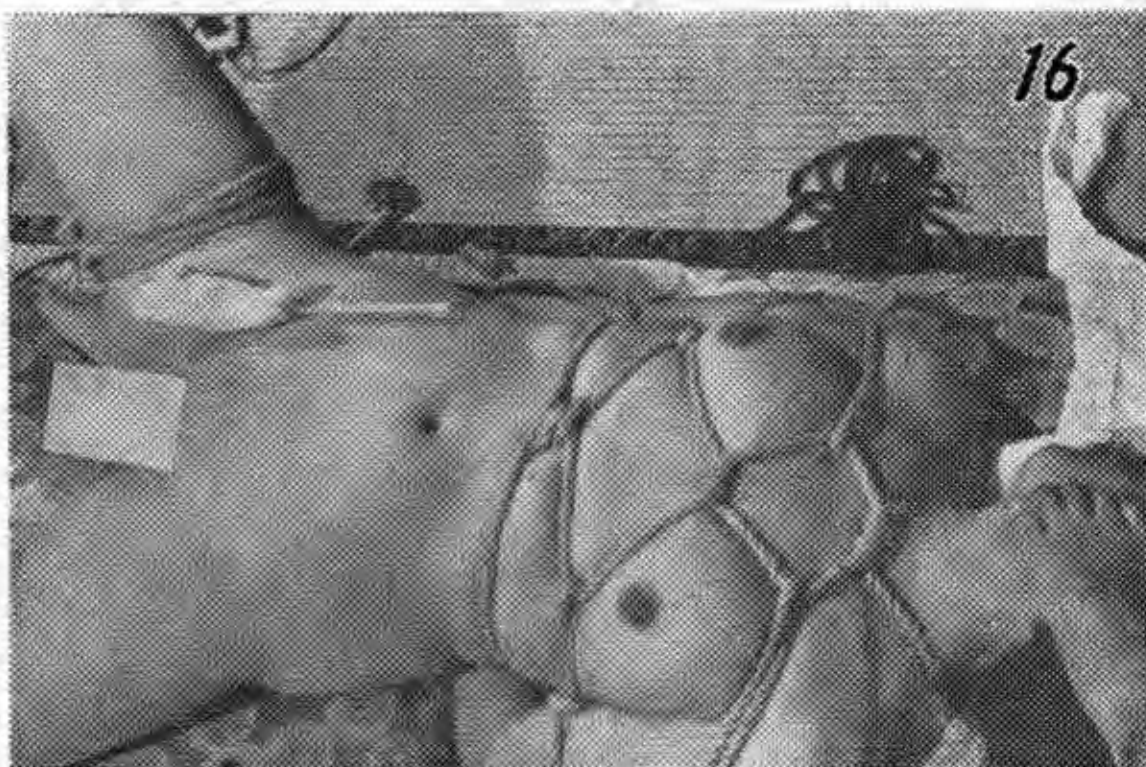
左から右から、たっぷりと写真を、とる。

ピンク色の豊かな女体が、なまめかしく、ゆれ動いているのを、一見、冷静そうな顔つきをした私が写真をとっているのだが、内心はそう冷静なわけではない。私は、それまで着けていた下着をとると、みさ子の猿轡を外し顔面に、またがった。フルートを吹かせようと



いうわけである。しかし、ここでも私の一見冷静な考えがひらめいて、これをポラロイドで写してやれという気になり、カメラをセットしてセルフタイマーをかけると、大急ぎで前の姿勢をとった。みさ子は約束通り頑張った。しかし、私はセルフタイマーの音やカメ

16



ラのレンズが気になって仕方がない。シャツ
ターが下りた時には、お世辞にもフルートな
どと云える代物でなく、せいぜいピッコロ位
の所だった。どうも自意識過剰の私は、こう
いう場面では一時的インポになるようだ。相
手のM女性にとって、つまらないと云えば、

つまらないが、安全と云えば安全な男かも知
れない。余分なことを書いてしまったが、こ
れも幼児性欲の一つの例証かな。別に私は腹
が立ったわけでもないが、照れ隠しの意味も
こめて、みさ子の頬を足で踏んだり、足の指
を口に押し込んだ(写真⑩)。

○

菱縄に縛り上げてから、あの責め、この責
め等々連続して責め続け、おそらく三時間く
らい経過したろう。流石のみさ子も、ぐった
りとしているので、菱縄をほどいてやること
にした。あれだけの激しい責めの連続にも拘
らず、縄は型崩れせず

全然、ゆるみも来てい
なかった。みさ子が今
まで誌上に投稿してい
た写真は、立派な女体
の割に縛りが貧弱だっ
た。それに較べて私の
縛りは、などと一人で
いばっていたが、後で
出来上がった写真を見
ると、下の菱形が少し
大きすぎて、だらしな
い感じだった。もう少

17



し、小さ目にした方が、もっと美しかったわ
い、などと反省している。どうも目高手低で
思うほど美しくは縛れないものだ。私は辻村
氏のように、新しい縛り方を次々に考え出す
独創性はないので、他人の考えた縛り方をリ
ファインして、少しでも綺麗に縛れば、そ
れでよいと思っている。このレポにしても辻
村氏のカメラハントの物真似にすぎず、にせ
物は、しょせん本物に敵うわけもないが、も
っと別のスタイルを考え出す才能がないので
止むを得ない。本当は十分な資料を揃えて、
縛りの美学写真版を書きたいのだが、とても



資料不足で、まとまらない。一つ編集部で豊富な資料を駆使して、唯の写真集でなく、美の本質に迫る立派な写真集を作って欲しいものだ。

○ 縄をとかれたみさ子は、ゆっくりと風呂に入っている。あまりおそいので、風呂の中で

ノビてしまったのではないかと心配になり、様子を見に行くと「あらっ嫌だわ」と云う。さっきまで、あんなひどい恰好をさせられていたくせに、一寸、風呂をのぞかれて、嫌だわ、とは、どうも解せないが、ま、縛られていない時のみさ子は、普通の女になっているかららしい、と解釈しておく。

○ 風呂から上がったみさ子の手足に、まだ縄の刻印が、くっきりとついている。この上、縛りあげては可哀そうなので皮の責具をつけることにした。ところが、この責具は少々安物なので、なんとなく薄っぺらで迫力がない。サイズもいい加減だし、やたらに尾錠がついていて面倒な割に、一向に緊縛感が出ない。局所にあたる部分にはゴムのイボイボがついているが、小さなもので一向に効き目があるようにも見えない。それでも、なるべくきつく締めあげて撮ったのが写真⑩であるが、このままでは、さまにならないので、柱に尻をあずけて足首をくくり合わせ、えび縛りにする。みさ子が自ら望んでいたローソク責めの態勢が整った。クリスマス用の、ねじれた金色のローソクを深々と立てると、火をつける。太



いローソクなので、なかなかローソクが垂れて来ない。もう一本のローソクに火をつけると炎をかたむけて、剃り跡の青々とした所にポツリポツリと垂らす。その度にアッと叫ぶがそれほど熱くはないことを前もって自分で験しておいた私は、無言で、どんどんとローソク

を垂らす。アヌス用の特製のパイプも使って得意の二本刺しとしてから、カメラを手にする。みさ子は口を半開きにして、うめき続ける(写真⑱、⑲)。

ローソクの代りに、さっき吞んだコココーラのピンを、よく洗って使う。本来の用途を外れて使う所に、また味があるので、その目的のために作られた道具には、なんとなく、なれ合いのムードがあるような気がする。そう云えば皮や金属で出来た拘束具は一定の形にしか女体を拘束出来ないが、縄ならば自分の好みに従って、色々と締め上げることが出来る。皮具は一応は使ってみるが、矢張り縄に帰ることになる。しかし、縄を上手に使うのには、なかなか練習がいるものだ。

二つ折りになった、みさ子の女体を足で、ふんだり、もんだり、くすぐったり、そして最後にフルートならぬピッコロを吹かせて、みさ子のすべてを辱かしめた。

○

予定の写真をとり終え、流石に疲れた私は風呂に入った。私が風呂から上がると、みさ子は今、写した自分のポラロイド写真に見入っていた。カラーは全部セルフタイマーを使い、私がみさ子のどこかを責めている場面ば



かりなので、全くひどいものばかりだが、みさ子は目を輝かせて見ている。ポラロイドは焼増しが出来ないのです、私はケチをして、そのうちの一枚だけしか、みさ子にあげなかった。それでも、みさ子は不満を云わずに素直に喜んでくれた。モノクロの方は後から送る

約束で、跡片付けをしてホテルを出た。もう時計は八時を指していた。

食事をしながら話をきくと、みさ子は朝から何も食べていなかったそうである。石原道代の巻で、彼女が昼食を食べなかったと書いたのを読んでいたのだろうか。しかし、あまり空腹では、はげしい責めには耐えられないし、身体にもよくない。またセクシャルな感度にも影響するので、少しは食べた方がよいのではないかな。余計な心配をしながら次回の約束をして、別れた。

別れしなに、みさ子は、にこにこしながら「今日の写真と記事が雑誌に載るのが待ち遠しいわ。楽しみにしているの」

と言った。これは私へのお世辞なのか、あるいは本当の気持なのか。私には後者のように思えた。

私は、

「さて、早いとこ現像して、記事をまとめなくちゃあ」

と、つぶやきながら、寒さも忘れて大股で駅に向かって歩いて行った。

——終——

(註) 「ピッコロ」フルートを一回り小型にしたもの。

作 鬼 団



決 定 版

● 聖目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

― 番号「花決定版」 ― 定価一、〇〇〇円（送200円） ―

― 内容主要見出し一覧 ―

第一章 発 狂 美 人 探 偵 登 場
第二章 美 人 探 偵 登 場
第三章 華 麗 な 洗 滌 場
第四章 救 護 者 の 来 訪
第五章 救 護 者 の 来 訪
第六章 狼 援 者 の 来 訪
第七章 魔 術 の 地 獄
第八章 怖 怖 の 地 獄
第九章 弄 弄 の 地 獄
第十章 淫 蛇 の 執 教
第十一章 美 色 姉 妹 の 危 難
第十二章 美 色 姉 妹 の 危 難
第十三章 落 室 の 秘 密
第十四章 密 室 の 秘 密
第十五章 脱 走 の 秘 密
第十六章 華 麗 な 宴 會
第十七章 地 獄 屋 敷 へ 新 顔
第十八章 翻 弄 され 千 万 円 の 身 代 金

第二十二章 身代金奪取の失敗
第二十三章 涙の宣誓文
第二十四章 連命の逆転劇
第二十五章 奇妙な三々九度
第二十六章 飼育される白い動物
第二十七章 悪魔と悪女の悪業
第二十八章 屈辱の地獄図
第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末
第三十章 悪鬼達の残忍な所業
第三十一章 落花無残の修羅場
第三十二章 淫らな美女の調教
第三十三章 すすまじいショーの展開
第三十四章 汚水にまみれた宝石
第三十五章 華々しき美女の屈伏
第三十六章 対峙する美女と美女
第三十七章 あくどい陥穽
第三十八章 羞恥図絵の展開
第三十九章 清純な令嬢の屈辱
第四十章 人身御供の令夫人
第四十一章 深窓の美少女とズベ公
第四十二章 小夜子への執拗な調教
第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 激しいスターへの訓練
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人
第五十二章 淫靡な時代劇ショー
第五十三章 華々しきショーの展開
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪惡な責め
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪党一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の泣き
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続け
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい機軸の到来と静子の狂態
第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱氣を帯びたマゾの競演
第七十二章 女盛りの妖美な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪府住吉郵便局私書箱第41号。
T558 出版株式金社宛

連載・時代 S 小説

紫 蘭 の 門

(8)

女には何が一番よく似合う……カルダンの衣裳かシャネルの香水か いな！ 否とよ……女には荒縄が一番よく似合う

風 流 極 道 軒

カット・岡たかし

五 所 責 め

「お景、なんとか言ってみなよ。いくら鉄火肌だと威張っていても、女は女だ。そのことを、フン、よく思い知りやがれ」

元禄屋、こんどはさっきのように唇を噛まれたりするものと、五寸も顔をお景の上位

から離して、大きな体をうごかしながら、こちよさそうに、せせら笑う。

(くそっ！ だれが、お前の女なんかに！)

両手を縛られ、牝鹿のようにすんなりとよく発達した両脚を二人の男に、ひきさかれるようにして押えられた惨めな姿で、お景は、最後まで、抵抗しつづける。

「お前の女なんかに、な、な、なるものか」



「威勢はいいが、どうかな。ほれ、ぼつぼつたかぶってきたじゃあねえか」

「な、な、なにをいうのさ！」

口では気丈に叫んだものの、内股をつきあげてきた激しい疼きは、しだいに甘い衝撃へと変わり、我知らず脇腹から太腿へと、女としての媚態をしめし始めるお景であった。

「旦那、さすがですな。結構、このあばずれを女になさってらっしゃるようで」

鞭兵衛が、生唾をのみこんで言う。

「フッフッ、ひやかすものじゃあないよ、鞭兵衛さん。もうこの年ですからねえ」

といったものの満更でもなさそうな元禄屋であった。と青蛇が、お景の横顔を覗きこみ「姐御、おめめをあけてよく眺めなよ」

しっかりと閉じた瞼に指をかける。

「や、やめて……お、お願い！」

激しい拒否の声があがる。が、その声には

前号まで——世界貨幣史上でもっとも品位の高い天正大判千五百枚、重さにして約六十五貫の大分銅金参千箇の謎を秘める豊太閤五夜のロザリオをめぐって、元禄屋と怪盗徳夜叉が対立。元禄屋の手中におちた小紫のお景の柔肌に、穴沢流の淫虐の魔手がのびる。

どこかに艶めいたひびきがあった。

(妾……ど、どうなったというのだろう。こんなことでは！ こんなことでは、いけない！ 誰が、元禄屋などに！)

必死で上体をちぢめ、手をにぎりしめ、足をばたつかせるのだが、それはかえって元禄屋の快感をさらに、たかめていくだけだ。

「フッフッ……お景……よい壺してるわ。さすがに、徳夜叉の女よ……」

何度もそんなことばを呟きながら、元禄屋は小半刻たっても、お景のみずみずしい弾力にとんだ裸身からおりたとうとはしない。

妖しく点っていた百奴蠟燭のひとつが、ジリ、ジリッと音をたてて消える。

「旦那……」

これは、鞭兵衛の、催促じみた声である。

次は、自分。そのあとは籤の順で、青蛇、

斑猿、黒馬、赤狐、そして白豚ときめられている。こう、目の前で、いつまでも見せつけ

られては、たまったものではなからう。油ぎった顔をぎらぎらひからせて息をはずませて

いる。

「も、も、もうすこしだぜ！ 鞭兵衛！」

やっと、喘ぎはじめた元禄屋は、

と懸声もろとも、全身の重みをぐったりと

お景の上にあずけたのである。五人もいる妾をふだん抱くときに、このように興奮し、陶酔したことはここ数年来ないことであった。

(この女、さすが、絶品の壺……)

ゆっくりと身をおこして離れようとしたが瞬間、元禄屋は(おや！)と首をかしげた。

××れないのである。(ま、まさか！) ちよつとあわて気味に両手を××にそえて、ぐい

つと……すると、やっと……

「すげえ！ こいつはすげえ……こ、こんな女は、始めてよ。はじめよりあの方が……」

鞭兵衛！ ためしてみるがよい」

女にかけては時の將軍家齊以上であると噂されるほどの通人である元禄屋が、これほど

ほめるところをみると、お景は、よほどの名器の持主なのであらう。

「旦那、どこがいったえ絶品なんですかい。

なにも普通の女と変わりはねえように思いますが」

お景の上で、鞭兵衛がそうつぶやいたのもつかのま、ものの二、三度、腰を動かすと、

「旦那、こ、こいつは、奥の……が、なげえんでしようよ……こ、この感じは……」

すげえ。あ、ああ、もう、もう……」

あとは、がらにもなく七尺近い巨体をびくびく慄わせて猛獣のように吼えたかと思うと早くも失速、陥落。

「情ねえやな、親分。それじゃあ、どっちが鬨られてるのかわかりませんぜ」

三番目の青蛇が、自信ありげにいつてお景のうえにのしかかっていく。と、いまままで青蛇に押えつけられていたお景の両手が自由になるとともに縄が、ゆるんだ。その刹那！

「こ、この人非人！ 畜、畜生！」

お景の手刀が、青蛇の首に炸裂した。

「ゲェッ！」

青蛇の完全な油断。穴沢流弓張月の拷問に加えるに穴、焙りの惨刑。その上で二人の男に犯されて媚態さえ見せはじめた女に抵抗する力など残ってはおるまいとたかをくくったのが、失敗であった。

お景は八重垣流小太刀免許皆伝の腕前。

その手刀をもろに喰ってのけぞった青蛇を介抱しようと黒馬がかけよる。

黒馬に押えこまれた左足が、自由になる。

「よくもよくも！ 妾を！」

ガバツと上半身をおこしたお景の必殺の二撃目が、そばの赤狐の眉間にとぶ。

「この阿魔！ どこまで、手間をとらせやが

るんでい！」

白豚と斑狼が、とっさに、お景に体当たりを喰わせると、押えこむ。

「畜、畜生！ 鬼、離せ！ 離すのよう」

組んずほぐれつしながら、三撃、四撃、五撃と、手刀が閃く。

もし、お景が、着物をつけていたならば、この場を逆転し得たかも知れぬ。

が、女の身、一糸もまといっていないということは致命的な弱点となる。

足を踏んばろうとすれば、あらわに曝け出して下腹や太股が、本能的に気になり、

飛鳥のように動こうにも、ふだんは晒木綿でしめあげている乳房がむきだしとあつては勝手が違う。

一時は、虚をつかれて慌てたものの、体勢をたてなおした七人の男たちに、やがて手とり足とり取り押えられて、お景は、再び、仰向けに大の字なりに太縄で嚴重にはりつけられてしまったのであった。

「まったく、すげえ女よ」

ほとほと感心しきった様子の元禄屋に、鞭兵衛が、

「旦那。こうなりゃあ、五所責めにかけるまですぜ」

と五人の子分たちに合図をおくる。

合点！ とばかり子分たちは裾をめくってそれぞれ自慢の××をとりだすと、

「あっしは、ここを！」

と斑狼が、はりつけられて見うごきひとつできないお景の右脇に坐り、こんもりともりあがった右乳房に、××を押しつける。

「じゃあ、あっしは、こちら」

黒馬が人一倍巨大な……左乳首に、あらあらしく接触させると、あちこち、自分の右手をつかって……。

「あっしは、ここにしましょう」

斑狼のそばに割り込んだ白豚は××をお景の下腹のあたりで棒のようにころころ……。

赤狐にのこされているのは顔の部分。

「この阿魔、さっきの調子じゃあ、いつ噛みつくか判らねえ」

腰から煮しめたように黄色い手拭いを取り出し、一筋、ぐいっと猿轡をかませてのち、お景の頭を両膝ではさむようにして坐りこむと、ぴちゃぴちゃと音をたてて、額と言わず頬と言わず顔中に、××を……。

「手刀のお礼だぜ。ざまあみろってんだ。さあ青蛇の。さっきの恨み、晴らしてやりなせえ」

斑猿に言われるまでもなく、怒り心頭に達している青蛇はお景のむきだしの××めがけて、銅造りの棒にも似た××を……。

「この阿魔！ こ、これでもか！ これでもまだ、まいらねえか！」

すさまじい男の精気が、お景のとじようとしてもとじることのできない黒い菊の花びらに迫っていく。

「アッ！ ムウウウ……」

お景は身動きひとつできない。一方、青蛇も上体を前に倒すことのできないまま、斑猿と黒馬の肩に手をおいて、まるで巨大な錐でも揉みこむように腰を前後左右に動かす。

五所責め——

いま、お景がうけている五所責めとは、五人の男が一人の女を同時に犯す、言いかえれば、一人の女を五人の男が同時に楽しむことである。

女は一人の男では決して満足しない。満足したと思っているのは、自慰であって、女は三人、四人、いや、五人の男に同時に愛撫されて始めて肉体的に満足感を得るものなのである。ちなみに、賢明なる読者諸氏よ。御令閨を愛撫されるに当たって唇、双の乳房、そして世にも得難き麗わしの紫蘭の門、さらに

は桜貝のごとき耳朶に、鼻孔、柔らかき双の腋毛、さらにまたいよいよ御令閨を恍惚の境へと導き入れる足のうら、ふくらはぎ……このように、数多き性感帯を、同時に、同時にですぞ、愛撫なさることがおできになるかどうか——。所詮、手足四本に唇と、そして男全身をせいっぱいつかっても、六つが六つの武器をもつにすぎない男一人では、とうてい、一人の女を満足させることは不可能！ だから私は言う。

女には、五人の男が、よく似合う。

五人の男がたち向かってこそ、女一人を徹底して法悦の境地にひきずりこむことができるのだ——と。また、言う。

女の柔肌には、荒縄がいちばんよく似合う——と。今夜、さっそく試してみられるがよい。世にも稀れな御令閨の柔肌に、そして、秘めたる花園にと。

さて——

お景の匂う柔肌にむらがっている五人の男たちの目的は、読者諸氏が御令閨を楽しませるために展開される懸命奉仕の努力ではもちろなく、あくまでも、敵側の捕えられた女を責め勵ることを目的とする。

だから、男たちにとっては、快樂この上な

いものであるが、女、即ち、天下の怪盜徳夜叉の情婦である小紫のお景にとっては、この上ない凌辱であり屈辱であつた。

犯すも、犯されるも、要は、犯す男と、犯される女との心の問題ひとつであらう。

「ア、ア、こ、こいつは、どうも」

と、突然、失望にちかい声をあげたのは斑猿であつた。眉間にうけた手刀の一発への復讐だ、五、六発ぶちこんでやるといつていたにもかかわらず、お景の顔を、所かまわず××でなで廻しているうちに、口ほどにもなくはやくも洩らしてしまつたらしい。

が、

「ち、ちくしょう！」

と言う呻きは、お景の唇からも洩れる。斑猿の白くねばねばした××が、手拭いの猿ぐつわのすきまから、直接、口のなかにとびこんできたのである。

「お、おれもだぜ、斑猿！」

あわれに声を出したのは黒馬である。この男も大きな牝の男は早い例にもれず、敏感と言うのか早漏というのか、薄桃色に輝くお景の乳房の丘や谷間に、棍棒のような××を這いずり廻らせている間に早くもダウン。

ぐみのような乳首に、ねばっこい液体をま

き散らす。

「フッフッフ、お二人は棄権ですかい」

白豚が、下腹のくろぐろとした××のはえざわを、ポンポンとなおも遅しく××きっている××でたたきながら、からかう。

肝心かなめの秘所は、青蛇の占有するところ。斑猿と黒馬が、ことを遂げたあつては自分の順番も早くなるうというもの。

「なにをいう。一度が二度、四度、五度とおちやのこさいさい」

斑猿は、いっそういきりたつふうである。

そして、青蛇が、土蔵の壁にきりりと妖しい影をうつしてたち上がったあと、場所を交替する。

この五所責め、もう一度、饒舌を許して頂くとして、今に始まったことではない。

古くシナで、男たちが、盟約を結ぶにあたって、血をすすったあと、絶世の美女をえらんで、同時に、愛撫することによって、いよいよその盟約を強くしたものだという。日本でも、中世以降、義兄弟の約を取りかわすとき、かための盃ののちに、しかるべき女をえらんで、男を見せ合うとともに、女の上と下の唇に——女は二つの唇を持つ——同時に、××を注ぎこむことによって、将来の生死を

誓いあうことが、しばしばあったという。

これをもってしても、男が、古来、女をいかに、神聖視していたものがわかるであろうし、えらばれた女は、生涯、忘れることのできない法悦を与えられたことを誇りにもしたし、よき想い出にもしたのである。

それはともあれ、青蛇のあとをうけたまわった斑猿は、早かった。元禄屋よりも早く、ことを遂げたあと、まだ、白い××が、付着している××をひっさげて黒馬が、斑猿を押しつけて、お景の本陣・大奥に迫る。

「ホオッ！ すげえ、起立ち昼起ち、夕立ち虹立ち……と、くらあな」

白豚は、かがやくお景の裸身にまたがった黒馬のどすぐろい尻のしたに手を入れると、もうどうしようもなく濡れそぼったお景の××の×部に、指を這わせる。

「白豚の、そんな所より自分の割り当てを」

「黒馬の兄哥、どんじりは辛えよな」

しぶしぶと白豚は、汗と唾液と×液でぐちぐちにぬれているお景の下腹に、再び、自分の××をあてがって、まろばしていく。

巨大ななめくじが、全身を這い廻るような感触……さすがのお景も、もう、これまでであった。怒濤のように襲ってくる本能の嵐に

油をそそがれ、火をつけられ、黒馬の攻撃に狂ったように身をさらし、つづいて赤狐の執拗な責めを受ける。

「や、やめてえッ！ お、お願い。お願いよう！ ゆ、ゆるして。ねえっ！ どうか、どうか、もう、許してえ！ ねえ！」

猿ぐつわが外れて、お景の絶叫が、土蔵のむんむんとたちこめる熱気をつんざく。

それが、いやがうえにも、男たちの嗜虐の本能を爆発させる起爆薬ともなる。

元禄屋から数えて七人目、やっと白豚の番がめぐってくる。

六人の男の××で、濡れに濡れ、いまにも泡立ちそうなお景の黒い菊の花びらを、真新しい手拭いで拭い、さらに、××のなかまで三本の指で……あと、やっと、

「では、殿軍（でんがい）を」

ゆったりと、もう、身動きひとつしないお景の裸身に、のしかかって行ったのである。

陽は、もう、中天にかかっていた。

責めはじめたのが、夜もまだ明けやらぬうちであった。

お景の子分の越中松は、もう、生きているのか死んだのかわからぬ状態で、小さくなつた××をさらして、目をとじている。

「元禄屋の旦那、まったくすげえ女ですぜ。」

おわたあとのぐい、つとくるあの感じ、こいつは手離すのは、まったく惜しいようにで

やっと思いをとげた白豚が、ぐみのような

乳首を、ガキガキッと噛んでたち上がる。

「絶品の壺とは、このような女のものよ」

元禄屋をはじめ七人の男たちは、征服するに値する女を凌辱した満足感に溢れる顔で、足もとのお景を、みおろすのであった。

五所責め——凄惨な拷問をうけおわたた裸身には、十数コのおざ——女の勲章が、裸軀燭の光のなかにうかびあがり、乱れに乱れた黒髪の一筋一筋にまで凄艶な翳が、やどっている。

「さて、鞭兵衛。この女、あとはどうにでも自由にするがよい。ただし、傷だけはつけてはならぬ。玉の肌のままで、抱くなと囁るなと勝手にせい」

元禄屋は、次の行動に移らねばならない。

徳夜叉の隠れ家は、お景のいうところによれば、青梅街道・八王子あたり。

さっそく、探索のものをおくろうと、土蔵を一步、でていく。

そのとき、植えこみのひめつげをおしわけるように一直線にかけこんできたのは、番頭

の和吉。

「旦那様。こ、これが、先程、御本宅に投げ込まれました！ 徳、徳夜叉からの手紙のようで……」

「なに、徳夜叉と！」

さし出された書状の封をきるのももどかしいように、読みおろす元禄屋の顔が、次第に精気にみちて油ぎってくる。

「フッフッフ……折れてきおったわ。ワッハッハッハ……徳夜叉め！」

それには、次のように認められていた。

一筆呈上

一、交換の事

当方に預りおる貴殿の愛妾お国の方、並びに従者文次郎兩名と貴殿の掌中にあるお景及び大蔵の越中松兩名を交換致し度く——。

一、場所 分倍川原八幡境内

一、日時 明六月二十一日戌刻

なお、老中・町奉行への届いでは勝手たるべき事、為念。

「殊勝な心がけよ。百、二百の捕吏など齒牙にもかけぬと言わんばかり……」

たからかに笑った元禄屋は、

「鞭兵衛。その女……いちおう、渡さずばな

るまいよ。にせものをたてる手もあるうが、相手がこのように天晴れな心掛けなら、帰してやらざるまいよ。せいぜい今夜一晚、楽しんでおくことよ」

と言いのこして、駕籠を命じると、日本橋の本邸へと、ひきあげていった。

徳夜叉の申し込みによる元禄屋との捕虜交換は約束どおりおこなわれることになった。

戌刻にさきだつ申の下刻に、麻生六本木の元禄屋別宅の建仁寺垣のなかに二丁の駕籠が吸いこまれ、群立する土蔵のまえでとまる。

夏の西陽が、あかあかと輝いて、白壁にくっきりと人影を、きわだたせている。

土蔵のなかでは——

鞭兵衛が、あらためて全裸のお景に、ひしひしと縄をかけていた。

「惜しい女だがなあ、お景。旦那の言いつけとありやあ帰さずばなるめえ。今度、どこで逢うか知れねえが、この俺が、四度も、抱いたってことあ忘れるなよ」

縄は、穴沢流三菱——一本の縄を二つにたたんで四つの結束をつくり、一番目の輪を首にかけたあと、二重になっている縄を股間におとして、背中を縦に、首の輪におして締

イメージギャラリー『石抱寸前』市原幸三郎



めあげて、双の手首を縛る。次に新しい縄を背後から二の腕に三回、喰いこませ、左右から前に回して第二、第一の結束の間におしで乳房をかこんで菱形をつくる。もう一本の縄で第二、第三の結束を左右にわけ、背後に回して、尻の上あたりで厳しく肉に喰い込ま

せたあと、もう一度、前に回して第三、第四の結束を分けて、三つ目の菱形を臍の下でつくる。無論この縄捌きは、被縛者が抵抗する場合には不可能に近い。囚人が、おとなしくなされるままになっている場合、特に、女囚にかけてその肉体の美しさを際立たせ、上役

の視察に供したり、与力同心が、楽しんだりときには、見せしめの晒しものにするときなどに掛けられる縄目であった。

いま、お景にその縄捌きが施されていると言うことは、もはや、彼女に抵抗の意志がない、あるいは意志はあっても肉体が疲労の極みに達していることを示していた。

お景には、もう女の意地のひとかけらも残ってはいなかった。

昨日、元禄屋がたち去ったあと、鞭兵衛たちは、よくもまあと思われるほどお景の裸身をむさぼりつくしたのである。

「姐さん。親分は四回だが、僕は五度、五度も抱いたんだよなあ」

黒馬が、親しみをこめて囁きながら、縄掛けを手伝う。

「あっしも五度だぜ、お景さん」

白豚までが右手を拡げ五本の指を突出すと「お別れだ。名残惜しいぜ、まったく」

縄目でいっそう盛りあがったお景の乳房をながい舌で、ぺろりぺろりと舐め、

「それにしても、お景さん。あんたは絶品。

まったく男心をとろかせっちまう。もう一度必ず抱かせてもらうぜ、必ずな」

赤狐も黙っては、いなかった。

「俺は、二回だったが、あんたの唇のなかに俺の××が、ガバツと突っこまれて、男の××がほとばしったことを忘れるなよ」

そういうながら、牀中の血を吸いとられてしまったように蒼ざめているお景の頬、唇、うなじへと黝い唇を這わせ、左手でなおも執念ぶかく、黒い菊の花びらをまさぐる赤狐。

「何とか言いなよ。俺たちの惣嫁じゃあねえか。おい、お景。何とか、一言くらい言ったら、どうなんだ」

斑猿が、くさい息をはきかけると青蛇が、「手刀をくらったお礼は、まだこれくらいですんじゃあいねえぜ。今度、であったときにもちっと、かわいがってやるからな」

と、縄目にそって指を双臂にまで這わせていく。

お景は、ただ、無言であった。鞭兵衛はじめ六人の男たちの××を、二十数回、小柄な肉体の奥深くに刻みこまれて、いったい何が言えよう。

(徳夜叉……さま……妾は……妾は、いったい、いまから、どうすれば……)

スウィツとこのまま、奈落の底に吸いこまれてしまうのではないかと思われるほど、くたくたに疲れきった裸身を、やっと支えなが

らお景は、無抵抗で縛られていく。

「やっとできたぜ！」

鞭兵衛の声で、男たちが裸身から離れる。

六人の夫、いや、元禄屋を加えれば、七人の夫をもつ惣嫁となったお景は、もう、ぼろ雑布よりも役に立たなくなった大蔵の越中松とともに土蔵からひきだされ、

「小紫のお景。徳夜叉によろしくな！」

つきさすような青蛇の言葉を背に、いもむしのように手とり足とり折り曲げられて駕籠のなかに、ほうりこまれる。

駕籠があがる。

鞭兵衛たち六人の男が、それにつき添う。

調布から府中へと、なだらかな丘の起伏をいくつも越えると、松や桧、楓の老木が繁っている小高い丘があり、その南側に、徳夜叉の指示してきた八幡宮の社殿があった。

その周辺――

すでに、北町奉行所与力、工頭監物の差配する百人あまりの捕方が、あちこちの繁みに身をひそめて、快盗徳夜叉の出現を今やおそしと待ちうけていた。

「くるかな、果たして」

来てみる、必ず一網打尽との自信を眉宇にみなぎらせて監物が、ささやく。

「必ず参るでしょう。徳夜叉と言う男、敵ながら天晴れなやつ。約束は守るはず。頼みますよ、工頭さま。この二人を渡すことなく、お国を奪いかえすように」

元禄屋が、かたわらの駕籠をかえりみる。

と――

しきりに鳴いていた夏虫の声がやむ。

工頭監物の手が、見えない敵の襲撃に備えて刀の柄にかかった。その時、

「徳夜叉参上！」

凜然とした声が思いがけぬ頭上でひびく。

「お、おおう！」

百余人の目が、いっせいに数十丈はあろう老杉の梢を、ふり仰ぐ。

瞬時、一陣の魔風が元禄屋の周辺で渦巻くと覚えた。

それが、お景と越中松を小脇に抱えた四つの人影であると気づくまでには、さらに二呼吸が必要であり、その間に、人影は、元禄屋たちの視野から、すでに一町の彼方であったのである。

「追え。お、追ええ！」

監物が怒号し、捕方が疾駆する。

突然――

「ウワッハハハ……たしかに、二人は貰いう

けたわ！　さらばじゃ、元禄屋。素っ首洗って待っておるがよからうぞ！」

杉木立を震わせるほどの大音声とともに、捕方の頭上で、轟音がとどろき、あたりが真昼のように明るくなる。

「こ、これは！」

工頭までが足をとめて身をすくませる。恐怖と、驚きの叫びが、あちこちでおこる。

両手で顔をおおって振り仰いだ元禄屋の指の間から、風が、大風が、杉の巨樹の梢から夜空へと舞いあがるのが見えた。

「お、お、お国はどうしたあ！　返せ、返せえ！」

夜空からは何の返事もかえってほこなかった。そのかわり、舞い散ってきた紙片に

北に四町、四辻の空屋

と墨くろぐろと大書されてあった。

大風と火薬——この奇略をめぐらしたのは稲富流砲術の達人・飛香の小式部であり、図書の六孫王、杖舎の茶々丸たちが、みごと、百余名の捕方を手玉にとり、お景と越中松を救出するのに成功したのである。この出来事を瓦版が見逃がすはずはなく、

「怪盗徳夜叉・千年杉の梢で神出鬼没」の記

事は、役人の目をぬすんで手から手へと回覧され、世直しを待望している江戸八百八町の人々の拍手喝采を得たのであった。

元禄屋の嫉妬

「お奉行所が、これほど腑抜けでは、私どもも考えをかねて、世直し騒動でもおこさなくちゃありませんまいて」

面目丸つぶれの工頭監物に、いやみを言いながら、（北に四町、四辻の空屋）と言う徳夜叉の指示した場所で、愛妾お国と、文次郎を救いだした元禄屋は、麻生六本木の別邸に帰ると、さっそく、二人の詮議を始めた。

それによると――

徳夜叉の隠れ家が、どこにあったのか、まったくいまでは見当がつかないと言う。ただ郷士か名主か、いずれにしても古くて大きな造りの家で、徳夜叉は、二十四、五才、白輪子着流しの、端麗な貴公子で、配下のものはおかめなどのお面をつけており素顔はわからない。まして五夜のロザリオのことなど、むしろ、こちらの話で、始めて知ったふうだったと言う。

「吐いたのか吐かされたのか。おい、お国。」

お前、まさか、自分からすすんでなにもかもしゃべっちゃまったのじゃあ」

「まさか、旦那さま。なんで妾が……」

雨戸もふすまもあけっぱなしした濡縁ちかくの角柱に、お国は、緋紫絞りの長襦袢ひとつで縛りつけられていた。

「文次郎とかいうらしいが」

元禄屋は、鴨居から一本の棒のように吊り下げられている二十五、六の色白の、にやけた男に今度は、鋒先を向ける。

「フッフッフ……よく見れば、まさしく年増泣かせの色男。どうじゃ、おい。お国とは、いつ頃、できた。いつ、乳繰りあった！」

嫉妬が言葉のはしばしに、にじんできた。

「わ、わ、わたしは、な、なにも、しておりませんので。へい、何ひとつ……。ご、ご勘弁を、どうか許してやっておくんなさい」

意気地のない男であった。

「フッフッフ……色男、金と力は何とやら。お国、よくまああ、このような腑抜けを間夫にしたものよ」

手燭をもって、お国の周囲を廻っていた元禄屋は、

「覚悟はできているだろうな。不義はお家のご法度よ！　よくも、このような男と！」

心中の怒りを我慢しきれなくなってきた、長襦袢の上から太腿をつねりあげる。

「痛、痛いったら、旦那あ！」

悲鳴をあげるたびに、妬心がつる。事実空屋でお国をとりもどしてから二刻。元禄屋は、こみあげてくる嫉妬に、なやまされつづけていたのである。

困って三年。五指を屈する妾のなかで一番可愛がっていたはずの女。それが、こともあらうに若い男と乳繰り合おうとは！

「お国、罰は覚悟しているはずじゃ。どんな罰がよい。おい、文次郎の首をたたきおとしやろうか。それとも、お前を、昭吉たちの慰みものにしてやろうか。どうじゃ！」

「妾は何もしておりません。文さんが、文次郎さんが、むりやりに」

「手ごめにしたと！ おい、文次郎、ほんとか。今、お国の言ったことは！」

「いや、いや、嘘です。大嘘です。誘ってきただけはお国さんの方からなので。勘弁して下さい。生命だけは、どうか、お助けを！」

文次郎、あわれな声をあげる。

「嘘、旦那様。嘘ですよ。妾は、無理に」

「お国！ 初手をだしたのはお前じゃあねえか。ちょっと、お寄りよ。やらずの雨じゃあ

ないの、とか何とかいいやがってよう」

「なに言ってるのよ。嫌だ、嫌だって言うのを無理に、てごめにしたくせに！」

徳夜叉の納屋に引き続いての醜い争いであった。が、嫉妬にくらんでいる元禄屋には、それが痴話喧嘩とうつる。若い二人が始めて抱き合った楽しさを想い出していると。

「や、やめやがれい。どっちにするんない。お国が慰みものになるのか。文次郎の素っ首たたきおとそうか。それとも二人合わせて四つになるか」

「許してえ！」

「生命だけは、た、たすけておくんなさい」

二人の悲鳴が、なかよく、庭の奥深い木立の繁みへと吸いこまれて行く。

「フッフッフ……」

元禄屋の嗜虐の血が、もえたち始めた。可愛い女であった。可愛ければ可愛いほど憎悪がつる。

（やるか。思いきって、お国を昭吉たちの思う存分にさせてやるか。抱かせることはしねえ。ただ、見せてやる。さわらせてやる。××に指をつっこませてやる。フッフッフ、その時のお国の顔が、みものだぜ。なあに、死にゃあしねえ。男に罵られたくらいで死ぬよ

うな阿魔じゃあない。それに、そのあとでな骨身にこたえるくらい抱いてやるさ……）

ぐいっと、呷った冷酒が、ききめをあらわしてくる。ニタツと笑った元禄屋に、

「旦那様。ま、まさか、昭吉さん達に妾を。旦那様、許してえ！ 妾が、妾が悪かったのよう！ 勘忍してえ！ それだけは、昭吉さんたちに妾を自由にさせることだけは、許してえ！ ねえ！」

お国は金切声で訴えたが、とりあおうともしないで元禄屋は、部屋をでていった。

「ポチャン——」

と、池の緋鯉が、跳ねた。

常夜灯の光をうけてたに、うつぎが可憐な紅色の花を咲かせている。

「お国、どうする！ いったい、どうなるんだよう！」

「なにをいつているのさ。今さら、生命が惜しいが、きいてあきれるよ、まったく！」

「お前は罵りものにされるだけですむが、俺は生命がなくなるんだぜ。頼む助けてくれ。」

旦那に頼んでくれよう！」

「フン、なにさ。妾は罵られるんだよ。あの顔みただけで虫酸のはしる昭吉にさ。なんともないのかい、この意気地なし！ まったく

見損ったよ、お前さんには！」

「頼、頼まあ。目をつぶってくれよう。な、一度、一度きりじゃあないかよう！」

「お黙り！ 妾は、いやだよ」

どうやら、このお国、旦那の前では殊勝に

も、しおらしい所を見せているが、その実、

「妾^{あた}し、や知らないからね。勝手に殺されてお終い^{しま}！」

と、ぴしゃっと言い、不貞^{ふて}くされたように横を向くところなど、相当のあばずれ女と見える。その白い頸のあたりに、やぶ蚊が、数匹、とんできてとまる。

「と、とっておくれよう。か、かゆいじゃあないのよう！」

角柱のかどに縄をこすりつけて、お国が縛られている縄目を解こうとした。その時、

「つぶしてあげましょう、お国様」

音もなく襖がひらいて入ってきたのは、昭

吉と和吉。それに、浅草蔵前の札差・利倉屋庄右衛門。

「珍しい所で、これはまた、お色気たっぷりのお姿を拝見しますなあ」

「利、利倉屋さん、どうして、また、こんなところへ！」

思いがけない男の出現にお国の白い顔が、

上気する。昭吉、和吉の二人の番頭は、もちろんのこと、この利倉屋とも、お国はかねての昵懇。月に一度や二度は、深川の妾宅に、元禄屋とともにあらわれて趣味の話に花を咲かせる仲なのである。

二人の趣味とは、無論、金に糸目をつけず女を裸にして、責め罵ることである。

「ちよいつと顔を出しましたところ、これはまた滅法よいときにめぐりあったようで」

「いや！ いやよ。妾はいや！ 何も顔馴染みの妾を責めて喜ぶことはないじゃありませんか。よその女にして頂戴！ いやよ！

ねえ、昭吉！ 許してよお。妾は、旦那様の女なのよ。番頭のお前にとって主筋にあたるのよ。それを、その妾を、いったい、どうしようと言うの！」

かねて元禄屋の目を盗んで自分に、いやらしい色目をおくっていた番頭ではないか！

「旦那様に言いつけますよ、昭吉！ 変な真似はしないで頂戴！」

必死で身をちぢめるのも構わず、昭吉は、

「ほれ、ここに、蚊が一匹！」

と女のような白い手で、お国の首筋を、たく。（ピシャッ）と音はしたが、蚊は、ぶ

「お国様。今宵は旦那さまのお許しで」

「や、やっぱり……やはり……」

（やはり、そうだったか）とお国の肌に、鳥肌がたつ。いくら、はすっぱな女と言っても女は女。三人の男にこれからむざむざと罵りものにされるのかと思うと羞恥の思いが、つうーんと、こみあげてくる。

しかも、その男たちが、顔馴染みであることが、より一層、羞恥心を駆りたてる。

（どうやら、許してくれそうもない……くそっ！ 旦那様もあんまりなことを！）

むらむらと怒りがこみあげ、それが、目のまえで鴨居からだらりとぶら下がっている間夫の文次郎への八つあたりになる。

「文さん！ ほれ、ご覧！ あんたが意気地なしだから、妾が、妾がこれから、死ぬほど辛い目にあわなきゃあならないのよ。この腑抜け！ 弱虫！ 文さんったらあ！」

文次郎は、ぐったりとして、目を閉じていた。三人の男が入ってくることによって自分の生命は、まず大丈夫。ほおとした瞬間、はりつめていた気持が一度に緩んだに違いない。いくらお国がよびかけても返事はない。「フッフッフ……色男、金と力はなかりけりか。この青二才め！」

文次郎に唾を吐きかけるように、冷たく言
った利倉屋は、

「お国さん。僕は前々から、あんたの裸を、
一度、拝見したいと思っていました。何と言

うても今時、世にときめく、御公儀為替御用
元禄屋さんの寵妾ですからな」

緋紫絞りの長襦袢の襟に手をかけて、
「ええ肉づきですなあ……色といい、艶とい



イメージギャラリー 『クジ引き』 岡 たちし

い……」

太り肉のお国の、縄目から、こぼれそうな
胸乳のあたりを、ゆっくりと撫でていく。

「お国様。私は、もう我慢できぬくらいにあ
なたさまのことを！」

と昭吉が、長襦袢の裾に手を伸ばし、

「何年もまえから、お国様のことを、この文
次郎とかいう、お人が間夫になられてからで
も、ほんとにあなたが、好きですきで」

その華奢な白い女にも見まがう指先は、裾
を払いあげると、そのなかの緋色の鎖縮緬の
おくにまで、青虫のように這って行く。

「アッ！ ア……昭吉！ な、なにをするの
よ！ かりにも、主筋にあたる妾じゃあない
か！ や、やめるのよ！」

昭吉のかわりに、和吉が答える。

「止めねえよ。その主筋の旦那さまのお許し
がでていると言ったはずだぜ、お国様」

いいながら和吉は、なかば、プリンと刺き
だされたお国の乳房に手をかけ、縄目のあい
だから無造作に掴み出すと、

「この乳首、何とも言えねえぜ。フッフッフ
ッ、……お国様、馴りてえだけ馴れという、
旦那さまのお言いつけ。馴らせて貰いますぜ
思う存分に……」

蒼白い顔でニタリと笑った和吉は、そのま
ま、左右の手の指を巧妙に蠢かせ、長襦袢の
襟から裾までを傍若無人に左右に大きく、脇
腹から背中へと、観音開きの扉のように開い
ていくと、まず豊かにかがやく腹のあたりを
舐めたあと、湯文字の紐に手をかける。

「や、やめてよう、和吉！ まさか、妾の、
妾の……」

「妾のなんだってんだよう！」

「妾を、は、は、はだかにするのでは」

「あたりまえよ。スッ裸にむきあげてくれと
旦那さまの、ご命令！」

「な、なんですって。イヤ、イヤよう！」

お国は、齒をならして身悶える。

昨日まで、女王のようにあごでこきつかっ
ていた番頭たちに、どうしてこんなに恥かし
いめにあわせられなければならないのか！

「和、和吉！ 必ず、あ、あとで旦那様に申
しつけますよ！」

「どうぞ、お国さま。今夜は、どうにでもし
てよいとお言いつけで！」

鎖縮緬の湯文字の紐を解くために、自分の
顎をお国のむっちりとした肉の盈ちた肩につけて
和吉は指をうごめかしていたが、なかなか
とけない。

「私も手伝おうかしら」

お得意の女言葉で声をかけた昭吉が、たっ
ぷりと凝脂ののった腰に腕を回す。

「や、やめて！ おやめったら！」

お国は、必死で裸身をちぢめて悶えつづけ
る。

「やめておくれよう、和吉さん！ なんだっ
てまた、顔馴染みの妾を、こ、こんな恥かし
い目に逢わすんだよう！ 昭吉ったらあ！」

悶えるたびに、紐が、ギシギシと軋み、い
きな深川鼈のびんが乱れて紅くそまった頬に
かかり、いっそう妖艶さを添えてくる。

「顔馴染だから面白いんじゃないのさ。見
も知らぬ男たちだったら、お国さまは、喜ん
で、いつでも股をひらくおかたじゃ」

なみはずれて大きい、まるで丘のように盛
りあがった乳房に、熊手のように大きな掌を
這わせながら利倉屋が、からかう。

まったくよいところへ、やってきたもの。

元禄屋からお国の責め役を頼まれたときは
年甲斐もなく心の臓がたかまるのを覚えた。

「他人さまの手植えの花をまさぐるのは、何
とも言えぬ、よい気持じゃ。どうだろう、こ
のすべすべした絨肌は！」

官能味たっぷりのお国の肌の匂いが、むん

むんとたちこめてくるのを、鼻孔をひらいて
吸いこみながら利倉屋たちは、お国の湯文字
と、ゆっくりと取り組んでいる。ぬがそうと
思えば、即座に紐を斬りすてることもできよ
う。それを、こんなに手間ひまかけて解いて
いるのは、たっぷりとお国に羞恥をあげあわ
せてやろうという魂胆から。

「まだ解けねえぜ、お国さん」

さも楽しそうにお国の正面で身をおこした
和吉は、次の瞬間、乱れた湯文字のあいだか
ら、さあっと、奥へと手を伸ばしたが、と、
「こ、こりゃあなんだい、お国さん」

と、さもびっくりしたような声をあげる。

「どうしたい、和吉さん」

「なあにね。滅法毛深えものが、まるで、犬
の逆毛みてえ」

「なんだって、犬の逆毛……ハッハッハッハ
……わかったぜ、お国さん。あんたよっぽど
毛深えらしいな。よしよし、毛深え女は情が
深えっていうから、たっぷりと哭かせてさし
あげますぜ」

「いや！ いやだったらあ！」

突然、××に加えられた攻撃に、びくびく
っと、釣りあげられた巨大な桜鯛のように、
裸身をおどらせたお国は、

「ほんとに、ほんとうに、お願い。利倉屋さん、妾にもうこれ以上、恥をかかせないで。ね、お願い。代りに何でもしますから。ねえ、つたら！」

「代りに何でもすると言っても、僕等にとつては、これに勝るものはないようすな、昭吉さん、和吉さん」

「勿論ですとも！ さあ、解けやしたぜ。ほれ、ほれ、この紐。こいつから指を離すと、もうお国さまは、どうにもならねえ」

和吉の指先にあやつられる二本の白い紐。
「じゃ、こちらの方も……」

利倉屋は、背中に押しやられていた長襦袢を、くるくるっと裾の方から、絨毯でも巻くようにまきあげると、背後で交錯させられたお国の両腕のなかにぼろ布のようにまるめ込む。前面から見てもうお国の裸身をかくすものは揺れうごく緋色の湯文字、ただひとつ。

「いよいよ、スッ裸に。ヘッヘッ、ヘ」

ペロリと舌で唇をなめあげた利吉は、お国のまっ赤にそまった顔をのぞきこみながら、白い二本の紐から指先をはなす。

「アッ！ アッ、アレッ！」

花びらの舞い散るように湯文字が、ふわりと青畳のうえにおちて、なんともいい表わし

ようなない空虚感、無防備感が、下半身を襲い、お国は、ピクピクッと全身を痙攣させたかと思うと必死で内股をあわせて、いっせいに注がれる男たちの好奇に溢れた視線を少しでも、ふせこうとする。

が、それが、女のむなしいあがきにすぎないことは、お国自身もなかば知っていることであつた。

「たしかに和吉さんの言うとおりの！」

「毛深けえな、まったく。すごい！」

同時に手をのばした三人の男たちの六本の手が、青虫のように、お国の黒々とした草むらを這いまわる。

「文、文、文次郎さん、たすけてえ！」

思わず文次郎にたすけを求めたお国の顔が次の瞬間、蒼白となる。

「文さん、あ、あんだという人は！」

お国の怒りも当然、がっくりとうなだれていた筈の文次郎が、いつのまにか赤く濁った目を開いて、三人の男に翻られるお国を見つめていたのである。しかもあきらかに、うつとりと、淫らな翳を顔にうかべ、幅広の黒ビロードの帯の下あたりの業平小紋を、くつきりとよりあがらせて――。

利倉屋たちの帯の下あたりが、むっくりと

盛りあがっているのを、見まいとしても見てしまい、一層、屈辱の思いにかられていたお国であつたが、こともあろうに、文次郎までが淫らな動きを下半身に示そうとは！

「この恥知らず！ お前さんの生命を救うためにこの妾が、こんな目にあっているというのに！ な、なんと言う恥知らずな！」

このお国の言葉を耳にした利倉屋が、
「お国さん。なにが、文さんの恥知らずだって……」

と鴨居にぶら下がっている文次郎を眺め、
「ハッハッハ……この男が、この青二才がねえ！ ハッハッハ……昭吉さん、和吉さん、まあ、ちょっと見てやるがよい」

利倉屋はそう言う、短刀を持ち出してきて帯を斬り払い小袖も襦袢もはねあげ、現われた越中褌の紐も無造作に切りすてた。

文次郎二十五才――男として精力があり余っている時である。そこには、まるで、奔馬の××のような××が、斜め上にと突き出されていたのである。

「男ってものは、こういうものなのさ。女の裸を眺めるとな、どうしてもこうなる」

利倉屋、手にした杖で、つつき廻し、
「さて、お国さん。どうだい、この男と、や

「って見ねえか、儂等の目の前でよ。遠慮することあねえ。やりなよ」

「いや！ 許して、許してよう！」

お国が、泣きじゃくる。

「泣いたって駄目さな。ほれ、ほれ見なよ。文次郎さん、ますます張りきってるじゃあないか」

鴨居に吊られた縄をずらせて、お国と二尺くらいの所までひっぱってくると、

「ここと、ここを合わせるだけなんだぜ。こつそりと何十回となく、やったことを、もう一度、ここでやるだけでよいのだがなあ」

利倉屋の杖は、文次郎の××と、お国のぶくぶくと肥えた尻や下腹を、つつき廻して、

「……しなよ、なあ、お国さん」

昭吉が、お国の腰を抱くようにして、文次郎の××に触れあわせる。その昭吉の帯のしたあたりも×××…。

その時——。

音もなく襖がひらいて、元禄屋が、あたふたと、かけこんでくる。

「キャアッ！ 旦那さまあ！」

「お国、どうだ。少しは、こたえたか！」

「ハ、ハイ。どうか、どうかお許しを。許して下さいませ。もう、決して、決して」

「決して男は、つくらぬな」

「は、はい！」

「誓うか」

豊満な裸身をくの字にまげて涙に濡れる瞳で、ふかぶかとうなずくお国を、満足そうに見おろしていた元禄屋は、

「じゃあ、これでな」

と、小柄^{こづか}をとり出して片頬をゆがめる。

お国が、不審そうに眉をひそめると、

「剃るのじゃ。剃って詫びを入れるのよ」

「あ、あ、尼になれと！」

「ハッハッハ……尼か。こいつは面白え。尼になりたいか、お国」

「いや、いやでござります！」

「そうじゃろう。まだ浮世には未練があるうて。すると、どこを剃るか、わかるな」

じいっと、元禄屋の顔を眺めていたお国、サアッと、顔を紅潮させて、

「ま、まさか！ まさか、旦那様！」

ふっくらした太腿が、ピクッと痙攣する。

「そのとおり。上がいやなら下を剃る。さあどうする。尼になるか、それとも」

利倉屋たちに命じてお国を勵らせ、それを細目に開いた襖のかげから眺めて、ひそかな悦楽に浸っていた元禄屋が、間夫^{まぶ}をつくった

愛妾お国に加えるに応わしいお仕置。

「旦那さま、許して。もう、決して男は、つくりませぬゆえ、お許しになって」

「いや、口約束は信用できぬ。上か、下か、どちらかを剃り、詫びを入れい。男でも、詫びを入れるときには丸坊主になるというではないか」

「だ、だんなさまあ……」

ぞくぞくするような仇っぱさを、たたえたお国の叫びに、和吉のもつ手燭の焰が、はげしく、またたく。

天保の大塩

蔭絵の角盟^{つゝ}が一つ。

それに、和蘭わたりのシャボンと小柄——結び灯台のあかりにてらし出された、お仕置をうけるお国の姿には、女本来の姿、男に屈服し隷従することによって幸福をつかむという美しさに満ち溢れたものであった。

昭吉と和吉がはこんできた和蘭渡りの椅子に両手を背後に回して縛られ、女のいちばん人目に曝したくない秘所を突きだすようにして、両足を、肘あての部分に大きく開いて縛りつけられている。

「旦那さま、妾が悪うございました。どうぞ御存分になさって下さいませ」

お国は、なまなましい女体の匂いを発散させながら神妙に言う。

「文次郎さんの見ているここで、皆さまがたを証人として、二度と男をつくらぬお約束のあかしとして、剃って……いただきます」

うなずいた元禄屋は、シャボンを角盥のなかにいれて泡だたせると掌につけ、眼前に、ふさふさと萌えいでている黒い草むらに、ゴシゴシと、なすりつけていく。

ピクッ、ピクッと、まるで、金網のうえで焙られる桜鯛のように、裸身が躍る。

「はじめるぜ、お国」

片膝をたて、右肘をお国の右腹にもたせかけた元禄屋は、二度、三度、まっ白い肌をつまみあげてから、スウーと、右手の刃を、漆黒の××へと滑りこませる。

ジリ、ジリッ——と、ときに、低い音が、なまめかしく夏の夜気に伝わるほかは、ものおとひとつ、しない。

元禄屋のあとは、利倉屋が、きらめく小柄をうけつぎ、つづいて昭吉、和吉と手渡されたが、一切の抵抗をあきらめたお国は、うつとりと瞳を閉ざして、されるがままに、身動

きひとつしない。

「お、お国、お国さん！ すまねえ！」

意気地なしの文次郎ではあったが、自分の女が、目のまえで、女のいちばん大切な秘所の×を、剃られているのをみては、黙ってはおれないのであろう。

が、うつすらと瞳を開いたもののお国は、文次郎には、もう、何ひとつ答えようとはしない。

「お、おくにさん……」

文次郎は、ただ、何度も呟くようによびかけながら、和吉のしなやかな指先が、うす紫や、さくら色の柔らかな××のさきをつまみあげて、すみからすみまで、すっかり剃りおとしてしまうのを眺めていた。

元禄屋をはじめ男たちは、念入りに、入れかわりたちかわり、両手に唾してお国のまえに蹲まり、慎重にことをはこんだ。

別して利倉屋は、大きな和蘭渡りの鏡を持ち出して、お国自身に、いま、何がなわれているかを覗きこませ、羞恥に染まる顔に、

「お国さん、これからよろしくな。これで他人とは言えぬ仲になったによって」

など、親しげによびかけて、お国が、思わず傾けてくる顔を、しっかりと抱きしめるの

であった。

「これでよからう。当分、浮気もできますまいて」

最後の一刷けをスウーと、あおあおと剃りあげられた肌にあてた元禄屋は、

「利倉屋さん、御苦労でしたな」

と、角盥のなかに、水音たかく小柄を投げ入れる。

言外の意を察した利倉屋は、真新しい手拭いで、お国の××をていねいにひとふきすると、元禄屋に片目をとじてみせ、昭吉、和吉をうながして、文次郎をひたてて部屋をでていく。

あとは、和蘭椅子に縛りつけられたお国の白く燃える肉体と元禄屋の二人だけ。

六月も末ちかく、広い庭先で、しきりに夏の虫が、なきかわしていた。

その頃——

大坂は天満、大坂町奉行所与力大塩平八郎中斎は、江戸の徳夜叉からの使者、旧書の六孫王を迎えて、感激を面に現わしていた。

「豊太閤五夜のロザリオのこと、聞き及ばぬではなかったが一笑に付しており申した。どうか五夜のロザリオの謎をといて、天下の飢

民のためにつかってくだされいとお伝えいた
だきたい」

「大塩殿。頭領は、謎をといたならば、その
秘宝、貴殿に献じようとお気持ちでござる」

のちに大坂天満騒動、大塩の乱とよばれる
大叛乱を徳川幕府の悪政に対しておこし、日
本の歴史に燦然とした光芒をはなつ大塩平八
郎中斎、六孫王の言葉を腕を組んできいてい
たが、

「百万の味方を得る思い……なれど、この大
塩、頼むは我が力のみ。徳夜叉殿のご厚意は
忝いかぎりではあるが」

十一代將軍徳川家齊の側妾お通の方の所生
と称する徳夜叉。大坂に偉傑ありと噂される
大塩とかねて書簡を往復させていたのであつ
たが、元禄屋の妾お国から、五夜のロザリオ
の秘密をきくや、これを直接、六孫王をつか
わして大塩の耳に入れるとともに、自分のも
っている戊夜のロザリオ以外の、甲夜、乙夜
丙夜、丁夜のその探索をともしして、天下
にみち溢れる飢民救済に役立てようと提携を
正式に申し入れたのである。

飢民救済——この頃、医学研究に余念がな
かった著名な蘭学者、杉田玄白の「後見草」
には、次のように記されている。

食ふべきものの限りは食ひたれど後には
尽果て先に死たる屍を切取ては食ひし由。
或は小児の首を切、頭面の皮を剥去りて焼
火の中にて焙り焼、頭蓋のわれめにへらさ
し入、脳味噌を引出し草木の根葉をまぜた
きて食ひし人も有しと也。

——と。

出羽、陸奥の餓死者百万。数カ村、数十カ
村の人々が、みな死に絶えて、白骨が見渡す
かぎり砂漠のようにつづいたといわれる。

「江戸と大坂に離れていても、天下万民のた
めに悪政にたち向かう志はひとつ。徳夜叉殿
にくれぐれも御身十分に愛われるようにと、
お伝えくだされよ」

大塩の情誼あふれる言葉をあとに、中仙道
を江戸は八王子の隠れ家にかけもどった六孫
王は、会見の始終を徳夜叉に報告。

白晝端麗な顔に、決意をみなぎらせた徳夜
叉は、

「急がずばなるまいのう。天下のため、大塩
殿のために、一日おくれれば、千人の人々が
飢えて死のうぞ」

六孫王、小式部、茶々丸、それに救出され
た越中松、いわゆる四天王の面々が、ふかく
うなづく。

かたわらには、小紫のお景がいた。元禄屋
一味からうけたおぞましい拷問の傷痕からは
すっかり回復したのであろう。短髪たんぱいの光をう
けて美しい横顔がかがやく。しかし、その瞳
のおくには、自分を屈辱の地獄にたたきこん
だ男たちへの復讐の念が、青白い炎となって
燃えあがっていた。

その頃——

江戸は日本橋四丁目元禄屋重右衛門の本宅
では、主人の元禄屋が、巨体をゆすぶって高
らかに笑っていた。

手には、長さ五寸あまりの黄金の十字架。

豊太閣の手から毛利輝元に。輝元から、と
きの帝・後陽成に献じられた丙夜のロザリオ
それが、やっと、いま、京都の菊亭家から届
けられたのである。菊亭政房の添書には、か
けがえのない秘宝であるが、貴子の悲惨な生
活みすてはおけず、ここにお送り申しあげ
る。今後は、娘を正妻として可愛がってほし
いと縷々として繰り返し述べられてあった。
「フッフッフ、貴子姫に働いてもらうのは、

これからよ。明後日には、勅使が東下りして
くるといふ。しかもその勅使が、姫の前夫・
押小路高明。やっとこれで貴子責める恰好

の舞台ができあがったと言うものじゃ」

元禄屋は、笑いを押えることができない。

「筆頭老中水野出羽さまから、勅使御滞在の中
の世話万端を頼むと言われた。フッフッフッ

水野様も、お人が悪い。儂のでもとに、貴子
姫がおることを知っての上でじゃ。こいつは
ひとつ、腕に縊りをかけて、御饗応を申し上
げずばなるまいて。女には縄が、よく似合う

……か。そして女を責めるのは、その女が惚
れている男の前にかざる。いまだに、あの貴
子は押小路を愛しておる……フッフッフ、そ
のまん前で、前の夫の目の前で、あの気位の
高い公卿の姫を、責め抜いてやるか」
手中にある四十七箇の珊瑚玉をつらぬいた
そのロザリオに、

有為の奥山今日越えて

△強烈な被虐女性△

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで注
目された川路むら子さんの要望により、
彼女に描写し、ここに彼女の狂態を再
元提供することにします。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
一糸もまとわぬ裸身に只股間の
ような執拗な目だけが柔肌をじ
わじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
如何に被虐を求めても、それは
ええ余りに泣いて泣いて泣いて、
れども悦びに泣いて泣いて泣いて、

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
わつとりと股防を浮かした素足
に縄をからませて、左右に引き開
けば、妖気がいっぱい溢れてくる。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
縄尻をとられて、追いついて、ど
うしようもない手先のままだに、
うしろも手も開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
後手に縛られたまま、臀部を露
けし、浣腸が近々と迫ってくる。
し、浣腸が近々と迫ってくる。

露出した全裸股体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
股間を露出したまま、股間を露
けし、浣腸が近々と迫ってくる。
し、浣腸が近々と迫ってくる。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
自分の股間より上に両足を掲げ
て、羞恥を覚える。羞恥を覚える。
べも、羞恥を覚える。羞恥を覚える。

壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
ありきたりのM女性であつたら
このような責めは許容しないもの
であるが、彼女はやはり違った。

悶絶海老縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
身体が二つ折りになつた苦痛も
さることながら、羞恥の個所があか
らさまになる無防備感はいどい。

再びむら子子の狂態

本誌五月号で本誌三のペンで
描かれた川路むら子さんの再登場
に、今度は、今度は、今度は、
今度は、今度は、今度は、今度は、
今度は、今度は、今度は、今度は、

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
股間を露出したまま、股間を露
けし、浣腸が近々と迫ってくる。
し、浣腸が近々と迫ってくる。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
鼻責めと鼻責めと鼻責めと鼻責め
と鼻責めと鼻責めと鼻責めと鼻責め
と鼻責めと鼻責めと鼻責めと鼻責め

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
トイレに追い込んで、排泄を強
制する。排泄を強制する。排泄を
強制する。排泄を強制する。排泄を

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
逆エビ責にあえぐ。逆エビ責にあ
えぐ。逆エビ責にあえぐ。逆エビ
責にあえぐ。逆エビ責にあえぐ。

椅子責でいためる

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
椅子を縛られたまま、椅子を縛
られたまま、椅子を縛られたまま、
椅子を縛られたまま、椅子を縛ら
れたまま、椅子を縛られたまま、

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
柱に縛られたまま、柱に縛られた
まま、柱に縛られたまま、柱に縛
られたまま、柱に縛られたまま、
柱に縛られたまま、柱に縛られた

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
顔面を縛られたまま、顔面を縛ら
れたまま、顔面を縛られたまま、
顔面を縛られたまま、顔面を縛ら
れたまま、顔面を縛られたまま、

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
両手を掲げ、媚態をあらわす。媚
態をあらわす。媚態をあらわす。媚
態をあらわす。媚態をあらわす。

悦楽責めアツプ集

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 一組 四〇〇円
悦楽責めアツプ集。悦楽責めアツ
プ集。悦楽責めアツプ集。悦楽責
めアツプ集。悦楽責めアツプ集。

とあり、そのしたに、22・42・14・20・26
と和蘭数字が刻まれてあるのをたしかめた元
禄屋は、クッククツと奇妙な笑いを洩らし、わ
が身に話しかけるように呟く。

「あと二つか、戌夜をもつ徳夜叉の隠れ家八
王子方面へは探索の網をめぐらしてあるゆえ
早晚こちらのもとなろう。すると残るは前
田利家卿に伝えられたという乙夜のロザリオ
ひとつ。これも必ず手に入れて見せるわ。ク
ックク、そのまえに」

半枚の畳をもちあげ床下の銅張りの箱のな
かから厳重な南蛮錠をおろした鉄の匣をとり
だし、ロザリオを納めた元禄屋は、手燭をも
つと、廊下にでる。

「前祝いに、ひと責め、責めてやらざる
まいて」

廊下の向こうに座敷牢――。

そこには、老中領田下野を始めとする十数
人の武士、豪商に責めなぶられたうえに、唐
人と日本人との混血した陳沈宝ら三人の男に
金股流修羅縄をかけられて、かがやくような
白蘭の肌から馥郁とした匂いを漂わせている
菊亭貴子が、ひっそりと一糸まとわぬ裸身を
さらしていた。



惨酷ショートショート

密航者は殺せ

小倉 幸男

バンザイ……密航成功！ 船は岸壁を離れ、はるか遠くの目的地へと進みだした。もう引き返すことはないだろう。

人の出入しない、うす暗い倉庫を、ねぐらと決めたわたしは、チョコ、コロ、キヨロなどの密航仲間に対面したが、そのうちの、密航十数回のベテランを自称するコマ子が、忠告してくれた。

「あんたは初めてね。用心なさいよ。発見されたら最後、なぶり殺しだから」

「えっ、殺されちゃうの！ どんな風に？」

「それが、ひどいと思ったらないのよ。私の友達、ネコ科の肉食獣のエサにされたわ。逃げようとした彼女を、あっさり押さえ、足の先

でコロコロ転がし、さんさんオモチャにしたあげく、鋭い爪でバリバリお腹を引き裂いてキイキイ悲鳴をあげるのもかわらず、ガブリと……。まっさきに喰いついたところをみると、はらわたが、いちばんおいしいのね、きつと。おなかガランドウになっても、彼女まだ死にきれずにもがいていたわ。結局、頭と四肢の先だけをのこし、むさぼり食われたの。密航者は殺せ、なのよ」

あまりのことに声もでなかったが、この話は事実で、わたしはその後、何度も仲間の最期を見なくてはならなかった。

船底の一角のオリに、チョコがとじこめられ、必死でぬけようとするが、格子の隙間

はせまく、とうてい、出られそうもない。「どうしたの？」

「やられちゃったわ。放置された食物に注意してよ。あたし、食いしんぼうで、がまんできなかったの。大好物のチーズをとろうと近づいたら、とたん床がボタンとひらいて、あつと云うまにオリの中に落下。床は、すぐはねかえって天井に早替りよ。出られるスキはないし、あたし、もうだめね」

「気の毒だけど、どうしようもないわ」

「まさか、オリごと焼き殺されるんじゃないでしょうね。そんなことしたら、あたしの恨みとして、臭いをいっぱいに残してやるわ。以後、仲間が罠にかからないように」

船員が入ってきたので、わたしは隅にかくれた。

オリを運びだした冷酷な船員たちはロープで舷側から海中へ吊りおろす。火焙りではなかった。その代り溺死させるつもりなのだ。

オリはズブズブと沈み、とじこめられた哀れなチョコは、いかにもがこうと、ぬけでるすべはなく、やがて窒息の疼れんと死が……

「もうオダブツだぜ」

「もういもんさ」

オリを吊り上げ、フタをひらくと、完全に水ぶくれになったチョコの死体が、甲板上にころがった。船員の高笑いが聞こえてくる。

犠牲者は、これだけではない。或る日、わたしは、平たい台の上の食物をいただくようにしているキヨロに気づき、注意した。

「ダメよ。ワナかもしれないわ」

「新米のくせに余計なお世話よ。あたいが先に見つけたんだから、あたいのものよ」

さっと引っさらおうとしたとたん……

「ボタン！ キュウ……」

こっけい、と云っては悪いが、そんな悲鳴が轟音と同時にあがる。

哀れ、スタイル自慢のキヨロは、天井から舞いおりた太いコの字型の鉄棒で、胸部を完全に、殆ど両断されんばかりに押しつぶされて、即死していた。口から少量の血汐が流れているだけ。苦痛も恐怖も、一瞬であったのが、せめてものことか。

あわてて逃げだしたわたしは、フラフラになった仲間のコロと鉢あわせした。

「コロちゃん、いったい、どうしたの？」

声をかけた時、もうコロは床にくずれ、のたうちまわっている。これこそ七転八倒というのか、断末魔のものがき。

「ドクよ。ドクを食べちゃった。ああっ、苦しい……胃が焼ける。なんとか、たす……けて。もう……シ、ヌ、ウ……」

コトッ！ 頭を落とし二度と動かない。愛

くるしいコロの、あまりにもあっけない死。彼女の死体は、マストから逆吊りにされ、海鳥のついでにむすまになつていた。おそらくみせしめのためだろう。

船員はわたしたちを何と思っているのか。もちろん好ましい存在ではないだろうが、目の仇にしないでよさそうなもの。或は、かわいがってくれるかとも思ったのに。

不用意にも甲板に姿をあらわしたクリ子の如きは、乱暴にも鉄砲で、それこそズドンと一発のもとに片づけられ、もろくも死体を晒した。弾は頭部に命中、クビを殆どふっとばしており、いちめんに散った血しぶきは、バケツ一杯の海水で軽く洗い流し、死体は海中に蹴おとされてしまった。

船は、ようやく目的地についた。こんな恐ろしいところは、一刻も早く逃げださなくては。だが出口は、完全にとざされていた。

「どうしたんでしょう」

「あたしたちも、殺られるらしいわ」

「エンジのわるいこと、いわないでよ」

「でも、人影は消えたし、なんだか不吉な予感がするのよ。あっ、煙が！」

「火事なの？」

「いえ、違うわ。あっ、わかった。毒ガスだ

わ。一息、吸ったらイチコロよ」

部屋の隅から、もうもうとわきでた煙は、たちまち充滿する。わたしたちは四方にのがれ、かなわぬことと知りながら、せめての望みを求めたが……

いろいろ親切に教えてくれた、ベテランのコマ子も、死体となつてしまった。けんめいに呼吸をとめるのも空しく、こらえきれず短く吸ってしまう。鋭い痛みが気管から肺へ走る。目がクラクラとし、足がよろめく。もう目も見えない。死ぬ、死ぬのだ。お母さん、姉妹たち、わたしは殺される。ああ、密航などしなければよかった。たす……け……

○

「ひい、ふう、みい、よう。これだけです」
「航海中、処分したのを加えると十五か。もっと注意しなくては、だめだ」

「アイアイサー。今度は絶対にのせないようにいたします」

甲板には四個の死体が晒され、士官と船員は、これらを足でころがしたり、軽くふんづけたりしながら話しつづける。

「だが、考えてみれば哀れな話だ。今年は、こいつらネズミのとしだというのにな」
「アイアイサー」

——(おわり)——



妊娠したって、嘘じゃないでしょ

／ 芙美代のお喋り ｖ

福 井 桃 子

明けましてお目度うございます。昨年中はいろいろとお世話様になりました。本年もどうぞよろしく願ひします。と言っても、今日は、もう一月の十二日。我さんも終わってしまつて、お正月気分もすっかりなくなつてしまつた今では、こんな挨拶もおかしいですわね。でも、とにかく、今年もよろしく、というところだけは、願ひしておきますわ。

今日も提げてこられた、そのソニーのテープ・レコーダーで、昨年は私のお喋りも大分録音しましたわね。アレ全部残してますの。テープも沢山いることだし、消しといて下さいましね。あとで、私の変な声がとび出してきたりしたら、嫌ですからね。

変な声って言えば、昨年、ホテルのボックスで録音したでしょう。あれ、どうしたの？



ウンとかハアとかスウとか、あのテープ、今でも持ってるの。あんなのだけは大事にとっておきなさいよ。私もそのうち、一遍、聞かしてほしわ。

どう？ 私の身体、変わっていかない？ あれから一月半ばかり逢ってないけど。

あら、私の顔がきれいになったって。そんなお上手を言っても何も出ないわヨ。そりゃツケ眉毛して、お化粧してるからよ。

そうじろろ見ないでよ。恥かしいじゃないの。これでも舞台上でライトを浴びたら、案

外、見れる顔なのよ。若いときに踊ってた、舞台写真、見せてあげてもいいわ。

それはそうと、あんだ、まだ判らないの。

この前、私言ったでしょ。妊娠してるって。

それに、ぜんぜん信用しないんだもの。どうなの？ あのとときの写真、現像してみてわかったじゃないの？ そりゃ、あときは、妊娠六カ月だもの、お腹たって、そう膨らんでいなかったわよ。だから、地腹だなんていって、全然、信用しなかったのよ。

男の人って、知らないけど、メンスがとま

ったって、わかったときは、もう妊娠三カ月なのヨ。少し大きいかな、なんて、あんだはのんきなこと言ってたでしょ。

私はね、産婦人科の医者の方へ行ってきたのはっきり妊娠してるって、聞いてきたんだもの、間違いないわよ。

それでね、私、あんだをびっくりさせてやろうと思って、ほれ、このコートね、マタニティドレスの代りってわけ。寒くって、厚着してるってくらいに思ってたでしょ。

そんなに、あわてなくなっていたいわよ。あとで、ゆっくり裸、見せてあげるから。

びっくりするわよ。そりゃ、でっかいお腹になってるんだから。そうね、十二月の中頃ぐらいから急に大きくなったかしら。

もともと、私しゃ、お腹の小さい方じゃなかったけど、妊娠八カ月の後半、二月には九カ月なんだから、お臍がこんなにむくれてしまっ、太鼓腹になったってわけなのよ。

週刊誌で見た加賀まりこのお腹なんかより私の方が、ずっと大きいわよ。ええ、今は腹帯してないから、洋服の外からだったら、余り目立たないでしょ。今日は、あんだとのデパートの日だもの、腹帯はとってきたんだけど腹帯したら、もっと大きく見えるわ。

あら、あんた、顔色悪いわよ。私ひとりにだけ喋らしておいて、今日は馬鹿にふさぎ込んでいるのね。私の妊娠、そんなにシヨックなの？ この前、妊娠したって聞いたときは冗談、言ってるって思った？ もし冗談じゃなかったら、とうに始末してるかもって？

私じゃネ、好きな人の子供だったら産みたいのよ。堕ろすなんて、とんでもないわ。加賀まりこは、どう思ってるか知らないけど、私は自分一人で可愛い赤ちゃんを立派に産んで育ててゆくつもりよ。

ええ、お蔭で身体の方は至極、元気なの。風邪ひとつひかないし、とんだり跳ねたり、階段からころげ落ちたことだってあるけど、平気。よく眠れるし、よく食べれるし、薬なんて飲んだことなしよ。だから、車、いくら飛ばしたって、平ちゃらというわけなの。

どう？ これからホテルへ直行して、私のハダカ撮ってみないこと。マダム美美代の妊娠したお腹なんて、そう写す機会なんかないわよ。ずーと、今まで、私の普通の身体を写してたんだから、妊娠した私って、凄く興味あると思うけどナ。ねえ、そうでしょう。

私が本当に妊娠したって言ったら、びっくりするだろうけど、すぐ、そのあとでカメラ



で撮らしてくれて、言うと思ったワ。

ええ、ええ、縛るなど、叩くなど、どうぞ御随意にして下さい。でも、余り責めすぎて途中で赤ちゃん、産まれてきても私は知らないわよ。それが承知なら、どんな責めを加えても、私はかまわないの。

なんだか、この部屋の暖房がよくききすぎ

てるのか、暑すぎるくらいだわ。失礼して、コートと上衣、脱がしてもらおうわ。どう？ お尻から、お腹、こんなに大きいでしょ。顔は案外やつれてないのよ。なんでもかんでももりもり食べるからかもしれないわ。

今年のお正月って、暖かかったわね。私なんか妊娠してるせいかしら、身体中がぼかぼ



かして、寒さ知らずだったわ。スキーに行こうって人なんか、雪がなくて困ってるでしょうね。私なんか、今年のお正月はテレビばかり見て寝正月だったけど。こんな大きなお腹して、そこら、うろうろ出来ないものね。では、お風呂へ入らしてもらいますから、それまでに準備しておいてネ。

○

ああ、いいお湯だったワ。こんな大きなお風呂で、一人のんびりつかっていると、なん

だか温泉へ来てるみたい。ここは温泉マークだって、まぜかえさないでよ。

お腹を上にして、足を真すぐ伸ばしているとおかしいじゃないの、お腹だけがね、島みたにお湯の上に浮かんでるのよ。今日は、あんた、入って来なかったわね。来たら、このパンパンに張ってるお腹、さわらしてあげようと思ってたのに――。

それ、見せたげるわ。大きいでしょ。こんなに、お臍、ふくらんでしまつて。

さあ、どんなポーズでもとるから、十分に妊娠した私のお腹、いや、裸全体でいいから撮って下さいネ。今日はどうしたの？ 私ばかりがはいでしまつて、いやに沈んでるのね。あら、テープ入れ替え？ 私、協力するから、機嫌直して、ね、写真撮ってヨ。

この、柱のとこへ立つの。どうしたら、お腹、大きく見えるかしらね。来月になってもお腹の大きさは余り変わらないと思うのよ。

今は、こうして、膨らみが上の方にあるでしょ。この膨らみが、だんだん下の方へさがってきたら、産み月に近いってわけよ。だから、今はお腹は大きくても、心配はないってわけね。ねえ、大きいでしょう。びっくりした？ これで私が嘘を言ってるんじゃないってわかったでしょ。こんな大きなお腹を証拠に見せたんだから、間違いなしよ。

そりゃ、洋服や着物の上からだったら、蒲団を巻いたり、なんとか細工は出来るけど、このとおり、種も仕掛けもない素裸なんですからネ、あんたの目で、よく確かめておいて下さいね。ええ、写真も何枚とってもいいわよ。どう、こんなポーズ。

カラー、持ってたの？ だったら次にはカラーで撮ってね。

それはそうと、二月号の記事ね、私が喋ったのと、ちょっと違うところがあったと思うんだけど、あれ、どうなってんの。少しは手直しはやるの？ 別にどうっていうことないんだけど、ちょっと聞いてみただけ。気にしないで。テープを開きながら、文章に書くのも厄介でしょうね。私のお喋りも、都合のわるいところは、少しは直すわけ？ そうでしょうね。こんなお喋りバアさんの、好き放題の世迷言など、そのまま、雑誌に載せられっこないわね。

こんなお腹になってしまったら、M男を責めるって話、あれも駄目になってしまったわね。もっとも、このでっかいお腹で顔の上でんと乗ったたら、潰れてしまうかもね。

なにしろ、二人分の重量だから、このポリウムは凄いいもんだよ。妊み女にいじめられたって、希望者はあるでしょうかね。

私しゃ、いいんですよ。身体の方は壮健でますます調子はいいいんですから、じゃんじゃん責めますよ。でも、相手のM男さんの方はどうなんでしょうかね。

今日あたり、その話を打ち合わせしようと思っていたんだって？ この私の大きなお腹を見て急に予定変更ってわけなの。だったら



折角のM男志願者の方には済まなかったってことになるわね。でも、赤ちゃんを産んでしまったら、又の機会もあるわ。

ええと、妊婦ヌードの方は、それだけでいいの？ 私しゃ、言ってお下さったら、どんなポーズでもとりますよ。まさか、アクロバットも出来やしませんけどもね。遠慮せずに、どしどし言ってお下さいましね。

では、いよいよ、縄で縛るの？
後手首は十分、縛ってお下さいよ。ええ、構

いませんわ、少々痛いことぐらいは我慢しますから。写真にはうつらなくなつたって、緩かったら、気分、出ませんもの。

お乳も大きいでしょう。心配なさんでもぎゅうぎゅう、縄をかけて下さいましね。ほら、締めつけたら、こんなに乳汁が出てくるでしょ。アラ、縄にしみ込んでゆきますわ。

お臍の下のところの格好がいいって、いーんですか。そんなとこ、あんまり押さえんといて、オシッコ出そうよ。そりゃ、近くなっ



てますよ。やはり膀胱を圧迫するからでしょうね。だから、あんたの好きな、アノ責めなんか、私、すぐ参ってしまうワヨ。まさか、あんなの、写真にはとれないでしょうけど、プレイだけなら、私しゃかまいませんわヨ。妊婦に対する羞恥責め、あの『花と蛇』には、とうとう出てきませんでしたけど、現実

に私の身体で試してみないこと？ 私、こんな責めを受けてみたかったんで、わざわざ妊娠したのかもしれないわね。だから、せいぜいハッスルして、私の全身がわなないて身ぶるいするような羞恥責めを加えて下さいネ。ええ、もうこんなに大きなお腹になったんだから、その方は大丈夫の筈よ。

あら、やっぱり、そんなとこ見たいの？ いやーン、そんなことしたら、燃えあがるじゃないの。エッチ。

プレイのために、わざわざ妊娠するって、素晴らしいじゃないの。好きな人の子を妊んでそして、妊婦責めのプレイを受けるって、前代未聞とっていいじゃないかしら。

凄く羞恥責めを受けてみたいワ。浣腸責めも面白いわね。A責めって、それ何？ はっきり説明してヨ。私しゃ、好奇心の強い女だから、なんでも経験してみたいのヨ。

妊娠八、九カ月の時の体位って、それなんなの？ あら、いやだ。そんなこと。でも、縄を使つての縛りを応用したら、変わった面白い体位も可能じゃないこと？

これから実験してみようっていうの？ いわよ。今日は最初から、そのつもりで来たんだから、テープとカメラで、存分に私をいじめて頂戴。でも、そんなパイプなんていやよ。わかってるでしょ、アノ方で——。

あら、察しがいいのネ。私、もう、こんなになってしまつて、羞かしいわ。

縄を解いて、また縛るの？

解いて縛って、また解いて——、てなこと言ってるうちに、あらあら、今度は脚を挙げ



るんですの。

痛い、痛い、肉を挟んでしまったじゃないの。ほら、縄と縄との間に。いいえ、脚の方じゃないのヨ、縄を止めた方の、腕のそこ。

脚まだ挙るけど、そのくらいにしといて。なんだか、脇腹のところが突っぱったみたいで変なのよ。ああ、それぐらいでいいわ。

さあ、早く撮って。そんなとこばかり狙わ

ないで、こう、脚の高く挙がったとこを全身で撮ってヨ。広角レンズを持ってこなかったって？ なんでもいいから、早くして。なんだ、またフィルムの入れ替え？ こんな晒しものにしておいて、じろじろと眺めないで、恥かしいじゃないのヨ。妊娠してると、そのとこも変化してるでしょ。

羞かしいけど、許してあげるわ。ゆっくり

と観察して。アップで撮ってもいいわ。あとで、私にも見せてね、お願い。

あーあ、これで何枚ぐらい撮った？

次はお腹の上に縄を掛けるっていうの？

構わないわよ、腹帯を締めるときにはね、力いっぱい、ぎゅうぎゅう締めつけるのヨ。だから、そんな縄なんて、平ちゃらだけど、でも、こんな、まんまるいボールのようなお腹に、うまく縄がとまりますでしょうかしら。

うまく、縄がずれないようにとまるんでしたら、私は掛けて下さっても構いませんのよ。

ほら、少し動いても、こんなに、上と下とへずれてしまうでしょ。空気をいっぱいに入れたフットボールみたいに堅いんヨ。さわってごらんさい。ねえ、ほんとでしょ。ここんところ、赤ちゃんの足がつっぱってるのかこんなんヨ。ええ、こんだけ、お腹が大きくなったら、そりゃ、しょっちゅう動いてるわよ。胎動って言うんですって——。

それはそうと、プレイをしたいために妊娠したって言ったけど、あれはまあ、冗談としても、なんだか、妊娠してからっていうものは、凄くいじめられたって気持ちしてきたのヨ。ええ、そこだったら、いくら、強く締めつけても、ずれないワ。もっと力いっぱい

縄を引いて頂戴。こんなポーズいいかしら。

あの、伊藤晴雨っていう人、臨月の奥さんを逆さ吊りにしたんだっていうじゃありませんか。私も、こんな大きなお腹をした体で、逆さ吊りでも、一本足吊りでもしてほしいわね。どう、やってみないこと。ええ、こんなに肥ってちゃ、駄目だって？ そうかしら、そりゃ、伊藤晴雨の奥さんは、すらりとした瘦型だけど、私じゃ、肥ってる分だけ、痛さを辛抱する覚悟は持ってるのヨ。

まさか、縄が切れるってなこと、ないですよネ。あら、そのかわりに、凄い羞恥責めにするってですか？ そりゃ、伊藤晴雨の時代には、大人のおもちゃ、なんていうものは、なかったでしょうネ。去年の十二月初め、白浜温泉へ行ったら、陳列に大人のおもちゃを並べた店が何軒もあったので見てきたワ。

誰と一緒にいったかって？ そんなこと、誰とだっていいじゃありませんか。スナックも止めたんだし、私、閑だったでしょ。だから、一人でぶらりっと、余りお腹も目立たないから、遊びに行っちゃってわけ。どなたか、こんな妊み女と一緒にでもいいって、いう方があったら、御一緒に下さったらよかったのに。そうなんです。折角、妊娠したんです



から、妊婦が大好きな人、紹介して下さったらね、嬉しいんですけど。妊娠なんて、若いうちに、そう何度も何度も経験できないし、それに、大きなパンパンのお腹をしてる時なんか、一カ月か一カ月半ぐらいですものネ。

お腹の大きな女を責めたいって、いう人も沢山あるんですよ。あんたなんか、余り興味なさそうな顔してるんだから、折角妊娠腹を見せてびっくりさせてやろうと思ってたのに、がっかりだわ。そう、妊娠したお腹に触るだけで感激する人もいるっていうの？ そんな

人に可愛がって貰ったら本望だわ。

三、四カ月の時と違って、八カ月も後半、九カ月に近くなったら安定してるから、少々セックスぐらい、平ちゃんな筈よ。ふん、そんな経験を話せてですか。それよりも、あんたが実験してみたら、どうなの？ 私しや、いつでもお相手してよ。あら、柄にもなく、尻込みするの。妊娠女には弱いって？ そりゃネ、体位を考えればいいのヨ。こんなに、お腹の上にフットボールを乗せておいて普通のことじゃ出来っこないわよネ。



据膳喰わぬは——って言うじゃない？ 普通だったら、こんな妊み女から誘いがかかるなんて、珍しいことじゃない、ねえ、そうでしょ。もう、写した？ だったら、早く縄を解いて、お願い。一ぷく吸いたいもん。

お酒の方はやめてんの。でも、煙草だけはやめられそうにないわ。とても辛抱できない

のヨ。さあ、こちらのお蒲団の方へいらっしゃいよ。ゆっくりお話しましょ。

加賀まりこ、私、大好きよ。私より大分、齢は上なのに、可愛い顔してるから若く見えるわネ。そうね、小柄で痩せてるから、その点、得してる感じネ。大きな目玉を、くりくりさせて、型破りなところも私、大好き。

やはり、相手は布施明でしょ。だって、彼は弁明もなにもしないもん、彼でしょ。間違いないワ。普通の芸人だったら、きっと始末してしまうでしょうに、加賀まりこは、えらいわネ。私、感心してしまった。

この頃、父^てなし子を生むのが、はやってるって？ そんな言い方、いけないわ。純粋なんですヨ、彼女たちは。こんな女の気持って普通の人には、わかって貰えないと思うわ。

そりゃね、正式に結婚して相手の男に百%責任をとらせるのは、女としては得よね。正式にとか、なんとか言ってるけど、結局は功利的なのね。だから、私なんか、世間的に言って、落第か失格かの、どちらかだわ。

まあ、そんな堅苦しいお話は、横へのけといてと、ええと、なんだっけ、今、話してたのは？ そうそう、伊藤晴雨の吊りの話、いや、大人のおもちゃだったカナ？

ずっと前の奇譚クラブに妊婦の切腹ってのが載ってたわネ。私もね、この妊娠した大きなお腹を切ってみたいという気がするときがあるの。浣腸が大好きな女だったり、切腹してみたい女だったり、私って変な女でしょ。

お腹の中の子供の父親が本当は誰なのかって、主人に疑われた若い妻が、それだったら

臨月のお腹を切り裂いて、私の潔白を見てもらうんだと、主人の前で妊娠したお腹を短刀で切る——というのなんか、どう?

それとも、妊婦の浣腸って、興味あるの? そりゃ、お産の前には浣腸受けるけど、やっぱり、浣腸もプレイじゃないと面白味はないわね。あんまり凄い浣腸を繰り返したんで、赤ちゃんも一緒に出てきたっていうんじゃ、困りますけどもネ。こう、お腹の中のものをすっきり出してしまうっていうの。浣腸で強制的に出されるだけに、凄く興味が持てるのヨ。下剤かなんかだったら、嫌なんだけど、お尻に浣腸液を入れられるのは、快感だね。

お願いばかりだけど、次の時には、して頂戴ね。浣腸もSMの中に入るのかしら。

疲れないかって? 私は平気。妊娠したからって、私は変わらないワ。

スナックのお店を売ったのは、お腹が大きくなったからだって言うんですか。そりゃ、こんな大きなお腹して、まさかお店へも出られやしないけど、あれとこれとは別よ。いい買い手もついたら、ここらあたりが見切りどきだと思ったのよ。今じゃ、お店を売ったお金の利子で、のんびりと優雅な生活を楽しんでいるという、結構な御身分なのよ。でも、三月



に赤ちゃんが産まれたら、のんびりもしておれないわね。それにネ、私、上の子のときもそうだったんだけど、予定日より二十日も早かったのよ。だから、ひよっとしたら、二月に出産っていうこともあり得るわ。

そしたらね、写真を撮るのも、あと一月あまりっていうことになるわ。せいぜい、今の

うちに私の大きなお腹を撮っておくことね。さあ、早く縛って頂戴ナ。

アラ、この台の上に坐るの? なんだか、今までお茶碗を置いていたお膳の上に、お尻を載せるのなんて、抵抗感じるわネ。そんな考えは古いつて。でも、一度でも家庭を持った女はやはり、なんとなく、そんなところがあ

るのね。その抵抗を感じるところを押して、でんと素肌のお尻を載せるのも面白いじゃないの。で、こんなポーズ？ 自由に動いているところを連続でシャッターを切るって？

そんなに言われると、反って動けないものネ。お腹が大きくなって、私も動作が、にぶったかす。

膝頭を縛って、両側へ引くって言うの？

これじゃ、開股縛りってわけネ。前をこんなに晒してかまわないの。なにかでかくしておいてよ。カメラを向けられたら羞かしいじゃないの。そりゃ、私が縄で縛られるのが好きじゃなかったら、いいのよ。だけど、私、縛られるのが好きでしょ。だから、興奮しちゃって、羞かしいのよ。わかるでしょ、この私の気持——。

ええ、不思議なのよ。うんと凄く興奮したら、また羞かしくないの。中途半端は駄目。唄の文句じゃないけど、中途半端は止めてっていう心境ね。そりゃね、時と場合によっちゃ、ポルノだって見せちゃうわ。

膝頭のところの縄、身を挟んでいないかしらね。痛いよ。前に膝の裏でしごかれて皮が破れて血がにじんでたけど、家へ帰ってからわかったんよ。そのときは、そうわからなかつたの。ええそれで結構よ。

海老責め？ そりゃ、無理よ。こんな大きなお腹で、どうして、そんな事出来るの。

そんなことしたら赤ちゃんが潰れちゃうわ。逆海老だったら出来るかもね。でも、決して、いい格好じゃないわね。

なんだって？ 私の鼻の格好が素晴らしいって言うファンがあるって言うの。そう、こうツンと鼻の頭が上を向いてるからでしょ。別に私しゃ、高慢チキじゃないですわよ。あまり、お淑かでもないけど鼻の格好だけで、そんなこと言わんといて——。

鼻責めのモデルになれって？ そりゃ、なんでもなりますよ。なにしろSMの大好きな私ですから、SMに関係することだったら、いや、奇譚クラブに関係することだったら、どんどん協力しますわ。写真にはならないだろうけど



前に喋ったように、若い女の子も好きだからまた、お喋りだけだったら、私の経験を話しても、いいわ。

私の住居ってですか？ 今はアパートなんだけど、赤ちゃんが産まれたら、母子三人でゆっくり暮せる庭付きの平家を見つけてあるから、そこへ移り住む予定をしてるの。結婚

は当分する気はないから、SでもMでも、奇譚クラブのためには、何かのお役に立ちたいと思ってるのよ。

それはそうと、私にいじめられたいっていうM男の志願者っていうのは、何人ぐらい集まってるの？

私はネ、自分が責められたいって思ってる

ことを、思いきりM男の体に加えてやりたいと思ってるにしてみんなだけ、妊娠で、しばらくは、お預けね。

男と女の身体の構造は違うけど、本質的には、Mの望んでることに、そう変わりはない筈よ。

だから、相当きつい責めになると思ったんだけど。そうなの、男性に対する羞恥責め、これは考えただけでも、ぞくぞくする程、面白そうよ。

お喋りに夢中になっているうちに食卓の上での、妊婦の料理は終わったわね。テーブルの上、濡れたタオルで、よく拭いておかないと、大分、汚してしまったかもよ。

さあ、いよいよ、これから、下へおりてから、本格的な羞恥責めにしてくれる？

しばらくの間、テープもカメラもお休みを頂いて私は楽しませていただきましょうかしら。

そんなこと言わないで、こちらへいらっしやいよ。

カメラに写らないんだから、この柔らかい腰紐を使って。じゃ、テープも止めておいて——と。

——（おわり）——



M男の切願

福井桃子女王様に捧ぐ

西村六夫

突然御便りを差上げます御無礼を御許し下さい。マダム美美代様の告白、毎月拝見致して居りますが、この度のM男を責めて見たいとの御発言は、私共M族にとって正に晴天のへきれきでありました。

最近、川野香代女王様の御登場がありましたとは謂えサジスチンの少ない事を歎いて居りましたが、貴女様の御言葉は何物にも勝る福音と思われました。何卒、今後サジスチンとしての告白を発表して下さいます様、偏えにお願い申し上げます。

斯く云う私も、そのM男の一人で、奇クを読み始めてから十数年になります。勿論社会人としての良識と矜持は充分、弁えて居るつもりで居り、温厚篤実の紳士と自認しては居るものの、健康と誠実以外、何の取柄もない平凡なこの私を、若し御傍に召し使って戴けますならば、誠心誠意、御奉仕申し上げたいと思つて居ります。

私の最も得意の馬や犬、肩車等は、若い人

にも負けないスタミナと頑丈さを待って居り又この顔を椅子代りに腰かけて頂いても、或は舌の御奉仕に致しましても、今迄御仕え申し上げたどの女王様方も、お呆れになる位の耐久力を持って居ります。人間便器の経験もありますので、是非一度、御使用の榮に浴したいと思つて居ります。

私の今迄のプレー経験から、何れか一方が嫌気がさした場合其の後の交際を打切ること。嫌なプレーは強要しないこと。危険の虞のあるプレーは避けること等を鉄則として今迄一度もトラブル等も無く、御仕えした女王様方、何れも御結婚等の已むを得ない事情で中断になる迄、大変快く、御仕えさせて頂きましたので、貴女様も屹度、御満足頂けるものと思ひます。

次に、私が日頃、如何に模範的なドレイになろうとして居るかを、述べて見ようと思ひます。私がMとして最高の憧れは手足の自由を奪われた上、若い美女がスカートを、ぐい

と捲くり、どっしりとヒップを下ろして顔面騎乗の形になった時です。ドレイは呼吸が困難になり、もがけばもがく程、苦しめば苦しむ程、女王様の快感を助長することであります。然し性交の前技として八〇%以上が行なうと云われるクニリングスやシックスナインも、形の上では、似て居るのです。Mプレイ(女性の側からSプレイ)が根本的に異なるのは、自由を奪われた上で奉仕を強制され、奉仕者の苦痛と被奉仕者の快楽が、表裏の関係にある処にあるのでは無いでしょうか。

私はドレイが女王様に緊縛鞭打ち等、ああして下さい、こうして下さいと要請するのは真のMプレイでは無く、あくまで女王様の御意のままであり、普通に考えられるドレイの苦痛があるからMプレイと云うのでは無く、女王様の快楽のためにドレイが使用されるから、Mプレイだと思ひます。

女王様がドレイの存在も忘却して、悦楽の頂点にあるとき、ドレイは苦痛のどん底にあつても尚女王様の悦楽を我が悦楽として、忘我の境に浸り、専心御奉仕に努めるのが、ドレイの使用であり、性であり、悦楽と苦痛は矛盾の様でありながら、そうで無い理由ドレイとは云つても生身の体、矢張り苦痛は苦痛の筈ですが、それを快楽と感ずるのは、女王様のため、身を捧げて居るからに他なりません。

ナミオM画廊 …… 春川ナミオ
——『ホラ靴下だよ』——



昔の武士が主君のため身命を賭し、又戦時中の食糧難時代、母親が餓えても尚、子供に先ず喰べさせた気持に、幾分か似て居ると云えましょう。ですから、女王様はドレイに対して些かなりとも、憐れと云う思召しがあります。只々快楽を追求になるのが、何よりもドレイの喜ぶことなのです。それがたとえ、どのような苦しい事でありましようともドレイにとって何物にも勝る快楽なのであります。

ドレイが人間だと思っではなりません。ドレイの望んで居る様に、女王様の快楽のため

に存在する器物であり、家畜であるとお考え頂ければ宜いのです。器物や家畜に対して固より羞恥心や遠慮等、要る筈もなく、存分に快楽を御追求下さい。特に、舌人形や便器程ドレイの人間性を極端に否定するプレーは、無いでしょう。

プレーに当たりドレイの誓いとして先ず便器プレーを行なうことがドレイに対して一挙に器物にまで落ちこむ身の程を知らしめ、又女王様との身分の隔りを感じさせて、其の後のプレーを円滑に進行させるためにも、最も適当なプレーでは無かろうかと思ひます。又

熟練した便器は一滴も洩らさず吸いとりますから、寒夜、態々トイレにお立ちになる不便さも無く、他の器具の様な、ひやりとする様な冷たい不快感もありませんので是非、座右に置いて御利用になる事をお奨め致します。

ドレイにとりましても世人が考える程、不潔なものではなく、成分的にも、汗や涙と殆ど同じく、古来若い女性の体内を通過して来た御神水は若返りの妙薬と云われて居ります。

化学的にも若い女性の尿中には、良質の女性ホルモンの他にも数多くの有効成分が含まれて居る事が既に証明されて、化学剤には望めぬ効果の高さ、吸収の良さを買われ、又近時制ガン剤としても注目される様になりました。健康者の尿中には、細菌其の他の有毒成分も皆無と言われて居りますから、女王様に便器として使って頂く事は、何物にもまして感謝申し上げねばなりません。Mプレーの極致、人間便器として御使用頂いた時、今迄の苦痛も屈辱も忘れて、ドレイとしての幸福感を、しみじみ味わうことでしょう。

いろいろ述べましたが、もとよりドレイにはプレーに就いて注文を付ける等と云う大それた気持は毛頭、御座居ません。只々女王様の御意のまま、悦楽の赴くままに、器物や家畜を使用なさる様な御気持で、是非共、一度御使用の榮を賜る様、切に切に、お願い申し上げます。



第四十三回

生 贄 (いけにえ)

屈従を誓ったジョセフィーヌは、四肢の自由を取り戻した。もう北の対の鉄檻に戻る必要はないであろう。その代り、彼女が必死で守ってきた誇りは無残に踏みにじられてしまったのである。

ジョセフィーヌは有明と一緒に入浴しなければならなかった。

そして、共に寝室に入る。惨めな心には、豪華な調度も意識する余裕はなかった。いい調子に弄ばれ、玩具にされた挙句、シーツを

紅に染めてジョセフィーヌは悶絶した。学問一筋で男を知らなかった彼女も、遂にその初花を有明によって散らしたのである。

これだけのことをしたのだから、きっとマリーに会わせて貰えると思ったジョセフィーヌの考えは、あまりにも浅はかであった。有明は、次の機会まで待てと言ったきり、エステルの館を立ち去ってしまったからである。何の保証も与えられないまま、自らの払った犠牲の、あまりに大きかったのを悔みながら、彼女は西の対に移された。

それも、今では二度と帰りたくない、あのおぞましい北の対、もといた部屋の壁一つ隣

に妹マリーが幽囚の身になっているとは露知らなかったのであった。

ジョセフィーヌを自分の女にしてしまった翌日、有明は佐瀬直美のために新局を作った。やる儀式を、とり行なっていた。

これこそ、この国での最高の儀式だった。天位、地位の所謂「貴妃」たちには列座を必要とする儀式はない。したがって、上臈に指名される儀式は、人位での最高の式典になるわけである。

高官が一品の爵位を授与されることを意味するし、余人を交えず有明が親しく執行する

ものでもあるから、これを「親授式」と呼び
被官者は「親授官」と称される。

これは秘儀だから、特別に設けられた一室
がある。

階段下のフロア、ご承知の通り一般の通用
口は向かって右側になっているけれども、左
側は不浄口といって、罪人や死人、そして畜
位、物位の出入口とされている。不浄口の扉
を入れて真直ぐ、奥まった一画が親授室であ
った。有明たちは特別のリフトで降りる。

凡そ二十畳ほどあろうか。中世めいた石

前号まで『有明を絶対君主と仰ぐ秘密
の裸女王国の物語り。世界各地から誘拐
されてきた美女達は五段七階級に区別さ
れ悉く有明に隷従畜従をしなければなら
ない。しかも、その日本人選民主義によ
って高位者の殆どは日本人で占められて
いるので、外国人は如何に材質が優れて
いても仲々自由な地位に昇れないのだ。
女医ジョセフィーヌも、たった一人の妹
マリーまで囚れては、泣く泣く屈服する
他はなかった。それでも、エステル館の
住人だったのがまだしもの幸せだった。
お手付に昇進した佐瀬直美のために供せ
られる犠牲は？

壁、石畳の部屋で、その中央、六畳ぐらゐの
空間に皮製のテントが張ってあった。テント
は沢山の皮を何枚もハぎ合わせて作ったもの
で、一枚一枚、様々の絵柄がついていた。や
や褐色がかった地色を仔細に見ると、それが
人間の皮膚を鞣したものであることが分かる
であろう。もっと恐ろしいことは、それらの
絵柄は皮を剥いでから画いたものでなく、生
きているうちに入墨されたものだということ
であった。これだけのテントを作るために何
と百十二名分の女体を要したという。

有明の大量、美女捕獲作戦では、必ずしも
五段七階級に当てはまる美女ばかり集めるわ
けに行かないことが多い。副産物として、格
外の女達も相当、入ってくる。これら格外に
処理される連中の運命は正にアウシュウィツ
ツ的だといえよう。彼女等の用途は生体実験
用、狩猟用などに使われて、カンタンに命を
奪われてしまう。そして、その肉は食用に、
皮は、こうした特殊調度や家具の材料に使わ
れるのである。とに角、色々な実例が後で度
々出てくると思うから、記憶に留めておいて
いただきたい。

親授式にはイケニエの命が捧げられる。こ

のイケニエも死刑を宣告された罪人とか、そ
れがないときは先程の格外女から、えらばれ
ることになる。

犠牲（イケニエ）に供されることが決まる
と、背中に勲記が入墨される。佐瀬直美の場
合を例にとれば、彼女の名前を彫り、彼女を
一品の上臈として任命するという文章が彫り
込まれるわけである。哀れな犠牲者は、すで
に四肢を一本に括られ、テントの中に縛がさ
れていた。彼女等の階級には、後手縛りを受
ける資格さえないのである。

定刻になると、有明と貴和、そして当の佐
瀬直美、そして特に部屋親だった夕霧の局が
揃ってリフトを降りた。

待っていた数名のアマゾン将校団が伏礼し
て出迎える中を四人はテントを、くぐる。

アマゾン達は、テントの周囲に佇立して警
衛にあたる。

テントは、ヤツと頭がスレスレになるぐら
いの高さしかなかった。皮は内側が表、外側
が裏になっている。にぶい蠟燭の光しかない
テントの内側は上下四方を人の皮で囲まれて
何か、百十二名の女たちの怨念が渦巻いてい
るようにさえ、思われるのであった。

テントの床、中央は一メートル四方に石畳が、えぐってあって、深さ六十センチほどの水槽になっていた。この中に人が入って正座すると、胸、又は肩から上が出るような深さである。その下手の縁に大きなマナ板が、しつらえてあって、様々の副木や鉄金具が、それにとりつけられている。

佐瀬直美が命じられたことは、先ず、そのマナ板に、イケニエを括りつけることであつた。

彼女の手で滑車が廻されると、ロープに曳かれた白い女体はズルズルと石の床をずって次第にマナ板に近づいて行つた。牛や馬だつて屠殺場に近づけば自らの運命を予感するかのうに鳴いて抵抗するものである。まして人間が、おとなしくしている筈がない。白い肉塊は生命の最後の輝きを不遜者に見せつけようとでもするかのようにもがき、ここを限りの哀願と悲鳴を繰返すのであつた。皮肉なことにイケニエは、この最期の時になって、猿轡を外され、ものを言えるようになっていたのだつた。しかし、どんなに叫んでも、その母国語がロシア語では誰に通じるものでもない。

佐瀬直美は、あらかじめ教えられていた通

り、テキパキと緊縛を進めて行く。まず、マナ板に装着してある皮ベルトを使ってスラブ女の胴、といつても胸乳のすぐ下のあたりをシッカリと板に結びつけた。次に、手錠をロープから外して頭越しに引いて、水槽の中にある鉄環に縛りつけた。上体が反って頭部が水槽の縁に陥ち込みそうになった。マナ板のその部分が丸く抉ってあつたからでもある。

こうなつては、如何に下半身が自由になつたとしても、どうなるものではない。果敢ない奮斗の後、イケニエの両足は股を一ぱいに開き、水槽の中にデングリ返しでもしようとするような姿勢で繋ぎとめられてしまつた。いいかえれば、秘処を高々と振りあげた形で固定されたことになる。

さすがにもう思い諦めたものであろうか。次第に叫喚は弱々しく、ただ自らの運命の辛さを呪うかのように愁々として哭くばかりである。

有明と貴和はイケニエとは反対の縁近く、高価な黒貂の裘（かわごろも）を敷いた上に並んで胡坐した。夕霧の局と膝を並べて平伏していた佐瀬直美がこるようにして、水槽の中に入った。正座すると、なみなみと湛えら

れた清水は丁度、胸の上まであつた。

有明と貴和に向かつて合掌した佐瀬直美の姿は、バプチストの洗礼を連想させた。

彼女は、しかしシッカリした声音で宣誓をはじめ。いわゆる「銀の誓い」である。

「わたくし、肉体番号C—〇一三号は、心からの歓びと感謝とをもって、わたくしのすべてを、とるに足りない肉体と貧しい精神でしかございませんが、そのすべてをマスターのおん許にお捧げいたしております。わたくしの育ちました地上の善悪のはからいをも超えて、今では楽しみも苦しみも、お与え下さいます。恐くが、わたくしにふさわしいものでございます。お恵みによりまして、過分にも人の位をお授け下さいましたが、それこそ限らない、ご恩寵の千万分の一でも、お報い出来る機会をお与え下さったことでございまして責任の重大さをヒシヒシと感じております。身にあまる光栄は、わたくしの価ではなく、わたくしの本質は最低の奴隷、いやしむべきペットの一人にしかすぎません。しかし、今よりは『三つの誓い』を、さらにさらに勤修し、人の位として、かくあるべしと定められましたオキテを守り、命ある限り、忠誠と勇気とを奮い立てて、ご奉仕させていただきます。

とを、厳肅にお誓い申し上げます」

暗誦しながら、佐瀬直美は滂沱とした涙を流しつづけていた。限らない屈辱とそれを超越する努力の積み重ねで、彼女の価値観、人生観は今や心の底から、この国のものとなってしまうていた。その自覚を前提として、今や「位人臣をきわめ」ようとしている現在には、何とも例えようもない絶頂感だったのである。

秘儀は滞りなく進行してゆく。夕霧の局がつけ木を磨り合わせて作った火が、有明の手に持つ百奴蠟燭にうつされた。綺麗に絵付けされた、華やかなものである。それを親授された佐瀬直美は、ゆっくりと向きをかえた。彼女の背中がシルエットになって、その向こうに照らし出されたイケニエの肌の白さが一層、クッキリと覗かれる。

「バリート（痛い）！」

イケニエが、固定された四肢を、振りもぎとろうとでもするかのように、全身をひきつらせて絶叫した。

蠟燭の輝きは佐瀬直美の手から離れた。自



らの肉体を燭台と化したイケニエは、蠟涙の滴る円筒を秘部の深奥に突き刺されて、苦痛

と屈辱に全身をブルブル慄わせるばかりだった。それにつれて炎も揺れるのであるうか、逆光に照らし出された佐瀬直美の顔も、ゆらゆらと動くように見える。

夕霧の局がおそろおそろ、消毒された注射器を貴和に差し出した。貴和の手で有明の左腕から約1ccの血が吸い出された。それが再び夕霧の局に戻されると、彼女は佐瀬直美の上膊から同じポンプの中に4ccを採血した。二人の血が混ぜ合わされて、5ccとなったのである。これは電気入墨針に移し変えられ、先ず有明が立ち上がって、蠟燭の直下で、もう熱い蠟の雫に焼かれ始めている白い双丘に顔を近づけるのであった。

ふたたび魂ぎるような悲鳴が、押しつぶされた下の方から聞こえた。

有明のと、佐瀬のと混合した血液が電気仕掛けで小刻みに振動する針の動きにつれて少量ずつイケニエの皮下に注ぎ込まれてゆく。ふっくらと盛りあがった腰のあたり、丁度、背中一ぱいに彫り込まれた見事な有明の紋章と、これをC—O—一三号に親授する旨を記した勅記の下にあたる位置に彼のイニシアルT・Aが赤黒い血の色で刺青されたのである。

余った血液は純金の盃に戻され、葡萄酒でうすめて、当事者四人が三口ずつススった。さらに、その残りをイケニエの鼻をつまんで無理矢理に飲み込ませてしまった。

イケニエに引導を渡すことを命じられる。佐瀬直美が逆さまになったスラブ女の顔を近々と見下ろしながら言った。

「わたくしが、この国で最高の栄爵を賜わる証しとして、わたくしは、あなたの命をもらいます。人の命は、何ものにも変え難い貴重なものです。それだけに、あなたを犠牲にする、わたくしの責任は重大になります。わたくしは先程お誓い申上げた通り、一生懸命、努力精進して、あなたの命の値に恥じないようマスターの立派な、はしめになる決心です。あなたに靈魂があるものならば、どうか私の行先を見守って下さい」

ご丁寧にもロシヤ語の訳がテープに吹き込まれてあって、ゆっくりとイケニエの耳に繰り返されたから、女の狂乱は、ますます募るばかりだった。あるいは恨み、あるいは歎き切々として哀願する言葉は解らなくても、心は誰の胸にも迫るものがあった。

「さ、早く！」

夕霧の局にうながされて、佐瀬直美はハッ

としたように大きな肉切包丁を手にとった。

秘儀親授

血の匂いが、テントのなかにムンムンしていた。

「よくやった、よくやった」

有明のねぎらいの声も聞こえないかのよう血まみれになった佐瀬直美はボー然として突立っていた。ハキ気がしても昨日から断食しているので何も出ない。たった今、スラブ女の首を打ち落とした感触が生々しく残っていた。

はげしく首を振って刃を避けようとするので仲々厄介だった。頭髮でもあれば、それを掴んで押えつけられるのだが、ツルツル坊主の畜位物位では、つかまえるところもない。額を押えようとすれば、あやうく噛みつかれそうになった。とに角、死にもの狂いなのである。それでも無理に切ろうとして二、三回切りつける。パッと鮮血が散って、イケニエは、いよいよ猛り狂うのであった。

「血管を切らなくっちゃあ……」

見かねたように夕霧の局が声をかけた。グイと突き刺した何回目かの試みが、やっ

と頸動脈を切ったらしい。さっきより一層、鮮烈な色をした動脈血がドッと噴き出して来た。

一瞬、イケニエはおとなしくなった。うつろに開いたまなざしが、何か陶醉したようなウットリした表情を示すようになる。

流れ出す血は全部、水槽の中に流れ込んでゆく。返り血をかぶった佐瀬直美の白磁の肌は、サイケなボディペインティングをしたように見えた。

イケニエが又、はげしく暴れだした。断末魔の苦悶だった。吊りあがった目が、佐瀬直美を、ひとと、にらみつけていた。その凄まじさに彼女は思わず逃げ出したいと思った。しかし、金縛りにあったように動けない。イケニエの顔近く、深々と身体を血の水に漬けて、ただガクガク慄えていた。一声高く、何か叫んだかと思うと、イケニエは大量の血のりを口から噴き出してグッタリと、こと切れしてしまった。まともにそれを受けた佐瀬直美は避けることも出来ず、顔から胸にベッタリくっついたヌルヌルを、あわてて拭おうとする手もマッ赤だった。どこもかしこも、彼女の周囲は血、又、血だった。

「目に血が。アッ、何か拭くものを……」

とぎれとぎれに、うったえるのは、血が目に入ってしまったらしい。

「しっかりするのよッ」

夕霧の局が叱咤した。ここで甘い言葉をかけたら、すべてがブチ壊しになってしまう。

「拭くものはイケニエの胸にあるわ。首はアト廻しにして二つ切りとってしまいなさい」

鋭いナイフが手渡される。それでイケニエの乳房を、そぎとれというのだ。

双の掌でも蔽い切れないように大きなスラブ女のそれは、まだやわらかく、あたたかだった。手さぐりのあぶなっかしさを見かねた夕霧の局が、手を添えて助けてやった。

「立ち上がりなさい」

やっと許された佐瀬直美は、ザブザブと紅い水をかきわけるようにして腰から上を水面から出すことができた。両手に削ぎとった乳房をつかんでいる。全身が凍ってしまったように冷たく、それでいて齒の根も合わないように慄えが止まらない。

夕霧の局も同じように水に入り、受けとった乳房をスポンジのように使って、佐瀬直美の裸身を、まんべんなく拭いてゆく。そうし

ながら、例の三つの誓いを二人して交互に三唱するのである。

「身も心も、わたくしのすべてを、マスターにお捧げいたします」(忠誠隷従)

「身も心も、精根をつくして、マスターにお仕えいたします」(精励奉仕)

「身も心も、清潔に、美と健康を保ちます」(保美保健)

美女二人が、これも美しい声で唱える声はテント一ぱいに、こだまし、おどろおどろした雰囲気とは、ひどく裏腹に、何かこの世のものではないように、すがすがしかった。

たしかに、それは人の魂を凍らせるような出来事だった。決して馴れることの出来ない見物だった。異常な作業は、異常な条件を必要としていた。ここにして、はじめて可能となる条件だった。そして、「果たさねばならぬ」関門だった。白兵戦で兵隊は無我夢中で人を刺殺するだろう。佐瀬直美も、似通った条件に支配されていた。

殺人の罪悪感、異常な条件の下では相当稀薄になっている。それよりも、不快感の方が強かった。有明も貴和も、そして夕霧の局だってハキ氣がするのを、こらえていたのである。まして、生まれてはじめて「人を殺した」佐瀬直美は完全に平衡を喪っていたと言っても、よいであろう。それでも、どうやら耐えられるのは、この国へ来てからズツと続いてきた様々の調教馴致によって洗脳され、コペルニクスのともいうべき価値感の転回があったからこそであろう。さもないれば、彼女自身が自殺していたかも知れない。

そして、このように非情な儀式を敢て強要する有明の意図の中に、自分の寵愛する女たちを、地上的な尺度における殺人犯に仕立てることに、地上に帰りたいという心情を断ち切り、一層、連帯意識を強めさせる効果を期待していることは明白だったのである

「首を落とすのを忘れている」

有明に指摘されて、二人はハッと顔色を変えた。血が目に入ったからというので、式の順序が変わってしまったのである。

「申しわけございません。私の失念でございました」

水の中で夕霧の局が詫びた。佐瀬直美もオロオロして、有明にあやまるのだった。式を滞りなく運ばなかったことは、罰せらるべき失態だった。如何なる罰を加えられても、仕

方のないことだった。心細気に有明の裁断を待つ二人に対して、今宵の有明はバカに寛大だった。

「よい、よい。許してやる。さ、早く首を切ってしまいなさい」

ホッと救われたように二人は後ろに向き直った。夕霧の局がグラグラするイケニエの頭を支え、肉切包丁を持ち直した佐瀬直美が首輪のあたりをゴリゴリと切りはじめる。殆どの血液は、すでに流れ出していたから、黒ずんだ血がトロトロと流れ出すばかりで、噴き出すような心配はなかったが、女の手では存外、厄介な作業だった。骨が、なかなか切れないのである。二回、三回と包丁をたたきつけて、ヤツと、わかれた。

切り離れた生首は無念の形相で白目を剥いていた。その血まみれの唇に接吻しなければならぬ。佐瀬直美はサロメのように重い生首を両手に捧げて、ソツと口づけをした。生気を失った唇は、ソツとする程つめたかった。



ポー然と突立ったままだった佐瀬直美は夕霧の局に小突かれてハッとわれに返った。

いつの間にか、銀製の首台に安置されたイケニエの首。その坊主頭に佐瀬直美が右手をのせる。その上に、貴和が同じく右手を重ねた。最後に有明の厚い手のひらが、それを蔽いかくした。

「今からは私の女だ。末長く可愛がってやるぞ。嫉妬せず、よく分を守り、仲睦じく楽し

く暮すがよい」

有明の声が心の底までシミ透る様だった。

佐瀬直美は大声で泣いた。ここまで来る道のりは、それ程遠く、それ程険しかった。またそれ程、価値のあることであった。

彼女は勝った。それは、この国での絶対的な地位に到達したことを意味する。

部屋親の夕霧の局も、脇にひかえて、ただもらい泣きをしていた。しかし、この涙が、

いくらか苦味を帯びているのを否定することは出来ないであろう。自分の部屋子であったとはいえ、今からは佐瀬直美は独立した局を持つことになる。有明との関係においては、ライバルが出現したと云っていい。嫉妬は、この国での厳しい法度であったけれども、嫉妬の情を持たないのは、愛情を持たないのもひとしいのだから、むしろ、嫉妬の心をかくし、おさえて仲よくすることが要求されるとも言えるであろう。

有明が続けて言った。

「おまえに新局をあたえよう。若紫の局と名のつたらしい。それから、夕霧、おまえは年寄となった。おまえの忠勤をめめて、五十万スイスフラン（約四千万円）を積み立てておく」

「あ、あ、ありがとうございます」
二人は異口同音に叫んだ。

ところが、ここで大変なハプニングが起ってしまった。

今や屍体と化したイケニエが、首と乳房を切られたために胴体がスポッとベルトを抜けて、今まで高々と盛り上がっていた尻の方から、水槽の中にノメリ込んで来たのである。

有明の方に向いていた佐瀬直美の背中に蛆涙を振り撒きながら炎がノシかかってきた。

「キヤーツ」

佐瀬直美が、とび上がったのも、当然だった。そして水から出てはいけないという規則も何のその、目の前にいる有明にしがみついたのである。

驚いたのは夕霧の局だった。これは、とんでもなく不謹慎な行為だった。まして血まみれの身体でしがみついたのだから、有明にも血がついてしまったのだ。

「いけない。水の中から出てはいけない」

上ずった声で夕霧が叫んでも、それはもう佐瀬直美の耳には入らなかった。彼女は、もう全身をガタガタさせて、

「こわい、こわいッ。お、おたすけ……」

ピシッと音がして、佐瀬直美の裸身が横にスツとんでしまった。

「無礼者！」

有明が一喝した。

それは一種のショック療法だった。こんなとき、温情をかけたのでは、それこそ気が狂ってしまう。

佐瀬直美は、ハッと気を取り戻した。そして、自分の犯した行為が、どんなに大それたことを覚悟して、身をまるくして平伏するのだった。

首台はひっくり返されて、イケニエの首は水の中に、とび込んでしまっている。その水の中に、刺青された背中を半ば見せて、屍体がプカプカ浮いている。腰から下は真赤な水の下にかくれて見えないけれど、さしこまれた蛆燭の火は消えて、室内は薄暗くなっていた。

貴和の機転で、間接照明のスイッチが入り

室内はパッと明るくなった。

いつの間にか、貴和は何枚かのタオルを持ち込んでいた。隣の浴室へ行って、とってきただけらしい。

そのタオルで、有明の身体についた血を、ていねいに拭きとって行った。

そうしながら小声で、

「許しておあげなさいまし。とっさにマスタ―にしがみつけるなんて、かえって愛の証しを立てたようなものではございませんか」

貴和の声は、有明にとって、いつも鎮静剤のような効果を発揮する。

ここでも、有明の瞋りは、みるみる薄れていった。

苦笑しながら、

「非常のとき、私にシガみついたのは、それだけ私を頼りにしている証拠だと思って、今度だけは許してやる。しかし、これに甘えるんじゃないぞ」

額を石畳に、ぶつけるようにしながら、佐瀬直美は、ただ、

「もうしわけございません。もうしわけございません」

と繰り返すだけであった。

——（未完）——

— S M カメラ・ハント —

理 倫 の 楽 悦

— 喜 多 知 子 の 巻 —

隆 村 辻

昭和四十六年十月号の、読者通信欄（二五四頁）に、左記の女性の一文が掲載されているが、改めてバックナンバーを開いていただく煩雑さを避けて全文を紹介いたします。

（私は、三十才になる平凡な主婦でございます。本誌を切めて手に致しましたのは、今から二年前になります。二人のちょっとしたことから、いつの間にか歯車が噛み合わず、そうなると思議なもので、お互いに意地を張り通して今日まで関係もなく過ごして参りました。人様には自慢出来るお話でもございません。私は本誌にのっている様な、美しいモデルさんとは程遠く、どちらかといえば、肥り気味の女でございます。誌上にのっておりました五月号の渡辺忠義様、七月号の責大造様のような方にひかれます。S男性の方からのお呼びかけをお待ちします。

愛知県 喜多知子

数ある通信記事の中から、特にこの記事を抽出したのは外でもない。彼女——喜多知子さんが、思いがけなくも編集部気付で私宛に、カメラ・ハント

志望の胸の裡を、綿々と訴えてこられたからである。

次は、私個人への彼女の手紙（原文の俚）『辻村隆様——突然のお呼びかけをお許し下さい。私は昨年十月号の読者通信欄に拙ない便りをのせていただいた主婦でございます。

私のあらましにつきましては、改めて説明するまでもなく、あの通信欄に発表した通りでございますが、自分の気持を押えることができず、S男性の皆様にお呼びかけしておきながら、いざ御熱心なS男性の方々からデー卜のお申込みをいただくと、心臆して、お目にかかるのが怖くなって参ったのでございます。その最も大きな原因は、誌上ではあの様に、お名前（おそらく匿名でしょうが）を伺っても、お顔ひとつ拝見したこともございませんし、もしお目にかかってお断わりするのにも悪く、且はそれを理由に、何らかのつながりができて、将来に困ることが起こりはしないかと恐れたからでございます。早速、十二月号で、お呼びかけに応じて下さいました静岡の赤木俊夫様、浜松の責苦与之助様には本当に申しわけなかったと思っております。そうした不安にさいなまれる反面、私の心理的な被虐性は高まるばかりでございます。

夫とのその後の生活も、私のヘンな意地と我
儘から、次第に溝は深まる一方で、こうした
生活を続けてゆくと、近い将来、破滅がくる
ように思われるのでございます。

判っきり申しあげて、私が勝手につくった
欲求不満だと分かっているのですが、この、人にもいえぬ悩みを解決していただ
けるのは、辻村様以外にはおられないような、
思いつめた気持が、日増しに強くなって参る
のでございます。その一番の理由は、辻村様
の正体が最もはっきりしておられ、心の奥底
にひそむ本能を、優しく理解なさって下さる
方と信じての事です。一方的な解釈を何卒お



ゆるし下さいませ。

私のような、肥り気味の平凡きわまる主婦
では、貴男様のように、美しい人々ばかりハ
ントしていらっしゃる方には、問題にもして
いただけないと存じますが、私の哀れな心を
お汲み取り下さいまして、一度お目もじ叶わ
ないでしょうか。

辻村様が、この世の中で最も安心出来る理
解者と独りぎめして、あつかましくもお願い
のお便りさし上げました次第でございます。
誠に不本意ではございますが、夫の手前、
直接、私宛にお返事はいただけませんので、
親しい安心出来る奥様の住所の気付になって

おりますが、若しも嬉しきお便りいただけま
したら、この奥様からすぐさま御連絡下さい
ます。

尚、夫のS性は皆無で、私達夫婦の間に、
過去そうした経験は一切ございません。又、
どなたか他のS男性に苛められたい気持も、
それは単なる心理的なもので、未だかつ
て、一度もそのようなことはございません。
浣腸は汚辱的に感じられて好みませんが、
一通りのことには耐えられると思います。

お優しき辻村様によって、生まれて初めて
被虐の欲びに燃えることの叶う日を、一日千
秋の思いでお待ち申しております。

とりとめもなく、一方的な我儘勝手の、突
然のお便りさし上げましたこと、ひとえにお
許し下さいませ。

辻村様のいよいよ御健斗の程、蔭ながらお
祈り申し上げます。 かしこ

十二月二十一日

岡崎市〇〇町八番三号 浅井方

喜多 知子

年の暮の慌しい時に、これは又、思いがけ
ない嬉しい便りであった。編集部で既に開封
してあったから、箕田氏も承知の上らしい。
一九七一年も、もう押しつまった今年中に

は、どうも実現しそうもないが、早速折返し速達便で、応諾の旨と共に、来年勿々の、私の体の空いている日、数日を書き送って、デートの場所など、電話で知らせてくれるように連絡する。

彼女から電話のあったのは、大晦日の前日三十日の午後であった。

家内は娘を連れて、正月おせち料理の買物に出掛けて留守だし、息子は近くのモータープールで車を洗っていて、幸い家には私一人越年準備で座敷の片付けをしている最中であつた。

澄んだ艶のある声が受話器に響き、電話の主はキタ・トモコだと告げた。

「お忙しい時にお電話を差し上げましたが、御迷惑じゃなかったでしょうか」

「恰度よかった、私一人なんです。いろいろとお尋ねしたいこともありますが、要件から先に話しましょう」

「あのう、私、毎週金曜日が都合よろしうございますの。趣味の刺繍の講習に参るものですから、一日中、家をあげられます。如何でしょうか？」

「じゃあ、一月は七日か、それとも十四日ですわね」

「第一週で結構でございます。新年勿々休むことになりましたが、趣味の講習ですから差支えございません」

「あなたさえよければ——ところで、大阪まで出てこられるのでしょうか」

「岡崎市の郊外で、少し大変なんです。名古屋あたりでお目にかかれますと、都合よろしいのですが」

「では名古屋まで出掛けましょう。新幹線の南改札口でお待ちしますが如何でしょう」

「ご無理申し上げて済みません。何時にお待ちしてよろしいでしょうか？」

「午前十一時から十一時半までにきめましょう」

「結構でございます。私、目印にマイ・ライフの雑誌を手に持って参ります。肥り気味の平凡な主婦で、ほかの女の方のように美しくもございませんので、お目にかかって、どうぞガツカリなさらないで下さいませ」

「とんでもない。お声とお話振りで、あなたの人柄が偲ばれますよ。唯、ワザワザ名古屋まで行きますので、待ち呆けにだけは、しないで下さい」

「そんなこと……必ず参ります」

「ハハ、安心しました。ところで奇クは、あ

なたがお買いになつてゐるんですってね」

「ハイ、二年許り前から……辻村さんとお目にかかれると分かつて、もう一度カメラ・ハントを最近号まで読み返すつもりでいます。お顔はテレビや、ハントのお写真で存じあげております」

「そりやどうも——。じゃあお目にかかる日を愉しみにしております。プレイのことなども伺いしたかったのですが、電話ですからいずれお目にかかったその節にでも」

美しい声は、

「どうぞ、いいお年をお迎え下さい」

と告げて切れた。

声だけの想像で、私はふくよかな教養高い人妻を脳裡に描き、こいつはハルから縁起がいいぞと、心は思わず弾むのであつた。

× × ×

屠蘇気分のためやらぬ一月初旬、新幹線ひかりで名古屋へ走る。正月以来、ずっと鬱陶しい日が続いたが、久し振りに今日は晴れ上がって風も冷たい。

ショルダーバッグ一杯に、詰めこめるだけ詰めこんできたが、プレイ道具一式、流石に重く、細だけでもバッグの大半を占めて、フアスナーも、はち切れん許りに、膨れ上がった。

ている。

いつも車で走るから、予定より早目に家を出る癖がついていて、新幹線で来た今日も、約束の時間より早く、十一時二十分前に、名古屋新幹線の南改札口に出してしまう。大阪市内を、愚図々々車で走っているより早いくらいである。

喜多知子夫人と出会うまでは、何の目算もなく構成も立たなかった。彼女の読者通信と便りから窺える限りでは、何かの理由で夫婦の仲に冷たい確執があり、女独りひそかに二年前から奇クを愛読する。肥り気味の平凡な主婦で、悶々の情やみがたく、S男性に呼びかけた女性という概念しかなかった。

彼女自身一言も、みずからのM性には触れていないし、どのようなプレイを求めているのかも分からなかった。唯S男性を求めているその言外に、被虐の願望を想像するだけのことに過ぎない。

それが事実か、卑下か、自分自身を他のハント女性の美しさにくらべて、程遠いと書いている。彼女が果して、私の好みに合う女性かどうか、すべては未知であった。

読者通信の女性と始めて出会う場合、その殆どは未知であるが、それだけに想像の愉し

さが胎んでいる。今日始めて出会う喜多知子にも又、同じことが言えるのであった。

構内を吹き抜ける冷たい風に吹かれて、約束より早く着いた時間を待っていても仕方ないので、ブラブラと地下へ潜り、コーヒーショップで、しばらくの時間を潰す。

きっかり午前十一時——。再び南改札口へ現われ、重いショルダーバッグを地上に降ろして、目につき易い位置に私は立つ。

駅の大時計が遅々として時を刻み、吹き抜ける風に体の芯まで冷えこんでゆく思いで、五分・十分・十五分と経過してゆく。

ここまで呼び出して、減多に待ち呆けもあるまいと、確信は抱いていても、突発的な事故もありうる世の中。時間の経過と共に、そろそろ黒い焦燥が、ふくれ上がってくる。

いつしか私はイライラしはじめていた。

或いはカツがれたのかと、悪い予感や不安が、次第に頭をもたげ、わざわざ名古屋まで時間キツカリにやってきた自分がみじめになるのかと、焦立ちは急速に拡がってゆく。

列車の到着と共に、いつとき構内は混雑しやがて人群の浪は引いてゆく。数度そうした繰返しをみつめていたが、内心、私は穏かではなかった。

十一時二十分を一寸、廻ったところ、往来の疎な中から、静かな足どりで、私に近づいてきた一人の女性があった。

刺繍のハンドバッグを提げた片手に、雑誌を丸めて握っていたが、私は直感で、彼女が目指す喜多知子であることを、さとった。

大きい安堵が胸をよぎり、思わず一、二歩近づき、数歩離れて相手に眼顔で会釈を送った。女性は立止まる。近づいてゆく私——。

「喜多さんですね」

「ハイ」

緊張に強ばった唇が、微かに慄えている。

「ああ、会えてよかった。すぐ直感で分かりました。辻村です——」

「私も……本当にお待たせしました」

彼女は淑かに頭を下げた。ふっくらとした上品な顔立ちに、想像からの期待は大きく外れ、私はその嬉しい期待外れに、俄に心を弾ませる。

白地のオーバーに身を包み、襟元から紫のネックのセーターを覗かせたその容姿は、スナリとして、到底、肥えているとも思われず、オーバーの裾から伸びた脚腺も細っそりと、かたちよかった。

確か年令は三十才と書いてあったが、今、

目のあたりにした喜多知子は、一見二十五、六才に見え、しっとりした若さが、人妻らしい落着きをみせていた。「少し早いですが、食事をしてゆきましようか」

「私、もう全然たべられそうにもございません」

「でも何か召上がらないと……」

「なんだか胸が一杯で、何もたべたくないのです」

「食事をしないと、体に悪いですよ。免も角……」

余り気の進まない彼女を誘って、私は構内の日本食堂へ入っていった。

彼女のペースに合わせて私も、手軽に寿司を注文し、喜多知子は詮方なげにポタージュのみを頼んだ。運ばれてきたスープも、スプーンで二、三度、口に流し込んだだけで、やめる。

「どうしたのです？ お体でも……」
「もう昨日から、食事がノドを通らないのです」

オズオズと人妻は、弱々しく微笑んだ。涼やかな美しい声も、とぎれがちである。



「今日のことが気掛かりだったのですね」

「ハイ……私、駅へは十一時前に参っていたのですが、お目にかかる時間が迫ってくると、足が前へ進まなくなりました。どうしてもお会いする勇気がなく、それでも、お待ちだと自分に言いかけ、それこそあそこまで、必死に歩いて参りました」

心のこわばりと緊張が幾分ほぐれたのか、やっと彼女はスラスラと喋り出した。

生れて初めてのアバンチュールに決する人妻の危惧と不安。激しい心の動揺と未知への恐怖——。今更あとへ退けぬ悔恨が交錯して、彼女は幾度かためらい躊躇しつつも、既に投げられた賽の重さに引きずられ、錯綜する心に咎打って、自ら求めた密かな会合であり乍ら、半ば自己嫌悪にかられ、遂に意を決して、私の前に姿を現わしたようであった。

みずから造り上げた堅い殻に閉じ籠って、悶々と内肛していた、綾に妖しき女心を柔らかに解きほぐすのが、今

の私に与えられた先決の役目であった。

先ず何をおいても、彼女ををリラックスさせなければならぬ。努めて私は、笑顔で接することにした。

「そんなに私が怖く思えたのですか。まるで鬼か蛇みたい……」

「辻村様といえば、毎月のように美しい方をハントなさっていらっしゃるんですもの。私ごととき平凡な肥えた女をみて、ガッカリなされるんじゃないかと……」

「いや驚いたなあ。正にいわれなき劣等感です。あなたのような、淑かで美しい方にお目にかかるのは、実に久し振りだ」

「まあ、お世辞にきまっていますわ」

ポツと頬を染め、このふくよかな優美な人妻は顔を伏せた。

お世辞ではない。この喜多知子には、男ずれせぬ、世間知らずの人妻の初々しさが残されていた。彼女自身、みずからを卑下するに余りにもコンプレックスにとり憑かれ過ぎていたようであった。

「通信やお便りでの想像とは、余りにもかけ離れ過ぎているので、間誤ついているのですよ、嬉しい誤算で——」

「皆さんにそんな事、仰有るのでしょうか」

「いや本当です。もっと自信を持たれないとダメですよ。自分というものに……」

「じゃあ、私のようなものでも……」

「光栄のいたりです」

「嘘でもそう仰有って下さって、嬉しいですわ」

伏眼がキラリと光り、私をみつめる眸が、なごやいで、眼許が、はにかんで笑った。思い出したように彼女はスプーンを手にとるともうさめたポタージュを一口二口、啜りこんだ。

「御主人とはプレイなさらないんですって」

「ハイ、結婚以来、一度もございませぬ」

「じゃあ、今日のことは勿論、御存知ないわけですね」

「ハイ、勤めに出ていて、夕方までは帰りません。刺繍の講習日を知っておりますから、何とか繕えます。でも、なるべくは、それまでに戻っておりたいと思います」

「奇くは、貴女御自身が買いにゆかれるのですか？」

「ハイ、買い辛いです私……。誰かに見られはしないかと、勝手に独りで想像して、買い終わると、遁れるように戻ります」

「御主人は、貴女が奇くを読んでいることを」

御存知なんですか？」

「気付いているかも知りませんが、今迄のところ何も申しません。見つからぬよう隠して藏ってはいるのですが……」

「珍しいケースですね。夫婦プレイの方は沢山知っていますが、奥さん独り、そっと奇くの愛読者というのは少ないですよ。今迄の女性では、谷山久美子さん、川路叢子さん、ぐらいかなあ」

「でも読者通信を読みますと、女性の方も、かなりいらっしゃるんですが……」

「全部が全部、信じられないのです。夫に頼み込まれて出す妻、妻の名で書く夫、仮装女性など多種多様ですが、あなたのような、ホンモノも混じっていると知って、正に驚きです。見直した思いですよ。どうして又S男性に呼び掛ける気になんかったのです？」

「出してから後悔しました。でも、あれを書いた時、まるで何かに憑かれたみたいな気持ちで、何度かためらい乍らも、遂々送ってしまいました。意地を張り合って、心の通じ合わぬ夫との暮しを続けてゆくうち、毎日ひとりポツンと家にいると、何だかやり切れなくなつて、誰でもいいから胸のうちをブケまけてみたいような気持ちにかり立てられたのです」

「判つきりいって欲求不満なんですね」

「……………」

無言で、彼女は微かに肯定した。

「S男性に呼び掛けて、若しうまく連絡がつけば、会う気だったのですね」

「ハイ、出した時の当初の気持では……。でも段々怖くなってきました。見ず知らずの、性格も、境遇も、人柄も分からない方とお目にかかって、どんなことをされるか分からない恐怖にかられてきました。十二月号をみてお二人も私の呼び掛けに応じて下さった事を知りました。それに力を得まして、若し辻村様が、私のようなものでも会って下さらないかしらと望みを抱き、一番信頼出来るのは辻村様以外にはないと、思い切ってお願ひしてみたのでございます」

「有難う、信頼していただいて。私も読者通信はいつも眼を通しますが、先程もいったように、正直いって余り本気で信用したことがないんです。昔はよく真に受けて連絡したのですが、いい調子で返事してきながら、散々じらした挙句、結局いざとなると逃腰になったり、返事が途絶えてしまうのです。本気の方は、編集部気付で私宛に連絡してきますよ。恰度あなたがそうであったように」

「いいえ、私とて逃げ腰でした。駅前で佇みながら、もうこの冬、帰ってしまおうかと、何度か思ったのです。でも折角、名古屋までお呼びしておいて、それでは余りにも申訳ない、と、やっと思い直したに過ぎないのです」

「いざ事実直面すると、尻込みする気持はよく分かりますが、こうして会ってしまえば、何でもないことです。ホンの少し前までは、ゆきずりの赤の他人同志ですが、同好で結ばれた今、私を信じて下さるしか仕方ないと思います」

「すべて、お任せいたします。唯、昨年暮れにお電話しました時、辻村様のお声が、とても改まっていて、冷たく聞こえましたので、お会いするまでは、何だか怖い方のように思えました」

「つい、事務的な口調になってしまうのですね。こうみえても、案外にフェミニストなんですよ」

「ええ、お書きになっておられるカメラ・ハントが真実ならば……。でもお目にかかって安心いたしましたわ」

「読者通信や私へのお手紙では、精しく分からないのですが、奥さんをM性と考えてよろしいのでしょうかね」

「ハイ、自分ではどの程度分かりませんが心理的には、そうしたものに憧れているようにございますわ。唯、浣腸だけは生理的に好みません……」

「分かりました。プレイしてみれば、どの程度か判つきりするでしょう。じゃあ、そろそろ……」

一盛りの握り寿司を、とくに食べ終わっていた私は、彼女がもうそれ以上、スープに手をつけないのを知って促して立上がった。度々、名古屋方面へは来ておりながら、いつも国道ルートに沿って、地図を頼りに車で走っているの、駅前の土地勘は全然なかった。

「少し歩けば、ホテルがあるように思います。が、私も精しくは存じませんのよ」

彼女も心もとない口吻であったが、免れ角、並んで駅前広場を横切って歩き出す。どこといって目指すあてはない。

ビル越しに見える高い建物が、大きいアベックホテルだという彼女の言葉に、それを目当てに、かなりの距離を歩いていったが、判つきり識別出来るところまでくると、ホテルにあらず、家電メーカーの広告塔をかねた、大きなビルであった。

柔らかな陽射しの大通りを渡る時、信号の点滅が赤に変わり、分離帯で待つあいだ、私は、バッグに納めきれないので、革紐に付ないだカメラを手早く外し、佇む彼女のスナックを撮った。撮りついでに、その周辺で、数枚うつす。

時計は既に十二時半を指していた。出会で、早くも一時間以上、経過している。

やみくもに私を引っ張り廻したのを恐縮するように、

「すみません、精しく知らないものですから……東新町あたりまで参りますと、ホテルがかたまっておるそうですが」

「じゃあ、タクシーでゆきましょう。早く、くつろぎたくなりましたよ」

無駄な時間の冗費が、この際惜しかった。

タクシーに乗り込み、運ちゃんに適当なアップホテルへつけてくれるよう頼む。知らない街の旅の恥はかき捨て。真昼間から告げる私に、運ちゃんは苦笑して走り出す。

振動で体と体が接触しても、いつしか彼女から初対面のこわばりはとれていた。やっと心に落着きと余裕が戻ってきたのであろう。

栄町の繁華街を走り、テレビ塔のある百米道路をよぎり、タクシー任せで、一軒のホテル

のガレージに車は滑り込む。

昼下がりの、明るい陽射しを避けるようにして、私達は、遁れるように、仄暗いホテルのフロントに立った。

× × ×

関西、関東、中部……。押しなべて、いずこも同じアベックホテルの部屋のたたずまいである。

既に二人の間に、ぎこちなさは、とれていった。オーバーを脱いだ喜多知子は、流石にボリュームたっぷり、セーターを通して、胸の膨みが、俄に大きく眼前に迫ってくる。

定石通り、バスの栓を満開にして戻ると、湯の満たされるまでの間、問わず語りの身上話に、しばし華が咲く。

「どうして二年間も、御主人と交渉がないのですか？」

優しく豊満なこの人妻から、そうした夫婦の性的不和は考えられず、思わず疑問を口に出してしまう。

「どうしても、その気になれないのです」

「お子さんはいらっしやらないんですね」

「ハイ、以前に一度妊娠しましたが、ツワリがとてひどく、死にそうに苦しいのです。

それで中絶したのですが、それ以来、妊娠が

怖くなりました」

「産制すればいいじゃないですか」

「ええ、そう思うのですが、思いやりがないというのでしょうか。主人は、さっさと自分だけ果たすと、私の意向などお構いなしに離れてしまいます。それでいいものでしょうか」

「横暴な過去の、男尊女卑の慣習の名残りでしょうね」

「そうした主人のやり方に、妻は抵抗してはいけないうのでしょうか」

「世の中の、大半の過去の夫婦生活は大体そういうものでしょう」

「愉しみも、味わいもない生活に、段々抵抗を感じ、そうした一方的な夫に、反撥するようになってしまいました」

「しかし求められるでしょうか？」

「ハイ時には……でも、もう心が冷えきっているのでしょうか、主人とはそうしたくない気持です」

「それじゃ、御主人が少し気の毒だなあ」

「先日、忘れていった運転免許証を、何の気なしに見ましたら、ゴムの衛生具が三個ばかり挟んでありました。適当に外で、はかしているようです」

「それにジェラシーを感じないんですか」

「私にジェラシーする資格は、ないでしょう。主人だって無理ないと思います。心では悪いと知りつつも、自分でも分からない拒絶の反応が起こるので。もう今更、仕方ありませんわ」

「不幸ですね。それじゃカタチだけ、名目だけの夫婦じゃありませんか」

「愛情の伴わない共同生活みたい」

「それでいて離婚なさらない気持が分からないなあ」

「主人から離婚を申し立てない限り、私にそれを求める権利はございませんもの」

お互いに分かっているながら、どうにもならない夫婦だであることを沁々と感じ、断絶の壁の中で、偽りの共同生活をする夫と、この妻の心理は、索漠としたものに違いなかった。

彼女は、夫婦の仲が冷えた頃と軌を一にして、奇クを自ら求めて愛読し始めている。

何が彼女をSMの世界に逃避させようとしたのか――



今聞く、夫婦仲の不和は、二年間の断絶の説明には、いささか理由薄弱である。

それ以上、断絶の真相を、彼女は何故か、語りたがらない。

初対面の私に告白するには、その原因は、余りにも深刻で、根深いものであるのかも知れない。

結婚して六年という。少なくとも、それまでの四年間は、うまくいった筈である。

美しく豊満で、一見従順にみえる、柔らかな物腰のこの人妻のどこに、このような鞏固な意志が潜んでいるというのであろうか。

「お風呂をみて参りますわ。もう一杯になった頃でしょうから」

息苦しさには堪えかねたのか、私の追及から遁れるように立上ると、バスの硝子戸を開いて、加減を見に入ってしまった。

「恰度、いい頃ですわ」

「どうぞ先に入って下さい」

プレイの、いつもの順序である。

洗面所、バスと、控えの間の仕切り

に襖がなく、彼女は私の手前、脱衣を憚って途惑っている様子に遠慮して、私は奥の間の間に姿を消し、襖を閉めた。

固定した台を置いたダブルベッドが、部屋の中央にデンと据えられている。マットレスのつもりで、撮影の邪魔だと、まくり上げようとしたが、固定のレザー張りの台が重くて動かない。動かない筈で、ベッドに転ぶと腰の辺りに、かたいものがあたる。ここにも上下振動のリズム器が装填されてあったのだ。

もう脱ぎ終わって、バスに消えた時分だろうと、頃合を見計らって襖を開く。果して彼女の姿はなかった。

私はこの処、少し胃腸をこわして下痢気味であった。正月二日頃から、嫁いだ娘達が、婿と孫を連れて陸続と訪れ、私の兄弟夫婦やその子供達で連日わが家は賑わいつづけ、更に珍しく、芳野眉美さんが、わざわざ東京から訪問して来たが、多勢の家族の中では、ゆっくり話をする間もなく彼も辟易して一泊で帰る有様であった。運動不足の上、呑み過ぎと食べ過ぎが忽ちこたえて、どうも腹の調子が、おかしく狂っていた。

彼女が風呂へ入ったものと独りじめして、耐えていた便意を吐かすべく、トイレのドア

をさっと開くと、訝っ！と、どちらからともなく声が挙り、豊かな白い臀部が、マザマザと私の眼に飛び込んだ刹那、私は慌ててドアを閉めた。まくり上げた臀肉の白さだけが視野一杯に、衝撃の映像となって、残影していた。

一旦、催したとなると、意地悪く便意は、しきりに私に迫る。再び間の間に戻ったものの、どうも下腹がシクシクと痛んでくる。

微かにドアの開く音がして、彼女の気配を隣室に感じる。

「あのう……」

控えめに、遠慮がちな声が私にかかる。立上がつて襖を開くと、頬を染めた人妻が、気愧かしげに立ち竦んでいる。

「先程は失礼——。てっきりお風呂だと思っただものですから、ノックもしないで……。どうかなすったのですか？」

「ハイ、困ったことになりました。全然予定日でもございませんに突然ありましたの。こんな狂うこと滅多にございませんに」

彼女はそれをみられた羞恥にかられているのか、消えも入りたげに真赤になって顔を伏せ、さも自分の重大な過失か、責任のように訴えるのであった。

緊張と不安の極限で、平衡心理を傾斜させた時、女人は突発的に、こうした生理的な変化をみることに、しばしばあった。このふくよかな人妻も又、その例外ではなく、私と出会う寸前まで心の均衡を失っていて、不覚にも不意の出血をみたのである。しかし、そのことが、何よりもプレイに対する、彼女の純粋さを証明しているのではなからうか。

「いいんですよ。奥さんさえおイヤでなかったら、私はちっとも構いませんよ」

さりげなくいったが、妊娠を極度に恐怖する彼女と、もし行きつくところまで行きたい場合、むしろその方が好都合かも知れないという思いが、咄嗟に脳裡をよぎり去った。万一SMプレイが爛熟して、その果てに、男と女に還元しても、不慮の心配はなかった。生理中が、絶対的に安心なことは、常識であった。

オトコの昂奮は鼻血ブーを呼び、オンナの昂奮はアンネちゃんブーというところだろうか。

「すみません、御迷惑をおかけして……」
不安と緊張の結果の、不時の出血にとまどって、喜多知子は、如何にも済まなそうに詫びるのであった。

「よくそんなことがあるのですよ。ハントした女性のうちで、過去何回か、そうした経験に出くわしています。だけど準備がないのでしよう。何なら電話して持ってこさせましょうか」

「恥かしいですわ。何とかちり紙で処置しました。未だ少ないようですから——」

私がトイレのドアを開いたのは、どうもその最中だったようで、私より以上に、彼女は驚き、ショックだったことだろう。

かつてのカメラ・ハントの女性で、初めての川口有里子は当然無理ないとしても、ピンクスターの辰巳典子、渚マリなど、一応プロ級の女性が、ハント間際になって突然、出血を見、私を慌てさせたのをフト思い出し、この人妻の、精神の不安と危惧が、想像以上に激しかったことを、し



みじみと感じとったのであった。

湯で濡らすまいとして、髪を巻いていたタオルが、何かのはずみでハラリと落ちると、意外にも彼女の黒髪は、私の想像以上に長く豊かに背に垂れていた。短く束ねて、巻き上げてあったのが、髪の長さと思っていた私は改めて長き黒髪に目を瞠る思いで、内心の喜びは倍加していった。丈なす黒髪の魅力には

いつも惹かれる私である。

「どうぞ早く、入って下さい」

「こんな体で、お先に入れていただいていいのでしょうかしら」

つつましく人妻は、ためらう。

「いいんですよ、おさしつかえなかったら、私も一緒に入れていただこう」

「ハイ、どうぞ」

チラッと羞恥を覗かせたが、既に覚悟の上か、彼女はあっさり応えた。

もじもじして脱ぎかねているのに気付き、もう私はこらえようもなくトイレへ飛び込んだ。不粋な下痢音の響くのを防ぐ為、幾度となく把手を押えて流水の激しさで誤魔化する。

ゆっくりと時間をかけて出してみると、バスの硝子戸に、微かに裸身が揺れていた。

あとを追うように脱ぎ捨てると硝子戸を開く。

気配を感じていたのか、喜多知子は首までタ
ップリと湯につかり、タオルで胸のふくらみ
を蔽って、一瞬、羞恥の視線をチラリと私に
投げてよこし、さして大きくもない湯舟の隅
に体を寄せた。

豊満な女体と、腹の出た私の、七五キロの
容積で、湯は滝のように激しく溢れこす。

向かい合わせに顔を見合わせ、不安を払拭
するように、そっと両手を差し出して女体を
引き寄せると、抵抗もなく白い肌が反転して
私の胸に凭れかかってきた。

抱きしめた胸のふくらみは動悸に弾み、真
赤にほてった頬には、羞恥にダブって、恍惚
めいた歓びの色が流れ、流し眼にみる眸に憧
憬が泛かび上がっていた。

そっとうなじを捻じむけて唇に触れると、
渇いた口腔は熱く、まるで私の求めを待ち望
んでいたかのようにヒタと重なった。

裸身を背後から抱きかかえた両腕が、柔わ
肌に動き始め、指先が、微かに乳頭に触れる
と、しぶきをあげて女人はのけぞり

「ああ、やめてえ、ダメなのよ。いやーん」

と、思いもかけぬ甘え声を立てて、俄に五
体を震わせ、身をくねらせると、俄破と激し
く、しがみついていたのであった。

まるで腫ものにで触られたかのように、彼
女の左乳首は、敏感そのものの性感帯である
ことを知った。

真昼の鈍い太陽が、開いた煙窓から明る
い光をバスに投げかけている。

湯の中の抱擁とくちづけが、緊張の連続で
こわばっていた彼女の神経を、一挙に柔らか
く、ほぐしていった。

揃って湯舟から上がると、浅い槽だけに、
縁すれすれに溢れていた快い湯加減の湯が、
半分足らずに減ってしまう。

フト脳裡をよぎる、川路叢子のあの時の豹
変——。それと同様な心理経過を、喜多知子
も辿りつつあった。既にこの人妻は燎らかに
リラックスしていた。

ムチムチした肉づきの柔肌は、眩いばかり
に白い。それが私の掌中にある。

この肉感的な真白き肌に黒髪のコントラス
トは、眼も鮮かに女体を一入ひき立てて、咫
尺の間にあった。

尊い宝物を奉持するかのよう、背後に回
ると、しきりに遠慮する人妻の、スベスベし
た背を洗い始めていた。

仄々とした湯気の温かさにも似た雰囲気
が私達を包み込み、再び共に湯舟に浸った時、

彼女は、キラキラと黒耀石のような瞳を輝か
せて、自分の方から、そっと裸身を近づけて
きた。

ひととき——。

あらゆる俗事を忘却の彼方に押しやり、二
時間前までは、路傍の他人同志だった私達が
今、すべてを超越して、ひたすらに男と女の
赤裸々な情熱に燃え上がって、甘い蜜の味を
むさぼるように求め合っていた。

× × ×

既に女心を貫ぬくエクスタシーに酔って、
この人妻は随喜の歓声を立て終わっていた。

乳房に恍惚の快感を漲らせ、抱擁と甘い接
触だけで陶酔に、のけぞっていた。鬱積した
欲求不満が、はけ口を求めてドツと堰をきり
激しい奔流となって、女体をかけ巡ったので
あろうか。

それでも流石に女のたしなみか、湯から上
がるとバスタオルを胸高に巻いて喜多知子は
放心したように、あらぬ方をみつめて坐って
いた。

背後から全裸の俣そっと抱きしめると、故
意かはずみかバスタオルをハラリと落とす。

まだお互いにシットリと濡れそぼった肌と肌
が合わさり、彼女はこらえようもなく、又も

や息を弾ませて、私のかいなに凭れかかってきた。

熱い唇を塞いで、舌端を擦ると、鼻声で喘いで、軟体が甘酸っぱく、互いの口腔を往來する。

「のどが、かわいたでしょ」

彼女の唾液のかれを知って、唇をして私は聞く。

「もうカラカラですわ」

「ジュースが、いい？」

「ええ、いっそ冷たいお酒が欲しいですわ。」

御免なさいね」

「こりゃ驚いた——イける口なんですわ」

「私、東北の秋田の生まれなんです。小さい頃から寒さ凌ぎに父に吞まされました。冬でも裸で寝る人が多いんですよ、酒の勢いをおりて……。お燗したお酒ダメなんです。冷たいのでないと——」

「秋田美人なんですわ道理で雪の肌の白さの



筈だ。肥えているというより、ふっくらしているのですね。ちっとも皮膚がタルんでいないもの」

「まあ、お世辞を仰有って」

彼女は、はにかんで笑い

「少しいただくと、体がカッと温まって、何となく気分がほぐれ、大胆になれるのです」

「そう、大胆になってもらいたいからね。さあさあ、吞ませてあげましょう」

備え付けの冷蔵庫を開くと、よく冷えた、一合瓶、二本をとり出し、コップに注いで口

一杯に含み、抱きよせた彼女に、口移しに酒を注いでゆく。

再び——更に、再び。

グルグルとを鳴らして嚥下する冷酒の匂いが、喜多知子の口腔一杯に拡がり、唐突にむせて、急に激しく咳込むのであった。

やっと納まると、

「ひどい方——」

なまめかしい怨嗟の眼許が、一入艶っぽくうるみ、いつしか女人のかいなが、私の首にかかって、しっかりと抱いて離さない。

「思っても叶わぬと独りぎめして、憧憬に似た心を抱きつづけていましたの。それが現実となって本当に嬉しいですわ」

夢みる眸で、彼女は呟く。女心は妖しく乱れていった。

「ああ、まるで夢みたい——あなたと呼んでいい？ ねえ、よばせて……」

たった今、吞んだばかりの酒に、早くも心は酔って、しなだれかかる。

「うん」とうなずく私に、

「やはり思い切って、お手紙、出してよかったわ。後悔したり怖くなったり、この俚会わずに帰ろうかしらと思ったり……でも、帰らなくてよかった。こんなにも愉しくて、あなたは、とても優しく、いい人なんですもの」
 「こうみえて、案外フェミニストなんだな」
 「そう、親切ね——。ああ、うっとりとしてきて眠くなっちゃった。きっと緊張がホグれたのね」

饒舌になった彼女の視線が、チラリと、開け放たれた奥のダブルベッドに走った。まぎれもなく、女人は欲情して私を誘いたがっていた。私のセックスが、思わずフラフラと、それに誘われそうになる。ノーマルなら、それは必然的なコースに違いなかった。

辛うじて、私のハイド氏が制して、一体、緊縛のプレイの方は、どうなってるのだと囁きかけるのであった。

「縛られたくないの？」

声をひそめていうと、大きく頷き、

「ちっともいい出してくれないんですもの。」

さっきから待ってるのよ、今か今かと——縛られて、苛められてみたいの。ねえ、早く縛って……私の体を、あなたの好きなようにし

ていいのよ」

好色に変わった眼許を桜色に染めて、ヒタと餅肌が絡む。

「さあ、やろう。こうしていると、ベッドへ転がり込みたくなる」

「あなたが悪いのよ、私をこんな気持ちにさせるから……」

私の肩に縋って立ち上がると、

「どうするの？」

ときく。これといって考えた構図もなかつたが、飾り床に眼をつけ、思いつく俚に、

「床柱に縛りつけてやろう」

と、手をとる。既に酔いが廻っているのか女人は足許をふらつかせて、床柱に倚る。裸身の俚でもよかったが、流石に彼女の眼を意識して、褌と浴衣を引っ掛けると、縄をとり出して女体に近づく。彼女も素早くパンティを身につけた。

上半身の逞しいポリウムにくらべて、腰から下は、意外なくらいにスナナリと伸びていて、その体付きが、服を着た場合の彼女を予想以上にスマートにみせる原因のようであった。

手っとり早い二重縄にして、彼女を簡単に床柱を背にして縛りつける。

(自分は今、縛られているのだ)

その自我意識だけで、喜多知子の胸は微かに弾み、慄えていた。自由を奪われ、異性に凌辱されるかも知れぬという想像が、彼女の心を、既に被虐の昂まりに繋がらせているかのようであった。

肥りじしだけに、腕を高々と挙げさせての高手小手には縛り上げられない。

床柱を挟み込んで、両手を柱の背後で組み合わせて、ぐるぐる巻きに縛りつける。

子供を産まない、かたちよい乳房が、締めつけた縄目から大きく盛り上がり、鮮烈に色づいて、桜桃のしゃぶりたい食欲にそそられる。

そっと唇で押えて、柔らかく歯を立てるとまるで待ち構えていた様に女体がぐねり、なまめいた嬌声が、辺りも憚らず高らかに上がる——。

この人妻は、乳房には、すぐく敏感そのものであった。それとも、生まれて初めてSMを伴ったプレイをしているという雰囲気、否応なく、彼女を敏感にさせたのであろうか——。

豊満そのものの、ポリウムたっぷりの女体は、又性感においても抜群であった。この

女体を前にして、過去二年間、なすこともなく指を咥えている夫の心情を思いやり、かくも性感に羽ばたく肉体を、じっとこらえて与えぬ女心に、私は測り知れない女の業と魔性を、しみじみと感ずるのであった。

懼らく彼女は、自分の敏感なポイントを熟知している筈である。夫は手を伸ばして乳房に触れ、抱擁すれば、一挙に解決する問題を妻の性の造反で、なすすべもなく手をつかねておるのは、一体どんな深い原因があるというのであろうか。

心が冷え、拒む体には、敏感な個所への接触も、いたずらに嫌悪に走る以外の何ものでもないであろうか。

眼に見えぬ鑑の上から触れたとて、女心を燃やす手段にはならないというのか。

今、喜多知子は、二年に亘る、冷たい性の造反を続けた挙句、その吐け口を私に求めて女体は疼きに疼いているようであった。肌の触れるところ、すべて

が性のポイントに繋がるかのように、敏感そのものである。

官能の昂まりにつれて、彼女は見得も外聞もなく、ひたぶるに恍惚し、ひたすらに欲情し、ひたむきに歓喜している。

情痴にのたうつ女体を前にして、離反した夫婦の、どうしようもない冷戦の原因が、私にはどうしても腑におちなかった。パンティを脱がせると、更に一本の縄をとり、膝下で結んで、えぐるように深々と股に喰い込ませ締めつけて臀部に巻きつけてゆく。

蒼丘は大らかにふくよかで、萌えいずる草原の面積は、広々と拡がっていた。繁みは深

々と長くはなく、灌木のように短く、それでいて裾野は、なだらかにのびている。それはジャンボ夫人の村上喜美と、はなはだ、よく似た生い立ちで、性毛学からいえば、肥満タイプ的女性に、よくある型のようなのである。

しかし、彼女は決して、肥満体というほどではない。スラリとした脚線の、着細りするタイプからは、凡そ想像もつかない、この上半身のボリュームある肉体に、肥満体特有のあの皮膚のたるみは全然なかった。

抱き心地よく、縛り心地もよかった。真白き雪の柔肌は、縄目を受けて更に映え、もう古くなった言葉であるが、正しくグラマーそのものであった。

ムラムラと嗜虐心が湧き上がってくる。そうならなくては本来の私ではない。こんな単純な縛りは、おこがましく緊縛ともいえないではないか。甘い情操に溺れていた心が、翻然と嗜虐の本性を取り戻し、私の胸は妖しく騒ぎ始める。

手早く解くと、改めて



麻の堅縄で、上体を縛と強く縛ってゆく。両乳房がポックリと飛び出し、胸は深くくびれて、吐く息すら少し苦しげであったが、彼女は口を緘して、私の縄の暴走を受けとめていた。

「苦しいの？」

問いかけると、黙って首を振る。

うっとりとした細めた眼は、緊縛されてゆく、被虐の雰囲気の中に酔っているかのようにすら見受けられる。

両手は床柱の後ろで、手の甲を合わせて、縛りつけてある。又も股縄かけようとして、とり上げた縄をみて、私は呀っと思った。

約五、六センチの長さ、鮮かな血色に染まってじっとり濡れていた。この縄の血痕は喜多知子とのプレイの記念のように、懼らく使用する限り、消えることはあるまい。

その擦染の位置が変わって縄は再度、彼女の股に縛とかかってゆく。縄を喰い込ませるだけでこの人妻は、始めて知る縄の感触に早くも、なまめいた喘ぎを洩らすのであった。

足首まで縛り上げて、身動きのならぬ緊縛の完成した女人像に、私の指先が、猥らな活動を起こしている。

「ああ、あなた。いや、いや、よして……も

うダメ。いけないわ」

と、歓声は一入高まり、彼女は欲びの言葉を、いつも反語で叫ぶ。

それでいて、五感を操る指技に、女の顔は驚えようもなく恍惚めいていった。

「いや」というのは「いい」ということで、「よして」というのは「もっと激しく」「いけないわ」といえば「続けて」と、とればよい。

風呂での抱擁以来、常に彼女は反語で、のけぞり、うたかたの悦楽に溺れていたからである。

激しく動転する、肉体の疼きと欲びに、自己を喪失した、噓言めいた反語が、果てしもなく彼女の口をついて流れ、縄目でピーンと張り切った乳首は、倍加して硬直していた。瞳孔は散漫と空ろに開き、女体は床柱を背にして、悦楽の極みに、のたうっている。

オーバーともみえるその欲びに対し、私の行為は何かといえ、指先と唇による、上半身への接触到過ぎない。

いつもの様に、愛悦の器具を与えた時、女人の歓楽は、それこそ天井知らずに沸騰して行くに違いなかった。

試みに――。

シオルダーバッグから、愛用の小型パイプをとり出してきて、接触部を合致させる。

ピーンと、羽虫に似た響きを立てて、パイプが硬直の乳首を襲う。

忽ちにして、怒濤のような悦楽の絶叫が流れ、それは須臾にして罷んで、ガクリと首がのめり、気を喪ったかのように、みじろぎもせず、唯、微かな吐息だけが、喜多知子の唇から、生の確認のように洩れているのみであった。

前のめりになった女体を縛りつけた縄は、痛々しげに深く肌に喰い込んでいく。

その俚にして、ベッドに腰を降ろし、煙草に火を点じて大きく吸い込むと、この豊穠な女人の、欲望の虜となった姿態を、私は息を嚙む思いで直視していた。

電撃に翻弄された緊縛の裸身は、一幅のS Mの画像のように逞しく屹立し、雪の肌は、全身をかけめぐる昂奮に、うっすら汗ばんで桃色づいていた。

平静を取り戻したのであろうか。やがて徐ろに持ち上げた顔が、万感の欲びと気愧かしさをこめて私をみつめ、美しく整然と並んだ皓い歯が、燦然と笑みこぼれて、私の行為を喜々として受け容れていることを、如実に現

わしていた。

縛って縛り甲斐のある餅肌であった。

この腕を、胴を、ぐいぐい締めつけた細縄が、縦横無尽に裸身を絡めている。

くびれ上がった胴から、臀部へ伸びた縄を膝下で結びとめ、種々の緊縛のポーズをとらせる。前号でも約束した通り、カメラを撮る状況をいちいち挿入し

ていては、折角のプレイの雰囲気壊れるので、すっかり割愛したが、SMカメラ・ハントと銘打った以上、その一縛り、一縛りに、時に応じて、カメラとストロボ、三脚、セルフタイマーなど活躍していることは、フォトが証明している通りである。

飾り床に坐らせていた彼女の体を、ズシリと受け止め、その場に押し倒すと、飽くこと

なく、余った細縄で腿、足へと縛ってゆく。

そうされることが嬉しくて堪まらぬかのように喜多知子は易々として、私の思うが儘に体をよじらせ、もたげて協力していた。

畳上に、藻と乱れた黒髪の妖しい美しさに惹かれ、思わず緊縛の女体を抱え込んで、のしかかる私。

唇を求めて、乱れる黒髪搔きわけて、私の

顔は、かぶさっていった。

長い長いくちづけ——やっと離して、皮肉に喰い込む細縄に眼をやり、

「きついんじゃない？」

と、いたわる私。

「後手が少し……でも、我慢出来ます」

「どう？　こうして、犇々と縛られている気持は」

「もう、うっとり——」。

長年の夢が叶って、嬉しいわ」

事実、彼女に苦痛の色はなく、陶酔の表情で欣然と応えるのであった。「ノドが渴いているんだろ」

くちづけの唾液が証明している。

「ハイ、どうしてかしら又、カラカラですわ」

「のませてあげようか」

「お水でいいわ」

黙って立ち上がると、一合瓶に残っていた酒をラッパのみで口に含んで



顔に蔽いかぶさると、口移しにのませる。

「もうダメ、酔うわ」

「いいじゃないか、酔ったって……」

「帰って主人に何といおうかしら」

「気になるんだね、やはり」

「そりゃ少しはね」

「新年宴会でのまされたとでもいうサ」

「フフ、そうね。私って不貞な妻かしら」

「少なくとも貞女とはいえないね。二年間もダンナに肘鉄くわせているんだからな。どうしてそうなったのか、未だに腑におちないんだよ」

傍に寝そべって問いかける。緊縛の裸女と並んで転がり、人生の四方山話をするのも又愉しからず哉である。

よくスチームの効いた部屋は、裸身の彼女の肌ですら、しっとりと汗ばませていた。

私も、とつくに浴衣を脱ぎ捨てて、越中褌一本の裸すがたである。

全身を強く縛しめられているのが、反って快いか、被虐の快感に酔い痴れた喜多知子は、じつくりと縄の味を噛みしめているかのよう黙って眼を瞑っていた。内心、或は、私の質問に対する返答を検討していたのかも知れないが――。

静かに見開いて、チラリと私を一瞥した眼

が、熱っぽく、うるんでいた。縄目の苦痛に遠慮がちに肉感的な肌をくねらせて、

「本当のことを告白しても、私って女を軽蔑しない？」

と、何か重大な秘密を打明ける口吻で、私の顔色を窺った。

「しないね。秘密のある女よりスッキリしていて、反って好感を持つかも知れない」

「白状すると、今の夫と結婚する以前から、私に好きな人がいたの」

云い終わって、サツと頬に朱が走る。成程これは確かに夫婦不仲の原因の、大きな手掛かりになりそうだ。しかし、よくある話でもある。

男の浮気は肉体的に相手を求めるし、女の浮気は精神的なもの、思慕からそうなることが多い。結果に於いては、いずれ肉体で結ばれても、その動機は男女かなり違っている。

彼女の謂う、その好きな男性とは、どの程度までの仲なのであろうか。

「じゃあ、どうしてその人と結婚しなかったの？」

「いろいろと複雑な家庭の事情で、どうしても出来なかったの。その人は未だ結婚してい

ないのよ」

「今でも好きなんだね」

不自由な姿勢で、首だけ大きくもたげ、こくりと深くうなずく。

「深い仲？」

「ええ、身も心も……」

「現在も続いているの？」

「時偶しか会えないけど、激しいわ、お互いに――」

「何処に住んでるの？」

「東京――」

「少し無理だね」

「だから盆と正月だけ」

「ダンナは気付いているんじゃない？」

「或はネ。でも精しくは何も知らない。この

こと打明けたの、あなただけよ」

「彼に操を立てての拒絶じゃないのかい？」

「そうした気持もあるけど、そればかりでもないんです。私に対するひどい侮辱と不信があって、それが、いつ迄も尾を曳いているんです」

「どんなことをしたの？」

「勘忍――それだけはお聞きにならないで」
彼女の表情に、チラリと嫌悪の苦悶がよぎった。人みな、どうしてもいえない悩みがあ

る。これ以上、追及することは、むしろ相手を苦しめるだけかも知れないと悟って、話題を元に戻す。

「ダンナには、どういって東京へ行くの？」

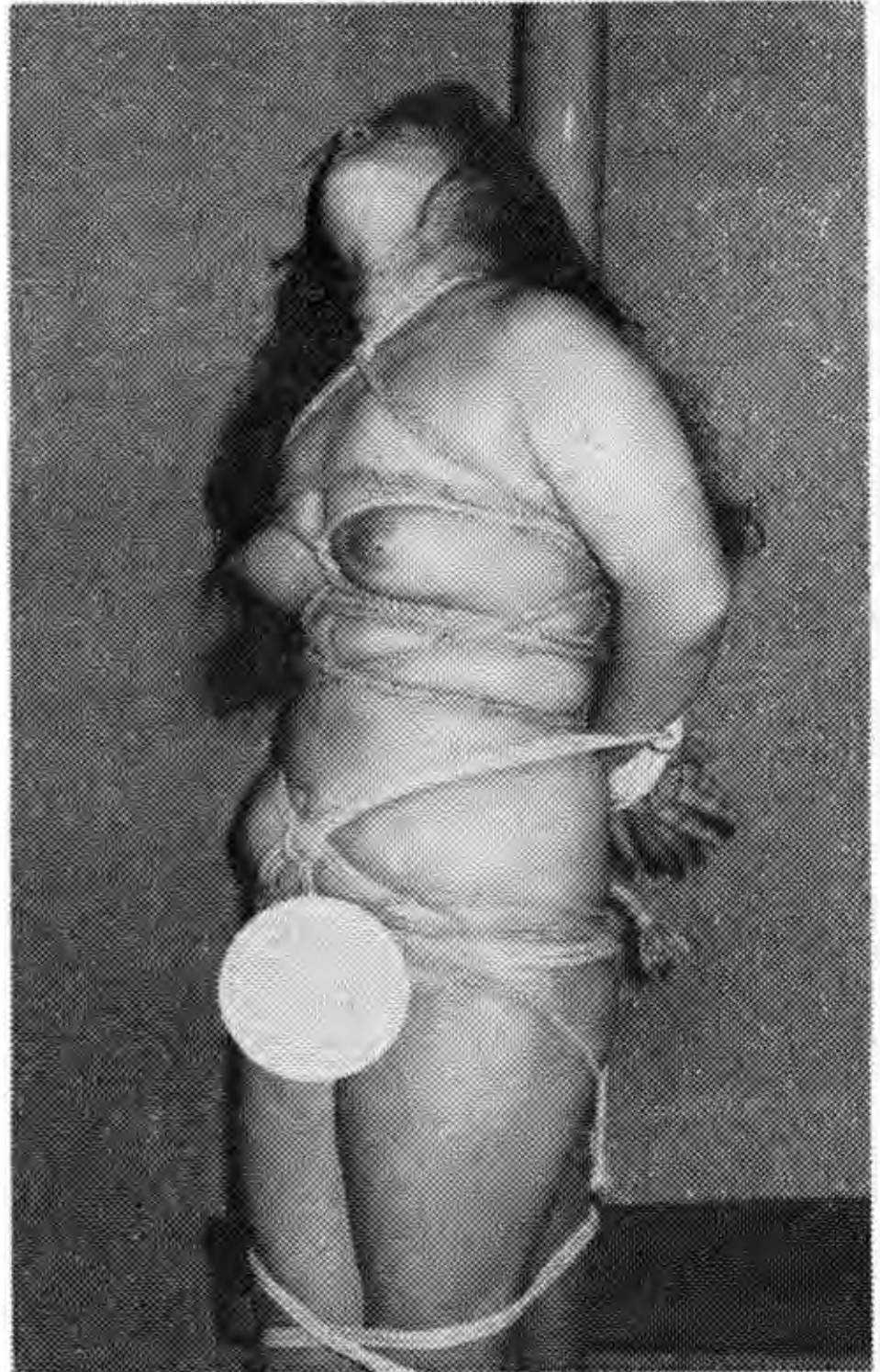
「私、以前に秋田から姉を頼って上京して、デパートに勤めていたのです。そこで同じデパートに勤める彼と知り合って激しい恋に陥たのです。姉は東京へ嫁いで両親が亡くなつてからは、その一番上の姉が親代りでした。年に二度、里帰りみたいに姉の家を訪れるのです」

「里帰りがデートの口実なんですね」

「お祭りの通りですわ。姉は薄々知っていてうまく取り繕ってくれます。お義理に顔を出しておいて、彼と会っているのです」

「正に悪妻だなあ」

「自分でも、そう思います。でも、どうしようもないんです。丸三日間、彼に入り浸りの



爛れたような生活をして、又元の冷たい家に戻ってきます。そんな私の体を主人に触られるのが怖くて、つい拒んでしまうのです」

「拒まれる主人こそ堪えたものじゃない。

あなたのような肉感的な美人と毎夜、寝て何もないなんて私なら気が狂ってしまう」

「だから適当に吐け口をみつけている様ですわ。でも私には何もいえないし、いえる私でもないんですもの」

てプレイの挙句、若し成るようになって構わなかったの？」

「夫とはカタストロフが近いし、彼とも一年に二度会うきりでしょう。そんな自分に、心や体がどうしようもなく焦立ってきて、自身を自虐の淵に追いやって、もうどうなってもいいような気になり立てられるのです。ハナからあなたとこうしてお目にかかれるなんて、とても考えてもみませんでした。私の

「何処かで、夫婦の歯車が、逆に廻っているんだね。それで、今年の正月は、もう彼と出会ったの？」

「未だなんです。あなたとお会いすることになったから、少し延ばしました」

「どうして？」

「彼に出会った後の数日まるで蟬の抜け殻みたいになるの。そんな空虚な私でお会いするのは失礼だと思ったから……」

「でも、こうして出会っ

ような平凡なデブちゃん、きっと相手にしてくれないと思ひ込んでいたのですもの。それだけに嬉しくて……」

女の眼はキラキラと妖しくうるみ、

「だから、可愛がって……」

と、身を擦りよせてくる。にじりよる裸身を抱きしめ、私はこの可愛い悪女に、激しい愛情を覚えずにはいられなかった。

「彼とはSMのプレイするの？」

「いいえ全然——。プレイ抜き、タダのセックスだけ。それも妊娠を懼れてヒヤヒヤしながら……。私の心の奥底にひそむ被虐の願望に、欲びを与えてくれるのは、広い世界でただ、あなただけ」

私のかいなに抱かれた彼女の眸は、限りない愛情をこめて、挑みかかるように私をみつめていた。

細縄が肉に激しく喰



い入る苦痛に、喜多知子は軽く眉をしかめて私の腕の中で軀をくねらせた。もう緊縛の間は、かなり長い。

「解いてあげようか」

「ええ、体中の感覚がなくなつたみたいで、

しびれてきましたわ」

かなり執拗に縛り上げた細縄は、解きにくい。やっと外すと、女人のかいなが間髪をい

れず私の首に巻きつき、まるで夢みる乙女のまなざしで唇を求めてくる。

彼女は唯、この刹那に、ひたすらに欲びを見出そうとしているかのようであった。

×

×

×

古い慣習、既成道徳、しきたり、などから一切脱却して、喜多知子は、自分なりの倫理感の上に生きていた。

お説教めいたことを彼女にいうのなら、人妻と知りつつ、何故遙々名古屋まで会いにきたのか。

そんな私に、彼女の行動を云々する資格はない筈である。

数多くの女性をハントし、その刹那、刹那に欲びを見出して、一応、真剣な愛情を覚え、心惹かれつつも、理性のまにまに去っていった私のこうした、なりわいも、妻子ある私にとって決して正々堂々、愧ずべき行為ではないとはいいい切れない。

ひとつ裏返せば、喜多知子の悦楽を追求する倫理と、私の感覚は、大同小異、さして異なるところはなかった。

充たされぬ欲求の吐け口を私に求め恋人の存在を告白し、夫婦の冷たい仲を偽りなく語る天衣無縫の女人に何を問詰しようとしているのであろうか。

こうした夫婦は、世に相当に存在しても、既成道德の美德のベールに包んで、己れ自身に正直になれないだけなのではなからうか。

その逃避は、佻しい、よろめきのテレビドラマに、憂を発散させているに過ぎないのかも知れないのである。

私自身をフトふりかえった時、改めて喜多知子に、むしろ微笑ましい慕情を覚えずにはいられなかった。

私はこの女性の、ひそかな被虐の願望を叶えてやり、満喫させることの出来る、世間に稀少の、安心な一人の男に過ぎない。それでいいではないか。それ以上、何を求めるものがあるというのであろう。そうした態度でいつもことに臨む私であるのに、かくまで判つきりと、この人妻の口から、夫や恋



人のことを告白されては、つい我にもなく、日常性の私が顔を出して、ジレンマに陥ってしまうのであった。

若し彼女がホステスの如く、男性に対して世慣れていて、真実を糊塗し、欺瞞と美しい虚飾のベールに包んだ自己の告白をしていたら、私は又その告白を、真実としてうけとっていたに違いない。ハントの内容も、かなり変わったものになっていたであらう。

しかし、虚偽と欺瞞のベールは、いつか剥がれる日がある。その日に私はまんまとあざむかれた私自身に苦笑しつつ、もう彼女の百遍の追従や愛想にも、一顧もしなくなるであらう。

可愛い悪女は、私に抱かれて、束の間の仮眠の夢路を辿っていた。ながながと曝した放恣な肉体一杯に、信頼と安堵感が漲っていた。

「眠いの？」

耳許で囁くと、物懶げに瞼を開き、「まあ、眠っていたのね。どうしましやう、私——」

「いいんだよ。もう少し続けて、いいかい」

「ええ、縛って下さい。もっと虐めて……」
 「でもあなたは、いつも口癖のように、いやとか、よしてとかいう。心にもないことを」
 「知らない」

咄嗟に顔赧らめて、それが決して本心でないことを体で示して、裸女は身をくねらす。

「じゃあ、今度は少し叩いてやろうかな」

「余りきつくしないでネ。生まれて初めての経験ですもの」

「心得ているよ」

叩き易いポーズを求めて、両手を縛って鴨居に吊り下げ首縄かけて膝に結び、身動きのとれぬ縛り方をして、試みに、ほどよく突き出たお尻を軽く、ぶっしてみた。

瘦身の女性なら、何でもないこの姿勢も、肥り気味だけに、かなり息苦しいらしい。裸身が、かなり大きな吐息を洩らして耐えていた。

パシリ、パシリと、平手打ちは、徐々に力をこめて強くなってゆく。

こんもりと盛り上がった、



雪肌の臀肉に、鮮かな桃色の手型が烙印される。

「痛そうだね」

「ええ少し……でも辛抱できる」

微かな悲鳴をあげて悶えていた彼女は、それでも精一杯の我慢をみせて応えた。

パイプをとり出して乳首に当てがい、片手でパシパシやると、苦悶の呻きが、須臾にし

て喜悅の叫喚に変化してゆく。

エクスタシーを伴ってこそ、臀打ちも快感に繋がることを、まざまざと証明する一幕であった。

「もうやめてえ。ああ、あなたあ。もう、いけないわ」

反語の連続で裸女は、よがる。頃合を見計らってパイプを止め、息苦しいポーズから解放してやる。

喜多知子は、ハァハァと荒く息を吐いて、豊かな胸を両手で撫で下ろしていた。

私をみつめる、猥らに輝く瞳は、妖しく媚を含み、それ以上のものを求めて熄まなかった。エクスタシーの中絶が女心を燃え上がらせているかに見える。

私はここで、彼女に花恥かしいポーズをとらせることに腹をきめる。プレイの気魄は既に煮つまりつつある。どの様な羞恥のポーズにも、あらがうことなく、彼女は従容と応諾する気配をみた。

深淵を探索すべく、私はその第一段階として、天の橋立、股覗きにさせて、右手足、左手足と、それぞれ縛り合わせ、首縄かけて太腿にわたし込み、否応なく一杯に拡がるよう工作して背後に回る。

ありありと花芯は開く。勿論、私の全神経は、それに吸いよせられる。

肥りじしの悲しさでこれは先刻の臀打ちのポーズよりも更に苦しいらしく、切なげに息を荒だて、眉をひそめて、やがては両膝を折り出す。

膝折れにつれて花卉はつぼみ、双臀が下向きに下がる。

両手を臀肉にかけて、押し潰すように押えると、耐え性もなくドサリと背後に転がり、亀を逆さに仰向けたように、両手足を挙げてバタバタさせていた。



甘露を一杯に含んだ花卉は、くれないを滲ませて、今眼前にあでやかに開花している。

熟視する焦点に、微かな血のこびり――。

その事実が、今迄私をここへ躊躇させていたものの、豊醇な味わいを湛えた禁断の果実が、こうも眼近く放恣の状態にあつては、いっしか私の男性が我慢しかねていた。

かたちよく締まった菊の座が、一入、私の

好き心と関心をそそる。

確かにこの時点まで、私は珍しく触れていなかった。バスの陶酔のひとつときにも――緊縛のプレイの戯れのまにまにも。突発の変調が、指頭の闖入を、心ならずも妨げていたようである。

股縄の数センチがトキに染まって、女体の傍に投げ出されてある。

両の手足を縛られて、仰向けに股を拡げた姿態が、私の大脳神経に、どのような変化を与えるかを、女人は紛れもなく知

っていた。そのポーズが、女体最大の羞恥の開帳であることも、つとに熟知の筈である。

にもかかわらず、この愛すべき人妻は、あえてその姿態を崩そうとせず、むしろ挑発したげに、これみよがしに曝した儘、じっとしていた。

燃え上がる炎の欲情は、私の次にとるべき行動を、胸を亢ぶらせて期待しているよう

あった。

「くれない」に、逡巡していた肚が決まり、風呂上がりの冷たい濡れタオルで押えると、くつきりと唇の紅さながらに擦染される。

歓喜をたかめるに絶好の、玉子型のリモコンを手にとると、ねっとりとした感触に心燃やしなから、ボタンを押す。

はじかれたように女肉が躍動し、五体をわななかせて、全身の骨の融けそうな甘い嬌声が、部屋一杯に充満していった。

既に喜多知子は、乳頭へのパイプの洗礼や口唇、指戯によって、再度にわたりアクメの境地に到達していた。

それは所詮、余戯に過ぎない。

本命をゆさぶりつづけ、深泉を直接つらぬく快楽のきわみに、魂を天外に飛ばし、身も世もあらず、気も転例せんばかりに愉悦の極

致を轟進していった。

グランスに、急激に大脳神経が集中し始め血瘤は脈々として、私の脳細胞は他の総てを忘却して、唯、この一点にのみ、活潑に働いていた。

立膝の膝頭が、タタミに力を入れて、ゴツゴツと痛い。

彼女は今、すべて私の自家薬電中のもので

はないか。何を慌てているんだ——と、自分にいい聞かせ、興奮にかられた体を、やおら起こす。

「ああ、あなた好きよ——好きになっていいわね……早く、早く……」

反語でない欲求の言葉を、囁言のように、とめどなく吐いて、彼女は倦ならぬ縛られた身を、狂おしく悶えさせた。

拭えども拭えども、ウテルスから滲み出る生命力の血に辟易しながらもいつしか、私の理性は、蠱惑の花園を彷徨して、半ば失われていた。

悪性のつわりが原因で妊娠を恐れ、夫婦の交わりすら断絶している彼女が、生命の血のほとばしりに心を解放させて、ひたすらに求めていた。

世に謂う。生理前後は女性の官能を昂め刺激を求めて亢ぶり、往々にして、自己を喪失して放埒に走りたがるものである



とか。

とすれば、喜多知子の不意の出血は、それを求めるに急の余り、人為によって性感を昂める、皮肉な結果をもたらした様であった。

心逸る余り、或はベッドの純白のシーツを汚すかも知れない——咄嗟にそんな危惧にもとらわれたが、その時はその時のことと、重量級の裸身を抱き上げて、ベッドに、その尽、横たえる。

「ああ、あなたを抱きしめた
い」

と口走る人妻に、左右の手足の縄解きはぐすと、待ちかねたように私の体をヒタと力一杯、抱きしめる。

のどをならして離そうとはしない。「人並みのことはしたくない。サジストらしく縛って……」

と告げても、がえんぜず、しがみついてくる。

手許の縄をたぐりよせ、無言で私は女の両手首に巻きつけていった。



下帯を外すと、丸めて顔に当てて眼隠しし手首を縛った縄で、その上から、ぐるぐる巻きにして、胸へ這わせてゆく。

乳首を吸うと、眼隠しが一挙に、残されていた最後の羞恥の砦を放擲したのか、彼女の欲びにのたうつ叫びには、生々しい性の卑語が臆面もなく混じり、思わず私をドキリとさせるのであった。

それは性本来の、赤裸々な希求の叫びである。

パイプが、地虫の這うような微かな音を、深奥から伝えてくる。歎歎する喜悅の逞しさは、眼隠しで尚更、憚らなかつた。

脱落を防ぐため、ぐっと両腿を寄せさせ、膝から足首へかけて、しっかりと縛る。

私の唇は、自然の欲求のように、灌木の草原を這い廻っていた。

いつしか反語を忘れた裸女は、在りの尽の生々しい卑語で、とぎれとぎれに激しく求める。

脇腹へ両手を当てて、ゴロリと反転させると、俯伏せの体位で、震動の位置が変わったらしく、一入彼女の愛叫は高まっていった。

果たせる哉、反転のあとに十円銅貨大の紅の斑点が、純白のシーツを染めて滲んでいた。

力をこめて、双臀をヒタヒタと叩く私の打擲が、小気味よく響き、掌の折檻が更に悦楽を倍加させるのか、叫声は恍惚を絵に描いて

轟きわたる。

痙攣が五体を襲い、刹那、歓声はヒソと消え甘い余韻が尾を曳いて、唇から洩れる。

パイプを手許に戻し、熱くほてった体を抱きしめて囁きかける。

「満足？」

「よかったわ、とても……会えて幸せよ」

「東京の恋人のことを、頭に浮かべているんじゃない」

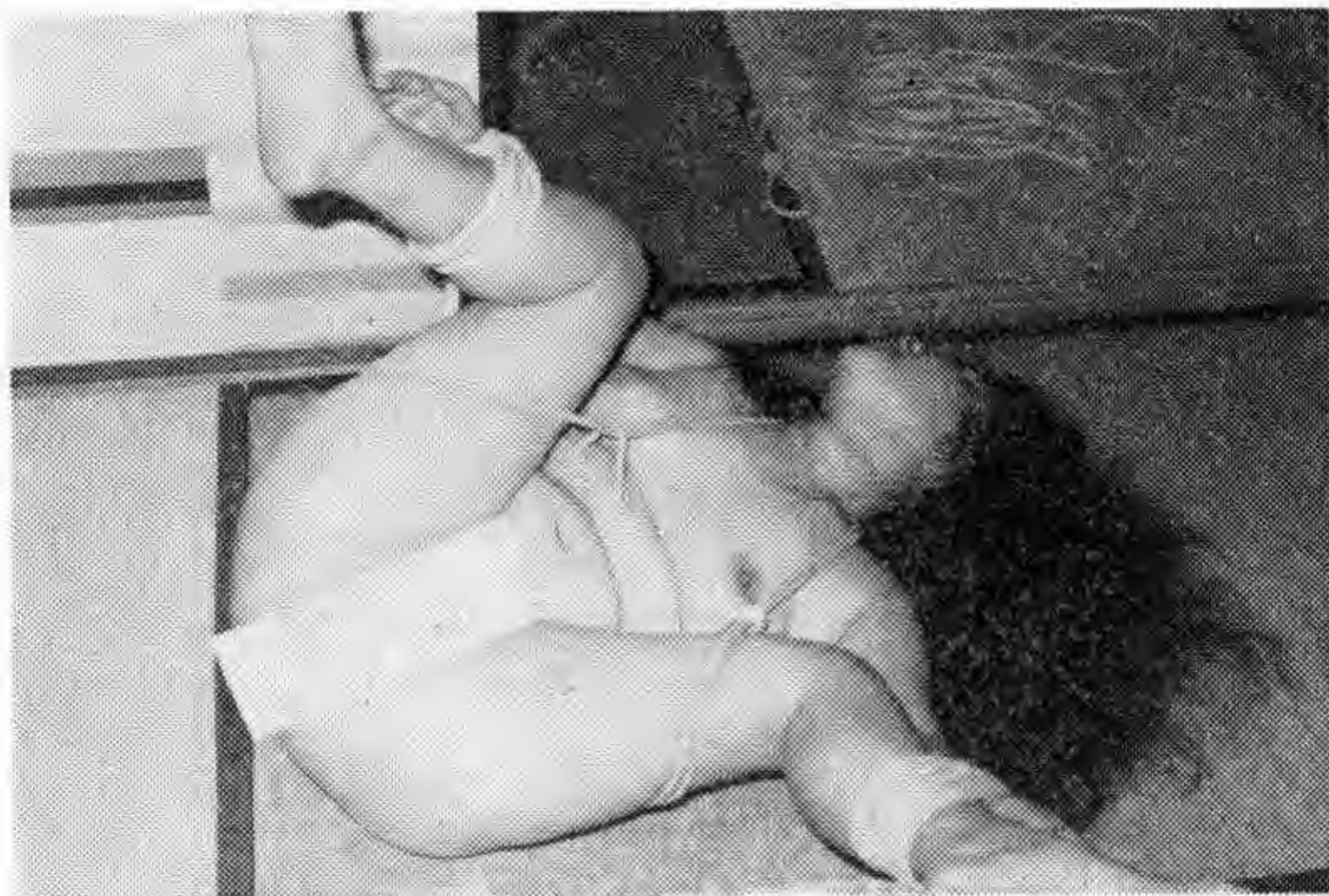
意地の悪い質問をすると、激しく首を振って、眼隠しの顔を私の声の方に向け、

「いやいや、そんなこといっちゃ。今は、あなたのことだけ……カラッポになった頭の中には、あなただけしか、ないわ」

胸波打たせて、彼女は喘いでいう。私は黙って、その唇を塞いだ。私の唇で――。

息詰まる、しばし。唇を離すと、人妻は声も殺さずいった。

「ねえ、どうしてあなたのを××××くれないの。やはり生理がイヤなのネ」



「そうじゃない、こうしても愉しんでいるんだよ。このムチュムチした雪のような肌を忘れないように、しっかりと網膜に灼きつけているんだ。男は一度しか勝負出来ないからね」

「イヤーン、もっと勝負さしたげる、何度でも……ねえ、あなたのお顔、みさせて」

豹変した人妻の欲求は激しい。甘えていう唇が、しきりに私を求めて、空間で、さまよっていた。

解放するや否や、彼女は私の体の上にのしかかって、押え込むようにして抱きついた。重量の upper body を押しつけられ、私は息苦しい思いで、そのくせ、そっと手を伸ばして、ベッドの前にとりつけた棚の台の、スイッチボタンをおさえる。

ベッドが恰度いい位置で、一定のリズムを保って上下運動を、くり返している。

絡んで、うごめく二つの体――。

「ねえ、あなたを好きになっでは、いけないの？」

「いいよ、私も好きだ。だけど、どう

しようもないじゃないか」

「私の方から大阪へ行くわ。構わないでしょう」

「無理をしないで……」

「別れたあと、我慢出来るかしら。あなたのことを考えて、毎日、ぼんやりしてるかも知れないわ」

「東京で、恋人が待っているじゃないか」

「あの人はあの人、あなたはあなた。プレイの味が、すごく新鮮だわ。私の全然、知らなかった世界を教えてくれたのですもの。あなたが憎いわ。こうして写真とって、別れてしまえば、すぐ私のことなんか忘れてしまうのですよう」

「忘れられない。でも——」

「でも？」

「どうにもならないよ」

「そうね、それもそうね。仕方ないのね、つらいけど……」

「東京の恋人並みに、一年に一、二度は会って、燃えてみたい。いけないだろうか」

「嬉しいわ、希望が持てて……」



この人妻は、その欲びを露わに示すかのように、いきなり自由の手を下に伸ばして、私を把握した。

ドキッとする積極的な新鮮さに、私の心は激しく疼き出す。

その気ならこちらもと、忽ち戦斗再開して、いきなり、その手を払いのけると、態位ところを変えて、荒々しくのしかかり、両腕を深く交叉させて、手早く縛ってゆく。

ぐいと両足持ちあげると、腕縄に足をつなぎ、更に下がらぬよう、うなじに縄を回して締めつける。

腰を高々と挙げさせて、シーツを汚すのを少しでも防ごうという配慮から屈曲のポーズをとったが、鋭敏な乳房は圧迫されて隠蔽されている。

そこへ触れることは出来なくても、もっと喜悦を呼ぶ根源が、ありありと咫尺の間に露出していた。

淫性づいた彼女を、とことんまで、歓喜の坩堝へ陥没させるべく、私は、用意してきた女悦の器具を総動員して責め立ててゆく。

いやこの場合、責めると言う言葉は

当て嵌まらないかも知れない。

むしろ、喜多知子の溜まりに溜まった欲求不満を、一挙に飽和状態にさせてやるために、私は精一ぱい努力する性の奉仕者なのであるから——。

果たせる哉、人妻の快楽の様相は百面相さながらに変化していった。

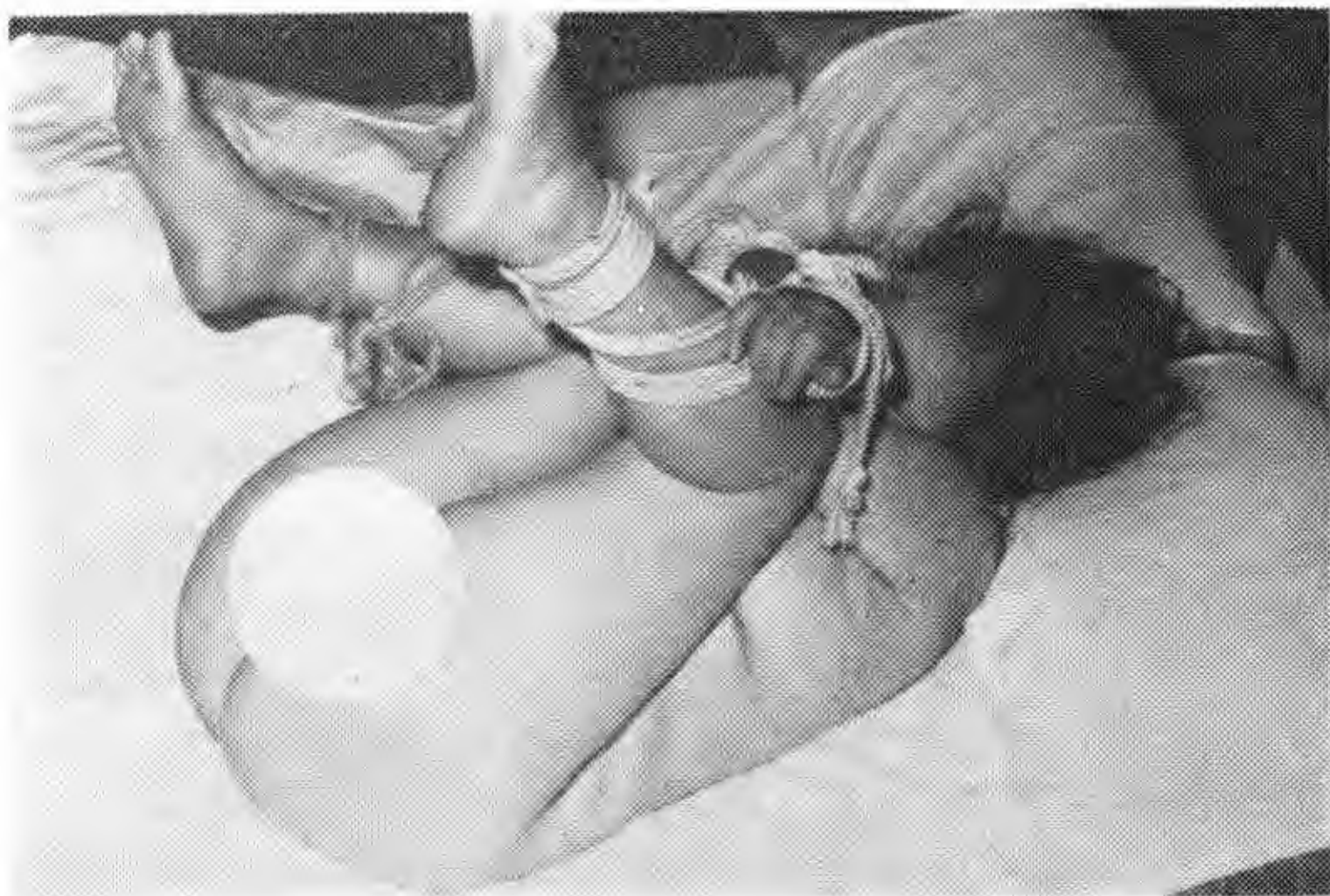
歎歎と鳴悦、絶叫と咆哮、うわ言とたわ言が猛然とミックスし、或は嘔り哭く如く、或は艶笑する如く、時に美しい皓齒をむき出しにして、奥歯噛みならし、果てしもなく絶頂を求めて、アクメの稜線を辿っていった。

「ああ、あなた。とうとう……ねえ早く——もっと。抱かせて、思い切り抱きたいの。この縄といてえ」

束縛された自由にならぬ裸身をきしませ、官能の靡れに、猥らな女獣となつた喜多知子は、忘我の境地で叫んでいた。

私は遂に××している——。

上体を起こして、解き放してやると狂ったように豊満な体しがみついてきて、柔らかい両のかいなが、呼吸も困難なくらいに、私ののどを夢中で、



しめつけていた。

× × ×
SMのプレイというよりは、緊縛を伴ったセックスプレイという方が、ふさわしいかも知れない。

嘗つてのハントした女性群の中にもこれに類似の状態は幾度かあったが、書くのを憚ったまでである。

ポルノ時代の到来と共に、その影響からか、私の筆も確かに露骨になってきたことは自認している。反面、昔にくらべ、それだけSMのプレイがエスカレートしつつあることも、否めない事実であろう。

従って、フォトは大いに乏しいし、緊縛美を追求する同好者の方からは、又ぞろ、お叱言を頂戴しそうである。

前回の野村信子も稀有の名器の持主で、勿論、大いなるセックス好みであったが、この豊満、優雅な人妻には、又、野村信子にない、積極さと技巧を持っていた。

堪能し、弛緩した飽和状態で、疲労がどっと出たのか、私達は裸身を絡ませあった儘、夢ともうつつともつかぬ

まどろみを続けたいらしい。

幻想の世界の連鎖反応で、反射的にハッと眼を開くと、傍に彼女の顔はなかった。

かぶった布団の足許がこんもりと盛り上がり、もぐり込んだ肉感的な軀を屈曲させて、裸女は、しきりに弄んでいた。

どうやら、眼を開いた原因はそれにあつたらしい。

蠱惑の粘い舌が私を襲う――。

胸は亢ぶっても、激しい鴛鴦戯のあとの全身はけだるく、再び挑まれても私のハイド氏は、欲望の膚から解放されていた。

漸く諦めて、顔を覗かせると、彼女は皓い歯を笑みこぼして、チラッと愧かしげに赧らんだ。

「ダメなのね」

「そりゃそうさ。年だもの、無理だよ……ウトウトと眠っていたらしい」

「矢張り東京の彼は若いわよ、その点――」

私は黙って眼をつぶる。三十才台と同じように行くものか。



「ねえ――」

布団の中で、彼女の手が私の指をまさぐり、引っ張って、雪解けのぬめつく雌しべへ、いざなおうとした。

しばらく――。次第に彼女の鼻息は荒くなり始める。

際限もなく感じて手を引くと、フト時間が気になって、枕許へ外した腕時計をのぞく。

既に五時を廻っている。

「時間、大丈夫なの？」

「今、何時かしら」

放心した瞳で、私にきく。

「五時を少し廻っているよ」

「もう少しいいわ。こんな愉しいこと滅多にないんですもの」

いざとなれば、女性の方が大胆、且奔放である。

羞恥の殻をクルリと脱ぎ捨てた喜多知子は正しく激しい情熱の女に豹変していた。

「シーツを、かなり汚したようだよ」

「困ったわ、私。仕方ありませんわ。」

どうせアベックホテルですもの、かぶせておくよりテはないでしょう」

悩ましげにキラキラ光る眼眸が、じっと私をみつめて離さない。

この人妻が、数時間前、駅前で、臆して足も前に進まぬ女性と同一人であろうとは——食事もノドを通らず、不安と恐怖で、突発の生理を見た人とは、どうしても思えぬ変わりようであった。

「そろそろ、風呂にでも入って身支度をしない？」

私自身、この俣もう少し横たわっていたい気持もあったが時間も気になるし、際限もないと、思い切りよく体を起こす。

彼女の顔が、フト恨めしげに歪んだが刹那、すぐ諦めたのか、やっと体を起こした。

既にぬるくなった湯槽に熱湯を注ぎ、二人で体を寄せ合って入っても、今は彼女の方が積極的であった。

私の体のあちこちを、いとおしげに撫でさすりつつ、縫りつくように聞く。

「ねえ、又お目にかかれるで

しょうか」

「会いたいね。何も刺繍の講習の日でなくても、ダンナがお勤めなら、いつだって出てこられるんじゃないかな」

「そりゃそうですけど、遅くなった時、言訳が出来るでしょう」

「あなたみたいな、スゴく情熱的な奥さんを持ちながら、何も出来ないダンナが、つくづ

く気の毒に思いますよ」

「そのことはもういわないで、これ以上」

「不幸だね」

「私も、そう思います」

彼女は、自分のどうにもならぬサガを悲しむかのように、そっと臉を伏せた。

心の断絶した夫婦が、ここにもある。

プレイの汗を流してバスを出ると、慌しく部屋を片付け終わる。

喜多知子は、元の姿に還元して、素肌の頬を、つややかに輝かせて私を待っている。

感謝の報酬を、ソツと握らせたなら、びっくりしたように突っ返し、

「要りませんわ、こんなもの……」

「どうして？ こんなに愉しくさせてくれたのに」

「だって私、それが金銭で、あなたとこうなったと思ったくないんです」

「今日の記念に何か買って下さいよ」

「本当に、いいんです。愉し



いムードを壊したくありませんもの。お金は人間同志の純粋な結び付きを壊してしまします。もういわないで下さい」

どうしても受取らない彼女に、私は諦めて蔵い込み、最後の軽いくちづけを交し終わって、受話器をとり上げた。

外界は、もう夕闇が濃い――。

「一緒に食事しない？ それとも遅くなる」

「笑わないでね。急にオナカが空いてきましたの」

「会うまでは緊張の余り、ろくろく食べていなかったからね。リラックスして、すぐく張り切ったものだから……フフ」

思わず顔を見合わせて二人にだけ分かる微笑を交してタクシーを止める。

栄町へ走って、丸栄百貨店近くで車を捨てると数年前立ち寄ったことのある、肉料理専

門店「ハイデルベルグ」のドアを押す。

彼女は部厚いビフテキ、私はバーベキューとビール。彼女の為に注文した酒が、うっかりして燗酒で、それをさまして、彼女は美味しそうに、のんだ。

仄々とした暖かい心が通い合い、恋人同志のように談笑して、年甲斐もなく私の心は若やいで愉しかった。

出会った時、ポタージュすら、ろくろくノドを通らなかつた喜多知子が大きなビフテキを旨そうにペロリと平らげ、僅かの酒で頬を火照らせて、時間をさらに気にする風もなかった。

今、再び私が誘えば、躊躇なく彼女は、すべてを放擲してついてくるに違いなかった。レストランを出てブラブラ歩くうち、私は

むしろにこの可愛い悪女が愛しくなり、何か是が非でもプレゼントしたい気持ちにかり立てられた。

彼女のいう通り、確かに、要らないといえ、尚更、呉れてやりたくないのも、人情の常であるうか。ハント女性に、こんな心境になったことは珍しい。

どうやら、彼女の真実と、その心意気に惚れこんだらしい。

靴屋を覗き、袋物店に立ち寄り、化粧品店に入



っても、彼女も依怙地になって断わり続け、何も要らないと私の手をとる。

私としては複雑な気持である。

彼女の固辞する心情が、痛いほど分かるだけに強いてとは、いい難い。さりとて、このピチピチした全身を、私という初対面の男を信頼して預けてくれたことに対して、なんらかの謝意だけは、物に託して表わしておきたいのであった。

いっそ職業モデルなら気も軽いのに、などと思いつつ足運ぶ。

歩き、歩いて、もう名古屋駅が近い。

街角に大きい洋装の店をみつけ、否応なしに引っぱり込む。

流石に女性であった。

好ましが刺繍をした紫の服地を手にとると、心は動揺するらしい。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る
団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫があり、是非蔵書の一部未入手の向はお早めにお申し込みください。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号「花」 定価五〇〇円(送共)

刺繍が、彼女の好みにピッタリだったのであろうか、始めて遠慮がちに、それを求めることに同意してくれた。

まるでパトロン気取りでオーダーの寸法をとるのを眺めながら、生地仕立代で、結局は初期の報酬より遥かに高くなったオーダー服地に、快心の眼を細め、愛しい人への贈りものに、内心は満足であった。

「すみませんわねえ」

採寸を終わった彼女は、さも恐縮したように改めて私に囁いた。

「こんな、ご心配していただくつもりは、少しもなかったのに……」

店員の手前か、付かず離れずの間隔を置いて、声もきわめて低い。

「いや、お礼は私の方で言いたいくらいですよ」

私も、彼女に習って囁き声を出した。

「承知してくれて、ほんとに私はうれしいんですよ。気を悪くしないでねえ」

「そんなこと……」

彼女が言いかけた時に、店員が寄って来て仕上がり予定日を告げた。

私は、たばこを揉み消して、立ち上がる。彼女のまなざしは、人眼がなければ抱きつ

いて、キスしたげな欣びを湛えていた。

「今度、お目にかかれる時には、これを着てきます、きつと……」

「さぞかし、よく似合うでしょう。愉しみにしていますよ」

恋人同志のように腕を組んで、遂々名古屋駅まで歩き通した私達は、午後八時という時間に慌てて新幹線の切符を買い求め、改札口へ急行する。

もう、乗客の人影も疎らな構内を突き抜けて、初めて出会った場所で私達は潔く別れを告げた。

「又会う日まで、元気でね」

「一生、忘れませんわ、あなたのこと」

涙ぐんだ眼が、万感の思いをこめて、じつと私を、みつめる。

もう時間はない。

手を振って改札口を抜け、階段で振り返ると、喜多知子は元の位置で、じつと佗んで、私を見送っていた。

構内を、木枯しに似た突風が吹き抜けていったが、きっと彼女の心は、ホカホカと湯気の立つ、石焼芋のように温かかったことだろう。



カット・矢川祥彦

布告と命令

女王からM男へ

佐藤満代

私は、以前に二度、誌面を借りて『奴隷募集』をしてやった佐藤満代だが、私の気に入るような奴隷は現われなかった。

それは、私が課した条件が、甘い考えのマゾ男にとっては厳しいためであろうと思うが

私は、自分の気に入らない男を奴隷にしてやる気持は毛頭ないのだ。

しかし、それは私の側近く使ってやる奴隷の場合のことであって、その募集とは別に今度、私は全国のM男性の女王として君臨して

やることに決めたので、私の合格点を貰えないことを悲観していたM男共も失望することなく、今後私に忠誠を誓うがよい。すなわち私はお前たちM男、全ての女王に即位して、お前たちに、私に対する崇拜を許してやることにしたので、有難く思え。

従って今日ただいまから、お前たち虫ケラ共は、ただ私の命令を聞こうということだけを念頭において生活するべきであって、一寸でも私の意向に反するようなことは、たとえ私の目が届かなくとも許されないと深く銘記すべきだ。

そして今後は、お前たちの生命のある限り、絶えず私を崇拜し讃美し、恐れと共に憧憬しながら日々を過ごすようにし、私の奴隷であるという光栄を確認するために一日一度は土の上に土下座して『私は佐藤満代女王様の奴隷であります』と十回、唱えて拜むことを命じる。

だが、お前たちの殆どの者は、こうして私が慈悲を以て、奴隷の礼をとることを許してやっても、一生、私の尊姿を直接に拝むことは出来ないだろうから、ここに私の概略を教えてやることにする。お前たちは恐懼し、土下座し、この書を捧げ持ってこれからの活字

を拝読せよ。

私は中産階級の一人娘として生れたが、私の十八才の時に両親が亡くなったものだから以後、かなりの苦勞をした。二十才の時に、ある美容院に住込みの見習いとして入り、働きのながら美容師の資格を得て、二十四才で、昨年、死亡した主人と結婚した。

主人が死んだのを機会に、それまでの蓄えと保険金、それに退職金を資本として自分の店を開き、現在は美容師八人を使う身となつて、経営は全く順調である。

八人の美容師は美人ぞろいである上に、皆が住込みで、現在では全員が私に隷属する女奴隷である。皆は、私に気に入られようとして競って働くが、私のために働くのは当り前だから給料などは一切、払わない。そればかりではなく、知人を通じて春を売らせた収入までも取り上げることにしているから、経済的には全く裕福である。

私の現在の日常は、毎朝九時頃までゆっくりと寝ているのだが、目が醒めてからベッドを離れようという気になるまでの間、その日その日の気分によって変わるのだが、女奴隷の内の一人、もしくは二、三人を指名して、舌を主体とした、いろいろな奉仕をさせるこ

とを習慣としている。

もちろん、朝の排泄はその時の奴隷に奉持させた便器を使い、ベッドの上で済ますのであるが、その物は八等分させて八人の女奴隷に朝食として与えることにしている。毎朝、ベッドの横の床に、ズラリと並んで正座した八人の女奴隷が、一斉に私を伏し拝み、それぞれが賜ったものを捧げて私への讚美の言葉を唱和し、その朝食を摂るのだ。

店を開けても、余程の上得意客でない以上は私が直接に仕事をするのではなく、女奴隷の仕事振りを監視したり、気分によって手の空いている者を奥へ呼び込んで責め罵りにしてやったり、気晴しの外出などをする。

閉店後はアルバイトに行かせた者以外の全部を一部屋に集めて、私への讚美の言葉と共に、今日一日もまた、私のために働かせてもらったことを感謝する礼拝をさせた後で、私のサディスティックな欲望を情け容赦なく満たす事になっている。私が考へついた責めは、すぐに女奴隷の裸身で実現するのだが、少しでも拒否の様子が見えれば、その責めを更に倍加してやれるのが面白いから、なるだけ奴隷が厭がるものを考えるのだ。

夜のアルバイトに行かせる女奴隷も、必ず

十二時までには帰ってくるように命じてあつて、帰ってくると私の寢室の前の廊下に正座して、帰宅挨拶とその夜の首尾如何の報告、及び、私への讚美と感謝の言葉を述べさせることにしている。もっとも、その頃には、私はたいていブレイ疲れの体をマッサージさせながら眠っているわけだが、この命令は確実に実行させるようにしつけてある。

大体、以上の様な日常を送っているのが現状だが、私はこの繰り返しの満足しているわけではない。私の性格は極めて残忍で冷酷だと自覚しているが、自分のために他人を犠牲にすることに大へんな快感が得られるので、現在のたった八人ぐらいの女奴隷に恭順を示させるだけではなく、もっと広範囲な嗜虐を樂しむためのいけにえとする男奴隷を、召使ってやろうと思っているのだ。

その使い方は、生れ育ちの良い教養と知性を備えた色白、長身の美青年を人間便器にして舌奉仕をさせることに始まり、人間馬、鞭打ち、その他、私の欲望の湧くままに、あらゆる責めと凌辱を与えて畜生にも劣る生地獄にたたきこんでやり、ただひたすらに私のためにのみ青春を捧げさせて廃人になるまで奉仕させた後は、ちり、あくたのように捨て去

ナミオM画廊

『遷

座(せんざ)』

春川 ナミオ



るつもりである。

もちろん私は、その男奴隷の持っている財産は動産、不動産を問わず全部を取り上げてしまうので、一旦、私の奴隷となったら最後私の勘気にでも触れて叩き出されると、忽ち生きてゆき兼ねることになる。従って私の気

に入られるために生命をかけて奉仕に精を出さざるを得なくなる筈である。それに、奴隷として採用してやるのと同時に、その体には『満代女王様所有、奴隷〇号』の焼印を捺すから、簡単には消せない。

ここで改めてハッキリ云って置くが、私の

側近く仕えることを乞い願う奴隷志願者は、自分のM性を満たそうなどと少しでも思っていると大きな間違いである。私は奴隷として認めてやる以上は、財産は勿論、その人格、肉体、精神までを捧げさすから、どんなことでも全てが私の思いのままであって、奴隷たる者は、私のサディスティックな欲望を全身で受ける生きた道具であることを忘れてはならないのだ。その心掛けのない者は、いかに願い出てきても許可してやらないから、そのつもりで……。

次に私の容姿と容貌を教えてやろう。私は今年三十八才を迎えるわけだが、体は衰えを知らない張りを持っており、年令より少なくとも五才は若く見られている。身長は一六四センチ、体重六四キロ、バスト一〇二、ウエスト八〇、ヒップ一〇八で、肩から胸へかけの曲線は見事であるし、腹部は、ぼってりとした肉付きで腰から大腿への曲線は重量感に溢れ、足首辺りでキュッと締まっている。

肌は浅黒く脂ぎっており、強烈な体臭を持っている。

顔は割合に大きく全体に、よい肉付きだし目、鼻、口ともに造作は大柄、目はキツくて残忍、酷薄な感じが、よく出ている。

髪は赤く染めてあるし、厚い唇も毒々しく赤く塗り、肉厚で高い鼻をピクピクさせて鏡を眺めると、いかにも残虐で驕慢な女王としての貫録がある。その上、全体の感じは豊満にして妖艶、正に爛熟した女盛りを思わす肢体の持ち主が、この私なのだ。

お前たちM男には、私の尊姿を想像するだけでも恐れ多いことだろうが、特に許してやるから、よく読んで想像した上で、僥倖だ私の玉体に非礼を詫びて崇拜せよ。そうすることによってお前にも、全国のM男同様に、私を女王様として今後、奉戴することを差し許



イメージギャラリー

『悦びの時間』

岡

たかし

してやろうというのだから有難く思え。但しさきに命じたように、一日たりとも私を遥拝することを怠ってはならない。

最後に、私の崇拜者となった男奴隷全員に告げておくが、今後、私への隷属を願い出る嘆願書などの奉呈は差し許してやることにするが、ゆめゆめ、お前たち自身が、私に気に入ってもらえるかどうかを考えてはならないのである。ただ誠心誠意、ひたすらに私に対する讚美と憧憬と渴仰の気持を表現することを中心掛けてさえいれば私が、どうにもならないほど退屈した折に、運良く読んでやるかも知れないし、それが、気まぐれにでも側使い奴隷のテストをしてやろうという気持ちに繋がらないとも限らないから、雲を掴むようでも悲観せずに、一生懸命に万一の幸運を願って精進するがよい。

念を押しておく。お前たちは、私を女王様として崇拜する男奴隷である。そして、あらゆる私有物と人格を私に奉呈し、一切を私の意志によって玩弄されるために供し、苦痛と屈辱の生き地獄に落ちることを望む畜生なのである。これを以て、全国のM男性の女王として君臨することにした私の即位に際しての布告と命令に代える。

(おわり)

カット・須坂 旭



ノイズ・メイカーズ

佐原陽一郎

ア製の高速車に乗っているのは決して贅沢ではないと思っている。

駒木はK河の堤防に添った叢に背広のまま寝ころんでいるが、時々薄目をあけて物音に耳をすますのは、常にだれかに狙われる男の悲しい習性が自然に身についたのである。

九月も終わりに近いこの辺は、もうすっかり秋の気配が濃く、いたる所にコスモスの赤い色が風にゆれている。しかし、そんな感傷に浸っているヒマはない。水鳥の乱れた羽音の中で、かすかに人の動くのが、ぴんと張りつめた神経の中に感じられた。

を映している。イタリア人、フェルッチオ・ランボルギーニが打倒フェラーリを目ざして製作した325馬力、3929CCの軽合金

エンジンは時速245キロのパワーを秘め、四人乗りの市販車としては世界で最も速い。

いつか東名でポルシェのパトカーに追われたが、ぜんぜん問題にならなかった。バックミラーに写った警官の驚愕した表情を駒木五郎は忘れることができない。

彼は運転免許証を持っていない。警察に追われたら逃げる以外に途はないから、イタリ

陽は射しているが、時々翳^{かげ}が走って行くように広い河原が暗くなるのは、雲が、かなり速く流れているからである。

杖立^{つえだて}峠を越えて夜通し運転してきたランボルギーニ・エスパーダの赤いボディが、敵を狙って息をひそめる獣のように川の水に影

ダスキンの黒い背広に包まれた、しなやかな身体は一八〇センチはあり、長い髪をかき上げると、広い額と冷たく澄んだ目が現われる。

こころもち碧眼といった感じの色なのは、駒木の血の中に白人のものが入っていることを示している。

また陽がかけり、こんどは明らかに拳銃の撃鉄を起こす、かすかな音がした。

「ふん、リボルバーか。大方、旧式なスミス・アンド・ウェッソンだろうぜ」

駒木は、ゆっくりと身体を反転させ、左腕に抱えたマクレガーのゴルフバッグを静かに引き寄せた。その中にクラブはなく、組み立て式の高性能マシンガンが毒蛇のような銃身をのぞかせている。

ブローニング、コルト、ワルサー、ベレッタ、ルガーと拳銃の数は多い。その中には、後世に残る名作として芸術品扱いをされているものもある。しかし駒木にいわせれば「拳銃の時代は、もう終わった」のだ。

「拳銃はお子様ランチ。大人はマシンガンを持たなきゃいけないえ」と駒木は人に勧める。実際、現在では世界の著名な殺し屋の殆どはマシンガンすなわち機関銃を愛用している。

たとえばイスタンブルでならした国際スパイのアレクポ、ルーマニアのプロエシュチ、シカゴのドリスコール、イタリアのガルシアと一九六〇年代以降の殺し屋は、すべて警察とマシンガンで一步も引かず、わたり合っている。

香港で駒木を息子のように可愛がってくれたネパール人のアガルワルもチェコスロヴァキア製のマシンガンを片時も離さなかった。日本に帰ってきた駒木が、まずはじめに苦笑したのは、名のある暴力団が、やっきとなって拳銃をあつめていることであつた。

時代おくれの旧式ピストルを何百挺あつめてみたところで、駒木が秘かに運び込んだマシンガンには対抗できない。

「日本では、ハンド・ガンの名前を並べただけの小説が売れるそうだと、アガルワルは皮肉たっぷりにいったことがある。カトマンズに生まれ、ヒマラヤの絶壁に向かってマシンガンの修練をしたというアガルワルは、世界で並ぶ者のない名射手であつた。

「拳銃が一人を殺す間に、俺は十人を殺す」とアガルワルは胸を張った。彼にとって拳銃など玩具にも等しかったわけである。

駒木は半開きにしたゴルフバッグに両手を

入れたまま、分解してあつたマシンガンの組立を終わった。どんな闇の中でも十数秒あれば第一弾を発射する態勢がとれるように訓練している。

得体の知れない敵から、腹の底にひびくような銃声とともに狙い射ちされたのは、その瞬間である。消音器をつけたリボルバー特有の、風を切る弾丸のうなりが激しく耳元を通り、背後のテトラポットが白いセメントの粉を散らした。

駒木は、斜面を身体に反転をつけて滑り降り、洪水で押し流されたいらしい等身大の石に身をかくした。

相手も無言なら、駒木も無言である。

駒木はマシンガンの銃身を肩にあて、安全装置のレバーを静かに外した。オイルで丹念にみがき込まれた黒い銃身が鈍い光沢を放っている。背広の右肩には特に厚目のパットが入っている。駒木は右足を後に引き身体の重心を定めると、ぴたりと照準を合わせたまま呼吸をととのえた。素人の射手は、マシンガンを持つと、めくら撃ちに横へ弾を抜けたがるが、プロは銃身を縦に振って撃つのが常である。その方が命中率が高く、連続発射のショックにも耐えられるし、ハンドリングが容

易であることを殺し屋たちは多年の経験で身につけているのである。

駒木の視野に白い河床が映り、枯葦の中から一本の腕がすーっと伸びたと思うと、その先に握られた銃身の長い拳銃から、激しい閃光と共に駒木を狙う第二弾が矢継早に送られてきた。

駒木の切れ長の目が一瞬光り、口元がかすかにゆがんだ時、マシンガンは駒木の意志を相手に伝える電鍵のように、正確な射程に数十発の弾丸を撃ち込んでいた。

乾いた河床の石にマシンガンが土煙と共に強烈なビートを終わった時、駒木を狙った敵は、すっかり萎縮したかのように沈黙し、ふたたび撃つてこようとはしなかった。

「俺に二度と撃たせるな。五つ数える間に両手を首にあてて出てこい」

駒木の澄んだよく通る声が終わるか終わらないかの間に、葦の茂みが左右に揺れて意外に小柄な影が現われ、夢遊病者のようにふらつく足取りで駒木の方へ近づいてきた。

全身を黒いコスチュームで包んでいるが、よく見るとスキndaイブ用のゴムタイツでピタリと身体を締めつけているのであった。

「あっ、お前は……」

顔を覆ったフードを、かなぐり捨てた相手を見て、駒木は目を疑った。

汗に濡れた女の額に心持ちカールしたプロンドの髪が風に揺れ、勝気そうな、まつ毛の長い目が、くやしそうに駒木の視線を下からすくい上げるように、にらみつけていた。

「マシンガンじゃ、とても勝負に、ならないわ。楊の情報だとライフルだったのに」

「楊とは誰だ。俺を狙ったのは、どういうわけだか答えろ」

「楊は中国人で、どんな精密な金庫でも、すぐ開けてしまうし、拳銃の名手だわ。なぜ、あなたを狙うかって私に聞いても、むだよ。お金さえもらえば誰でも殺るのが、私たちの商売だもの」

駒木は、女の腕を逆にとって後手にねじ上げ、右足で柔軟そうな腰を、思い切り蹴って地面に、ひざまずかせた。

「あっ痛い。何をするのさ。あたしをこんな目に合わせると、ボスが承知しないよ」

「そのボスに、ぜひ逢いてえのさ。それにゃあ手ぶらでも失礼だし、おまえさんを素っ裸にひんむいて連れて行こうというのが俺の考えだ。往生ぎわが悪いと、思いがけねえケガをすることになるぜ」

ゴルフバッグの底にビニールの平らな紐がひと束あったので、駒木は女の背中を膝で押さえつけながら、荷造りでもするような慣れた手つきで後手に両腕を縛り、前面は念入りに亀甲型の縄目を掛けていった。薄いゴム服の上から豊かな乳房が、くつきりと縄目に浮かび上がり、股間に縄を通して強目に引き絞ると、それまで足をばたつかせてあばれていた女も観念したのか、口惜しそうに下唇をかみしめて急に大人しくなった。

ヌメヌメしたゴムの感触に、女の汗と香料の匂いが混じり合って駒木を刺激したが、彼はつとめて無表情に女の髪を右手でつかみ、縄目のきびしさにあえぐ女の顔を上に向けさせた。

「まだ名前を聞いてなかったな、可愛い子猫ちゃん。どうせ本名は名のるまいが、なんか呼びやすい名を考えてくれ」

「あーっ、いたいわ。かんにんして。ほんとの名をいうわ。上田ナオミよ」

「やっぱりこの毛は、イミテーションというわけか」

「少し強めに脱色すると、こんな色になるのよ。カツラじゃないからそんなに引っぱられるとたまらないわ」

「若い女が、男に捕われて身動きもできねえ程、縛り上げられれば、後はどんなことになるか覚悟はしてるんだろうな」

「わかってるわよ。あたしだってヴァージンじゃないんだから。でも、この股のあいだの縄は何とかしてよ。わざと縄の結び目を作るなんて、趣味がよくないわよ」

「女だてらに殺し屋を開業しているのだから、少しは女責めの縛り方ぐらい勉強しておく方がいいぜ。股間縛りは初歩のうちで、こんなので悲鳴を上げていたら、中等クラスまでいかねえうちに失神してしまうぜ」

「意地悪ねえ。あたしって、今まで手錠をはめられたりはしたけど、こんな本格的に縛られたのは生まれてはじめてよ。もう無駄な抵抗は、ぜったいにしませんから、少しは手かげんしてよ。身体中に縄をかけられてイモ虫みたいに転がされたら話もよくできないわ」

駒木はナオミの懇願を、わざと無視して腰の辺りで縄止めをすると、余った縄尻を腕に巻きつけ、ちょっと気取った抑揚をつけて、

「キリキリ立あてえーっ」

といった。女囚のように、すっかりあきらめきった表情のナオミは、従順に「ハイ」と答えて、よろよろと立ち上がった。

腰から、ずり落ちそうになっているホルスターから拳銃を抜き取った駒木は、それが38口径のS&Wハンド・エジエクターであるのを見て自分のカンに狂いがなかった事に満足し、女の乳房にあたる縄目に銃身を差し込んで、ぐりぐりもみ込んだので、ナオミは又、新しい悲鳴を上げなければならなかった。

アメリカにはコルト社とスミス・アンド・ウエッソン社の二大拳銃メーカーがあり、自動拳銃ではコルト社が一步、先んじている感があるが、軍用のリボルバー式拳銃では、コルトをしのぐ名声を保っているのがS&Wとスミス・アンド・ウエッソン社である。

ベルギー製のブローニングや、コルト45ガバメント等のスマートな形態を持ったオートマチックに比して、管打式リボルバー拳銃はスタイルの面で一步、劣るが、メカニズムが簡単なので不発率が少なく実用的といえる。

外見より何より、自分の身を守ることを第一義とするプロフェッショナル達が、リボルバーを愛用するのも当然なことといえる。

「若いのに似合わずクラシッくな拳銃を持っているな」

「ベレッタも使うことがあるけど、距離が遠いときはリボルバーの方が安心できるの。今

日は、あなたに負けてしまって、こんな姿にされたけれど、拳銃同志だったら互角に射ち合える自信があるわ」

「残念だが俺は、このトムプソン製のマシンガンだけを信用しているんでね。ハジキのマゴとは、お付き合いできかねるね」

「まあ意地悪ね。本当にあなたって、にくい人ね。もうどうにでもしたらいいわ」

ナオミは縛られた身をよじって口惜しがらるが、縄尻を駒木にしっかり握られ、マシンガンの銃口で背中を小突かれるので、どうすることもできず、河原の石につまづきながら車の方角へ連れて行かれた。

ランボルギーニのリクライニング・シートへ仰向けに押し倒したナオミの両足を、それぞれ窓枠に縛りつけ開股させた駒木は、きつく食い込んでいた股間縛りの縄を解き、ゾリゲンの鋭利なナイフで、その辺りを丸く切り取った。

縄の刺激もあってナオミの茂みはすっかり濡れており、駒木が指先を巧みに使っていたと、濃いルーージュを塗った唇の端がまくれ上がり、白い歯並びを見せてナオミは、あえぎ続けるのだった。

「どうだ。そろそろボスのいるところを思い

出したんじゃないかな」

「待って、ああっ——、もうやめて。そんなに責めなくても白状するわ。ああっ痛い。いやよ、いやよ。そんなのないわ」

全身に汗をかけたナオミの体温と体臭が、切り取られたゴムタイツの丸い穴から一度に吐き出される感じであり、駒木は両方の乳房を、すっかり露出するような穴も、あらたに切ってやった。

普段は覆っておくべき部分だけを白日のもとにさらけ出し、その他の肉体は、すっかりかくしている奇妙なコスチューム姿にされたナオミは、開股責めのポーズのまま、逃がれようとしても身動きすらできず、羞恥と口惜しさで目に涙を浮かべながら、何時か悲鳴もかすれがちになるのだった。

「ボスは横浜にいるわ」

「横浜か。そのボスが楊という男なのだな」

「ちがうわ。楊はボスの片腕といわれる男情報係よ。ボスは、ずっと大物よ」

「久し振りに、手応えのある野郎にお目通りできそうだな。パンティぐらいいは特に許してやるから、お前は裸で道案内をしる」

2

黄金町一帯に拡がる簡易旅館や飲み屋に軒を接するように、場違いという感じで荒れ寺があり、なかば朽ちかけた門柱には、それでも明覚寺という文字が、おぼろげに見える。昔は、かなり格式の高い真言宗の寺であったが、戦災にあって建物の大半を焼かれ、戦後無住寺となっていた。その明覚寺の薄汚れた本堂に夜毎、灯りがともり、人目をばかるとように様々な風態の男女が出入りするようになったのは、つい最近のことである。

黄金町といえば人も知る麻薬地帯であり、寺の周辺はカスバとでもいうような無法地区であるだけに、あまり近隣の評判にもならないが、そこで何かが行なわれているらしいということは、関東甲信越麻薬取締官事務所、横浜分室の栗山末雄もキャッチしていた。

栗山取締官は麻薬捜査のベテランで、マリファナ関係に強く、彼の手にかった外人タレントや黒人兵は数多い。身長割に肩幅の広くがっしりした体躯の栗山は、時折りハワイ生まれの二世に間違われるような細い目の好人物的風貌をしているが、柔道四段の腕前で心持ちガニ股で歩くのが癖である。耳が大きいので外人には「ビッグ・イヤー」と呼ばれ、恐れられていた。

麻薬Gメンといえは聞こえがいいが、捜査は地味な張り込みや尾行の連続で、テレビ映画のような、さっそうとした職業ではない。横浜地区だけでも三千名はいるといわれるペイ患者や、その周囲に群がる売人を、たった四人の係官で取り締まる現状では日曜も祭日もない激務に耐えていかなければならない。古ぼけた黒塗りのセドリックで明覚寺に通じる迷路のような石畳に乗り入れた栗山取締官は、ライトを消して、じっと前方の闇に目をこらした。

突然、前方に二条のヘッドライトが見え、それは急に右折して寺の方へ吸い込まれていった。外灯に浮かび上がった白いボディはセリカGTらしかった。時速一九〇キロは軽い高性能車だ。中古のセドリックでは、とても追いきれる相手ではないことを見とけると栗山は車のドアにロックして明覚寺の裏手の方へ用心深い足どりで回って行った。かたじけなりの狭い墓地に沿って、やや傾斜した切り通しに、本堂の黒い影が今にも崩れ落ちそうに頭の上へ、のしかかってくる。

栗山取締官が気持を落ちつけようと煙草を口にくわえたとき、不意に霧の中から大柄な男の影が現われた。

イメージギャラリー『吊られるッ!』小川 茂 正



「おい、そのまま動くな」

職業がら、こんな場面には慣れている栗山は、わざと大げさに驚いて煙草を落とし、両手を高く上げて無抵抗の意志を示した。

男は栗山の背後へ回り、拳銃らしい堅い金属製のものを軽く押し付けた。

「誰に頼まれて、ここへ来た」

「誰って、べつに。面白いシロクロが見られると聞いてやってきたんだが……」

「何だと、この野郎。バカも休み休みいえ」

「しかし、たしかにボクは野上さんに聞いてきたんだがね」

栗山は相手の正体を知るために、それとなくカマをかけてみた。野上とは地元の暴力団K組の元締で栗山とは旧知の人物である。

野上の名を出して反応がなければ、関西から東上して勢力を伸ばしはじめたY組の息がかかっていると見ていい。

「野上なんてのは関係がねえ。とにかく、このシマに足を入れた以上は、ハイさよならとはいかねえ。一緒に来てもらうぜ」

男は勝ちほこったように栗山の肩を突きとばし、明覚寺の石垣の下へ連れて行き、靴の先で石垣の一部をモールス符号のように一定のリズムをつけて叩いていたが、それが合図であったのか石垣の上から、するすると一条の縄梯子が降りてきた。

本堂は、外見こそ古めかしくカモフラージュしてあるが内部はコンクリート造りで蛍光灯が、あかあかと灯り、らせん階段が地下室まで幾重にも通じてあった。横浜分室管内にこんな拠点がいつの間にかできていたことで栗山はこの大都会の暗黒面を、今さらながら思い知らされたような気がした。

栗山が、二十平方メートル位の広さがある地下室の明るい照明の下に立たされた時ドアが開いて四十年配の男が部屋に入ってきた。

「これはこれは。私としたことが、栗山さんのお越しとは気がつかずに失礼しました」

かなり巧みな日本語であるが、栗山は長年の勤で相手が中国人であることを見抜いた。

「私を御存知ですか？」

「あなたの顔写真を、五〇〇ドルでも安いと買って買う人達もいるようですね。しかし私はペイを扱う商売は、やっていませんよ」

「さあ、どうですか」

「ガサ（家宅捜査）をかけても無駄骨でしょう。ここを改築したのは、そんなものと早く手を切るためです」

「ほう……。すると？」

「ハマでも、輸入品のポルノは、いわば公然と売られています。今年の夏は、日本のポルノ産業にとって戦国時代になるでしょう。ヒップの割れ目が出てはいけない、ヘヤーが写ってはだめといった規制は完全にくつがえると思います。私たちもこのチャンスに、ただ腕をこまねいていることはできない。今年の夏を目標に、このスタジオを利用してポルノ写真の製作にのりだしたわけです」

「しかし、あなた方が手にかけてきたブルーフィルムは、完全にポルノ時代を先取りしていると思うがね」

「いや、そうではありません。ブルーフィルムは、屋根裏で一部の限られた者を相手にするものです。私たちがここでつくる商品は、もっと多数のために大きな流通機構にも乗れるものです。ポルノ解禁でブルーフィルムの世界が大きく塗り変えられるのです。もちろん私たちの組織はペイも流してきたし、末端のチンピラまで数えれば、非合法的に金を吸い上げる、あらゆる方法を知っている。しかし、そのために払った犠牲は大きく、官権は常に私たちの築いたものを切りくずしてゆきます。今後、生き伸びてゆくためには、あなたを含めて、すべての権力の手を逃がれ、最大限の利潤を追求しなければなりません。ポルノ産業に転換した私たちの組織に、あなた方は、もう用がない筈だ」

「なるほど。だがこうしている間にも、このハマにはヘロイン、コカイン、マリファナが右から左へ法外な値段で流れ、数千名の人間を癡人に行っている。これまでも数多くの組織が偽装解散を繰り返し、かえって勢力を強めてきた。われわれは最早、あなた方を信用できない。ポルノ産業などと、子どもだましの隠れ蓑を使っている、いつか又ブツを扱うようになる」

「あっははは。いや、これは手厳しい。まあ、それはそれとして、今夜はゆっくり客人として、くつろいでいって下さい」

男は自分の名前を楊と名乗った。左の手首に竜の刺青があり、頬には古いが、はっきりした傷痕が一筋、走っている。

開西のY組とは、まったく無関係で、独自に京浜から静岡県県の漁港にかけて勢力を張ってきた暴力団であるらしかった。資金源は、やはり麻薬や拳銃の密輸であろう。フィリピンのセブ島で製造される粗悪な拳銃を密輸するのは、殆ど焼津近辺の漁船なのである。

別部屋のソファへ導いた楊は、スコッチ・ウィスキーのオールドバーを出して栗山のグラスに注いだ。瓶の裏に貼ってある髭のじいさんはトーマス・パーといい、百五十二才の長寿を全うしたことになっている。ルーベンスの筆になる肖像では善人そうな眼差しをしているが、このパー氏は実は恐るべき色事師で、婦女暴行で十八年間、入獄したといわれる。

スコッチの中では、やや甘口の最高級品であるが、栗山はグラスに手をつけなかった。「酒はお気に召しませんか。それでは、すこし風変わりなものを、ご覧に入れましょう」

酒棚を押すと、全体がくるりと回転して、その奥にも赤い絨毯に覆われた通路があり、その先に、それまで居た部屋よりもっと広いゆったりとした感じのスタジオがあった。

照明は全体に薄暗いが、室内の温度は快適で、エアコンディショニングの低い機械音がかすかに床へ響いていた。

楊は無気味な含み笑いをしながらライトのスイッチを入れ、上の方を指差した。

栗山は「あっ、あれは……」と叫んで絶句したまま、立ちすくんだ。

部屋の壁面全体が大きな時計の文字盤になっており、中央の突起した機械室から大きな振り子と動力になる鎖が垂れ下がっていたがその鎖の先に下がっているのは全裸で後手に縛られた女であり、対照となる反対側の鎖にも、やはり全裸の女が逆吊りにされていた。

鳩時計の鍾として、女が吊られているのであったが、直径五〇センチほどの振り子は表面が鏡のように磨き上げられているので、左右に揺れる度に女の裸体が幾重にも重なり合っているものである。

左右の女とも、まだ年若い感じで、乳房はち切れるように盛り上がっており、逆吊りの女の長い髪が、ゆらゆら揺れて、床まで、

すれすれに届きそうである。

「どうです、素晴らしいメカニズムでしょう」「驚きましたな。だが、これが新しいポルノですか」

「いや、これは部屋の飾りで、ほんのアクセサリーです。本当のポルノは、こんな生易しいものではありません」

「もうご免、こうむりたいですな。これ以上刺激を受けたら明日の勤務にさしつかえる」

「あつはははは。栗山さんのような歴戦の勇士が何をいいますか」

楊が振り向いて笑った時、突然、鳩時計の窓にあたる正方形の穴から黒い銃口が現われオレンジ色の光芒と共に、楊の足元に銃弾がたたき込まれた。

「動くな。両手を上げろ」

「おまえは誰か。ど、どこから……？」

「何をとぼけた寝ごとをいっている。生きるか死ぬか、どっちかを選べ」

深い井戸の底から反響するような、陰にこもった声が、だんだん明瞭になると同時に、駒木五郎が不敵な姿を見せ、マシンガンを手を敏捷な身のこなしで床に跳び降りた。

楊は素早くブローニング・ハイパワーを引き抜いて駒木を狙い撃ったが、弾丸は背後の

壁面に土煙を上げただけであった。

ブローニング・ハイパワーは口径九ミリ、十三連発のオートマチックで、ベルギーのフアブリック・ナショナル・ドアルムス・ギレ社の製造した名拳銃であるが、その高性能ぶりでNATO（北大西洋条約機構）の制式拳銃として承認されている。

「おっと、待ちな。大事な土産物がある」

駒木がロープを手繰り寄せると、両手吊りにされた女の身体がゆっくりと降りてきた。

薄いナイロンパンティだけ身にまとっているが、縄目を逃がれようと身体が反り返るとに、汗にまみれたそのパンティが今にも、ずり落ちそうで、かえって、なまめかしい。「ナオミに、のしをつけて返してやるぜ」

「そんな女は知らない。人違いだ」

「こいつは俺を狙い撃った。お前が俺を消そうとしていたことは間違いない」

「いや、私じゃない。それは誤解している」

「この場に及んで往生ぎわのわるい野郎だ」駒木がマシンガンの狙いを楊の胸元に止めたとき、背後のドアが音もなく明け放され、
「それは私だ」

という太い英語の声が、はね返ってきた。
「彼がやったのではない。私がみんな知って

いる」

化石のように硬直して動かなかった駒木は後も振り返らず、うめくように、「アガルワル」と、ひと言、つぶやいた。
「アイハグントシンユーフォーアロングタイムハグユー
「ゴロー。ずいぶん逢わなかったな。元気で
やっているかね？」

香港で駒木五郎の親がわりとなり、一人前の射手に仕上げた、ネパール国籍の貿易商がラル・アガルワルであった。
「アイドントビリーブユー
「俺には信じられない。何をやる気なんだ」
「私が答えよう」

それまで黙っていた楊が、急に元気づいたように話しはじめた。

「ミスター・アガルワルが私たちのボスだ。ボスは、すでに日本の麻薬密輸中継地の大半を握っているが、今後は日本の土地を買った有望な企業を吸収して、合法的に金を儲けようと考えた。そのために、香港で子どものように面倒を見てきた駒木五郎、すなわち、あなたを日本に帰して、ひと肌ぬいでもらおうとした。ところがあなたは、ボスの心も知らず勝手に日本へ帰り、ボスにそむいて自由にふるまった。あなたは恩人ともいえるボスを裏切った。だからボスがナオミを差し向けあなたを殺そうとしても怒ることはできない

筈だ」

「それは違う。ボスが最初に俺に近づいてきた時は、真面目な貿易商という振れこみだった。その正体がバレた時から俺を脅迫しはじめた。その手を逃がれて日本へ帰ったことを決して裏切り行為とはいえない」

事のなり行きを見守っていた栗山取締官は駒木の方へ近づき、

「事情はともあれ、こうなった以上は、ひと荒れしなければ、おさまるまい。私は、どうやら君の味方につきそうだが、迷惑かね」

栗山は、かくし持っていたコルト・コマンダーで照明灯を乱射した。突然、暗黒の世界になった部屋の中で女の悲鳴が起こり、栗山は駒木の肩を押してドアらしい方角に突進した。

階段を登って行くときに左右から狙撃されたが、栗山の巧みな拳銃さばきに、男が白いシャツを血に染めて、らせん階段を、すべり落ちて行った。

外へ飛び出すと、ひんやりとした夜気の中に白塗りのセリカー六〇〇GTが、盛んに排気ガスを出して明覚寺の山門から出て行くところであった。

セリカの華麗なボディシエルが、一一五馬力の高速で激しくスキッドし、第三京浜国道に通じる坂道を駆け上って行く。

深夜の料金支払所を百六〇キロの速度で強行突破したセリカを、ぴったりとマークした駒木五郎のランボルギーニは、まだかなりの余裕を持って走っている。

「栗山さん、マシンガン撃てるかね？」

「こう見えても、私は機関銃隊長だった」「そいつは、いい。じゃこれを使ってくれ」

駒木五郎は片手でハンドルを保持しながらゴルフバックを開き、スペアとして用意してあるシュマイザーのマシンガンを栗山に示した。世界の殺し屋が夢に見るドイツ製の高性能マシンガンであった。

「アガルワルが持っているのはチェコ製の百連発ドラム付だ。とても、拳銃じゃ無理だ」「タイヤを狙って撃とう」

ランボルギーニはエンジンのうなりを上げ斜行しながら、セリカの背後に接近した。

楊がブローニングで撃ってくるが、フロントは防弾ガラスなので、駒木は冷静に車の角度を計算して寄せて行く。

「よしっ」

栗山のシユマイザーが乾いた金属音を立てて、光芒が窓を染めるとセリカの左後輪が見事に射ち抜かれ、アガルワルがスリッパを止めようとハンドルを大きく回す姿が見えた。

中央分離帯に激突して横転したセリカは、それでも炎上することなく、ドアを開けて出てきたアガルワルと楊は、大きな傷を負ってはいないようであった。

アガルワルのマシンガンが、先に狂気のようには火を吐いた。狙いはさすがに正確で、ラッポルギーニのホイールキャップが、ずたずたに引き裂かれて吹き飛ばされた。

栗山と駒木は身を伏せ、車を盾にしてそれぞれのマシンガンをセリカGTのボディに集中させ、引き金を引き絞った。灼熱した弾は生き物のような正確さを持ってボディに無数の弾痕をつくり、まず楊が拳銃を持ったまま頭を打ち抜かれて路上に倒れた。

ガソリンタンクに火が入ったセリカは紅い炎を上げて燃え上がり、それを背景に、顔を血に染めたアガルワルが狂ったようにマシンガンの乱射を続けていた。

「栗山さん、ここは俺にまかせてくれ」

駒木五郎は、大胆にもアガルワルの正面に

仁王立ちとなった。ピタッと銃声が止まり、アガルワルも不敵な笑みを含んで立ち上がった。二人の射手は、三〇メートルほどの間隔を置いて向かい合った。

「先に撃て」

アガルワルがいったが、駒木五郎は首を横に振った。「オーケー」とでもいうように、アガルワルはマシンガンを構え、二つの銃器は同時に激しい、うなりを上げ、五郎はガンを腰につけて重心をとりながら地面へダイビングのような姿勢で転がった。

「おい、大丈夫かっ」

栗山が五郎を呼んだ時、アガルワルが、ゆっくりと山が崩れるように前のめりに倒れていった。トムブソンの弾丸がアガルワルの心臓部を見事にとらえていた。

「肩をやられたな」

鮮血がしたたり落ちる五郎の肩に気付いて栗山は手早く自分のハンカチで応急処置をしてやった。

「なあに、ちょっとかすただけさ」

「手強い相手だったな」

「ああ、まあね」

栗山は、自分のセブンスターを二本、口にぐわえると同時に火を点けて、その一本を駒

木五郎の唇にくわえさせた。

深夜でも、かなり交通量の多い第三京浜だけに、気がつくとも前後にヘッドライトの光がかなりの長さで連なっている。

「人騒がせなことをやったものだな」

「俺も今夜ほど派手にマシンガンを撃ち合ったのは、はじめてだ」

「安眠妨害だな」

「ノイズ・メイカーさ」

「えっ、何だって？」

「アメリカのおモチャで、お祭りの時なんかにぐるぐる回して音を出すのがあるだろう。俺たちは、とんだノイズ・メイカーズさ」

二人の男は白い歯を見せて笑い合い、栗山は負傷した駒木五郎の肩に腕を回して抱き起こした。救急車の赤い回転灯が遠くに見え、サイレンの響きが、だんだん近づいてくる。

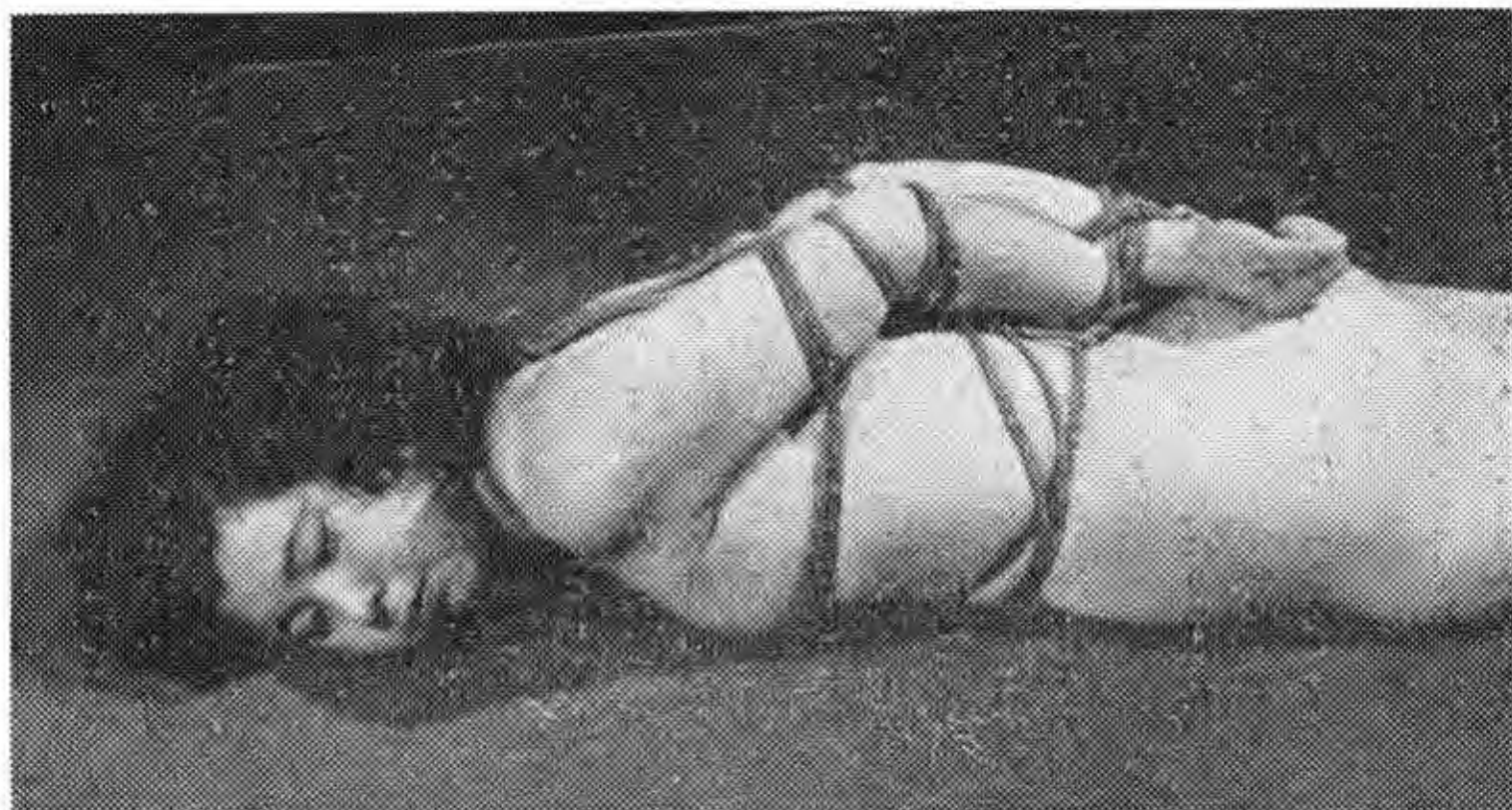
霧が流れて、ほのかな星明かりが見えたが、つめたい風が出はじめていた。

「栗山さん、弁護士を頼みたいのだが」

「心配するな。俺が悪いようにはしない」

年令も立場もまったく異なる二人の間に、いさよな奇妙なきっかけから友情のような連帯感が生まれ、それが二つのシルエットを霧のように包み込んでいた。

(この項終)



〽 告 白 〽

京きょう
都と
慕ぼ
情じょう

前 田 真 知 子

私が奇クの、昨年の一月号に『白い陣痛』などという、ちょっとキザな題名で自分の緊縛日記の一端を書かしてもらってから、早いもので一年以上も経ってしまった。

三月には大学を卒業して私も一年生の社会人としてOL生活を踏みだしてみると、なかなか暇なんか出来そうになかった。やはり、なんといっても学生であった時の方が自由があったし時間的にも気ままに出来た。

といって、私の身体の中に沈潜しているマゾの血は決して消滅してしまっただけではなかったのだ、時折りは頭を持ちあげてきては、私を、いらだたせた。奇クの緊縛モデルに、もう一度なってみて、お前自身のマゾ性を確かめてみてはどうか——という悪魔のような囁きが、私の耳もとにしたこともあった。

私の住所が変わったこともあって、奇ク編集部からの便りは入手しなかったけれど、もう一度、モデルになってみる——という可能性が、いつも私の心を、さいなんでいた。

それと、もう一つ、奇クの緊縛モデルになるため東京から関西へ旅行するということが私の大好きな京都の街へ行けるという誘惑につながり、私の心を大きく捉えるのだった。

夏が過ぎ秋が訪れて、私の心がなんととはなしに動いたが、勤めはじめの新入社員として勝手に休暇をとるということは憚られた。私が奇ク編集部へ、八もう一度、モデルになっ
てみたいVという便りを書かせたのは、皮肉なこと、やっと有給休暇がとれそうだったということが、きっかけだった。

そのきっかけがあったればこそ、私を何の躊躇させることもなく、関西へと旅立たせてくれたのであるが、女として、もう既に十分生育した自分の身体を、そして一糸まとわぬハダカの自分を眺めているとき、あからさまに、自分のすべてを、すみずみまでさらけ出してしまいたいという強い欲望が火をつけられたように燃えあがってくるのを、どうすることも出来なかった。

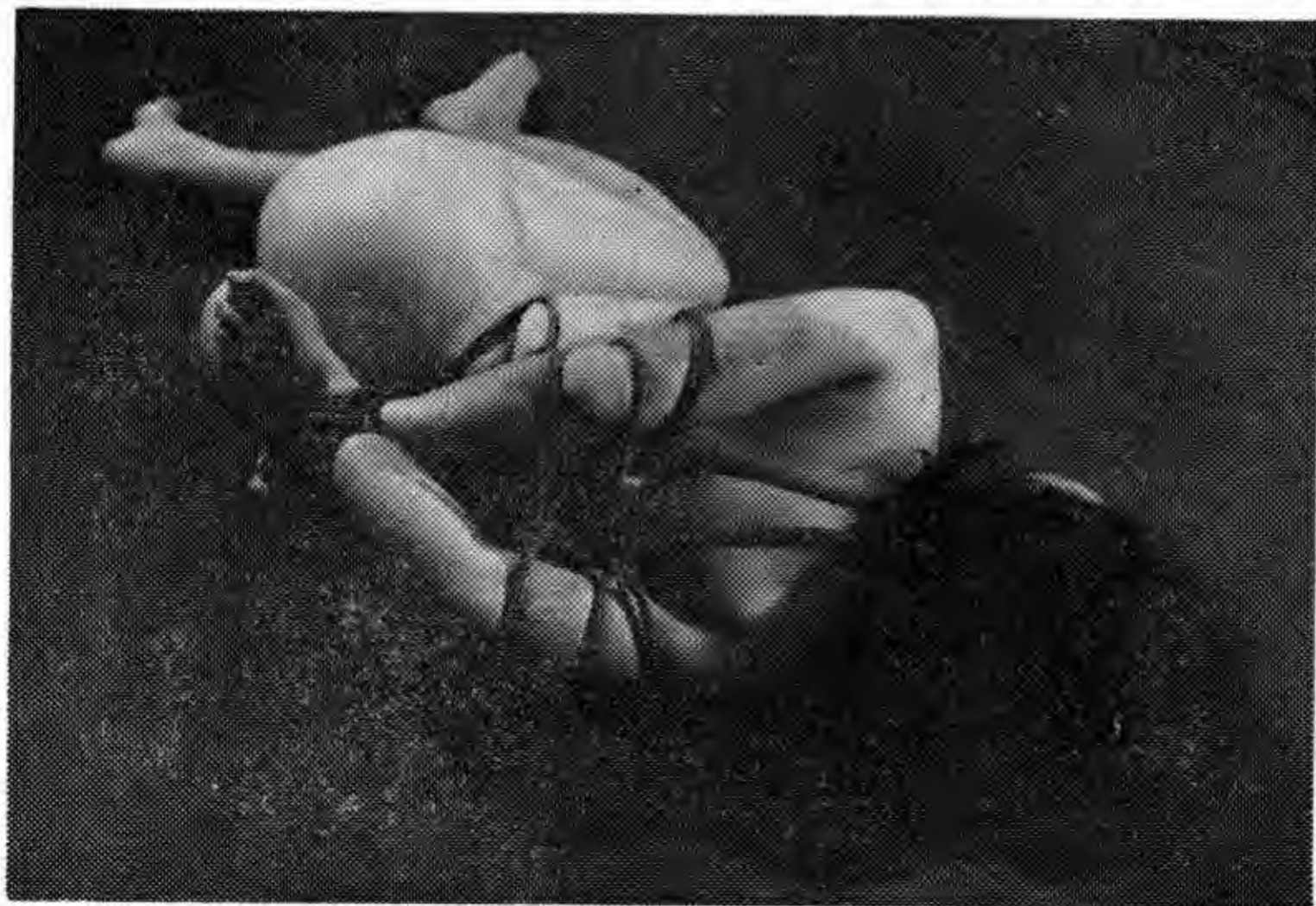
それは一年の間、私の胸の中にくすぶり続け、そして不完全燃焼のおりのようなものがこの完全に育った私の女体の中に充満していたような気持であった。それが、休暇がもらえて関西へ行けるということが、きっかけと

なって、一遍に即可能性として燃えあがってきたのも当然であった。

私は自分の被虐意識や被虐傾向について、まだまだ未発達、未熟なように思えて仕方がない。具体的に浣腸されたとか、擦られてみたいとかはどうしてほしいとかいう個性は持ち合わせていない。まだまだ経験が浅いから当然といえば当然であるのだが、幼稚という域から、まだ脱しきれない自分に、いらだちのようなものさえ感ずるのである。

だから、只今の自分は、奇クの緊縛モデルとして、麻縄できびしく縛りあげられ、ハダカの身体のすみずみまでをカメラの目で執拗に追い迫られる——と、そう考えただけで、私の全身が燃えあがってしまうのだ。

自分のそのときの顔も、また、女として最もかくしてお





かなければいけない個所も、縛られて自由の
きかない制限下に於いて、はつきりと写真に
うつされることは、恥かしければ恥かしいほ
ど直接、生理的な快感につながるのである。
どうすることも、押さえることも出来ない生
理的な快感は、また激しい羞恥感を私に与え
その強い羞恥感が、また、より激しい生理的

快感につながっていた。

その相乗効果は、私にそういった場面を想
像させるたびに、私を次第次第に恍惚状態へ
と誘い込んでしまう。幾度となく空想の世界
の中で遊び戯れた想念が、今、再び自分の身
の上に現実として加えられるのだということ
を考えると、私は自分の身体が何だか、がた

がたと慄えてくるような気がした。

古事記や万葉集、日本書紀などの古典を研
究し、その雰囲気や憧れている人は、当然、
奈良とか飛鳥周辺を旅してみたいと思うこと
だろうが、私は学生時代から古都京都を懐か
しむ心が強かった。それは何故かと尋ねられ
ても自分でも、はつきり答える理由は持ち合
わせてはいないが、平安京を定められた桓武
帝が「この国山河襟帯、自然に城をなす」と
言われたように、東山、北山、西山と周囲を
山にかこまれた京都盆地が、一〇〇〇年の王
城の地として平安文化の中心になっていたか
らなのだろうと思う。

源氏物語や枕草子、平家物語や源平盛衰記
それに徒然草や方丈記、古今和歌集に大鏡な
ど、当時の古典にしたしんでいると、いつと
はなしに私の夢は遠く平安京の、あえかにも
華やかな王朝時代を偲んでいる。そして、そ
の場面となった数々の遺跡を残す京都の街が
蜃気楼のように私の眼に浮かんでくる。

といって、私は実際の京都は余り知らない
のだ。一昨年の秋、十月五日に新幹線で京都
へ訪れたのと、その前年、級友と二人であわ
ただしい一泊二日の京都旅行をしたのに過ぎ
ない。そのときは、最もオーソドックスな嵯

峨の清涼寺、仁和寺、落柿舎、化野の念仏寺を第一日目に、第二日目は清水寺、産寧坂、高台寺、文之助茶屋、円山公園、西行庵、芭蕉堂といったコースであった。次の機会にはもっと京都らしい人に知られない裏通りを自分の足で歩いてみたいと思っていた。

そもそも、私が奇クのモデルを志願しようと思い立ったのはボーイフレンドだった彼の下宿で一冊の奇クを発見し、拾い読みしている私に彼が、「なんだか熱心に読んでいるな。こんな雑誌に興味があるんかい？」と問いかけられたのが、きっかけだった。

そのときは、モデルになろうなどとは夢にも考えていなかったのが、いろいろと議論をしているうち、「君は完全なMだから、立派な緊縛モデルになることが出来るよ。一度、志願してみてはどうか。君のような美人だったら、きっと珍重されるよ」と言われ、それが一種の暗示のようになって、私を支配してしまった。それでいて、彼は私の身体に指一本、触れようとしなかったのであるから彼は不思議な男である。

その彼も今では大手の電機メーカーに就職していて名古屋へ出向していると聞いた。

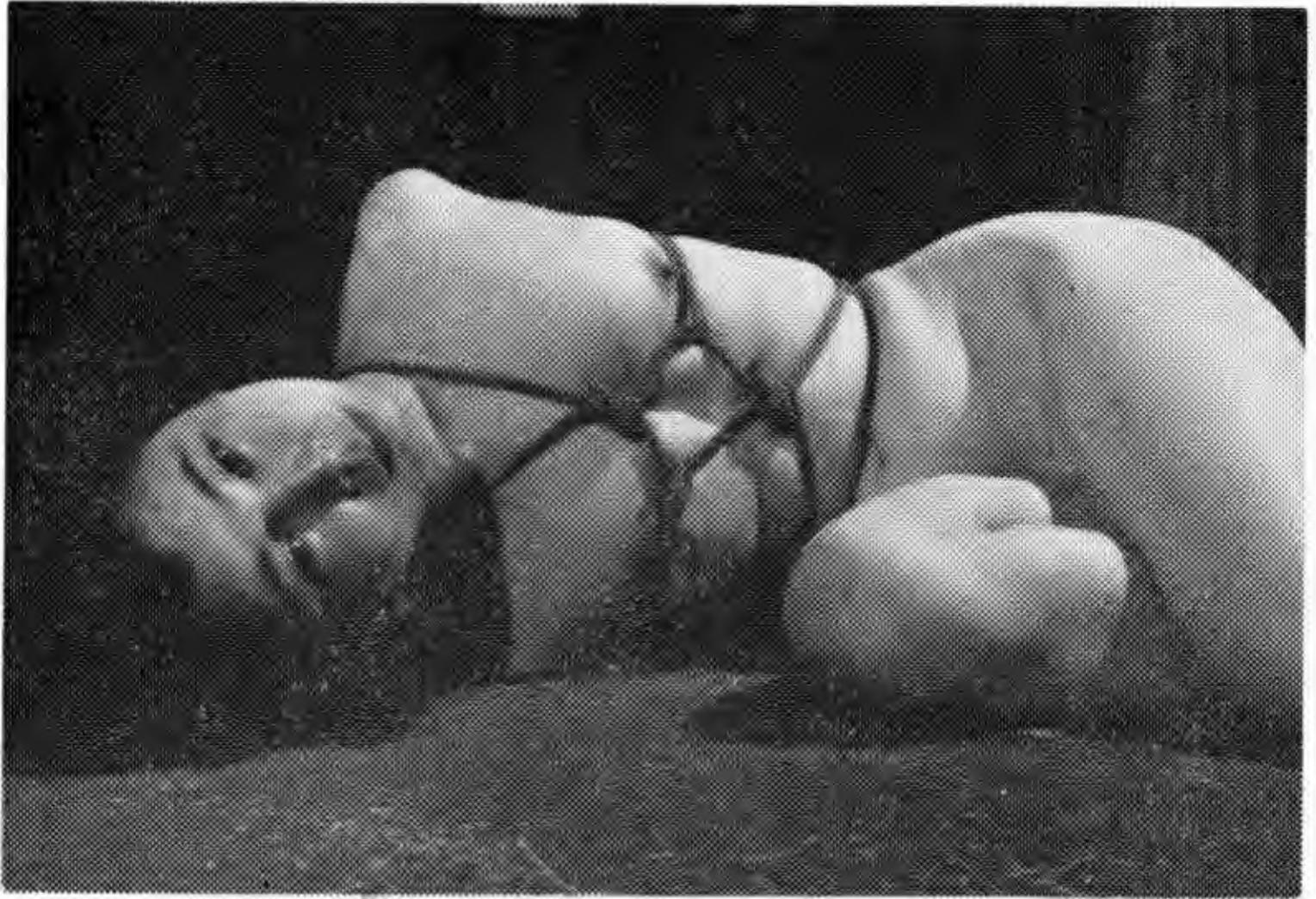
私が奇ク編集部へモデル志願の手紙を出し

たのは、日本中がエキスポ70の万国博人気で沸いていた45年3月のことであった。私も大学生の身として暇は十分にあったが万国博見物の費用捻出のためという虫のよい考えから交通費と宿泊費ぐらひは浮かしたいという気持があったのは、いなめない。

ただそれだけの理由か、といえば、そうで

はなかった。奇クをはじめて手にしたときから、私の胸にジンと響いてくるものがあったのである。それがなんであるか、ということ具体的を示せといっても、まだ何の経験もない私にとっては無理な話であるが、ただ、なんとなく奇クの内容に強くひかれてゆく自分を、どうすることも出来なかったことを差





かしいながら白状せざるを得ない。

だが、十月五日に上落して生まれて始めて縄の洗練を受けた私は、自分が裸身を縛られるというのに対して限りなく憧れを抱いていた女性であるということを実感した。

殊に全裸にされたときは、自分がこうされるのが好きだという強い衝動が胸をゆさぶったし、縄が白い肌を締めあげてゆくと、今までに経験したことの無い、やるせないような快感が全身を、しびれさせたのであった。

この第一回の経験によって私は縄の魅力、縄で縛られることの魅力を、自分の肌で、じかに感じとり、彼が私に言った「君は、完全なMだから……」という言葉が、そら恐ろしいような迫力で私の耳元で蘇った。

十月五日と六日の両日の午

後、私は全裸の一糸まとわぬ姿を縛られて写真を撮られたのであるが、白い肌のすべてを人前に晒すことで、晴れがましい楽しさを味わったし、縄で縛られて自由を拘束されることに、被虐の象徴的な喜びを味わった。

十月七日の午前中、私は随心院と醍醐寺を訪れることによって、遠く平安朝の時代に夢を馳せ、その当時の町を自分が一人で歩いているような錯覚に陥った。全裸に剥かれて、トゲトゲしい麻縄で縛しめられることは、私の心の奥底に沈潜している心のふるさとへ帰ったような気持ちにさせられるのであるが、京の古い街を訪れることは、この二つがオーバーラップして私の頭の中で一つのイメージにかさなってしまうのであった。

随心院の門前は、華やかな観光寺とひきかえ、一台の車も停まっていな淋しさであったが、一步、門をくぐった両側の築地塀の美しさは先ず私の心を完全に奪ってしまった。

門や表通りの佗しさにひきかえ、築地塀に沿って植えられたツツジの緑が、美しく白い壁に映え、樹立の彼方には、さして高くないこんもりとした山が、借景のように手の届く近さに見えていた。この随心院の近くの竹藪の小径を深草少将が小野小町に毎夜、通った

ということであるが、庭内の草深い小径の奥に、小野小町の化粧の井戸というのがある。

私は両側から垂れかかる草を払いながら、その化粧の井戸というのを見に行った。かがんで、井戸の水を右手の掌で、すくって見ると指の間から白い水玉が、ぼろぼろとこぼれ落ちて、井戸の水の面にころがっていった。井戸といっても手を差しのべて水面に届くらしいの水溜りのようなものであった。

今昔物語に出てくる勧修寺というのが随心院の隣にあるのだそうだが、七千坪はあるという庭園、池泉を拝観していると私の思いは遠く平安朝の昔に馳せてゆくのである。当時桜をかざして回遊した大宮人のたたずまいも偲ばれ、平安朝の人達の胸のざわめきが、じかに私の心に迫ってくるような気がする。

ここで私の一番嬉しかったのは誰一人、私の他に人影がなかったことである。私は心ゆくまで平安の昔の幻想に酔うことが出来た。

思い返してみると、昭和46年、昨年一年間はSMとも京都とも、すっかり御無沙汰してしまっていることに気がついた。今年24才の私にとって、この一年間のブランクは、たしかに大きいように思う。奇ク編集部と地理的に、もっと近ければ、更に機会があったこと

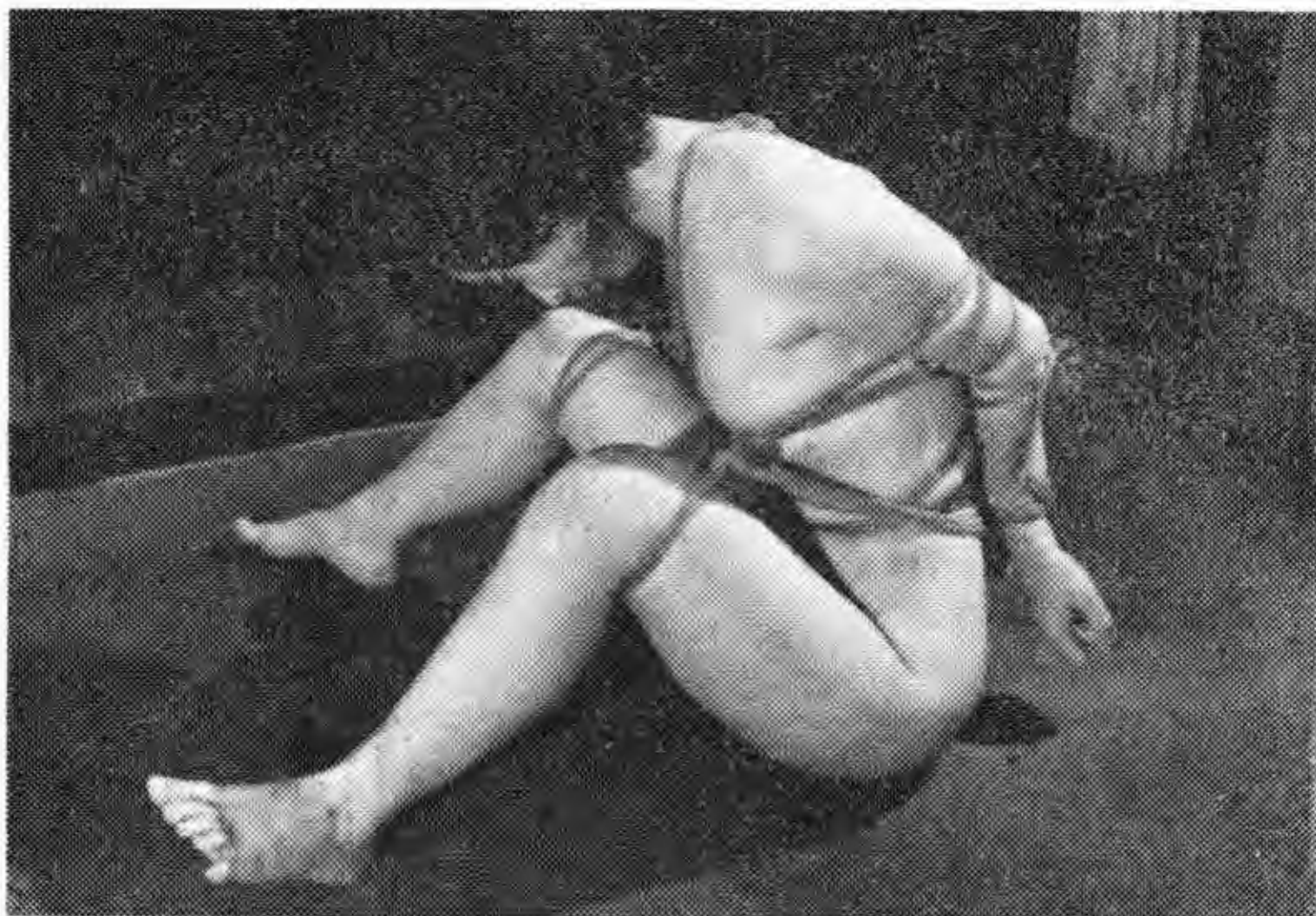
と考えられるが、東京と大阪とでは、如何に交通機関の発達した現代といっても、ちょっと二、三時間、暇があるので立ち寄るといいうわけにはいかない。

暖冬異変の続いている昭和47年1月、私は一年何カ月ぶりかで京都を訪れるために、再び新幹線の車中の人となっていた。与えられ

た四日間の休暇の日程を、最も有効に使って出来るだけ広範囲に京都の街を歩いてみたいと考えていた。それだけに時速二〇〇軒で走っている電車も速くないと感ずるくらい気持ちの方だけが先走っていた。

京都駅へ着いた日は、どんよりと曇っていて、鶯がいちめんに立ちこめ、屋並をすっぽ





りと包んでいた。それが目指す銀閣寺道へ着いたときは霧のような驟雨が、しとしとと音もなく降っていた。傘を差すほどのこともなかったが、舗道が黒々と光るように濡れていて道の片側に連なる樹々の緑が美しかった。

私はコートの際を立てて、ペーブメントを一人で歩いていった。こつこつという私のハイヒールの足音が、はっきり聞こえるほど街は静かであった。道の片側に車がずらりと駐車されてあったが、行き交う人も車も、ほんまばらでまるで眠っているように静寂な街であった。流れている小川の水も街中と思えぬくらい澄んでいて、急な流れを見せているのは、少しは山にさしかかっているのだろうか。

角に交番があるところからは、両側に土産物を商う店が並んでいて、道幅もぐっと狭

くなっている。シーズンオフの今、その土産物店も三軒に一軒は表を閉じていて、なんとなく佻しく感じた。小驟雨の降る、うすら寒い冬の日、わざわざ銀閣寺を訪ねる物好きな人も少ないのであろう、至って閑散としている。ゆっくりと昔の京を偲びながら物思いにふける私としては、この静けさは極めて幸いしていた。山門の手前に一軒の古びた茶店があって『甘酒』と書いた短冊のような看板がひらひらと風に舞っていた。

硝子戸を閉じた店の奥はうす暗くて人の気配もないようである。三つばかり置いてある縁台に腰をおろして、私は静かなたたずまいの銀閣寺の門前の風景をあかず眺めていた。山門を入ったら直ぐ直角に右へ道は曲っている。一筋の掃き清められた砂利道の両側にある石垣の上の生籬は見事に刈り込まれて美しかった。年輩の外国の上品な婦人がこの生籬の曲り角で、逆に山門を見上げて、連れの一人に何か話していた。あたりに人はなし、私も思わず、その婦人に語りかけたくなる様な一瞬であった。

私は東京から、わざわざ京都まで出向いてきて、銀閣寺の入口にある、この生籬を見ただけで、来た甲斐があったように思った。

私は古びた土塀、くずれかけた築地塀などを見るのが好きであるが、このようによく手入れされた生籬を見たのは生まれて初めてであった。閑散として通る人として少なく、この一筋道であったからこそ、強い感銘を受けたのかもしれない。緋雨もすっかり止んで、薄陽を受けた雑木の葉の緑は、冬とは思えぬ艶々しさに輝いていた。

銀閣の庭園の人工的な美しさも私の心を酔わすに充分であったが、霧雨にしっとり濡れたこの小径の両側の生籬の美しさの方が、私の心を、しっかりと捉えて放さなかった。

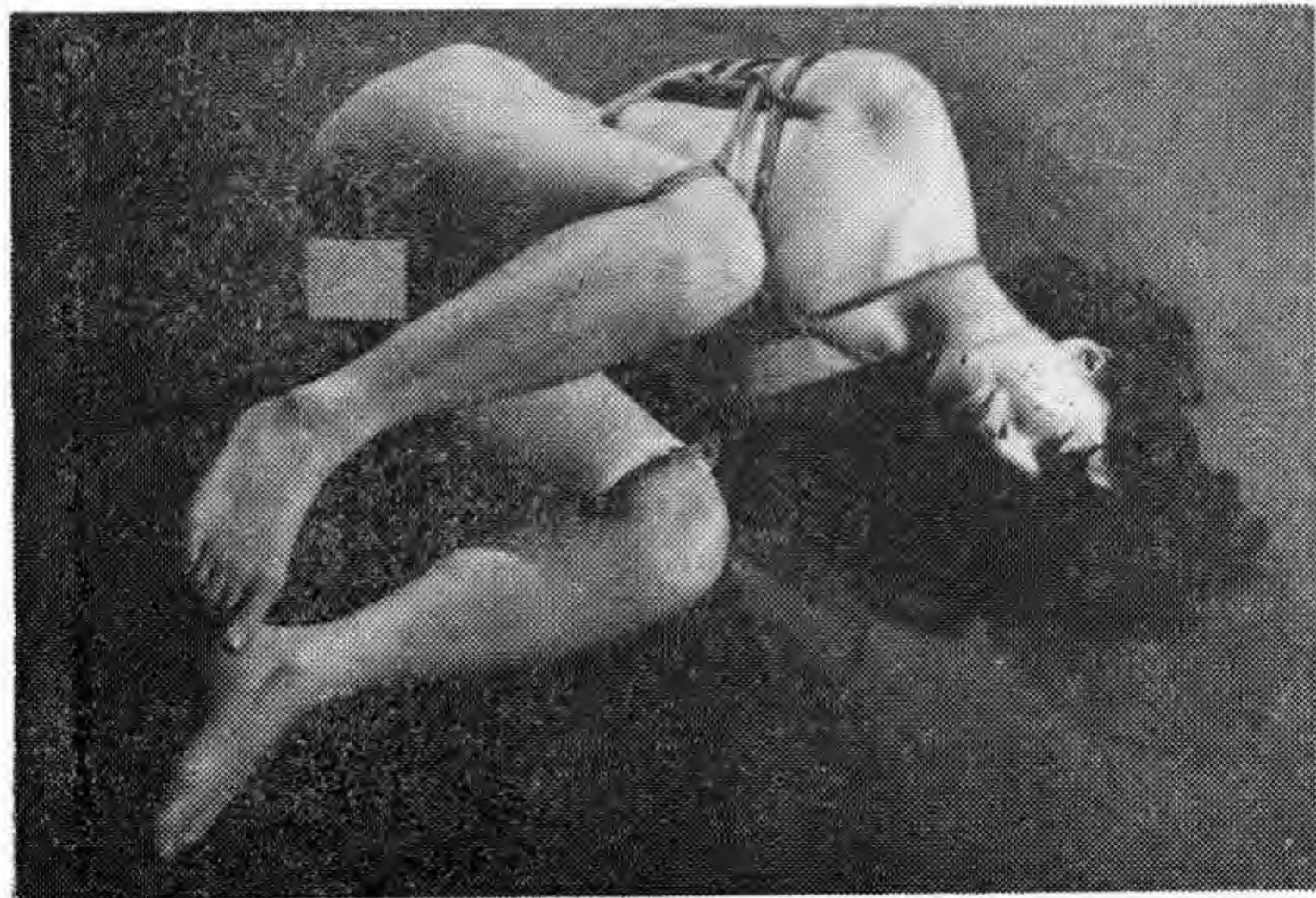
次の日は午後、私は緊縛フォートのモデルになるという編集部との約束があったので、昼食をはさんで、ほんの二時間あまり京の街を一人で歩いてみた。

以前に歩いたことのある嵯峨野の野宮のあたり、平安時代の面影が色濃く残っているとされているが、今日は時間の都合もあって観光客などの殆ど歩かない、京都の町の人だつてその土地の人でなければ歩かない様な道を通った。といっても私が、わざわざ、そんな所を狙って行ったのではなくて、道不案内の私が道に迷ってしまったって、結果的には迷路に、はまり込んだような格好になったのだ。

この日、私は朝十時に宿を出て京阪電車の三条駅で下りた。以前に車で通ったときのあの加茂川にかかった三条大橋の感じが、とても好きだったので一度じかに自分の足で歩いてみたいと思っていた。だが、駅前に出てみて私は先ず巨大な陸橋がクモの巣のようにならぬように交差点を占領しているのに驚いた。

皇居を巡拝している高山彦九郎の大きな銅像も陸橋の下で小さくなっているようだ。私は三条大橋の方へは行かず陸橋の上から銅像を目の下に見おろして、自分の予想していた風景と全く違っているのに、思わず目まいを感じるくらいだった。行き交う車の激しさは、これでは新宿並みである。

陸橋を下りて五、六十歩も歩いたらうか、池田屋事件殉難烈士の墓があるという小さ





な寺があった。寺といっても大衆浴場そっくりの構えで、何も見る物とでもない。直ぐ表は停滞した車の排気ガスで息もつまりそうである。暫く辛抱して車の流れと共に歩いていったが堪まらなくなって信号のある所から右へ折れた。この道はまだ広かったのだが途中で左へ曲ってから道は急に細くなった。

曲ったかと思うと道はすぐ行き止まりで、再び左へとると又、行き止まりである。

人一人がやっと通れるくらいの軒を接した屋並みで、今では私なんか見たこともない駄菓子屋が二軒もあった。まるで江戸時代の長屋のセットのような街が続いている。

行き止まりの道が右の方へ曲っているので仕方なく、そのままその道を歩いて行くと又もや行き止まりである。突き当たった所が、大將軍神社

というお宮であった。大きな樟の木が茂っていて境内はうす暗く人の気配もない。門を潜って余り広くないお宮の中を歩き回ってみたが、物を尋ねようにも誰一人いない。落葉だけが風に吹かれて、かさかさ音を立てているばかりである。

やはり京都は戦災を受けていないから、こんな裏通りが残っているのだなあと感心させられた。東京でも、所によっては裏町へ入ってゆくと、石垣の上に草が茂ったあたり江戸時代の名残りの片鱗を見せていて、はっとさせられるようなことも時折りあるが、このように街全体が、まるで映画かテレビの時代物のセットのような建物が続くのは、きわめて珍しい。

お宮に突き当たったので仕方なく右方向へ足を向けたが、又もや行き止まりで丁字路になっている。それを左へとれば今度はカギの手には道は自然に左へ曲っている。まるで迷路へ迷い込んだ小羊のような私。行き止まりではなかったが、歩いている道を右へとって、やっと市電の電車道へ出た。

そこは今までの江戸時代の街並みとは一変して凄い車の列である。知恩院前という市電の停留所の標識を見て、私ははじめて自分の

現在位置を確かめることが出来た。

懐古趣味の私が、物思いに耽りながら歩いた京の街の思い出は、まだまだ、これから続くのであるが、読者の方々には退屈だろうから、このくらいにして打ち切ろう。

それよりも、その日の午後を受けた私の緊縛フォト撮影の方が、より興味を持っていただけのことと思う。

わざわざ休暇をとってまで、東京から関西まで来たのは、お前のその白い肌を麻縄でギリギリと縛られたいためだろうと、そう問われたなら私は、はっきりと否定できない自分の心を知っている。

京都を見物したいなどいうのは、それは表面的な口実であって、実際は女としてのお前の性^{さが}が、縛ってほしい、縛られたいと叫んでいるのだらう。それだったら、そんなテレかくしをしないで、女らしく、はっきりと縛ってほしくて関西へ旅してきたと言えと、そうきめつけられても私は一言もない。

実際のところ私は京都の街の裏通りを一人で歩いていても、そのことがいつも頭の中を占めていた。縛られることが何故楽しいのかそれは私にもわからない。でも、今日の午後何カ月かぶり、自分の裸の肌にじかに縄が

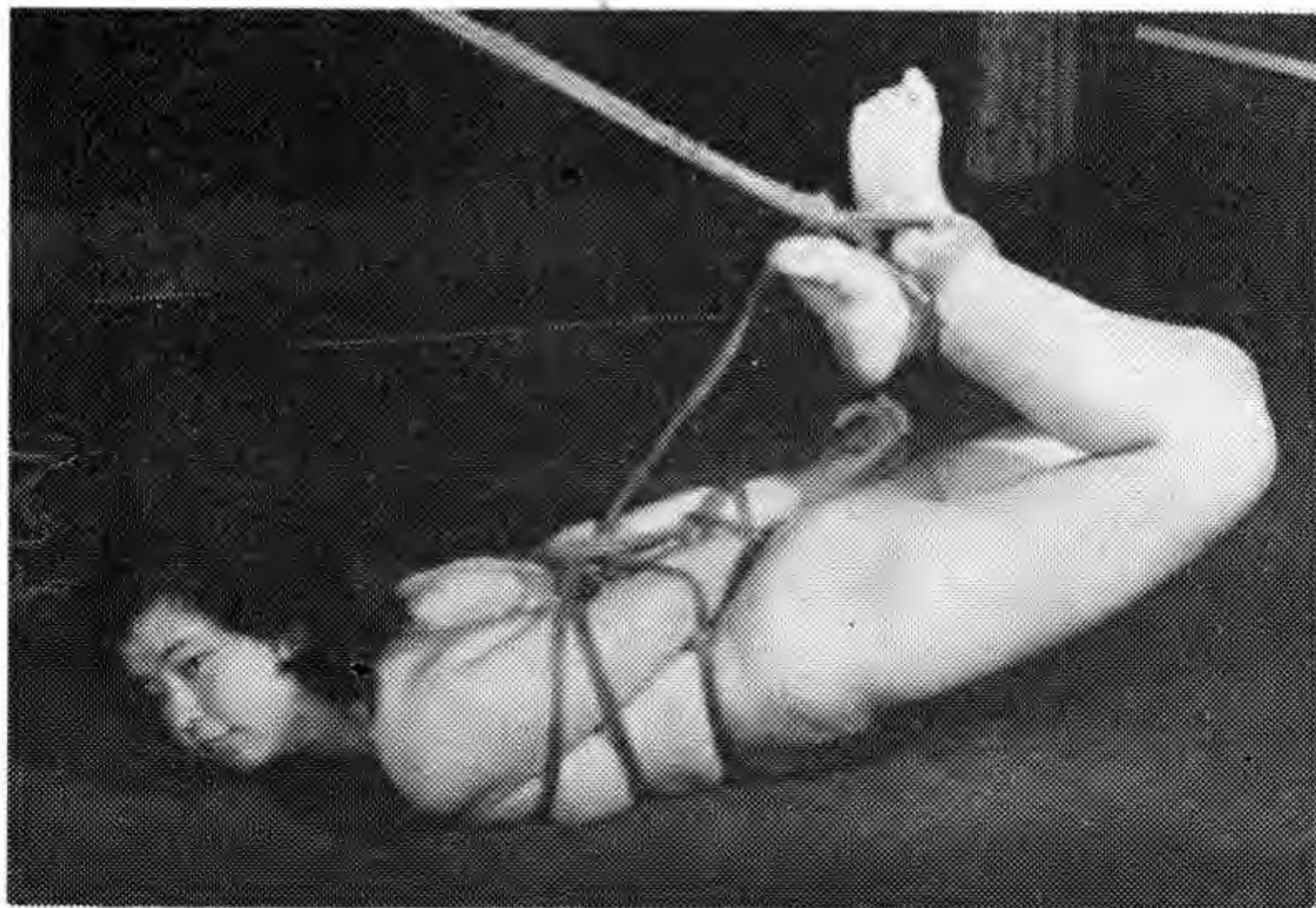
掛けられるのだ。現実になんか体験できるのだと思っただけで、何となく心が弾んでくるところを押さえきれなかった。

昔のままの、たたずまいをすっかり残している京の街を歩くのも楽しい。これは嘘いっわりのない私の気持であるが、それよりも、もっと現実的で、もっと肉感的な迫力をもって私に押しつけてくる快感は、我が身を緊縛されることであると白状せざるを得ない。

それは何故なのか、自分でもわからない。

ちよっぴり抱く不安と、羞恥の入り混じった気持ち、私の昂揚した緊縛への憧れが入り混じって適当にブレンドされ、指定された場所へ落着いた時は、そんな心の葛藤は何事もありませんでしたよ、という顔付きをしていた。

平常から口数の多くない私



であったが、そのときは更に無口になっていた。だが、目だけはすべてを観察しようと思ったような目つきになっていたことと思う。

「君のその澄んだ目で、じっと見つめられていると、仕事がやりにくくて仕方がない」

と言われたことがある。喋らなくて、只、じっと見つめているだけ、というのは、私を責める人にとっても、きつと、やり難いのに違いない。嬉しいときには、はしゃぎ回り、痛いときには大仰に叫び声を挙げる方が反応があつて確かに、やりよいように思う。でも私は自分の性格としては、そのような演技じみたゼスチュアはしようとしても、とても出来ない。俳優としては演技力はゼロである。本当の素人といってよい。

縛られることは好き、責められることも大好き。——という一人の成熟した女性に過ぎない私。今日で二回目の経験であるが、第一回目のときから一年何カ月も離れている。だから、今度も始めてのときのように、第一歩から馴らされなければならぬ私。

縛られることが好きだ——と、言っておきながら、実際はそれほど好きではないのだらう。だって、一年何カ月のブランクだって、お前は辛抱していたではないか。と、問いか

けられるかもしれない。しかし、そんな疑問を持つ人は、女の生理というものを知らない男の人の言う言葉である。

女の肉体というものは、男の人の考えているような爆発的なものではない。私のような経験の浅い女性にとっては縛りたいといつても、より観念的なものであるから、妄想とか空想とか、或は期待とかによって満足させられる部分が非常に多いのである。

午後の二時から六時まで四時間に亘って、私の身体に加えられた麻縄による緊縛は、私の抱いていた空想と期待に對して、一つのピリオドを打ってくれたように思う。

私は黒ずんだ麻縄によってむごたらしく縛りあげられ、ひしゃげたように変形した自分の白い肌を冷ややかに眺めながら、その白肌に「ざまアみる。もっともっと苦しめ。



色が変わるまで苦しめ」と叫んでいた。自分の肉体に、嘲りの言葉を浴びせていると、その皮膚の痛さがジーンという弾力性の凄い快感に変わってきた。

両側の膝に縄を掛けられて仰向けにころがされると、自分の意志とは反対に、いやでも脚が開いてくる。お尻の方からカメラが狙っ

てくる羞かしさも忘れて、私は開けきった自分の足に向かって罵倒を浴びせかけていた。「上品ぶって恥かしがることなんかありません。いいんだから、縄で縛られた足を思いきり開けりゃいいんだ。それがお前の本当の希望なんだろう。さあ、開け、開け」

そう呼びかけると、ぐっとそり反った足の

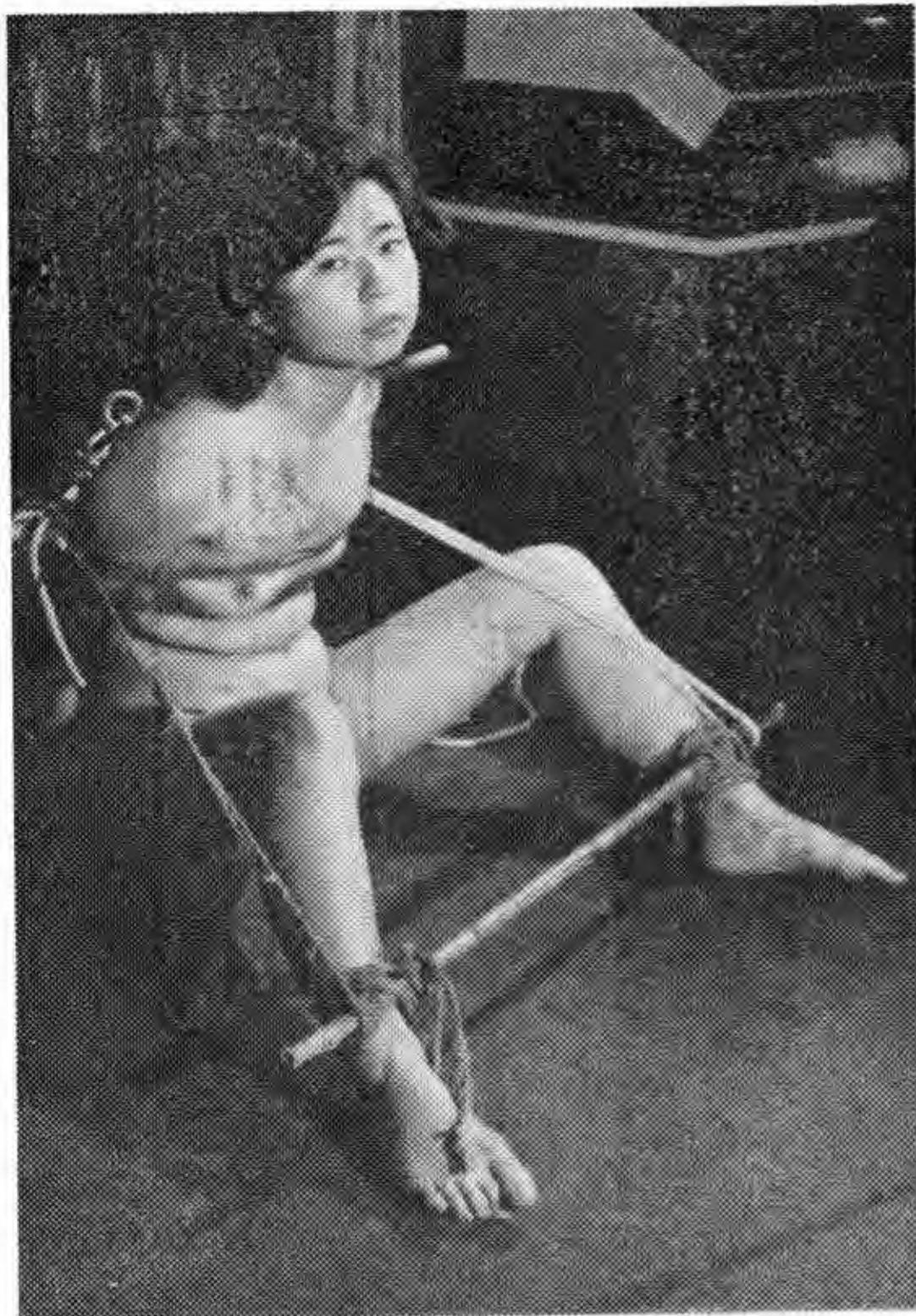
拇指から足の裏へかけてジーンと快感が走り、それが踵へ移ったかと思うと、忽ち脛の筋へ電流の様に伝わった。脛からは、もう太股の裏側を通して太股のツケ根へと、快感は私の意志を無視して伝播していった。

もうそうなってしまうと、背中の下敷きになっている縛られた後手首の痛さも麻痺してしまっ、と、いうよりも、痛いのが故の快感が、じわじわと全身に伝わってきたのだ。

私は自分では予想できないような行動に出してしまった。真正面からカメラを向けられているのに、足をすぼめるどころか、もうこれ以上ひろげられない程、両足を思いきり左右に開いていたのである。カメラのレンズが向けられていいると、そう考えただけで、私は目くるめくルツボの中で狂ったように燃えあがっていた。

私の裸身はクラゲのように柔らかくなり、麻縄でどのように厳しく縛られても、痛さを感じずどころか、身体のすみずみまでもカメラに晒す喜びに打ちふるえていた。

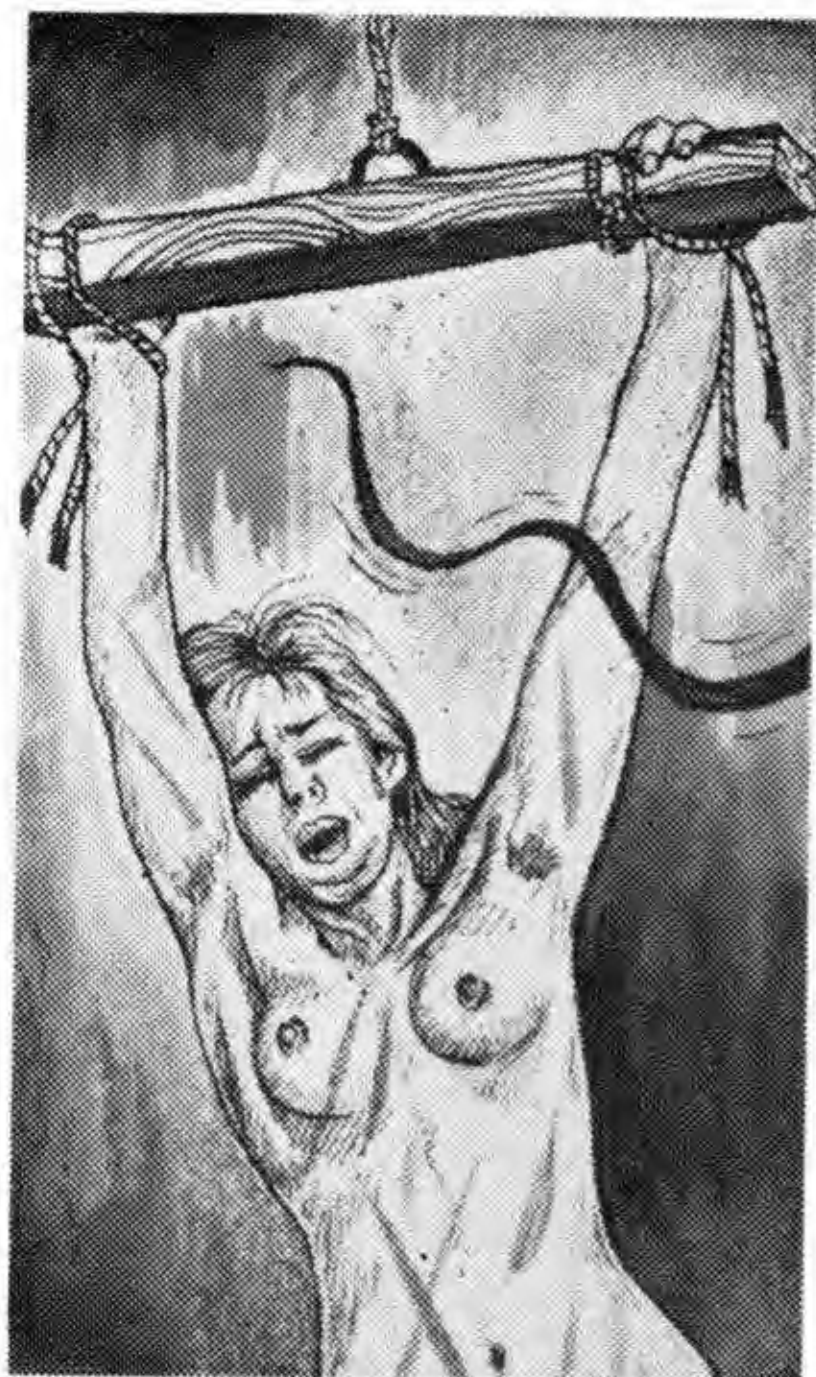
私は、なんという女なのだろうか。私は頬を真赤に染めながら、言いわけの言葉を必死になんて探していた。



連 載 創 作

幻想帝国

花 影 叢



カッタ・小 川 茂 正

ゼーヤ河に氷の割れる音が、とどろく。
あらわれた蒼い水面にのって、砕氷が河をく渡る。しかし、それは午後から夕刻にかけての、いつ時のことで、夜になると割れめはまた薄氷におおわれ、時には両側からの氷塊の圧力で氷がもりあがり、朝、人は河上に氷の作るバレエの舞台の乱舞のような自然の華の丘を見いだすのだ。

倉庫の事務所に憲兵隊事務所がある。

今しも密偵の露人イワノフが、建物に足を踏み入れた。入口の立哨の兵に身分証明書を示している。

ほぼ一カ月。春に先がけて、ゲリラの根拠地になっていられるとみられるゼーヤ河。その支流のセレヌジャ河の合流点近くまで威力偵察行の作戦があり、イワノフは住民に対する通訳及び案内人として一中隊に同行したのだった。

セレヌジャ河を逆のぼると、ブレインスキ―山脈をこえてアムグニ河からアムール河口ニコラエフスクに達する。ゼーヤ河からレナ河流域に出る道がある。すなわちシベリヤ鉄道を日本がおさえてもバイカルからオホーツク海への道は確保されているのだ。春になれば、このルートが活発化し、よしんば兵力装

備の違いからゼーヤ中流域の日本軍主力をおびやかすまでには、いたらくとも、北からオホーツク、ブレヤ河の炭田地帯、ハバロフスクと、かきまわし戦術をとれる自在の位置がゼーヤ河谷なのである。しかもタイガにおおわれて、ほとんど難攻不落の要塞地帯をなしている。ロシア人の頑張りが、そこで物をいうことになるのである。

偵察隊は敵と接触しなかったが、タイガを一カ月さまよって、抜けでて来たのが奇蹟みしいものである。通訳といっても住民ひとりにも逢わない。案内役としては、頼りにされ心細い内心を押し隠して、河相、過密林など説明するものの、イワノフにしても読んだだけの知識、聞きしにまさるシベリアのタイガに、どぎもを抜かれた恰好であった。

凍った河がある時は唯一の道だが、決して平坦につづいていない。満州でスケートを楽しむところと根本的に氷相が違う。

とにかく二週間かかって五〇キロも進めたであろうか？ 支流はいくつかあり、どれが本流だかも地図があっても迷う。義務的に日時を消し、帰途予定についてからは欲も得もなく引き返した。それも果して通ったとおりにたどっているものかどうか、一カ月ぶりで宿

営すると空の一角に、ほの明りをみた。幻ではあるまいか、と危ぶみながら、それがスボボドヌイの灯だとわかって、兵たちも涙を流した。その涙が、ほほで、ぱりぱりと凍るから、妙なうれいような情ない様な気持ちだ。

シベリア征服など、こいつは容易ならぬぞ、とだれしも思ったことであろう。まず、イワノフも日本の立ち往生を信じた。ロシアはピョートル大帝以来、三百年の日時をかけているのだ。

疲れ果てた足を憲兵事務所にむけると、近づく辻々で検問をうける。それが皆、新顔の腕章さん達だ。イワノフの顔も、さっぱり通じない。いい加減うんざりして、建物にいたると内部がシンとしているようで、何となくさやめいている。人の温気がムウンと鼻をつく。兵数がふえたせいか、と思えるが、どうもそれだけではない。イワノフの鼻が、ひくりと動く。仕事を嗅ぎつける。しかし、いまは反射的に狢犬のように反応する神経を失っている。少々、うんざりする。

「おう。帰ったか。ご苦労」

と原口憲兵曹長が、机から振り返ってイワノフを一瞥し、

「だいぶ、こげたな。ひとつ焼きが入って頼

もしくなったぞ」

ワッハッハ。と空いばりの豪傑笑いは変わらない。雪やけというが、イワノフのは氷やけである。鼻の頭の赤くうれた珍妙な色どりを曹長は笑ったのだろう。

「うむ。報告は、いい。所管が違うからの。しかし、まアゲリラは出て来おったか？」

「はあ」

とイワノフの返事は、さえない。

「疲れとるようだよ。まあ、今日はかえって休め。カチューシャとかいったの、お前の巢のマダムは」

「はあ、しかし」

とイワノフは生ぬるい返事をした。日本人を相手にする時、気をつけなければならないのは妙な温情的な、せりふの裏側だ。額面どおり受けとって、さっさと背をむけようものなら、ピストルの弾をうちこまれないまでも今度くる時、小股すくい毘をしかけられると思っておかなければならない。

「何だ。何かもの足りなさそうだな。そうしておってもポーナスは出んぞ。今度のことは師団本部じゃからな、窓口は。——が、元気がまだあるなら見世物でも見て行くか。明日からのお前の仕事の参考にもなるしな。まア

大分、長いおあずけだったから、ちょっとした刺戟にはなるだろう。何、たいしたことはないがの」

開いていた書類つづりを閉じ、原口は立ちあがった。

「たいしたことはないがの」

と原口は、くり返した。

「何せ数が多いから、壮観じゃ。ロシア女というのは、まアどれも感心するほど肥えとるで。並ばして、ケツをわらせると、むっくりむっくりと、豚というより河馬の行列じゃ」

どれほどのロシア女を捕えたのか？

地下室への階段を下りるのかと思ったら、倉庫の本屋の方へ行く。なるほど多人数の温気は、そちらから、ただよってくるようだ。

年を越して、住民との接触はないが、軍政の用意がととのい、まず手がけたのは、駅からゼーヤ河の橋へむかう途中の裏通りの一本の住民をいっせい検束してしまったことだ。軍隊がとり囲んで、それこそ、蟻の子いっ匹残らないまでに住民を通りに追いだし、倉庫へ行列を作らせて集まらせた。家屋中を調査し、住民を移動させるのは憲兵隊の仕事だ。

手にもてるだけの衣料と食料は持たせたがそれ以上の持ちだしは禁止。ひとつ通りで五百人ほどの住民がかりだされたであろうか。どういうわけかイワノフには調査や連行組織の仕事は、まわってこなかった。

といってもイワノフの嗅覚は敏感に動く。いよいよ、おいでなすったね、と思う。ナチスのユダヤ人狩りのようすは聞いているし、たぶん、それと同じ狩りこみの光景が、その早朝にみられたことは疑いない。

倉庫に入れられた五百人は、しかしイワノフの目にも触れない。

ゼーヤ河沿いの倉庫、製粉製材工場は、すばらしい大規模なもので、日本人にはとてもこれだけのものは作りだせまい、と感じる。

平時なら材料製品がつまり、冬期でもシベリア鉄道を利して般出入があり、工場も稼働しているのだろうが、日本軍がおさえたのは空の倉庫だった。その一郭へ吸いこまれた五百人は、まるで目につかない。

そのうち、はずれの棟のひとつから、石炭をたく煙がでしたので、あそこだな、とわかったのだが、附近はイワノフにもなじみのない一隊が固めていて、身分証を見せても通してはくれない。

空屋になった通りは娼婦街になった。

以後、狩こみはないようで、あれは娼婦街を作るためのでき事か、と思い、五百人のことも忘れているうちに、今度の作戦行に、とばされたのだ。

その狩りこみが本格的にはじまったという事であろうか？ イワノフは原口の後にしたがいがいながら、いそがしく頭をめぐらせた。さがせば、何か新しい仕事、うまいもうけ口にありつけるかも知れない。

日本人のする事が、何を目的としているのか？ それしだいによっては、大きな請け負い仕事も生じるだろうし、ロシア人からも、しばれるという訳だ。

匂う。うまい、ごちそうの匂いがプンプンする。とイワノフは鼻を、ぴくつかせる。

河馬か豚か知らないが、そうなると大切なお得意さんだ。せいぜい喰いこんで、鼻をつっこんで、なめまわすほど可愛がってやるぜと、イワノフは疲れも忘れて、舌なめずりしたのである。

重い木のひき戸を立哨の兵があける。ピーンと木と鉄が鳴る。

天井が低くなった小部屋だ。小部屋といっても学校の一教室ぐらひはある。

「何だ」

原口は蜚声をあげた。

「今日は河馬の行列じゃないな」

「は。曹長殿」

部屋にいる四人の日本兵、十人ほど（と目かんじょうした）のロシア人を一列にならばせた前の中央にふんぞりかえったリーダー格の階級章、伍長が、原口をみとめたとたんにピンと気をつけの姿勢をとり、報告した。

「昨日で検身は終了であります。本日は共産党員家族とおぼしき者を尋問し、情報をえ、かつ、懲罰をあたえる予定であります」

「よろしい。作業続行」

と原口も答礼した。

「というわけではありますが、曹長どのが、おのぞみなら河馬のダンスでも何でも、お目にかけますが」

と伍長が態度はそのままに顔だけゆるめ、にやりと笑った。

「気をつけ、なおれ」

と原口は態度をくずし、

「いや、いい。お前らは、そのまま、つづける。おれたちは見学だ」

「はい。作業続行いたします」

一家族であるらしく年令さだかではない。

老婆を頭に五十代らしい夫婦。三十代なかばと見える一家の嫁らしい女。それから、ひとり、はでやかな娘。その下は、ずっと子供になり、小学生の年ごろの三人。いたずら盛りの男のこ。一番チビが三才ぐらいの女のこ。

二十代の男がぬけている。それに、あるとすれば十五才から上。

まずゲリラに加わっているとみえる。しかし、この町ではこの家族ぐらいが平均で、とりたてて怪しいようにはイワノフには見えな

いが。しかし、懲罰のいたぶりが目的なら、運悪く、くじをあてた一家なのであろう。

家族は、すべて丸裸である。チビッ児まで毛をむかれた鳥のように寒々と立たされている。金髪のソバカス顔。男は老人までガッシリした骨格。女は腰郭が張り、胸が、そっくり返るくらいに熟れたタイプ。嫁と娘、息子の三人が栗毛だが、そばかすは大小とりどりだが、そろっている。

主婦の五十女が、年なりのおとろえを、まったくみせていず、むくむく段をつくって肥えたからだに肌が、また脂光っている。嫁も骨格では、おとらないが、肌がややすすけているのは東洋系の血をうけてか？ 娘は、み

るからに、ほんのりした桃色で、寒さと緊張のせいかわピンクが、ややまだらに、新鮮なハムの切り口のようになっている。

女たちは首をたれている。少年が、むっとした顔つきだ。

兵のひとりが曹長とイワノフに折りたたみ式の椅子をもって来て、すすめた。

原口は列のななめうしろに椅子を、すえさせた。

伍長が演説をはじめた。メモ式に書いたものを手のなかでチラリチラリ見ながら、ロシア語の一文句を、ぶつ。

「お前たち、家族、共産党員いる。名前をお前たち、いう。いわないと、いけない。いわないと、お前たち、銃殺」

なんとも妙ちきりんなロシア語だ。日本人のポキポキした発音になれているイワノフには通じるが、果たして彼らに通用するのか。

どううけとったものか、列のうしろに来てしまったのでイワノフにも彼らの顔色がうかがえない。イワノフが出ていって喋ればいいのだろうが、日本人は縄張り意識が強いので出しゃばりは見送った方がいい。

日本兵は武装なしで、草履ばき姿だ。それだけでもこの作業が非公式な、お遊びと知れ

僕のイメージ画集

『子守のせっかん』

室井 亜砂路



る。竹刀を手にして、やがて二人が列の背後を、のそりのそり、歩きはじめた。

「よし、お前ら、這え」

と、これは日本語で、どなった。どうもうまく喋れないので伍長も苛立つのだろう。

「這え、這いつくばれ。口助のブタ共」

と、わめいた。

三人ともども床を竹刀でたたいて鳴らしたが、やはり通用しない日本式の芝居で、家族は誰も反応もみせず、のそりと突っ立ったままである。

伍長が、顔をまっかにして走った。列の最右翼にいるチビ娘をとって喰う鬼の勢いでひつつかみ、中央にひきずりだす。

「ギャー」

と、けたたましい幼児の喚き。いい加減の神経の者ならちよっと手を下しかねるところだが、赤鬼になった伍長は

なおも小さな者の手足を、とりひしごうとする。

頭をわしづかみ、ぐいと床に近く押しつけ手伝いに寄って来た一等兵に押さえつけさせて、今度は床にくずれてしまった腰をたたせる。竹刀を、小さな尻の下にこじ入れ、ぐり押しに腰をあげさせるのだ。可愛いぼっちゃりした尻が天井をむく。その間も泣き声の連続だが、鬼どもの手は容赦ない。

母親が列からとびだした。子供たちが、わらわらと乱れて、いなごのようにとびついて行く。

「くらー」

と赤鬼伍長は、すっかり逆上して、竹刀をふり廻すが、竹刀でなぐられたぐらいでは私たちの肥軀は、ひるまない。

曹長は椅子から立ち、しばらく混乱の渦にかわった形勢をうかがっていたが、チビの上の小娘に目をつけると、すいと寄って手を取り、すばやくねじ上げて自由を奪い、軍刀をすうり抜き放ち、小娘の喉笛にあてた。

「ヒー」

と細い声をたて、小娘は目をでんぐり返した。その声に一同、ふり向いて、事態をさっし、いちように顔を蒼白にし、動作が凍りつ

く。

赤鬼伍長も兵二人も形勢に応じ、曹長の側に來て、陣をくむ。ところが伍長と兵一人は竹刀を奪われていて、睨んでかまえてもサマにならない。

「申しわけありません」

伍長がいう。

「いい訳けはいい。ロープを十人分、持ってこい」

それから立哨の兵が呼びこまれ、ロープが十人を拘束していった。赤鬼伍長は竹刀をとり戻し、汚名ばんかいに大童であった。

○

ネーラ・ソローピンがこの光景をみたら、

「うっ！」

と絶句するであろうか？

十人家族は、この物語の冒頭に登場したレーヴィン家の者である。ネーラの婚約者の兄セシーモは十八才と十七才の息子たちとともにパルチザンに参加している。老婆はセシーモ兄弟の祖母。老夫婦は父と母、セシーモ夫人、妹マリヤ、それからセシーモの子供たちである。

意地の悪い方法が、とられている。

母と夫人、マリヤがそれぞれ、息子ふたり

と父という順の組合わせで向かいあわせにぐるぐるまきにされ、手を高くあげた縄尻を天井の梁にかけられて、つま先がかるうじてつくくらいに釣りあげられ、ブランブランと三箇ぶらさがったのだ。

三人の小娘チビと老婆が残った。これは娘たちにとっては祖父、母たちの方にむけて四ツ這いの姿勢をとらされた。

まず大人と少年のカップの荷造りと釣り下げが行なわれてから、ひと固まりになっているチビ達がならべられて姿勢を強制される。それも手を床についたから、いいというわけではない。

「ヒー、ヒー」

泣く声も涸れ、しゃくりあげて顔をくしゃくしゃにさせながら、尻のあげ方が足りないといつては、たたかれ、下肢をひらいてガニ股にしると脳裏を、ぐいと、こじられる。頭をあげかければ、なぐられる。鉄拳と竹刀、わしづかみの、ひきちぎるような扱い。

悲惨、滑稽をきわめるのは、子供たちのなかに、まざった老婆である。ただでさえ醜い肌になるんだ、ぼろのような肉。とがった骨ガクガクとふるえる手足。腰。四ツ這いにはなったが、それ以上、ぶるぶるふるえて足の

ひらきようはない。ぜいぜい喘息発作でもおこしたようにあえぐのを、なお尻をあげる、と竹刀でえぐり、こじり、面白がって尻のとがった、てっぺんに打ちこみを入れる。それと、やはり姿勢がとれないのはチビだ。さすがに荒っぽく力まかせに、たたかれることはないが、小意地の悪い兵に固めた拳の固いところで頭をコツンコツンやられたり、柔いにぎればとけてしまいそうな尻たばを、したたか、つねりあげられるなど、陰質な、いじめ方をされ、さっきの元気のいい泣き声は、どこへやら。ぐずんぐずん、涙とよだれで顔を、よごすばかりである。

大人たちは、もはや子供の危難をどうすることもできない。それより、現在の自分のくるしみに喘いで少しでも楽な姿勢を、たもとへと、つま先に、もだえを集中させる。

ロシア人というのは肌なつこい人種だ。家族が久しぶりに逢う。知人と逢う。それこそ抱きあって、なめあわんばかりである。男どうしで、キスしたりする。日本人の感覚では少しギョッとさせられ、それから辟易する。

——が、こうした感覚は習慣的なもので、それこそ、お国ぶりというほかはないのだ。人なつこい、というより、肌なつこいとい

うべき彼らだが、さすがに素肌をあわせ、こ
とさら密着させられては、たまらない。少年
の二人は、まだ青いが、それだけに背丈は、
もやしのように伸びて、彼らにとっては祖母
叔母になる女と、ちょうど釣りあいとれて
いるのだった。

こうした場合、女の方が平気なものだ。彼
女らにしてみれば男はおのれの分身である。
肉親なのだから疑いようはない。それで、危
難にあえばためらわずがり、あるいは包み
こんで守ろうと本能がはたらき、その意味で
は日本憲兵の小意地のわるいもくろみはなか
ば失敗している。日本人の妙に遠慮しがちな
儒教道徳でいやしめられている女ではないの
である。

しかし男はやはり具合がわるい。当然の作
用がおこる。腰をひこうにもひけない。

仕方なく父が嫁を突くぐあいだ。暖房はき
いているが裸では、やはりふるえあがる寒さ
のなかで、妙なぐあいに力が入り、肌が細目
で摩擦され、火照ってくる。二人の体温がま
じわり、火花となって爆ぜる。そこをひとり
の兵が竹刀をふり、三つの荷を順ぐりにたた
いていくのだ。女たちをねらって、ほしいま
まに竹刀をぶちあてる。横に切るぐあいに尻

へぶちこむ。臀肉が竹刀をめりこませ、張つ
た肌がぶるぶるっと震う。それが、男に直接
ひびく。男には刺戟的な震動だ。

「バシリ」

と打たれると、ぶるっぶるっと部分のふる
えが波となって、上にせいっぱいあげられ
た手首にまで伝わり、腰を中心に、ぐらりゆ
れる。ゆれても倒れるはずはないが、足さき
が、たたらを踏み、細目が肌をよじり、そこ
にまた火花がはしる。

脂汁が、どちらのものとも分かれたまま
に足もとにたれ、肌は赤くゆであげられ、日
本人ふうにいえば「火のかわり」になる。

ようやく子供たちの方の姿勢が、伍長をど
うにか満足させるまでにとれるようになって
一段落した。

「ヨーシ、そのままにしていようよ」

日本語が通ずるはずはないが、子供たちに
も日本兵の悪意のこもった言葉の大意は反映
し、けなげにも姿勢をたもとうと足と手を踏
んばるのだった。

日本兵のいう、

「M検」

という形だ。

もっともこの形は検査として一般的なもの

で、刑務所などで使われている。羽田の通関
事務所でさえ通用する方法だ。ただ医学的に
また検査の必要上の場合と、刑罰的な意味の
場合では、まるで違う。

この形で鞭うちを加えるのも、日本では見
られないが、やはり一般的だ。日本国内では
答刑が消えても、朝鮮統治に日本人は鞭うち
を採用した。

四ツ這い、臀部への鞭うちはヨーロッパの
方がポピュラーである。ナチス収容所でも、
そのための鞭うち台があり、公開で処刑が行
なわれたりした。

昨日までの憲兵たちの作業は、倉庫に収容
された者の「M検」であり、そこでは女たち
が数が多いこともあって粒をそろえられ、医
学に名をかりた憲兵たちの恣意的な方法によ
る好奇心、好色心を満足させたのだろう。

「河馬の行列」

などとあざけりながら、ずらり並んだ女の
臀部、その間をぎらぎらする目で憲兵たちは
のぞきこみ、姿勢の強要に対して反抗する者
を猫が、ねずみをいたぶるように、なぶった
ことだろう。

老婆とチビはいじめるのは面白いが、みも
のとしては、やはり尻の形が、ぼこりと丸く

ふくらんだ小娘たちの方、が目こそそるだけの値打がある。

鬼伍長が、すっかり機嫌をなおし、にたりにたりと、し始める。歪んだ頬肉を、こぼさんばかりだ。

「こいつら、まだ青いふりしてるが、もう男とくっついてるんじゃないのか」

「生娘かどうか検査するんですか？」

伍長殿

と兵のひとりが早速、媚びる。

「うん。まア、みてみる」

小娘の傍に、すっとんだ兵が、ひょうきんな、しぐさで、

「こら、もっとケツをおったてろ」

と、ぴしゃり平手打を尻に加える。

「オー。アウ。ママ」

と耐えかねて娘が叫んだ。

「どうだ？」

「はあ、まだ未使用のようではありますが、何

しろ」

と鼻をつまんでみせ、

「くさいであります」

イワノフは、ひそかに女たちの値ぶみを、してみた。やはり小娘などが、上値だろう。

日本人に抱かせるには丁度いいくらいの背丈だし青いところが珍重されるに違いない。てもちの女として仕こむにも、これくらいの年ごろなら思うさま鍛えられる。

こういう娘たちに首輪をつけて、鎖をひき犬の群れを連れ歩くように行く自分の姿が脳裏にうかび、イワノフは、思わず口もとがゆるんでくるのを、どうしようもない。

「何だ、お前。思いだし笑いか」

原口という、日本製の面にある烏天狗に似た男は、あくまで非情であるらしく、こういう時にも、意地悪いほど周囲に注意をくばるのも忘れない。

この男、たぶん不能者だ、とイワノフも、

やや無気味になって、この、憲兵曹長を眺めた。

しかし、そのわりに観察力は弱く、見当ちがいの思いこみばかりしている。

「伍長。悪ふざけもいいが、もっと、ぶちのめせ。口助になめられるぞ」

と原口はいった。

「ハ。さっそく。では、ぶちのめすでありますッ！」

と鬼伍長が、うろたえたように、しどろもどろに、いった。

この男は豪傑ぶっているが正念場になると腰をぬかす小心者だ、とイワノフは日本人のタイプを、あてた。

その小心者の豪傑が、

「それ、打て。ぶちのめせ！ くそのひり出るほど、たたきのめせ」

と、わめいた。

たちまち竹刀が倉庫のよどんだ空気に風を

呼ぶ。

悲鳴があがり、肉が鳴る。

縄がよじれて、鉄の梁さえ、しなうような修羅場が、はじまった。

小娘たちの、ぶっくりした臀肉が、ささ身のようにわれるのも、すぐだろう。

天星社刊

《限定版グラビア写真集》

在庫案内

M写真集『女王様に飼育される日々』 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

緊縛プレイ撮影行

白い露台で

城 章 夫

あの日——ぼくと那津子の五回目の撮影行の日。

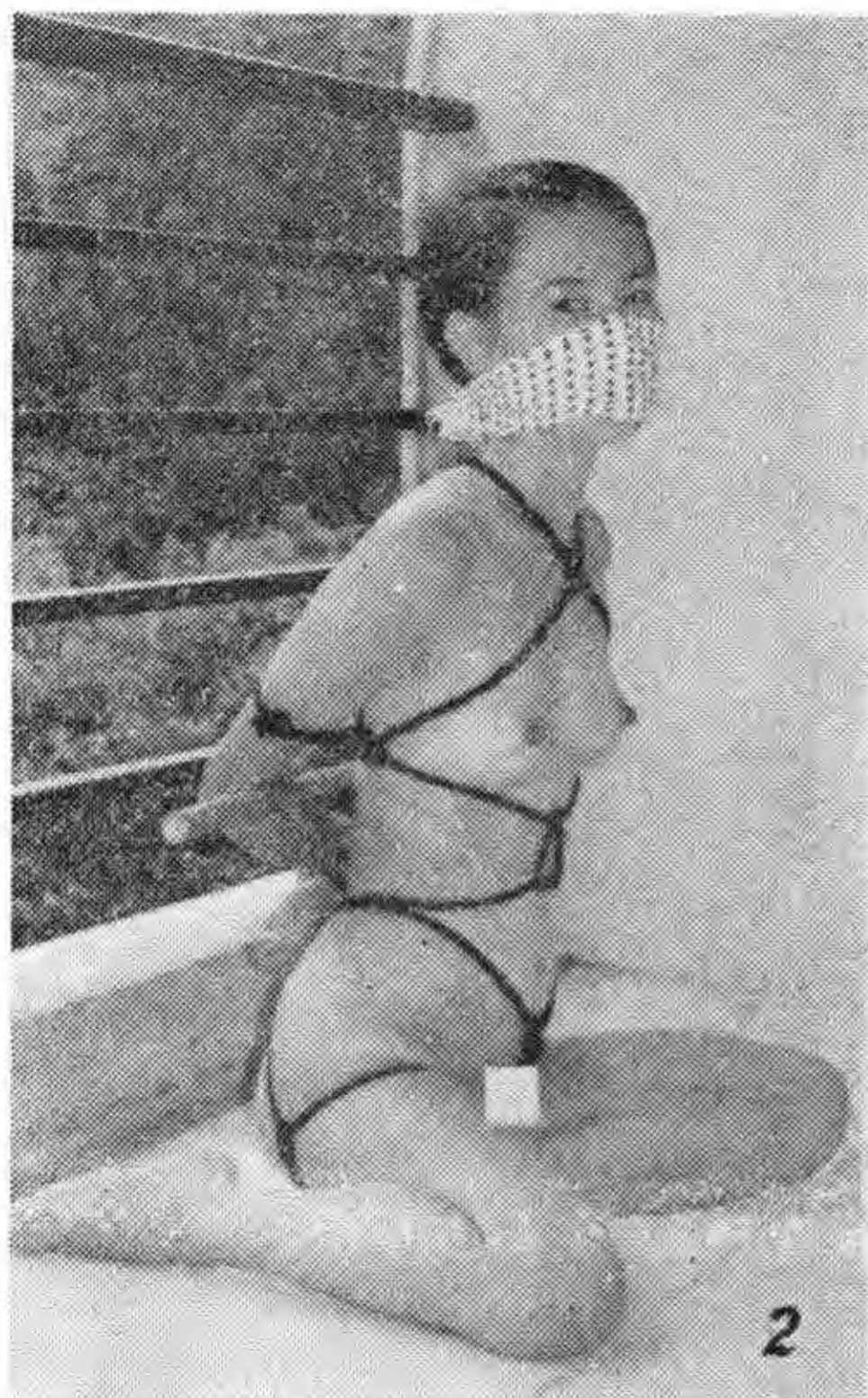
あの日から一週間ほどして、待ちに待った写真が出来上がってきた。封を切る手も、もどかしく袋をあけて写真の束を一枚々々繰りながら眺めて行くと、撮影当時の事が、ほんの些細なことまで、ありありと蘇ってくる。

それにしても、白い露台の上で、やわらかな秋の午後のひかりを浴びながら、谷の対岸



の溢れるような木々の緑を背景に、さまざまな姿態で括りあげられた那津子の裸身の、なんと美しいことだろう。

常の日の那津子は決して、こんなに美しくはない。これは那津子によく似た、しかしずっと魅惑にみちた別の女だ。ぼくの尽きせぬ夢の中の女だ。だが、この写真の女は、なぜこうも美しいのだろう。艶やかな、まろみのある裸身を透過通った光の中に晒しているか



らだろうか。いや、それだけではない。その腕に、胸に、そして腹部に黒い縄が喰い入っているから、さらに、その縄が下にのびて、滑らかにかける丸味を締めあげているから、そして口を猿轡が、かたく覆っているから、だから、こんなにも美しいのだ。

しかも、この女は二重の意味で「囚われの女」だ。縄でキリキリと縛りあげられて身の自由を奪われ、きびしい猿轡で口をふさがれ

ている、美しくもあわれな囚われの女。そればかりではない。それは、大気中にみなぎる七いろの光をとらえて収斂させ、一点に鋭く凝集させるレンズを通して、ひとひらの印画紙の上に、永遠に閉じこめられた「囚囚われの女」なのだ。だからこそ、ここに二重にとじ込められた写真の女には、この世ならぬ美しさが輝き溢れているのである。

ああ、これから先、ぼくは筈底から、いく

たび、これらの写真をとりだしては、その美しい囚われの女の姿態に、飽くことなく眺め入ることだろう――。

そんなとりとめもない想念から、ふっと我に帰ったぼくは、電話機を取りあげてダイヤルを回す。むこうの受話機のカチャリと外れる音がして、待つほどもなく、電話線の中から聞きなれた那津子の声が、ひびいてくる。

「もしもし、那津子かい。ぼくだよ。この間の写真が出来上がったよ」

「あら、そう。うまく写っている？」

「うん、とても綺麗に、とれているよ。ほんものの那津子より、よっぽど、すてきだ」

「まあ、ごあいさつね！」

冗談と受けとったらしく、那津子は陽気な笑い声をあげている。

笑っているね、那津子よ。だが、これは、ぼくの本音なのだ。心底、本当に、ぼくが愛しているのは、これらの写真の中で、白いからだを黒い縄で縛りあげられ、切なげに身をくねらせている、おまえによく似た、しかし、おまえとは別の女なのだ。

その日――ぼくと那津子の五回目の撮影行の日。



空は朝から、よく晴れていた。だが、都心から電車で、たった一時間半、もう山々が間近に迫る、小さな駅に降り立つと、空は、なおさら澄みわたって、すべての物のかげにまで金色の秋の日の光が、みなぎり、ぼくと那津子は思わず目を細めたくらいだった。

踏切を渡って駅の北側にまわると、そこはもう、水のほとりだ。白い河原を、やせた水流が走って行く。その流れを、さかのぼって約三キロ。河原は、いつか消えて谷になり、

両側に切り立つ山々は、まだ盛んな緑に、おわれている。紅葉の季節には、まだ早く、ほかに、さてと見ると見るものもない谷あいの一軒宿。とはいえ、つい半年ほど前に出来たばかりのこの温泉宿は「L温泉ホテル」の名前相応にかなり整った設備をもっている。

何しろ季節外れではあるし、それに、ぼくらの着いた時間が早かったせいもあって、まだ他の客は誰も、いならしい。予約しておいたバス付きの部屋は、いちばん奥まったと

ころにあり、撮影が目的のぼくらにとってはお誂え向きの部屋だった。

女中が、お茶を置いて下がってしまうと早速、部屋の点検にかかる。八畳の部屋は、ゆったりとして、淡褐色の壁が格好のバックを提供してくれる。これは撮影にもってこいだなどと独りごとを言いながら、押入れかと思っただけで開けてみた襖の向こうは四畳ほどの寝室になっており、もう手回しよく布団まで敷いてある。その奥はバスルームとトイレ。部屋に戻って、谷に面して閉めてきつてある障子を、あけ放すと、何とその先は、かなり広々とした露台になっている。サンダルをつっかけて出してみると、すぐ下は急な崖になり、その崖に生い茂った木々の緑をすかして、はるか下に白く泡立ちながら水が流れている。そして谷の対岸は、ここより、ずっと高い山の斜面で、びっしりと、木に覆われている。

「那津子、すてきだぞ」と、まだ部屋に残っている那津子に声をかけながら、ぼくは黒い鉄の手摺りに、よりかかって空を仰ぐ。山と山に狭められた細い空を、雲が白く光りつつゆっくりと流れて行く。まもなく露台に出てきた那津子と肩を並べて、水の声ばかり高い森閑とした秋の谷の、たたずまいに見入って

いるうちに、ふと、ぼくの頭をかすめた一つの思いつき！

「そうだ。那津子、この露台で撮ろうよ。セミ戸外の、すばらしいヌードがとれるぜ」

「えっ、ここで？ 昼間から、こんなところで裸になったら、人に見られちゃうわよ」

那津子は、とんでもないという顔をする。

しかし、ぼくは、このすてきなアイデアに夢中になってしまった。

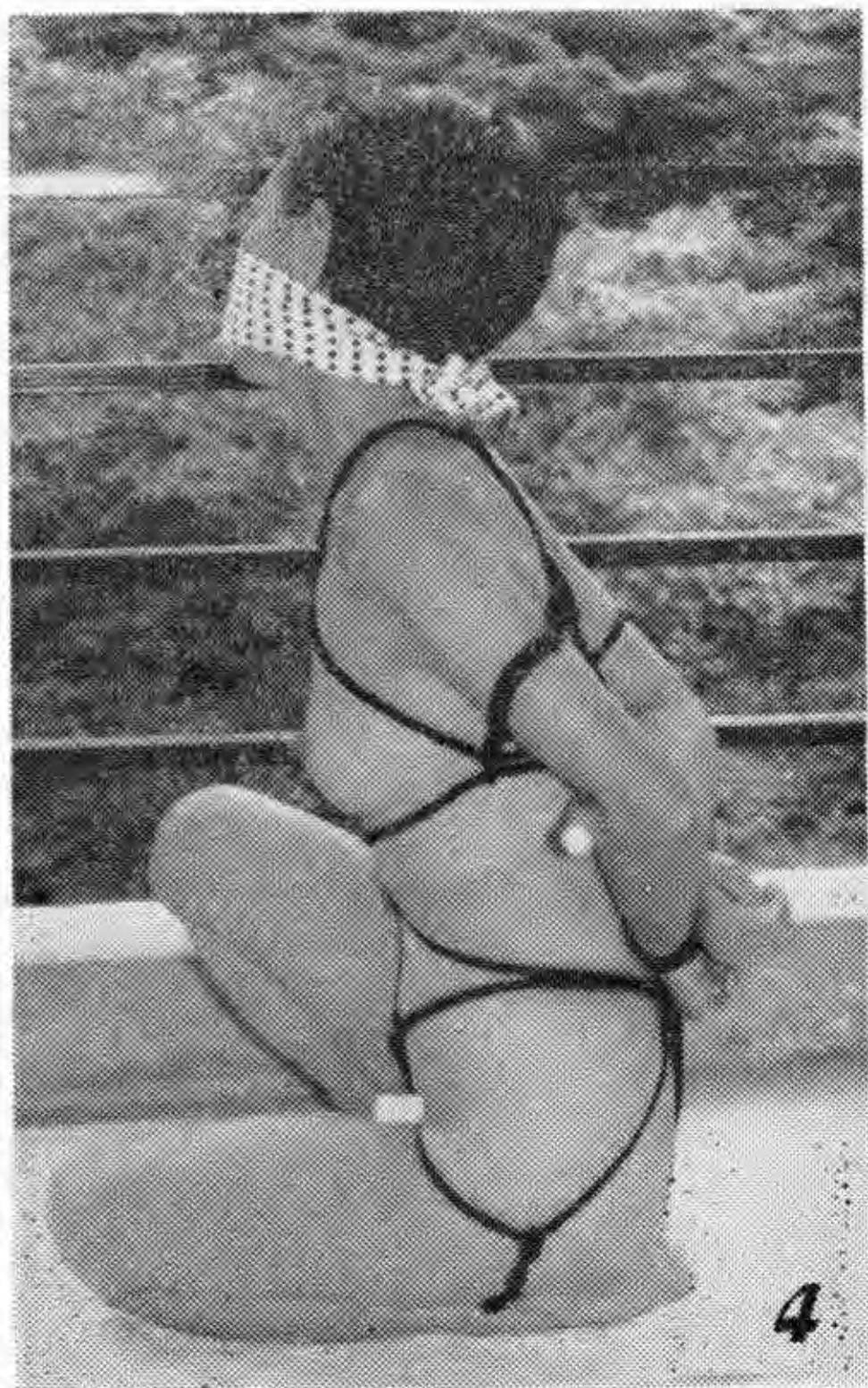
「大丈夫、大丈夫。ホラ、むこうは、あんな山だし、このへんは人里近いから、猿だっていやしないよ。道はこの部屋の反対側だから絶対、見えっこ、ないじゃないか」

ようやく那津子も納得して、

「それじゃあ、まだ陽の高いうちに撮っちゃいましょうよ。なんといっても、もう秋だから、陽ざしが傾くと急に寒くなるわ」

「よし、じゃあ善は急げだ。早くお風呂に入ってこいよ。そのあいだに、ぼくは撮影の支度をしておくから」

いつも、ぼくら二人が、いっしょに過ごすときの神聖な手続、あるいは、儀式——まず浴室で洗い場に那津子を正座させ、ぼくのからだの中から進んでる温かいシャワーを浴びせてやる。次いで、お湯から上がった那津子



4

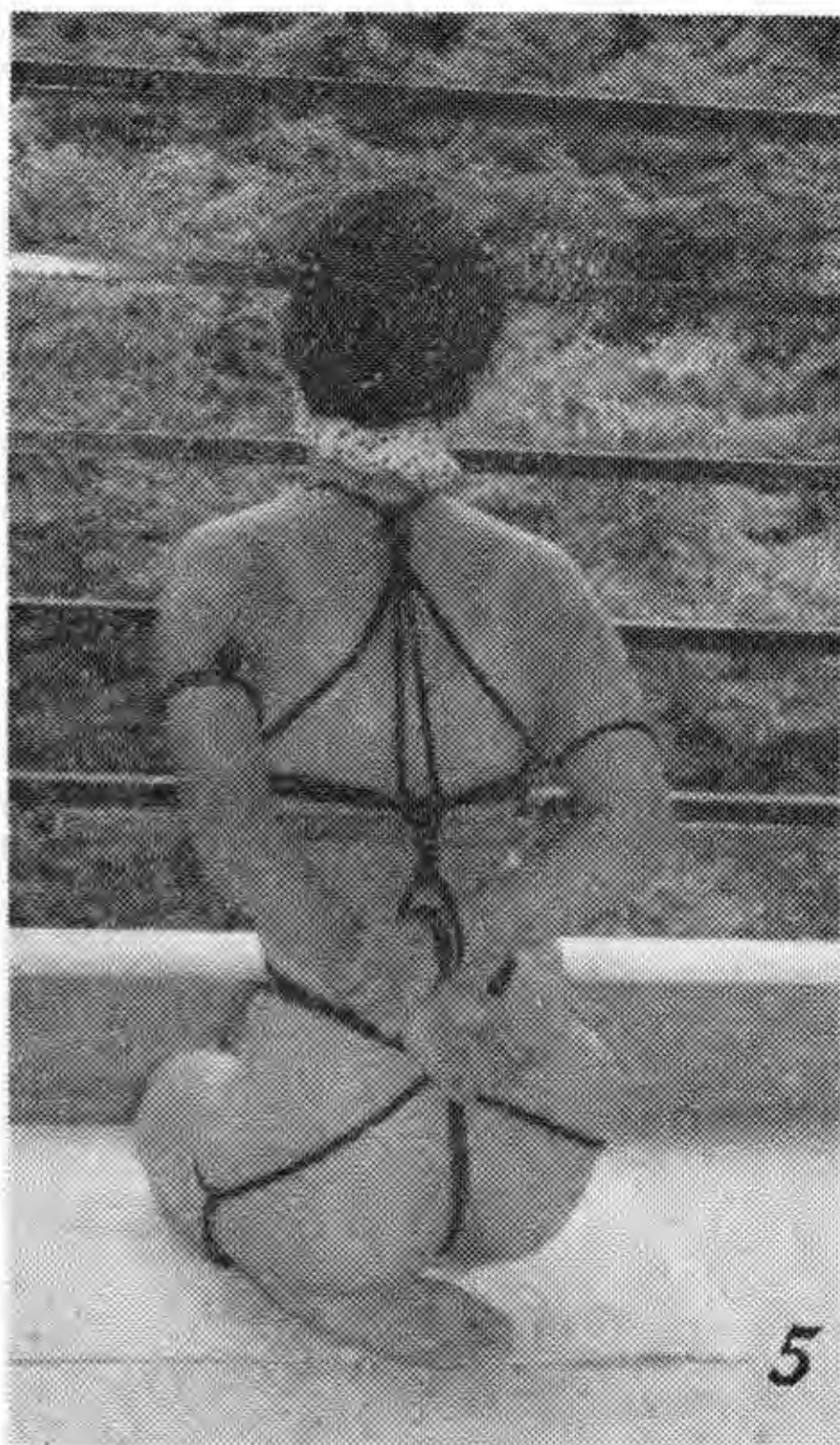
を後ろ手に縛りあげてから、歩幅一〇厘くらいに足首を連結し、部屋の片隅にいた手拭いとハンカチを一つずつ、口にくわえて持っでこさせ、それで猿轡をはめてやる——プレイに入る前の大切な心理的ウォーミングアップである、このプロセスも、今回は省略することにしよう。いまは何よりもまず、移りやすい秋の陽が、まだまだ西天に高いうちに撮影を完了しなければ——。

ストロボに電池を装填し、カメラのシャッターと絞りをセットし、それから長短、各二本ずつの黒い縄、手拭い、ハンカチを茶卓の上に揃えておく。そうこうしているうちに、那津子が、お湯から上がってきた。

「どうだった、お風呂は？」

「とても、いいお湯。なんだか肌が、つるつるするわ」

山峡に湧く、出で湯に洗われて、なるほど



那津子の桜色に上気した肌は艶やかに光っている。その柔らかく暖かい肌に、ぼくは手慣れた調子で黒い縄を、からませて行く。

まず、短い方の縄で、背中で交叉した手首を縛り合わせる。長い縄を二つ折りにして首にかけ、乳房の上部で結び目をつくる。そして左右に分かれた縄は背中にもわり、また前へ出てきて乳房の下で、ふたたび一緒になって結び合わされる。こうして、乳房をかこんで菱形の図形を描き終わった縄は、腰のくび

れに喰いこみながら体を一回り。下腹部で、また出合って結び目を作り、小さくて形のいい那津子の臍を中心に逆三角形を描き出す。二筋の縄は、そのまま三角州を締めあげ、尻を、さかのぼって腰を括った縄に連結する。そこで縄は再び左と右に分かれて尻の双丘を斜めに走り、太腿のつけ根にからみつく——常日頃、もっとも好んで行なう、ぼくにとってのオーソドックスな縄掛けだ。

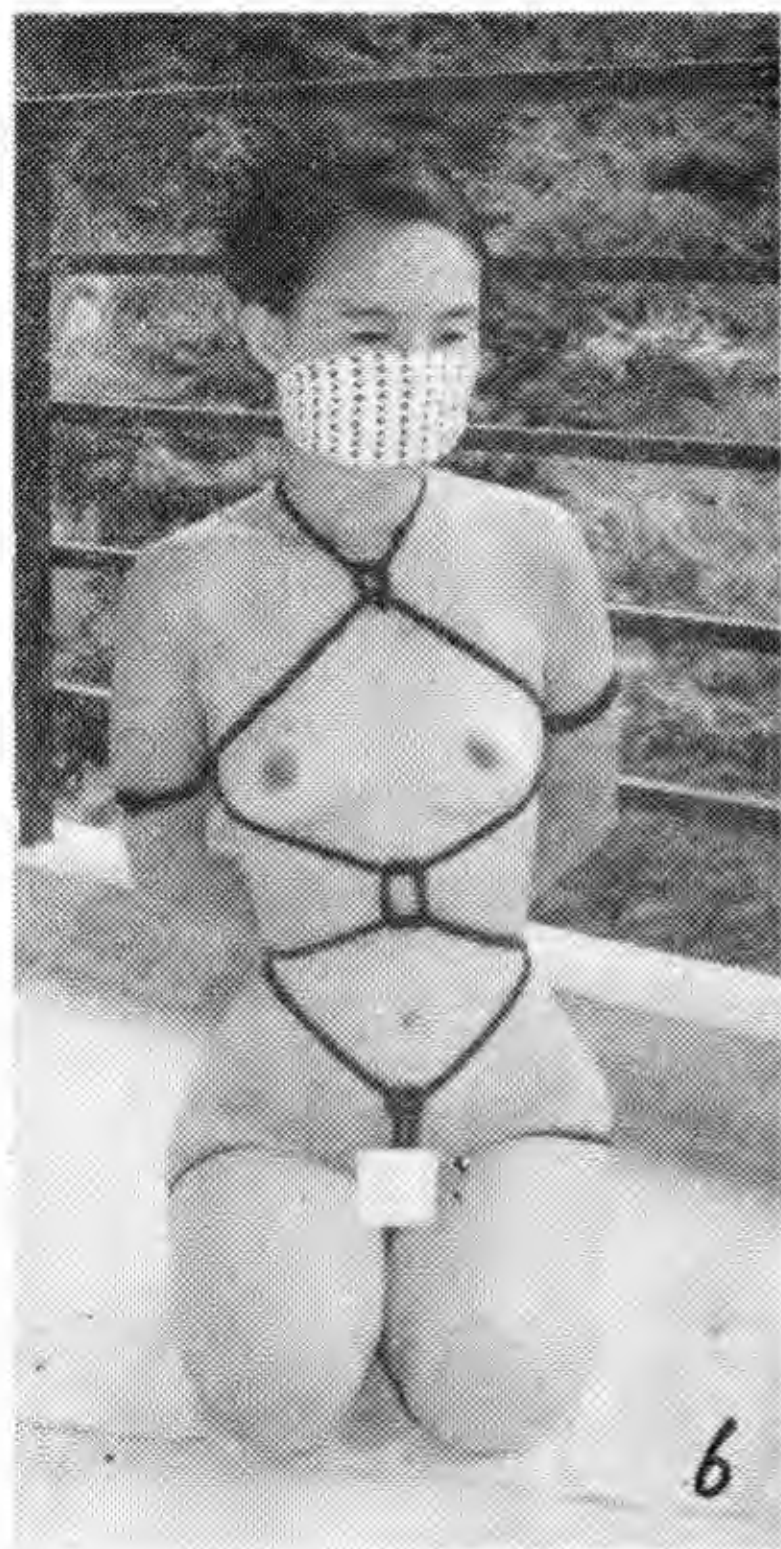
それから猿轡。ハンカチを丸めて那津子の

口に押し込み、鼻の上から口まで、ぎっちり手拭いで覆う。ただし、この手拭いの緊め方にもコツがいるのだ。

初めのうちはレアリズム一辺倒で、手拭いが外れないことばかり念頭におき、やたらに固く縛ったものだが、さて、そうして写真をとってみると、目が吊り上がり、ひどい時には顔全体が、ゆがんで写ってしまう。鼻も、かたく緊めた手拭いで押しつぶされて、横顔でも撮ろうものなら、甚だ見栄が、わるい。ぼくらの場合、あくまでも「美しい」写真をとるのが目的だから、少しは猿轡が、わるくても表情を損わないことの方が大事なのだ。このへんが、現実引き写しのレアリズムと表現上の虚構のレアリズムとの違いであろう。

縄をかけ猿轡を噛ませ終わると、那津子を促して露台にでる。床はザラザラしたコンクリートの荒塗りで、とても、このまま裸の那津子を坐らせるわけには行かない。そこで部屋にとってかえし、湯上がりタオルをとってきて床に敷き、その上に坐らせる。

最初は膝を崩した横坐りのポーズ。用意してきた竹の棒を両腕と背中間に差し込むと腕がグッと後ろに引かれて緊縛感が、ひときわ強まるが、生憎と今は夏も終わったばかり



のこととて、スリープレスのワンピースを着ている暑い間中、除毛していた腋毛が、まだ充分に伸びきらず、いつもなら後ろに引かれた腕の下からタツプりと覗くのだが、残念ながら今日は、それが殆ど見えない。

まず正面からカメラを構える（写真1）。

那津子は顔を、やや挙げ気味にして、右の方を流し目に見ている。以前は正面像の場合、ぼくが「撮るよ！」と声をかけると、那津子は顔をヒタと、こちらに向けて、レンズの中心を覗き込む様にしたものだが、ここは、やはり目を伏せ加減にしたり、顔をねじまげて

あらぬ方を見つめるといった表情の方が、恥らしいや、おののきの感情を、よりよく表現する様に思われる。度重なる撮影行で那津子もこのへんの呼吸を飲みこんできた様だ。

つづいて斜め前から（写真2）。こんどは那津子は目をあげてカメラの方を凝視する。

その怨ずるような、まなざしを素早くとらえて、シャッターが小気味よくパシャッとおちる。この頃、那津子は少々瘠せ気味で、緊縛モデルとしては、もうちょっと肉がついてもraithたいところだが、それでも腰のくびれた部分、太腿のつけ根あたり、黒い縄が、かな

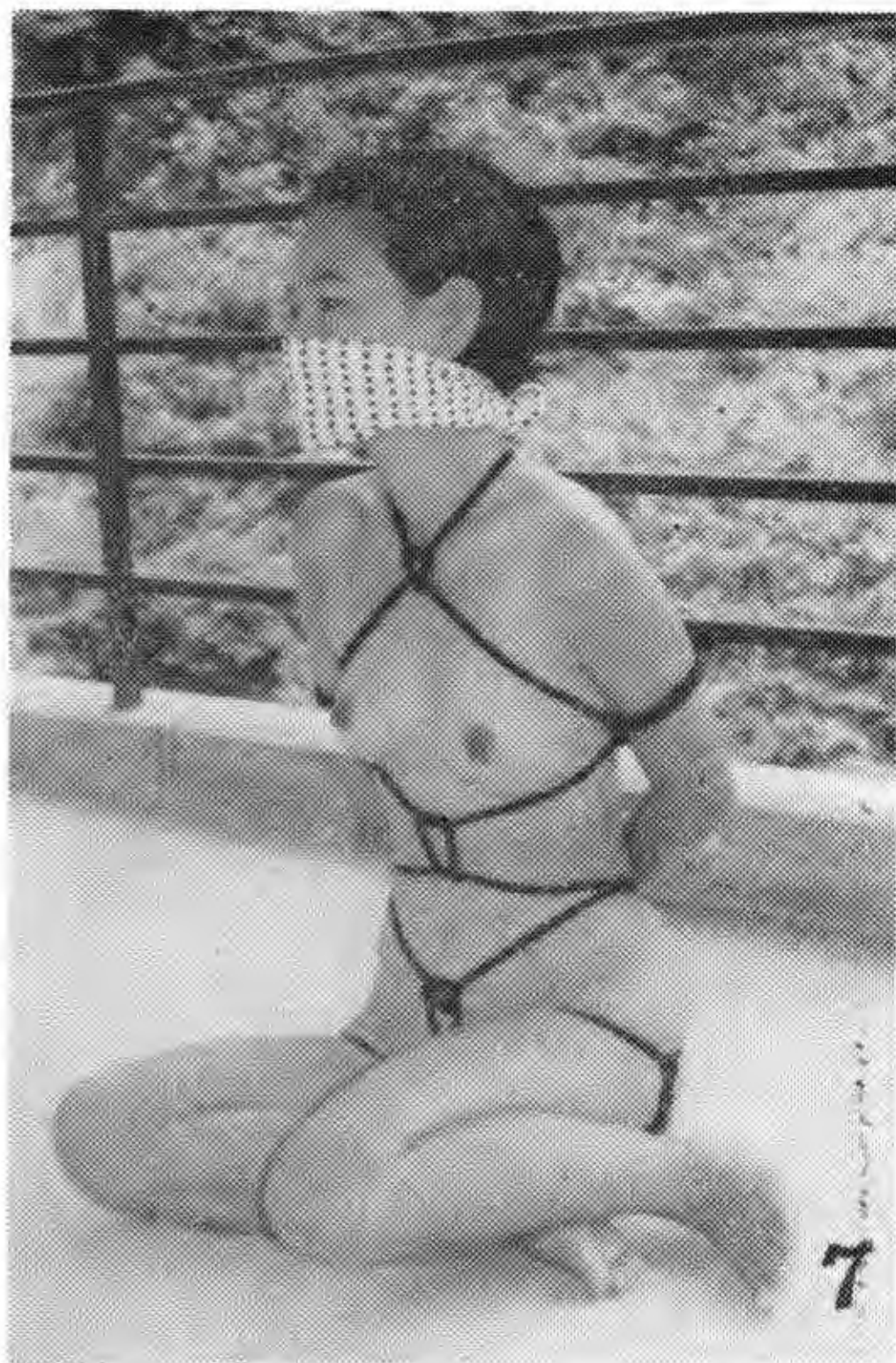
り喰いこんで、いい効果をあげている。

このポーズで角度をかえて、なお数枚とつた後、片膝を立てた姿勢をとらせ、斜め左前（写真3）から、そして側面（写真4）からと、続けさまにシャッターを切る。背中で組みあわせた手首を括られ、固く握りしめた手のあたりに、囚われた女の情感が、にじみ出ている。

最後にカメラは背面にまわり、水着のあと、ほの白く残る肌に、黒い縄が描き出す幾何学模様をフィルムに焼きつける（写真5）。

これで、カメラは那津子の中からだを、ほぼ一回り、まわったことになり、読者にも縄の掛け方がよく判っていただけだと思う。ところどころの縄のゆるみが、気になるかも知れないが、要所々々はギッチリと締めあげてあるつもりだ。ぼくらの場合、緊縛は苦痛をあたえるのが目的ではないのだから、那津子が痛がれば適当に、ゆるめてやる。とはいっても、那津子も大分、縄に慣れてきて、かなりきつく縛っても、あまり文句は言わなくなってきたようだ。

ここで背中に、しよわせた棒を抜きさり、両膝を揃えてキチンと正座させる。膝を崩して坐るポーズにも、それなりのよさがあるけ



れども、ぼくは、やはり正座のポーズが、いちばん好きだ。

人は坐るとき、膝をくずしたり物によりかかったり、最も楽な姿勢をとるのが普通だろう。膝を揃え、背すじを伸ばしてキチンと正座するには、そうしようとする意志の力が必要だ。しかし囚われの女の場合、それは「正座したポーズ」ではなくて、「正座させられ

たポーズ」なのだ。自ら選びとった姿勢ではなくして、他から強制され、そうすることを余儀なくされた姿勢が、「正座させられたポーズ」なのである。だから、それは「屈従のポーズ」だ。縛られた女の哀れさ、惨めさをもっともよく現われるのが、このポーズだと思うが、どうだろうか。

そこで、その「正座させられたポーズ」を

まず正面から（写真6）。ピッタリ揃えた太腿が、こんもりと盛り上がり、そのつけ根を括った縄が肉に埋もれるばかりに喰いこんでいる。やや伏し目になった那津子の、しおらしい表情が、ムードを、いっそう高めるのに役立ったようだ。

つぎは横坐りのポーズ。といっても、既出の写真1、および2の坐り方ともまた違う。

こうしたとき、言葉というものは無力なものだ。人間を他の動物たちと決定的に区別する点は、われわれ人間が言葉を、あやつる動物だということにあるとは、よく言われることだが、その言葉が、時として殆ど無力であるように見えることがある。それが、さして複雑でもない今のような状態を描写しようという時にも、そうなのだから、言葉というものは、まだまだ練り上げられていないといふべきであろう。

前の横坐りと今度のそれと、どこがどう違うか、クドクドと説明を試みるよりは、写真を見れば一目瞭然。とすれば、こうして一生

懸命、書き綴っているこの撮影ルポは、いったい、どんな意味をもつというのだろうか。千言万語を費やすよりは数葉の写真と並べて見せれば、同好の士には、それで充分なのではあるまいか。

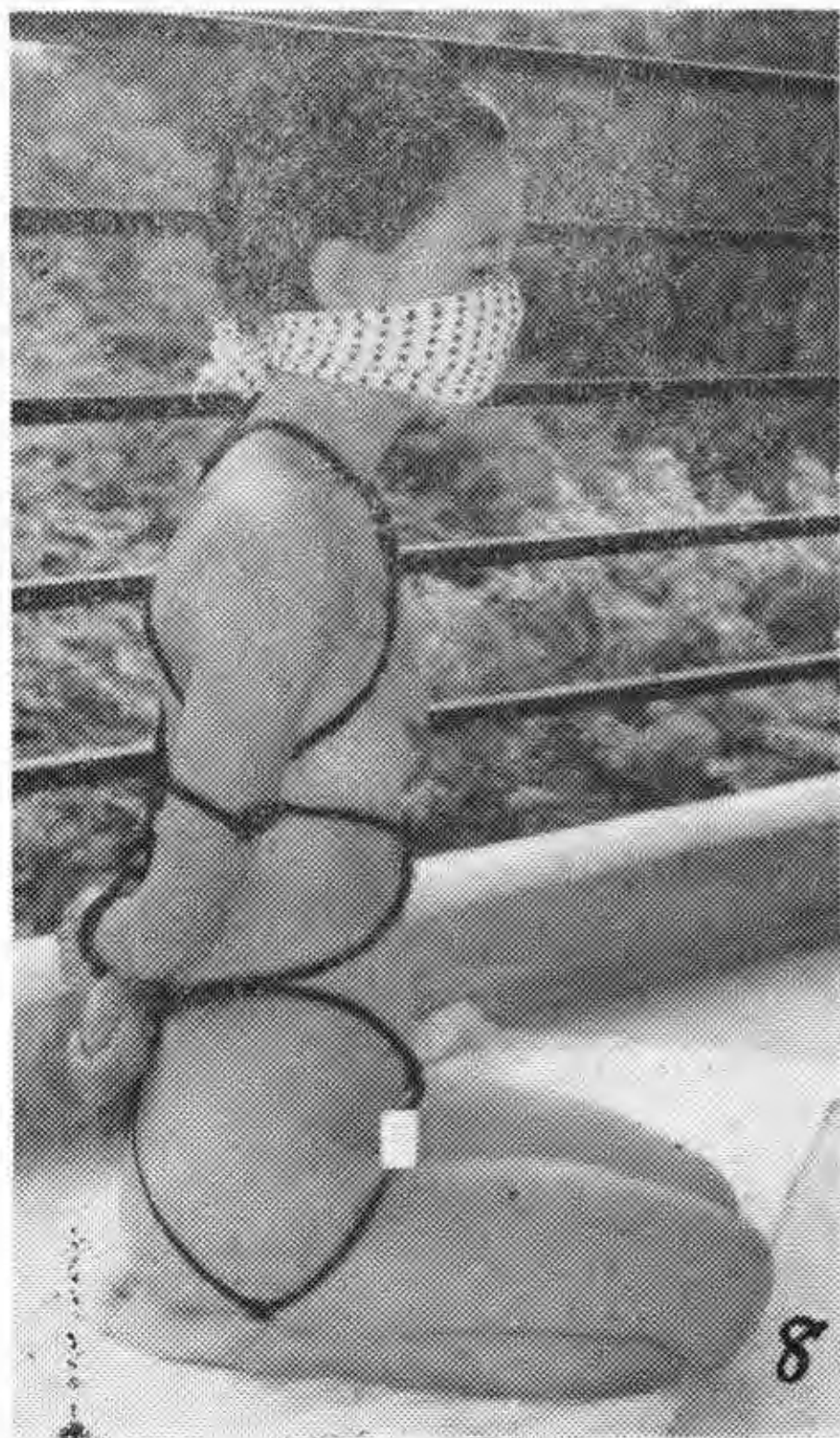
いやいや、そうではあるまい。写真は所詮ひとつの道程標に、すぎないのだ。そこへ辿りつくまでの、さまざまの経緯。そこから先へ流れてゆく、くさぐさの、いきさつ。それらを告げるには言葉によるほかはない。それらを綴るためにこそ、こうして、ぼくは拙い筆を走らせているのである。

さて、その横坐りのポーズを斜め左前から(写真8)。前掲の写真1、および2の、ベッタリと尻を下ろしたポーズは、棒を背負わされていることからいっても、無理矢理そういう格好に引き据えられたという感じが強い。のに対して、こんどのポーズは同じく膝を崩した横坐りながら、つつましく足と足とを合わせており、これは囚われの女が自ら選んだ姿勢だというふうには見えないだろうか。それだけに、この写真には一種の、くつろぎ———といっておかしければ、抵抗のはての諦めからくる安らぎ、といった気分さえ、漂っているようだ。

ついで斜め右前から(写真9)。この写真になると、今いったようなムードが、いっそう明瞭に認められるように思われる。ほとんど同じ角度からとった写真2とくらべると、その感は、ひととき深い。棒を背中に差し込まれたために、否応なしに上体をピンと立てねばならず、胸と腹部もつき出し気味で、全体として何かしら緊張った感じがするのに対して、写真9では肩を落とし、上体をやや前屈みにして、内なる想念(それは如何なる想

いであろうか。素裸に剥かれて黒い縄でヒシヒシと縛りあげられ、白い露台にさらされて囚われの女の想いとは———)に思い耽っているように見える。左の太腿の付け根に掛けられた縄が、ほとんど見えなくなるほど肉に喰いこんでいるのも哀れを誘う。

引き続き、側面から背面から、はたまた正面からと、さまざまの角度から那津子の姿をカメラに収める。もっぱら動き回るのはカメラマンのぼくの方で、モデルの那津子は



ただ坐っているだけだから楽なものだ。

最後に、那津子のからだを露台の床に、ながながと横たわらせる。まず、膝をかるく折り曲げた仰臥のポーズ（写真10）。ついで、からだをグルリと回して横臥の姿勢をとらせる（写真11）。さらにカメラは那津子の足の方にまわり、尻の双丘と、そこに絡みつく黒い縄とが織りなす絶妙のコンポジションを撮る（写真12）。

こうして、一本三十六枚撮りのフィルムは一時間ほどで、とり終わってしまった。いつものように縛り方を、あれこれと変えることをせず、ただモデルのポーズを変えるだけだから、至って能率的なわけだ。

ぼくは室内にもどり、テーブルの上にカメラを置くと、また露台へ出た。

「おかげで、わりあい早く済んだね」

ねぎらいの言葉をかけながら、那津子の縄を解き、猿轡を外してやる。手首にくっきり刻みつけられた縄のあとを、さすってやりながら、ぼくは那津子と肩を並べて露台の手すりに寄りかかり、今まで撮影に夢中になつてろくに目にも入らなかつた谷のたたずまいに視線を投げかけた。山にさえぎられて見えなけれども、つるべ落としの秋の陽は、もう

だいぶ西に傾いたらしく、目の下の谷には薄い影が拡がり始めている。気がついてみると空気も冷え冷えとしてきたようだ。

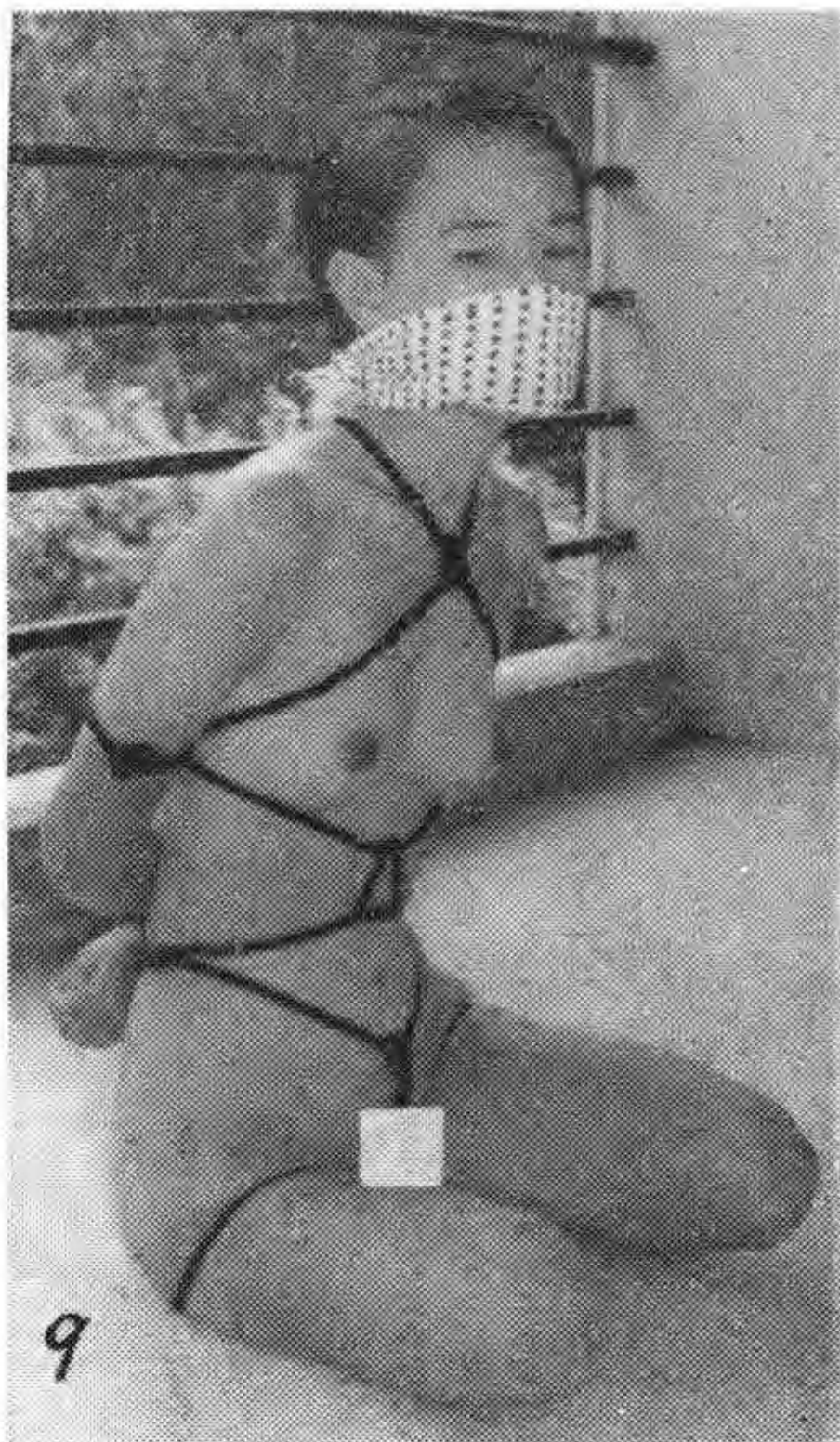
「寒くはなかったかい？」

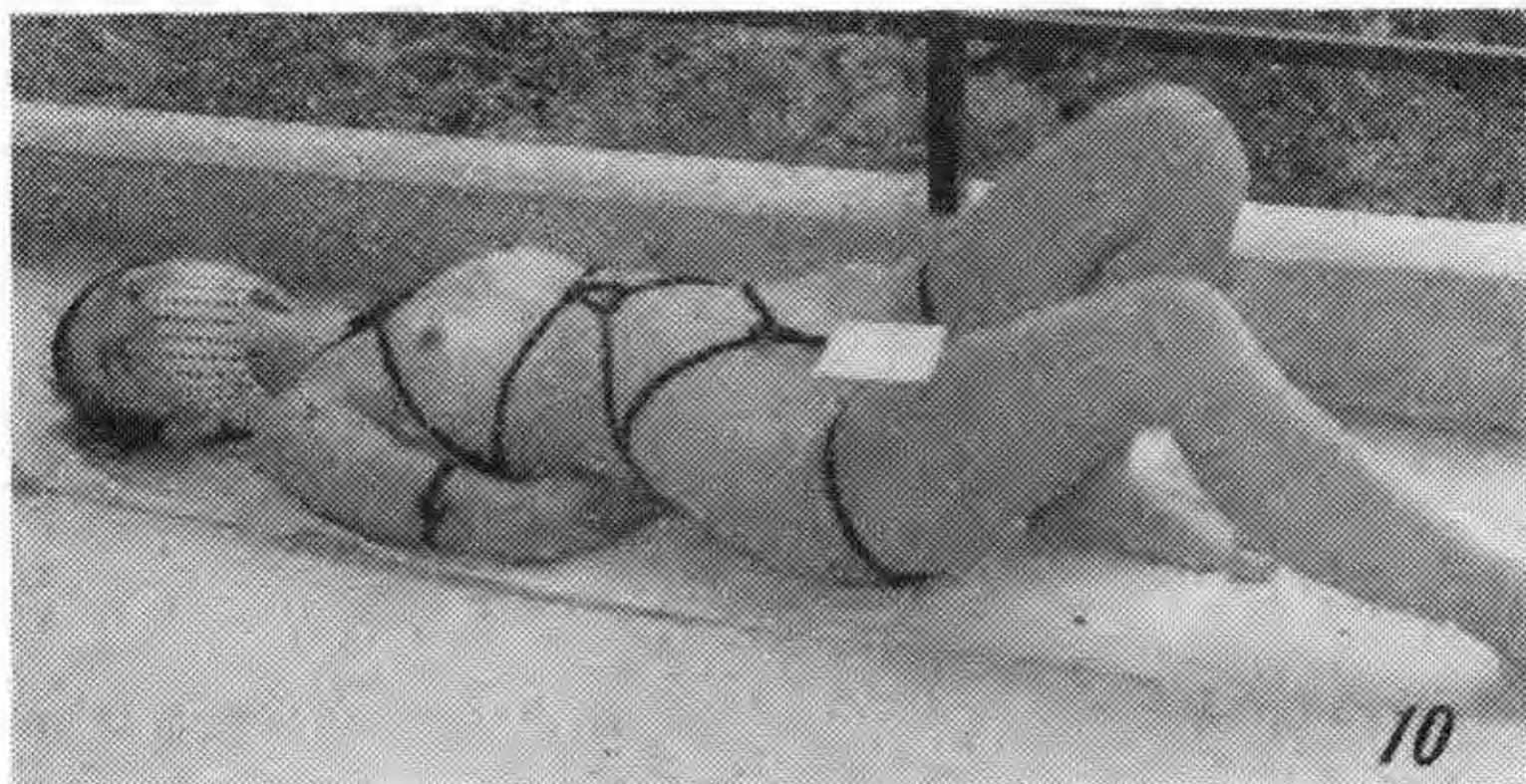
那津子の肩に手をかけると、肌がひんやりと冷たい。

「おや、だいぶ、冷えているよ、さあ、ゆっくり、お湯につかう」

小柄な那津子を抱きかかえるようにして、ぼくらは部屋に、はいった。

夕食がすみ、宿の女中が膳をさげてしまうと満ち足りた満腹感を快く反芻しながら、ぼくはゴロリと畳に、ねそべった。所在ないままに、旅行鞆の中から、今宵の撮影のために作ったコンテニューイティ（撮影台本）を、ひっぱり出してみる。思わぬハプニングから昼間に白い露台で撮影を済ませてしまい、もはや不用になつてしまつたけれども、例によつて三日も四日もかけて、楽しみ楽しみ書きあ





げた、このコンテ——といっても、やや大判の、メモ用紙を五、六枚、ホチキスで綴じたペラペラの小冊子にすぎない。表紙には五行に分けて、『緊縛写真撮影コンテ・とき——昭和四十一年九月〇日・ところ——温泉・撮影——城章夫・モデル——滑川那津子』と麗々しく、書いてある。それもこれも、遊びなのだ。時間をかけて、こんな他愛もないコンテ作りに熱中し、人目を避けつつ、こんな山あいの温泉宿に来て縄で縛りあげた女の写真をとる——何のための、この情熱だろう。持って生まれた少数異端の嗜好が昂じた挙句の、この始末だ。われながら因果なことよと嘆ぜざるを得ない。

そんな思いを振り切るように、ぼくは、つと身を起し、これも所在なげに、つくねんとしてゐる那津子に声をかける。

「那津子、食後の散歩は、どうだい？」

「散歩に？ 外は、まっくらよ」

「いや、ちょうど今夜は満月なのさ。もうじき、月明りで、あかるくなるよ」

「そう。じゃ行ってみましょうか」

と、腰をうかせた那津子に、ぼくはピシリという。

「ただし、那津子を縛って行くんだよ」

裸になった那津子を、すばやく黒い縄で後手に縛りあげる。勿論、手だけではない。縄は胸を締め腹を括り股間をくぐり抜ける。その上からフンワリと浴衣を着せかけ、帯で腰のあたりを軽く結ぶと、ちょっと見には、懐ろ手でもしているようにしか見えない。

部屋を出ると、すぐ廊下の横手に非常用のドアがあり、それを開けると、そのまま宿の前の道路に出られるようになっていて、サンダルも三、四足おいてあるのを、先刻ちゃんと確かめておいたのだ。そのサンダルをつっかけて表に出ると、両側から、せばまる山にさえぎられて月は、まだ見えないけれども、東側の山の向こうでは、もう地平線を離れてかなり高く昇っているらしく、山にはさまれた狭い空には銀色の、あわい光がみなぎって宿の灯のとどこかぬところまで来ても、あたりは、ほんのりと明るい。やがて自動車道路は大きく左にカーブして、さらに谷沿いに上流へ登って行く。そこから小径が分かれ、谷を渡る吊り橋へと、ぼくらを導いてくれる。

ゆらゆら揺れる橋を渡って対岸に着くと、差し交わす木々にさえぎられて、もう道路はもちろん、宿の灯も見えない。ぼくは那津子を立ちどまらせ、上にまとった浴衣を剥ぎと

る。と、たちまちそこに、まるく艶やかな裸身が現出する。木下闇のなかにも、銀色の微粒子のような月光が、ほのかにただよい、那津子の白い肌に幾何学模様を描く幾筋もの黒い縄が、あざやかに浮かび上がる。ぼくは思わず息を吞んで、この妖しくも美しい眺めに見入った。

ややあって我にかえったぼくは、那津子を促して林の中の小径に歩み入った。那津子の姿がよく見えるように、ぼくは二メートルほど後から縄尻をとって歩いて行く。「肉付き豊か」とは、お世辞にもいえない那津子だがそれでも極くゆるやかな角度で径が登り勾配になっているので、ちょっと前かがみになって歩く那津子の尻がプリプリと動き、股間から尻に沿って、さかのぼる二た筋の黒縄が右に左に、かしいで揺れる。

那津子は黙々と径を進み、ぼくもまた、黙然として、そのあとを追う。いつか月は山の端を出外れたとみえ、林の中に、たゆたう揺し銀のような微光は、いっそう、その光度を増し、前を行く那津子の裸身は、ますます鮮かに目に映る。

歩き出してから、どれほどの時間がたったことだろう。ぼくの意識は、いつのまにか時

空を超えた境に、さまよいだしていた。このぼくは、いったい、いつの世の何者なのだろう？　そして、その三、四歩前を、後ろ手、股間縛りの、きびしい縄目をうけ、白い裸身を夜気にさらしながら、頭を垂れて、ひっそりと歩いて行く女人は、そもいかなる罪があつて、いずこへ引かれて行くのだろうか？　意識は夢幻の国にさまよい出ながら、五官の働きは眠っているわけではなく、そうしている間にも、耳は時折さやぐ葉ずれの音や、風にのって、はるか下から運ばれてくる水音を、あざやかに聞き、目は前を行く白い裸身と、その足もとの黒い小径にチラチラゆれる月の光を、しかと見ているのだった――。

そんな奇妙な心的状態から、ぼくが現実の世界へ連れもどされたのは、山の奥の方で不意に鋭い声をあげた夜鳥の啼き声だった。気がついてみると、ゆるやかな登り径ながら、ぼくらは、いつのまにか可成り上の方まで登ってきてしまったようだ。ぼくは、あわてて縄尻を引き、那津子を立ちどまらせる。

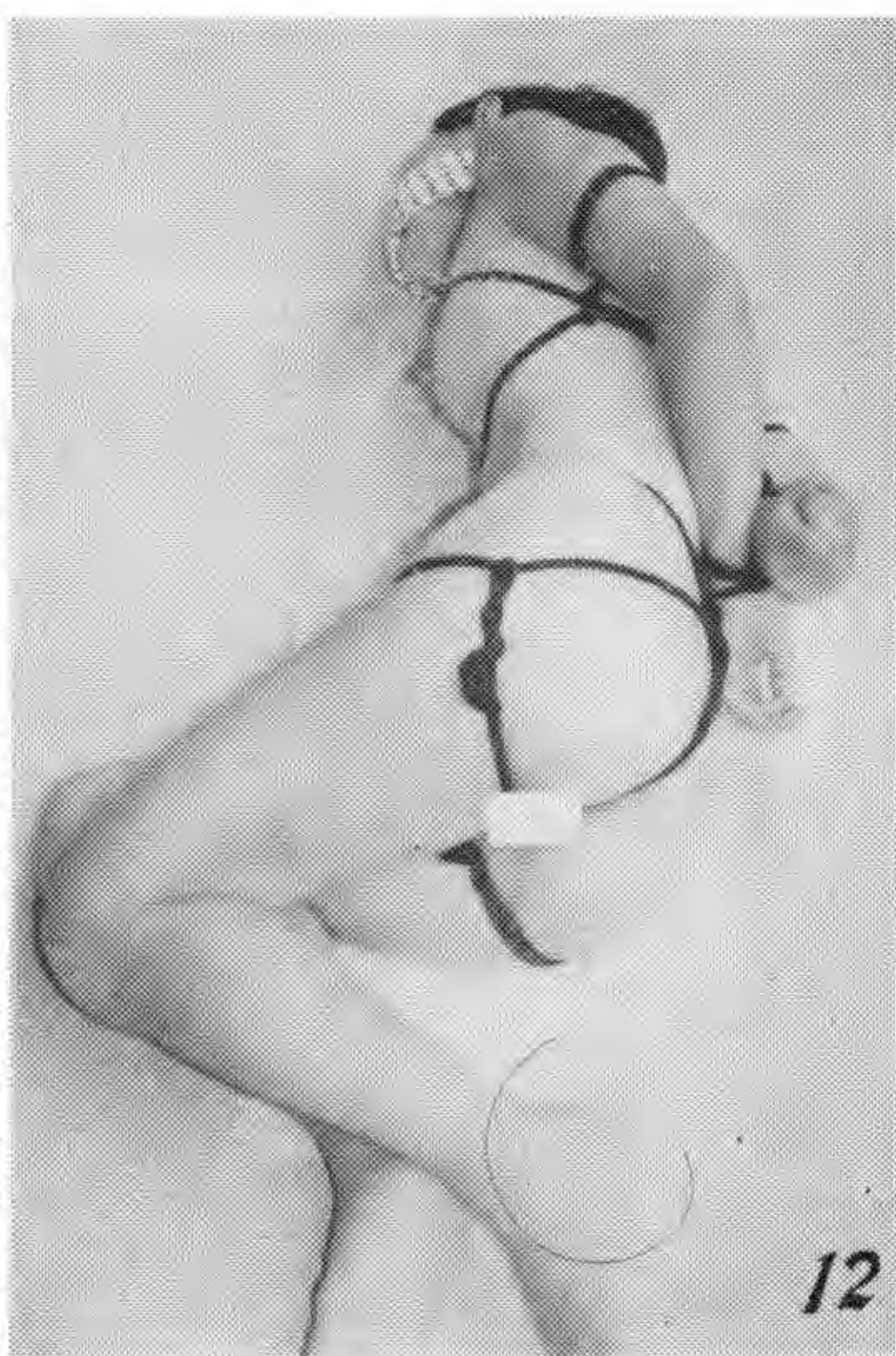
「どこまで行っても、この径は、はてしないようだね。もうこのへんで、そろそろ、もどろうか」

振り向いた那津子は、声にはださず、ただ



顔を、こっくりとうなずかせる。那津子もまた、ぼくのように、夢幻の境を、ふわふわと歩いていったのだろうか。

下りとなれば、やはり道は、はかどる。須臾にして、ぼくらは吊り橋のたもとに降りついた。くるとき那津子の浴衣を剥いだ所だ。当然ここでまた浴衣を着せてもらえるものと思っただ、那津子はそこで立ちどまる。ぼく



12

は縄尻をピンと引き、もっと前進するように合図する。那津子は素直に吊り橋を渡り始める。ゆらゆら揺れる橋の真中で、ぼくは那津子の歩みをとどめ、そのかたわらに近づく。那津子の細い肩を抱いて、上を仰ぎ、下を見下ろす。中空にかかる銀色の月の光、ほのかな暗闇の奥で白々と光る水の流れ。ひんやりと冷たい那津子の肌を、いとおしみながら、

ぼくは那津子の耳に、そっと、ささやく。

「たのしかったね、今夜の散歩は」

那津子は黙って、うなずき返す。そのからだに、ぼくは、ふんわり浴衣を着せかけた。

宿に帰りつくと、例の非常口から人目に触れることもなく、ぼくらの部屋にもどる。那津子の浴衣をぬがせ、しかし縄は解かずに、そのままバスルームに連れて行く。そして洗い場に那津子を立たせると、ぼくはその足元にうずくまり、ザブザブとお湯を汲みだして夜露に濡れた那津子の足を丹念に洗いはじめる。さながら、おごれる女王の足を、うやうやしく洗い清める奴隷のように。ああ、SといいMといい、この微妙に揺れ動く摩訶不思議な異端の心情よ。そのとき、ぼくの胸を領していたのは、まごうことなきマゾヒスティックな欲びであったといえよう。

「あたたかい。気持がいいわ」

頭の上で那津子の呟く声が、きこえる。ふり仰ぐと、那津子は後ろ手に緊く縛りあげられたまま、うっとり目を閉じて、ぼくの洗うがままに任せている。ぼくは、そんな那津子の前にひざまずき、その艶やかな下腹に、ぼくの顔をうずめていった。

青……春……の……陥……穽……(22)

白衣のサディスティン

芳野眉美

カット・岡たかし



A

雑木林に囲まれた家は、他の地域社会から完全に孤立している。静夫の父が、静夫の保養地に、こんな淋しい土地を選んだのは、公害や都会の悪から静夫を守る為であったが、また、孤独を好む年頃の静夫の希望でもあった。

この新築の美邸は、静夫と、看護婦の舞子しか住んでいない。ベッドに寝ている静夫の頭に、黒いナイトキャップがかぶされていると思ったが、顔までおおっている黒いナイロンのマスクは、どうやら女もののパンティのようであった。

舞子が、にこやかな微笑を浮かべて、ドアから姿を現わした。

「お早ようございます。坊っちゃん」

女物の黒いパンティをかぶった静夫は、舞子の挨拶に答えず、ただ、うなずいただけであった。

「まあ、いい子ね、坊っちゃん。舞子のパンティを、ちゃんと顔

にかぶって下さったのね」

舞子は、黒いパンティを静夫の顔から取りながら、いった。

「いかが、舞子の匂いは」

舞子の黒いパンティは、新品ではなく、汚れていたのである。舞子が穿いていたものを静夫の顔にかぶせたようであった。

静夫は、無言のまま、うなずいた。

黒いパンティにかくれて見えなかったが、静夫の口に、メンスバンドが巻きついていたのである。

「猿ぐつわを取ってあげましょうね」

ゴムの猿ぐつわを取ると、舞子は、静夫の口に指を入れて、ずるずると、唾液でぐちゃぐちゃになった布ぎれを引っ張り出した。

ピンクの可愛いショーツであった。

「あら」

と舞子がショーツをひろげていった。

「汚れていたのに、綺麗になっているわ」

静夫の口が、まるで電気洗濯器のようであった。

「どんな味がした？」

と舞子は静夫の顔を覗き込んだ。

「おいしかった？」

「——」

「ねえ」

静夫は、うなずいた。

「毎日、こうやって寝ていたい？」

「——」

「舞子ね、坊っちゃまのために、パンティを沢山、買ってきたの」

舞子は、静夫の掛布団をはいで、ニヤリとした。

全裸の静夫は、ゴムロープで、胸から足首まで、ぎりぎりに縛られていたのである。

「だめねえ」

舞子は眉をひそめた。

「もっと元気を出すようにしなければ」

静夫は力なく縮みあがっていたのである。

「坊っちゃまの病気、なかなか良くならないわよ」

舞子の白い指先が、縛られた静夫の肌をまさぐる。

「あらあら」

と舞子はいった。

「どうでしょう」

舞子は静夫の下半身のほうに回った。

「フフ」

突然、舞子が笑いだした。

「はい、ここまで」

舞子は、静夫に男性らしい異変を感じた気配であった。

「さあ、朝食にしましょうね、坊っちゃま」

そういうと、舞子は白衣の裾をからげて、ベッドの静夫の胸に、またがっていった。

「舞子のを飲みたい？」

静夫は、うなずいた。

「でも、少しよ」

純白のパンティを膝まで脱いで、舞子は静夫の胸に、かがんだ。べったりと胸に腰掛けただけではなく、腰を浮かしていた。

「むずかしいなあ」

かがんだままで舞子はいった。

「標的が小さすぎて、的がしぼりにくいわ」
まるで弓的をねらっているような口調であった。

「口を大きく開けてちょうだい」

「——」

「そうそう」

舞子は静夫の口に的を定めて叫んだ。

「よくて？」

静夫が、うなずく前に、白衣の裾の下からすっとゆるく弧を描いて、あたたかいものが静夫の口に落下していった。

「こぼしちゃ、だめ」

静夫の口から、あふれた液体が、静夫の頬をつたわって、ベッドにたれた。

ベッドに丸く水の、しみが広がった。

「みんな飲みなさい」

少しどころではないようだった。

静夫ののどが、ごくごくと苦しうに音をたて、激しく脈動していたが、ようやく、

「スープは終わり」

と舞子が静夫にいった。

「今度は、こつてりした美容食よ」

舞子は、白衣の裾をからげたまま、静夫の顔に背を向けて、またぎ直した。

「舞子のは、少々ねばり気があって、おいしいそうよ」

静夫は阿呆のように、口を開けていた。

逃げようにも、ゴムロープで全身を縛られ御丁寧にも、ベッドにくくりつけられていたのでは、逃げられるものではない。

もぞもぞと動いて、舞子は標的を定めたようであった。

放尿より、また、むずかしい。

「ううん」

と舞子は可愛い声を出して息ばった。

そのつもりでも、静夫の顔にしゃがんでしまふと、トイレでするのは違い、せつかく

のその気持が、抵抗を受けて逃げてしまふ。そう簡単に出るものではない。

と、可愛い音がして、

「あら」

と舞子は赤くなった。

異臭はない。ただ、小さな音だけだった。

「ごめんね」

と舞子は静夫を見下ろして、あやまった。

「うん」

とまた、舞子は息ばった。

静夫の朝食もかなり大変な作業であった。

「よくて？」

と舞子が息を切らして、いった。

重々しい響きが、その言葉にはあった。

静夫は無言のままであった。

B

静夫を浴室に入れておいて、舞子は、いそいで階下におり、女中部屋らしい四畳半に入ると、足踏みしながら押入れの襖をあけた。

ネグリジェやら、スリッパやら、パンティやら、女もののランジェリーばかりが、無造作に押し込んであった。どうやら、洗濯をしていないようで、舞子の肌の匂いにまざって舞子の分泌物の異臭が、押入れに充満してい

た。

「出ておいで」

と舞子は、汚れ物の山に向かって叫んだ。

「いつまで、そこにいるつもりなんだい」

かなりベランメエ調であった。

ぐらりと汚れ物の山が動いて、静夫と同じように頭から、すっぽりと、舞子の赤いパンティをかぶせられている男が、うらめしそうに舞子を見上げた。

押入れ一杯の汚れ物とは、少し多すぎると思ったが、男が一人、舞子の汚れ物の下着の中に埋まっていたのである。

舞子は手をのばすと、男の首をつかんで押入れの外に引っ張った。

「ぼやぼやしてないで、出て来るんだよ」

赤いパンティの下で、男がもぞもぞと何かいったようであった。

「なんだい？」

舞子は男の顔から赤いパンティをとった。勇であった。

勇の口には、これまた静夫と同じように、

舞子のメンスバンドが、ぐるぐると巻きついて、猿ぐつわをしていたのである。

「そうか、忘れていたわ」

舞子は、勇の口から、ゴムバンドの猿ぐつ

わをはずすと、勇の口に押し込んであったものを、さもきたならしように顔をゆがめて外につまみだした。

静夫の口の中には、ほどよく汚した、ピンクの可愛いショーツを押し込んだのだが、勇の口の中には、舞子は、こともあろうに、捺印したような神聖なカットメンを、そのまま押し込んでいたのである。

「あらあら」

カットメンをつまんで、舞子は眺めた。

「色が、ずいぶん薄くなっているわ」

勇の口の中で、次々に唾液があふれて、好むと好まざるとにかかわらず、うすめて勇は飲んでしまったことになる。

「なんで早く出て来ないんだよ」

と舞子は勇の顔に、ぴしゃっとビンタをくらわせた。

「それは無理ですよ」

はあはあ、荒い息を吐きながら、勇は白衣のサディスティンを見上げていった。

「あぐら縛りにされているんですから」

ベッドの静夫は、仰向けに寝たまま、全裸体を、足からゴムロープで、ぐるぐる巻きにされていたのだが、勇は、ロープは同じゴムだったが、後手に縛られたうえ、あぐら縛り

にされ、更に首から、あぐらをゴムロープで連結されて、まるで海老責めの恰好で押入れに、ほうりこまれていたのである。

「泥棒みたいに忍び込んで来るからよ」

「いくら呼んでも、いなかったのじゃありませんか」

昨夜遅く、急に舞子に会いたくなって、居候先の葉子の家を飛び出し、静夫の美邸にやって来たのだが、いくら呼んでも返事がないので、勇は無断で家に入っていたのである。

「静夫をいじめていたのですもの、お前の声なんか聞こえるものですか」

と舞子は笑いながら、いった。

いきなり後頭部をなぐられて、気がついたときには、全裸にむかれて、海老責めにされていたというわけであった。

「それにしても、不意になぐるなんて、ひどいですよ」

勇は、ぎしぎしと背中で骨の音をさせながら、舞子を、またうらめしうに見上げた。

「誰だかわからない男が、ぼーっと立っていでごらん。なぐるのが、あたりまえよ」

楽しそうに舞子はいった。

「女と子供だけしか、いない家なんだから」

「それにしても心臓が強い」

「そうかい」

どうやら、舞子は、侵入者が勇と知って、大胆な行動に出たような気配であった。

「でも、よかったでしょう」

ぎしぎしと勇の背中の骨が派手に鳴った。舞子が足で踏んづけたのである。

「あっ」

「フフ」

「ううっ」

「いたいかい」

勇は、ぼろぼろと涙を流した。いたい、なんてもものではなかった。

一晩中、背中を丸めたまま、押入れに、汚れた下着と一緒に押し込まれていたのである。これでも、少しはサディスティンの葉子にきたえられて、床下の穴にとじ込められた経験もあるから、たえられているといった状態なのである。

「面白い男が飛び込んで来てくれたよ」

と舞子は、勇の丸まった背中に足をかけ、ゆさゆさと、ゆすりながら、いった。

「こんなことを静夫にしたら、それこそ、すぐ熱を出して、あとの看護が大変だからね」

「ぼくだって熱がでます」

苦しうに勇はいった。

冗談はともかく、このまま舞子に責められていては、本当に発熱しそうであった。

「ぼく、というガラかよ」

舞子は、白いストッキングで包まれた足を勇の口に突っ込んだ。

「げっ」

「フフ」

舞子が容赦なく、ぐいぐいと足を押し込んでくるので、勇のあごがあがり、勢いあまって、うしろにどっと、ひっくり返った。

「静夫とちがって、元気がいいわね」

舞子の白い指が、すつとのびた。

「どうしてだか、静夫はだめなのよ」

「おびえているからですよ」

と、ひっくり返ったまま、勇はいった。

「おびえている？」

「そうですよ。こわいから、ちぢこまっているんです」

「何がこわいの」

「病人を看護している人がですよ」

「おだまり」

勇は裸のお尻をスパンキングされて、鼻息を荒くした。舞子のしなやかな手は、それほど痛くなくむしろ、ぞくぞくするような快感を勇にあたえたのである。

「もっと」

手がいたくなったのか、スパンキングをやめた舞子に勇はいった。

「もっと打って。気持がいい」

「おだまり」

いやというほど、尻を蹴とばされ、勇は呻いた。

「甘えるんじゃない」

舞子は、白衣のスカートの裾をからげると

「忘れていたよ」

純白のパンティを膝までずらして、舞子は

勇を見下ろした。

「静夫に朝食をさせてきたのだけど、お前にも半分、とっておいたよ」

「朝食？」

勇は、すでにピンときていた。

「菓子とかいう、お前の飼主と、どちらがおいしいか、ゆっくりと味をみてごらん」

舞子は中腰になった。

「スープは、ないからね」

「えっ」

静夫の口に舞子は、きれいさっぱりと放尿してきてしまっているのである。

「スープで流し込もうたって、それはだめだよ。お前に、たっぷりたべさせてやろう

と、静夫の朝食を少しへらしてきたんだから」

「毎日、静夫にたべさせているのですか」

と勇は驚いてきいた。

「静夫の病気が治るまでね」

治るところか、これでは、ますます静夫の性傾向は進んでしまう。

「そのうち、静夫は、舞子がつくった食事でなければ、たべなくなるわ」

「ブタだ」

「そうさ。静夫は舞子のブタ」

「――」

「静夫は一人息子だし、待っていれば、この家の財産は、みんな舞子のものになる」

「夢だ」

と舞子のふくよかな尻の下で勇は叫んだ。

「そうかしら」

「そうさ。そうに、きまっている」

「静夫が、そういったのよ」

「えっ」

「これは、舞子のつくり話じゃないわ。秘密の話なら、誰がお前に話すものですか」

舞子は軽く息をついた。なかなか陣痛が起らないようであった。

「そんなこと」

勇は唸った。

「馬鹿ね。静夫は、ロマンチックなマゾヒストなのよ」

「それを現実の、真のマゾヒストにしているのは誰なんだ」

「フフ」

静夫の空想を着々と実用化し、この白衣のサディスティンは、一人息子の静夫を掌におさめ、玉の輿にのり、女王振りを発揮するつもりなのかもしれない。

「夫を便所の中で飼っている妻なんて、すばらしいじゃない」

勇は返す言葉がなかった。

「口をあけて」

と舞子は勇を見下ろして叫んだ。

唇が乾いてきて、勇は唇を舌で舐めていたのである。

「早く」

勇は、あわてて口を大きく、あけた。

海老責めにされていては、舞子の命令に従うより仕方がなかった。

「あっ」

舞子の尻の下で、勇の恐怖におびえた声が上がった。舞子のいう朝食が、猿ぐつわのよう口をおおってしまったのであった。

「早くたべないと、窒息してしまうわよ」

勇の顔の上で、白衣のサディスティンの笑い声がした。

嘔吐する前に、勇は気絶した。

昨夜からの海老責めが限界をこえていたのと、あまりにもすさまじい舞子のごちそうをまともに喰らっては、いくら葉子にきたえられていても無理であった。

「意外に弱虫ね」

という舞子の声を、勇は薄れていく意識の中で聞いていた。

「どれ、勇のあと始末は、静夫にやらしてやろうか」

浴室で、静夫が舞子を待っているはずであった。

C

葉子は気嫌が悪かった。

一緒に寝ていたはずの勇が、いつの間にかいなくなってしまったからである。

「あんた」

隣室で一人で寝ている夫の三田の頭を葉子は蹴とばした。

「勇がいないのよ。どこに行ったの？」

「知らないよ」

三田は寝ぼけた顔で答えた。

居候の勇が妻と寝て、夫の三田が一人で寝ているという、妙な生活が、この頃ずっと続いていた。

「うそだろう」

葉子は足の裏で夫の顔を踏んづけた。

「本当に知らないんだよ」

三田は、あわてて妻の足を両手で支えた。足の裏で踏んづけられるのはいいが、下手をすると前歯を折られてしまうのである。

歯が折れなくても、やわらかな口の中を切ってしまう、血だらけになってしまう。

最近、葉子は乱暴になってきた。

「本当だな」

と葉子は、しつっこい。

寝ているうちに勇に逃げられたのか、もしかしたら、あの女、静夫の看護婦のところに行っただけではないかという疑念が、葉子を知らず知らず、むかむか、させるのである。

「くたびれて、ぐっすり寝てしまったから勇君が出て行くのに気がつかなかった」

「だめじゃないか、しっかり見張っていなければ」

「——」

「このウスノロ」

ナミオM画廊 『よく来たわね』 春川 ナミオ



三田は何と答えていいのか、わからない。
静夫の看護婦の舞子に、妻の葉子が、かな
りライバル意識を持っていることはわかる。
が、意外だった。
「すみません」
と三田は妻にいった。

「すみませんじゃないだろう」
葉子は、ますます三田にからんでくる。
どう考えても、勇が舞子のところに行った
(と思っている)のが、かんべんできないら
しいのである。
葉子がナイロンロープを持ち出した。

「手をだしな」

と夫の三田に荒々しくいった。

葉子は、三田の両手の指先から、ナイロン
ロープを巻きつけ始めた。

こうなっては、三田がいくら抵抗しても無
駄である。勇に逃げられて、カリカリきてい
る妻の葉子を静めるためには、妻のいいなり
になっているより仕方がない。

三田は素直に両手をのばして、だまって葉
子から縛られるままになっていた。

二のうでのつけ根まで、ぎりぎり巻きにさ
れると、三田の頭が少しゆがんできた。血液
の循環が渋滞し始めてきたようであった。

「痛いかい」

と気持良さそうに葉子がいった。

「痛いだろう」

この責めの痛さを知っている様であった。
三田の二本の手を、別のナイロンロープで
一つにくくると、

「ううう」

という鳴咽が三田の口から洩れた。

苦痛が、かなり激しいようであった。

「わめいたっていいよ」

と憎々し気に、葉子は三田にいった。

三田の二本の手は、血液の循環が完全に渋

滞したようで、うでをもぎとられるのではな
いかという恐怖が、三田を襲っていた。

「許して下さい」

と三田は妻に哀願した。

「だめだ」

と葉子は首を振った。

「お前が勇を追い出したのだろう」

葉子が、とんでもないことをいいだした。

「そんなこと」

驚いて三田はいった。

「勇君を追い出すなんて、そんなこと、でき
るわけがありません」

三田は必死になって葉子にいった。腕がし
びれて、どうしようもなくなってきた。

「ロープを解いて下さい」

三田はぼろぼろと涙を流しながらいった。

「お願いします」

「勇を追い出しておいて、よくもそんなこと
がいったものだ」

葉子は、かなり、しつっこい。

静夫の看護婦の舞子が、かなり気になっ
ている証拠であった。

「かんにんして下さい」

「本当のことをいえ」

「本当です。けっして、勇君を追い出したり

はしません」

「誓うか」

「誓います」

「うそつけ」

葉子は乗馬用の皮鞭をしごく、

「びしっ！」

と、しびれて感覚のなくなった三田の両腕
にたたきつけた。

「ぎゃっ」

三田は、まるで交通事故にでもあって、腕
を切断されたような悲鳴をあげた。

知覚を失った肉に、はじける鞭は、残酷な
までに三田を痛めつけるのである。

「ひゅう！」

と鞭が空を切った。

「ばしっ！ ばしっ！」

「助けて」

機械のローラーシャフトに巻き込まれたよ
うな激痛に、三田は思わず絶叫した。

「助けて、助けてくれ」

「うるさい」

葉子は、それでも容赦せず三田を打った。

「びしっ！」

「ばしばし！」

「助けて、許して」

「どうかしましたか」

庭に面した廊下の雨戸を少しあけて、隣の
大崎が、驚いたような声で顔を見せた。

「あら、大崎さん」

と葉子は、すっかり前がはだけてしまった
緋の長襦袢を直しながら、甘い声をだした。

「いらっしやい」

「いらっしやいじゃありませんよ、奥さん」
と大崎は、あきれていった。

「鞭打ちなら、猿ぐつわをしてから、やって
下さい」

「あら、そんなに大きな声だったかしら」

「大きな声も何も、ぼくのところまで、悲鳴
が、びんびん聞こえてくるのですからね」

「おおげさなのよ、この男」

「うで痛め縛りに、鞭打ちですか」

ひたいに油汗を浮かべて、布団に転がって
いる三田を見下ろして大崎はいった。

「解かないと危険ですよ、奥さん」

「そうかしら」

「残酷な人だ、奥さんは」

「そこがいいのでしょう」

「まいったな」

大崎は三田に近づくと、両手両腕を、ぎり
ぎり巻きに、きつく縛ったナイロンロープを

解いていった。血の循環をとめてしまつては体が、くさつてしまう。

「どうかしたのですか？」

大崎は三田夫妻のどちらへとなく訊いた。

「なんでもないの」

鞭を、ほうり出して、葉子はいった。

不意にじゃまが入って、葉子の気嫌は少しもよくなつては、いないようであつた。

「おや、勇君の姿がみえませんか」

大崎はニヤニヤしながら葉子にいった。

「家に帰つたのでしょうか」

と葉子はいった。

「たまには帰らないと、うちの人心配するから」

「そうですね」

大崎は、葉子があわてている原因を、どうやら気がついたようであつた。

「大崎さん」

と葉子がいっぱ。

「奥様は、まだ、お帰りにならないの」
いいにくいことを平気でいう。

大崎の顔が、くもつた。

「まだです」

「いつ帰ってくるのかしら」

「さあ」

「家出をしてしまったのかしら」

「そんなことはないでしょう」

「離婚して、新しい奥様をおもらいになったら？」

「奥さん、かんべんして下さいよ」

妻に逃げられた男は、頭をかかえて葉子にいった。

「そんなにいじめないで下さい」

ナイロンロープから解放された三田は、ぐつたりとなつて、布団に横になつたままであつた。口もききたくないらしい。

「葉子のお布団に行きましよう」

と葉子は大崎にいった。

「いいのですか、奥さん」

三田を見下ろして大崎はいっぱ。

「今更、何をいうの」

「また」

「そんなことより、早く裸になつたらどうなのよ」

いいながら、葉子は早々と緋の長襦袢を脱いで布団に坐り、片膝を立て、大崎にむかつて、おいでおいでをした。

「犬のように這つていらつしゃい」

大崎は裸になると、四つ這いになった。

首を低くして、そろそろと葉子の片膝立つ

た足に、顔を寄せてきた。

「鼻をびくつかせて、よくかいでごらん」

葉子は腰を浮かせて、大崎に匂いをかがせるために、露骨なポーズをとつた。

「いい匂いでしよう」

大崎の顔にすり寄せるようにして葉子はいっぱ。

「かいだら、舐めてもいいのよ」

「奥さん」

と大崎が唸るような声をあげた。

D

浴室のタイルに、全裸のまま、長々とのびている二人の男を見下ろしながら、白衣の舞子は、にやにやしていた。

若くて、ぴちぴちしたおいしい御馳走が二匹も、舞子のいいなりになろうとしているのだから、舞子にとって、こんなに爽快なことはない。

静夫も勇も、こつてりした朝食を舞子にたべさせられて、朝からノックアウトをくらつたように、全身がでれつとして力がないようであつた。

念入りに洗つたばかりの青年の肉体を、舞子は、あくことなく見つめていた。

静夫は病弱らしく、痩せて骨が見えているが、勇は、ほどよく肉がついて、舞子好みの体といえそうだった。

白衣の舞子の白いヒールが、静夫の目立たない乳首に触れると、

「ああっ」

と静夫は敏感に反応して、勇を驚かせた。

「フフ、くすぐったいかい」

片足をもたげ、舞子はヒールの先で、静夫の乳首を、やわやわと踏んでくる。

「そこは、だめ」

と静夫が叫んだ。

静夫の乳首を踏んだまま、いきなり、舞子は勇の胸に白いヒールを乗せてきた。

「痛い」

と静夫が悲鳴をあげた。

勇は眉を、しかめただけであった。

静夫のおおげさな悲鳴に、えんりよしたわけではないのだが、何か声が出なかったのである。

二人の裸の男の胸を踏んづけて、白衣のサディスティンは、すくっと立った。

「どう、重くないでしょう？」

「重い」

と静夫は、舞子の足首をつかんでおしのけ

ようとした。

「勇は？」

「軽い」

と勇は答えた。

ヒールのかかどが鋭くなく、巾の広いものだったから、肌を傷つけることはなく、がまんでできないこともなかった。

だが、決して軽くはなかった。肉がよじれて痛かった。

「勇は乳首に感じないの」

と舞子がいった。

勇は、うなずいた。静夫ほど敏感ではなかった。

胸から首へ、舞子は二人の男の裸体の上を歩いた。

「く、くるしい」

首をおさえられて、静夫があばれた。

「大丈夫よ。殺しやしないから」

舞子は、ぶっそうなことをいった。

「げっ」

反転して勇の首を舞子のヒールが圧迫し、勇は蛙を踏みつぶしたような声を上げた。

「フフ」

面白そうに舞子は、ふくみ笑いをした。

首から胸に、胸から腹に、舞子はそろそろ

と二人を押し潰していった。

二人の男のやわらかな腹部が、舞子の重みで、ぐっと、へこんだ。

「許して」

と静夫が哀願した。

「弱虫」

振り向きざま、

「ペッ」

と舞子は、静夫の顔に唾液を吐いた。

「まったく、いくじなしなんだから」

舌打ちして、舞子は静夫を踏みつけていた足を、もろに勇の腹部に運んできた。

「ぐえっ」

踏みつぶされて半殺しになった蛙が、とどめをさされたような声をあげて、勇は目を白黒させた。

背中なら、まだ舞子一人の体重ぐらい支えられるだろうが、やわらかな腹部となると、そうはいかなかった。

「オーバーねえ」

肩をすくめて舞子は勇の腹からもおりた。

「まだまだ訓練しなければだめね」

プロレスの学校へでも行かなければ舞子の責めを受けるのはむずかしいかもしれない。

「四つ這いになってごらん」

と舞子は二人の裸の男にいった。
静夫と勇は前に両手をつき、膝を折った。

「二人とも身体を寄せて」

勇の右腕と、静夫の左腕が密着した。

「そのまま待っておいで」

舞子は責める器具類を取りに、もどったようであった。

「腹がへった」

と勇は静夫にいった。

「朝食って、アレだけなのかい」

舞子の排泄したものが朝食であれば、空腹で身体がもたない。

勇は一寸、心配になった。

「ひと遊びしたら、本物をたべさせてくれます」

と静夫がいった。

「本物って、米の飯のことだろうね」

「ええ」

「まさか、舞子さんの肉体を通過した米の飯じゃないだろうな」

「舞子さんだって、そんなにでませんよ」

「それもそうだ」

かなりの量を、舞子は、静夫と勇の顔の上に排泄しているのである。

「何を、ごちゃごちゃいっているの」

鎖の音をさせながら、白衣の舞子が浴室にもどってきた。

勇の右手首と、静夫の左手首が、ひとつにされて手錠が、はめられた。

勇の右足首と静夫の左足首には、一つの足枷が二人を連結した。

もう一つ。膝の下あたりに、太い鎖の輪がはめられたのである。

前後に突起物のついている、レザーバンドを二つ取り出して、舞子は二人の顔を眺めまわした。

「女なら、さしずめ、皮の貞操帯というところなのでしょけど」

と白衣の舞子はいった。

「男用に製作したから、貞操帯ではなく、やはり、奴隷帯と呼ぶのが、ふさわしいわ」

袋のような皮の突起物を、二人の男の顔の前に突きつけて、

「これ、わかる」

と舞子はいった。

「女なら、いらないわね」

舞子は二人の男の後ろにまわると、しゃがんで、腰にレザーバンドをあてがった。

一つの突起物の用途は、わかった。

奴隷帯には、もう一つ、前よりも細いが、

長くて鞭のような突起物が、うしろについているのである。

「犬や馬には、しっぽがあるものねえ」

長くて細い、もう一つの突起物のことらしいのである。

レザーバンドを、乱暴に二人の男の腰に固定してしまった舞子はニンマリと笑って、薄い生ゴムのパンティを、静夫と勇の顔の前でひらひらさせた。

「これがお前たちのマスクだよ。うれしいだろう」

と舞子はいった。

昨夜、勇の口の中に、赤味を浴びたカットメンを押し込んだように、舞子はメンズが終わったばかりのようであった。

「洗濯なんかしていないからね」

生ゴムのパンティを、舞子は二人の男の頭から、すっぽりと、かぶせた。

「鼻だけは出しておいでやるよ」

パンティの太腿にあたることを、上手に鼻のあたりにもってきたのである。

舞子は、白衣のポケットから、細い鎖でつながれた二つの金の輪をとりだした。

「鼻輪だよ」

と舞子はいった。

静夫の顔の前にしゃがみ、静夫の小さな鼻を指でいじっていたが、金の輪を静夫の鼻孔にいれると、まるで手が鼻輪をしているように、つけてしまった。

「鼻に穴をあけているわけじゃないよ」

と舞子は勇にいった。

「イヤリングのように、はさむだけだから心配しなくてもいいの」

もう一つの輪が、勇の鼻につけられた。

「そのうち、二人とも、鼻輪用の穴をあけてやるからね」

イヤリングのために、女性が耳に穴をあけている時代である。

鼻に穴をあけても、おかしくないだろう。

最後に、静夫と勇の首に、がっしりした犬の首輪が、はめられた。

白衣のサディスティンは、男の二人の背中に、両足をどっしりとおろして、立った。

鎖が二人の男の口を割って、舞子の手でしぼられた。

鎖の手綱であった。

「ひゅう」

と皮鞭が空を切った。

「びしっ！」

「びしっ！」

と二人の男の尻に、皮鞭がはねた。

「走れ」

と舞子は叫んだ。

「庭まで走れ」

走れといっても二重三重に手錠足枷、鼻輪鎖と、二人の男は連結されているのである。

よたよたと舞子の奴隷たちは走った。

「おそい」

白衣の舞子は、容赦なく鞭を振り上げた。

「ばしっ！」

「ばしっ！」

静夫の悲鳴は、生ゴムのパンティのマスクと、鎖の手綱に消えて、押し殺したような呻きとなっていた。

浴室から廊下へ、二人の奴隷帯をつけた男たちは、長い皮のしっぽを、だらりとさせて白衣のサディスティンをのせ、のろのろと這った。

「さっき、電話があったわよ、勇」

不意に、舞子は勇にいった。

勇は生ゴムのパンティのわずかな穴から、舞子を見上げた。

急に振り向くと、静夫の鼻とつながれている鼻輪が引っぱられて痛くて、どうしても緩慢な動作になってしまう。

「三田さんからよ」

「——」

「三田夫人じゃないわよ」

舞子は足をのばして勇の頭を踏んづけた。

「勇が行ってないかっていうから、来ているっていいおいたわ」

これは困ったと勇は思った。

葉子に無断で逃げて来たのである。

バレてしまうと、葉子にどんなお仕置を受けるか、わかったものではない。

「舞子の献立で、おいしそうに朝食をたべているって、三田さんについておいたわよ」

勇は、がくつと頭をたれた。

バレてしまったのは仕方がない。

舞子が許すかぎり、静夫の家に居候してやれと決心した。

サディスティンも、舞子のほうが、未知で新鮮で若いのである。

廊下から、やっと庭に出た。

「庭を、ぐるっと走るんだ」

と舞子は叫んだ。

二匹の人間馬の背中の上で舞子が一枚一枚服を脱ぎ始めた。



躍進二月号を読んで

北口好夫

七二年はポルノ解禁の時代だといわれているが、その幕明けにふさわしい奇クの変身ぶりである。私は相当以前から、この雑誌を読んでいますが、このように内容の

充実している時代はなかったのではなからうか。例えば写真にしてもグラビア版には及ばないけれども大きくて鮮明になっているし、実に数が多くなっている。余談で



はあるが、奇クを手にしてパラパラとめくってみて、写真の数が多いと得をしたように感じるものである。

更に読物にしても、だんだんとキワドイ描写が多くなってきたようだ。以前はある程度までしか書かずに読者が勝手に空想し興奮したのであるが、最近はその要請に応えたというのか、実に刺激的なSMシーンが随所に展開して私達をわくわくさせる。

塚本鉄三氏のルポは毎度のことながら、緊縛写真の美しさには惚々として感心させられる。それにしても、福竜という芸者は実にすばらしい身体をしている。ポリウムは余りなさそうであるが塚本氏の巧みなカメラにかかると、身体全体が悦びの表情をあらわして躍っているようである。

身体が軽い彼女なればこそ出来たのであろうが、柱を背負っての足揚げポーズは実にすばらしい。このポーズでのパイプ責めは、文中にあるように、女体はさまざまに変化をし、悦虐の叫びは女体の或る部分からだけ、とめどもなく流れつづけた……。というのであるが、これまで、このような見事な描写があったであらうか。塚本

氏のルポの文章の中に、美を感じたのは私一人だけではあるまい。

ロマン派生氏のマゾヒスティックレディは、文も具体的であり会話もあり、現代的臭味を感じるが、惜しむらくは写真が稍白っぽい点である。黒のストッキングはいいものであるが、もう少し長目のものはないのであろうか。ガーターをつけてストッキングを着用せると面白いと思う。

写真全体をもう少し黒っぽくすると、黒のストッキングと白い肉体とのコントラストが美しかったのではなからうか。また無理からぬことだが、写真をとるタイミングを少し変えたと肉体の表情も出せたのではなからうか。目がかくされているのだから身体の表情がはしかった。それにしても、立派な身体の女性である。ロマン派生氏が、うらやましい。

M女通信の高村浩子は以前、辻村氏に縛られたとき、妊娠していたようだったが、どうなったのであろうか。すべやかそうな裸身を見ていると、フト考える。今度は塚本氏に両足を開けられての羞恥の浣腸責め、もう徹底的にM女に仕込まれている。彼女にとっていいことかどうか知らぬが少なくとも

＜想句＞

M 女のお正月

北川まりこ

年越しのお仕置受くと素裸の

わが身横たう寒き板の間

除夜の鐘鳴り始めたり緊縛の

素肌に賜う鞭音もまた

鐘音に合わせて響きし鞭打ちの

百八ツ目がいま終りたり

足指に唇寄せて奉る

新年の賀詞 奴隷の誓い

緊縛の裸身くねらせ初奉仕

熱き口づけ 奴隷の証拠

罪多く淫らな女体浄めんと

若水注がるマゾの裸身に

若水の冷たさ肌に泌みとおる

熱き血汐も凍るばかりに

霜柱素足に踏みて初日待つ

庭木の幹に裸身くくられ

縄解かれ寒き厨で整うる

雑煮の支度も素裸のまま

舞初めの扇一本賜りて

はだか踊りのこの身羞し

投扇の古き遊びに興じ給う

開股縛りのわが身を的に

新年の年玉代りと手ずからの

初剃り賜う刃先の冷たさ

書初めの筆の運びもたどとし

ドレイと辿る後手のまま

も私達読者にとっては末が楽しみ
な人である。

カメラハントは妊婦の、それも

大分以前のものであるから、現在
では少し物足りないが、第一号で
あり、九カ月の身重であればいた
し方ないであろう。余談であるが
九カ月にもなれば、ちょっと押さ

えれば腹がはじけそうな状態にな
り、普通なら、とてもSMプレイ
などできないものである。

風流極道軒氏の『紫蘭の門』は
実に血沸き肉躍る痛快なSM時代
小説である。次から次へと出てく
る奇想天外な責めの方法は、本当
に面白い。空想の世界が限りなく

ひろがってゆく時代物の方が、道
具立ても豊富だし、少々の不自然
さも時代がカバーしてくれるので

SM小説にはうってつけである。
伏せ字のところに、どのような
文字が入るのだろうか楽しみなが
ら読んでゆくと、頭の中にいき
いきと豊香の白い裸身が浮かぶ。

ポルノだ、まさにこれは
ポルノといつてよい。来
月号が待ち遠しい小説の
一つである。

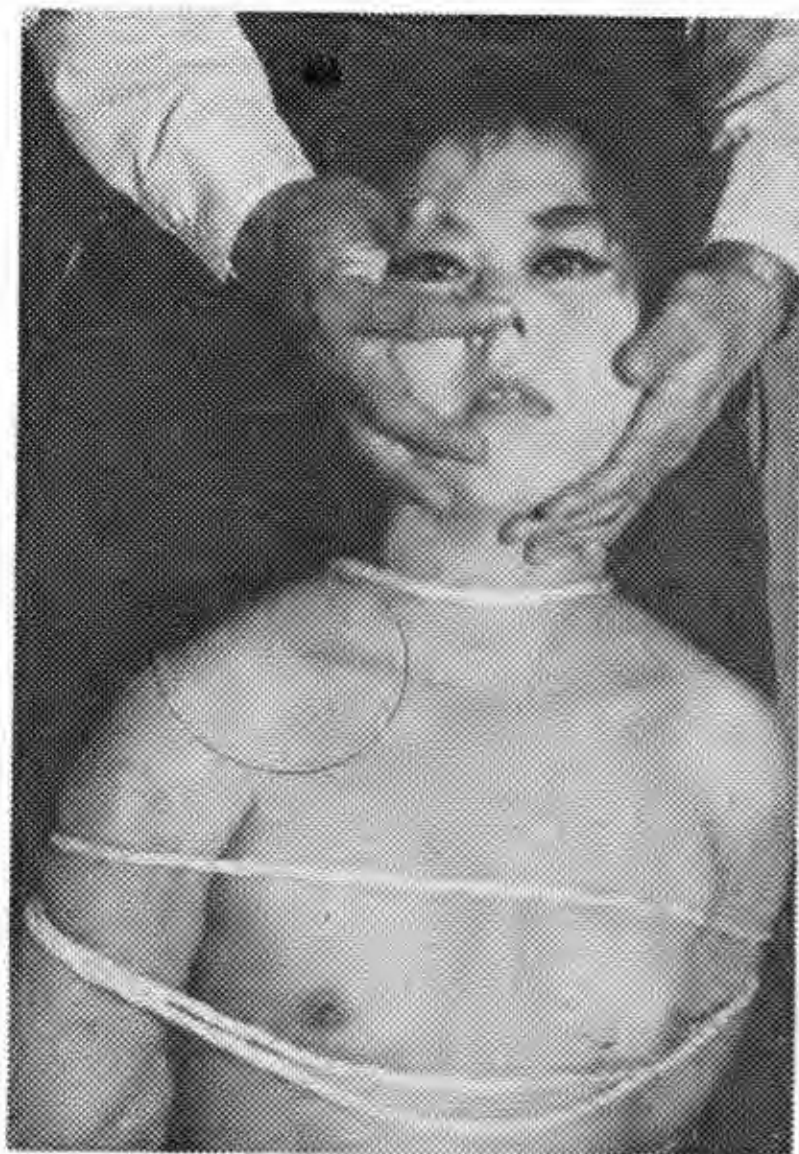
マダム美美代こと福井
桃子の告白は面白い。S
M両方の気があるらしく
彼女のグラマーな姿態を
いちど塚本鉄三氏に縛っ
てもらいたい。一八六ペ
ージの写真のように、か
なり後手をしげると上に
手が挙がるから、身体は
やわらかいのだろう。片
足を下げておいて、もう
一方の足を頭の上に挙げ
たままで浣腸をしてやり
たい。あの豊かなヒップ
を縄で縦横にしばりあげ
車の毛パタキでワキの下
や股間をなでてやりたい
などと、どんどん空想の
わく美女である。



鼻責めの自作フォト

真鍋 五十二

私は数年前の奇クに、女性の鼻責めの体験やフォトを発表したところのあるマナベ・イソジです。私は女性に対する緊縛、その中でも鼻に対して責めを加えることと、その写真を撮影することに非常な興味を持っておりま。自分の手指で女性の鼻陵や鼻翼、鼻孔などをいろいろに変形させたり、セロテープ、ゼムピンなどの小道具を用いて苛めるのが好きです。今まで何人もの女性を使って鼻



責めの写真を撮影してきましたがここに同封しました二葉は最近の作品です。奇クのモデルさんの中にも私好みの女性が沢山いられますが、一度、私に責めさせていただきたいと思います。きつと誌上に飾れるような作品が出来ると思っています。

それから全国の鼻マニア鼻責めのファンの方々、これからもどんどんお便りを下さいますようお願いしております。

美しき鼻孔の追求を望む

山井 二郎

いつごろから、顔の中央の一部分に、こんなに心ひかれるようになったのか、私自身が不思議ですが、ともかく今は、鼻そのものの、外形のすなりと延びた鼻筋のカーブ、肉付き豊かな鼻翼、少し高目で大きな鼻頭、まっすぐな鼻柱に鮮烈な魅惑を覚えます。

あの日も、あの美しい縦長の鼻孔が目映らなかったら、私は好江を誘わなかったに違いありませんでした。私の希望を知った時、好江は大きく目を開いて、美しい鼻を振っていやいやをしました。

しかし、あり合せの紐で後手に縛ってしまうと諦めたらしく、仰向けにのけぞった好江は、照明に美しく映える素晴らしい鼻を、存分に見せてくれました。縛られた痛さのためか、白い歯並びから呻き声が洩れていました。その上向いた美しい鼻孔と鼻翼のわななきは、私には戯れを求めているもの、のしか思えませんでした。

私は、径三ミリの金属棒を二又の鉤型にしたものを、あえぐ鼻孔の上部に掛けて引いてみました。好江は思いがけなかったのでしょ

う、ああっ！ というなり、よけいに鼻孔を上向かせてのけぞりました。その瞬間、私は全身がしびれる思いがしました。白く美しく光る鼻孔と打ち震える豊かなその鼻翼、鉤に引かれて伸びきった鼻柱のいいようのないあえぎ。

可愛い顔を朱に染めて、振り離そうとしても取れない鉤に引き伸ばされた縦二列の鼻孔を、私の手で鏡に映して見せられた好江は、豊かな鼻翼を汗で光らせながら、「恥ずかしいわ」と呟きました。

夢を現実のものにしてくれたことを謝して別れた後も私は、きつと好江は、短い時限、狭い範囲内ながら私のものとなったことに悦びを感じ取ってくれただろうと確信していました。

だが、その後一週間して私が訪れた時、愛する好江は転居してしまっていたのです。どういふ事情か訊ねることも出来ませんが、あの日のプレイが原因だとは思いたくはありません。

私は今、同好の方と鼻の美しさの追求を話し合いたいのです。意を同じくする方、お便り下さい。

浣腸マニヤの手記

山田 悠 介

二十年前位前から奇クとなじんでいる浣腸マニヤですが、昭和二十九年頃の羽村京子さん、花村恵美子さん、角皓子さん等の書かれた浣腸マニヤの優れた告白文を、胸をわくわくさせながら読んだことを今もはっきりと思い出します。当時、感激してお手紙を差上げたのを、読者通信欄にのせていただいたこともあります。

その後、御誌にそのような文が少なくなったので少し遠ざかっていましたが、最近、又ポツポツと良い告白ものがのようになったので戻って来ました。最近のものでは、42年7月号の菅野弘さんの文。44年3月号の大川恵子さんの文。46年12月号の中野昭子さん、近藤恵美子さんの文等が優れていて、印象深く、読みました。47年1月号の福井桃子さんの文も、めずらしく、写真まで入って中々リアルでよかったと思います。



イメージ「実験」岩波大介

最近SMブームで多くの雑誌が出ていますが、その中に出て来る浣腸は殆ど「花と蛇」を焼き直したような責めものばかりで面白くなく、矢張り浣腸は創作よりも告白文の方が平凡でも、はるかに迫力があり、それ等は長年の伝統ある御誌をおいて他にないというところを、しみじみ感じます。

最近、稲垣足穂氏著

「絵本、逆流のエロス」(現代ブックス社)を読みました。この本は全篇にわたりA感覚について、くわしく述べており、昔のヨーロッパの浣腸画が、いくつものせてあったり、その他、ホモの交わりの図も多くあったりして、マニヤの方々におすすしたい本ですが、その中で稲垣氏は「私自身も凡俗な性交を避けて相思の男女が浣腸だけしあっている実例を知っている」と述べています。何と素晴らしいことでしょうか。うらやましい限りだと思っています。

又、最近発行された松窪医博の著書「高等性戯」及び監修書「SEX365日」(駿河台書房)を読みますと、男女の性愛のいろいろな変化が紹介されており、その中に縛りや鞭打ちと共にアヌプレイや浣腸プレイが写真や絵入りで述べられています。昔は一部のマニヤだけであつたであろうこれ等のプレイが、広く一般化されようとする前ぶれであると、喜ばしく感じました。そして、若い青年男女の間に猛烈に、はやっている浣腸遊びVと書いてありました。それが、それ程のブームだとは知りませんでした。今の若い人が何でもどしどし実行に移すというの

は、うらやましいですが私のような中年の独身者には中々そのような機会がないのが残念です。何処かトルコ風呂のようなところで女性と相互プレイが出来るとなところがあれば勇気を出して行ってみたいと思います。

先日、御社で分譲している浣腸写真から二十組ばかり送っていただきました。流石に見えたえのあ出来ばえのものが多く、特に深田菊子さんのものは全裸の大胆なポーズのもの、浣腸器の先端が殆ど挿入されたかのように見えるものもあり、大変迫力があります。又、東浦ひかるさんのものや、東浦さんと山原さんがプレイしているものも中々見事で、雰囲気もよく出ていて見たえのあるものです。そして浣腸されている東浦ひかるさんの表情の可愛らしさに、思わず写真に向かって「ひかるちゃん」と呼びかけてしまいました。毎日こうして浣腸写真を眺めて楽しんでおります。

以上いろいろと述べましたが、今後の御誌浣腸記事の、より一層の充実をお願いすると共に、同好の方々と話し会える機会を持ちたいと願っております。

(東京都新宿区)



—〈第九十四回〉—

辻 村 隆

旧号の私のカメラ・ハント、飼育の愉しみや、ミキとマキの華麗なる戯れに登場した小池美喜は、もともと、私の家の近くにある理髪店の理容師の卵であった。大阪キタの理髪店に替って以来、一度訪れたが、そのうちに又と思つていたが、先日、覗いてみたらもうミキもマキもいなかった。腕の上がるにつれて移動していったのか、或は、いい相手でもみつけて、結婚したのかも知れない。折角ハントした可愛い娘も、その後、絶えて放っておくと、いつの間にか、音沙汰がなくなってしまう。さりとて、いつまでも彼女達のしりを、追っ掛けて許りもおれず、痛し痒しである。

う二年前のこと。私が客だから、近頃は触れもしなくなつた。マスターは、どちらかというと長髪嫌いの方で、さっぱりと刈り上げるのが、お好きらしい。流行だから詮方なく、ヤングパワーには長髪を揃えているが、若いキビキビした理髪師に、その方を任せようここ十数年来、一向に変わることもなき、私の頭など調髪している方が気楽そうであった。

凡な日常性の私である。とすれば比率の高い、日常性の私にふさわしい頭でいる方が、無難な様であった。少なくとも私の年令で、長髪族は、我が町内には一人もいない。となると、やはり多少の未練はあつても、従来のままの私の頭髪の方がふさわしく思えるのであつた。いっそ、脱ばやりの世の中思い切って長髪かつらでも仕込んで、ハイド氏の私の折には、変貌したく思つても、さてとなると、そうなり切れないうところ、私もやはり古い人間の一人なのであろうか。

脱サラ、脱日本と、脱ばやりの近頃、私は自分の自由さが、つくづく嬉しくなるのであつた。興あれば夜明けまで書を読み、眠れば正午近くまで睡眠をとり、喰べたい時にたべ、したいことを好きな様に出来る今の環境や、仕事に、今更のように感謝している。脱サラリーマンなればこそ、SMのカメラ・ハントも出来、雑文の一つも書けるのだと思うと、誰にも拘束されない職業を選んだ、自由人の愉しさを、しみじみと満喫する昨今である。

ポルノ的な題名のドギツサに、フト心惹かれ、偶に西欧ポルノ映画を覗くことはあつても、どうもSMがかったものは少なく、裸女とファックの連続で、落胆させられることが多い。期待して観にいったがッカリすることもある代りフト好き心に誘われて覗きに行くポルノ映画に、思い掛けないSM性を発見する時もある。

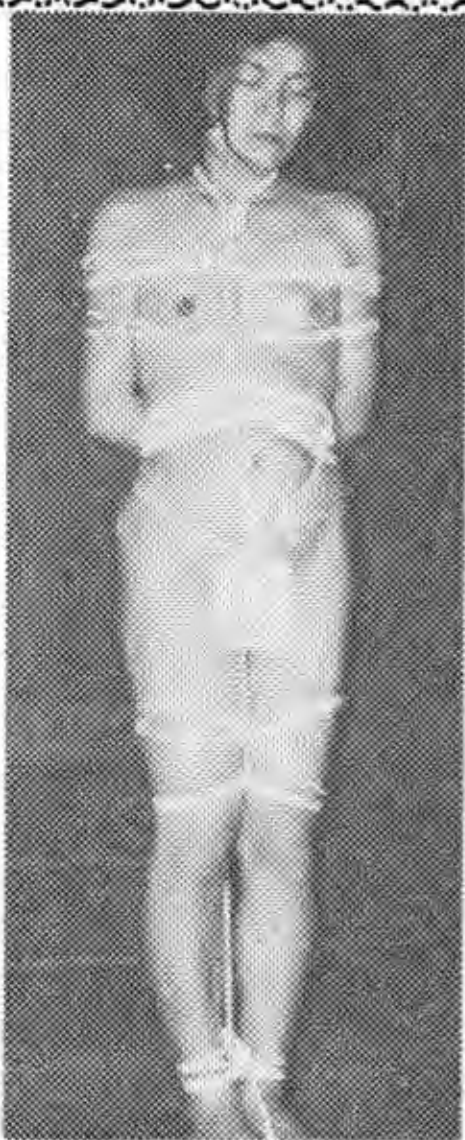
話題にものぼらなかつた「アニマル百年史」が、強烈なSM性に終始したのには一驚した。二番煎じ三番煎じの映画館で、上映を知られたら、是非、同好の方に一見を、お奨めしたい一巻である。

内容は百年史とある如く、四話に分かれていて、第一話は南北戦争がテーマ。

北軍の退却した部落に南軍が侵入し、残された一軒のノミ屋に押し入る。金次第でどうにでもなるオヤジを督励して、居残った娼婦を兵士に提供させ、セックスに狂う彼等を指揮者は冷たく見守る。このあたりポルノ調であるが、その部落を、少数の北軍に守られて将校夫人と黒い奴隷が逃避して行く。逸早く発見した南軍は、少数の北軍兵を皆殺しにして、将校夫人と黒い奴隷を引摺り込み、衆人環視の中で輪姦する。逞しい黒い

好美の立ち縛り

渡部光雄



肌がのけぞり、無理矢理、開股させられた黒い女性の一点に、数多の猥褻な兵士の眼が注ぎ、のりかかって行く、粗暴な兵士達の振舞いには、征服者の激しいサジスチックな行為が充満している。

息絶えた黒人女性が、床に転がる傍の、机上に挙げられた将校夫人は、襲多い服を一枚一枚、剥がされて全裸にされ、数人が手とり足とりして、輪姦に狂い立つ。

戦場にかかり立てられた兵士の群集心理は、確かにこの様であったに違いない。そくそくとした迫力が観る者の眼に迫ってくる。

第二話は西部開拓の掠奪——。

アメリカ人に大牧場を占有された若いメキシコ青年が、復讐にか

り立てられた。白馬に打ち跨がって、華麗に草原を走ってゆく牧場主の妻を襲う。激しく抵抗する夫人の衣類を剥ぎ、裸馬に縛りつけて隠れ家に拉致し、全裸にして後手に縛って犯したあと、両手を縛って梁から吊り下げ、激しい鞭打ちを振う。夫人の持物を馬の背につけて、牧場主へ挑戦し、数人の奪還の男達と争う。

激しい争いの間、夫人は全裸のまま、ずっと吊り下げられ、憎悪を覚えると若者は思い出した様に打擲する。彼女の裸身には、痛々しい鞭痕が烙印をふやして行く。

果ては夫人を罵り殺しにして、牧場主と対決して両方とも斃れるが、何とも凄まじい、息をのむシ

ーンの連続である。開拓史の一頁には、こうした狂った掠奪も必然的にあったであろうことは想像に難くない。

第三話は、ナチスに捉えられた娘達の残酷な収容所を描く。

ナチスに捕えられたユダヤの娘達が、性のいけにえ、唯、慰安に供せられる収容所に、運ばれてくる。並ばされた娘達が、兵士の好色の眼の前で裸にむかれ、水浴と称して、激しい放水の洗礼を受ける。柔らかな口調の裏に、恐ろしいトゲのあるナチ将校の命令は娘達に性の奴隷を強要する。殺されるよりマシと、命令に服した娘達が、裸身に布子一枚、羽織って部屋にかたまる。侮辱に頭じなかつた娘一人が、一同の前で見せしめとなつて、三角の按馬にまたがせられて吊り下げられる。誰も同情してはならないと命じて、そつと覗いている将校の目に、一人の娘が、拷問される娘に水を与えるのが見える。忽ち一同に懲罰の鞭がなり、高々とバケツを捧げてかつての日本旧軍隊そっくりの罰が娘達に課せられる。

ころげ落ちた娘の股は血まみれになり、三角按馬の尖角は真っ赤な血に染まっている。その娘は這

いつくばって将校の泥靴をペロペロとなめさせられる。

娘の必死にめぐる舌が激しく動く。暴力の姦淫——。一人の娘が

ナチの豚と叫ぶ。忽ち、この娘は全裸にむかれ後手に吊り下げられ将校の革帯が強烈に臀部に飛ぶ。臀部の薄桃の条痕が、打擲と共にありありとされるされてゆくのは、描いたものでなく、娘は真実苦悶し、鞭痕は正に打擲によるものであることに一驚する。このシーンの迫真力は、映画として、かつてその種の、どの映画よりも凄まじくリアルであった。

ナチ高級将校の前で、数人の娘が、乱れてレズ絵巻を繰り上げさせられ、将校は独り欲情する。

それも連合軍の反攻で、この娘達は、すべて一片のちりあくたのように殺されて、ブルトナーで押し潰されて行く。これはナチ収容所の実写の一端と挿入してある。このナチの残酷シーンは、全篇圧巻でSM趣味、横溢している。

第四話は現代。ノゾキの脅迫。超望遠レンズで、アパートを覗く男の眼に、子持の未亡人の自慰が映る。男は子供を誘拐して、交換条件に未亡人に情交を迫る。拒絶する未亡人の全裸に激しい鞭打

ち。挙句に男の眼前で未亡人は自慰を強要され、交情する。所用のある男に頭痛薬といつわって睡眠薬を与え、自動車を飛ばす男は墜死する。未亡人の復讐であった。鞭打ちシーン以外、陰湿で、この物語が一番落ちるが、チャンとSM的要素は含まれている。

以上、ざっとした概要であるが百聞は一見に如かず、この映画、同好者は昂奮する事請合いである。正に人間はアニマルである。

× × ×
 万一の場合を懼れてか、SMのプレイはしたし。されどフォトを撮られることはイヤと仰有る女性が案外に多い。

プレイのひとつときの耽溺、情事には、当事者が緘黙していると洩れることもないが、一旦、カメラハントとして公表されると、いっどこで、どんな場合、露見するかも知れぬという危惧が先に立つのである。

それだけに、SMカメラ・ハントして、発表する私の立場も又、誠に微妙である。

肉体的、或は容貌にコンプレックスを感じて拒否する人——発覚を懼れて難渋する人——撮影のために、折角、盛り上がったプレイ

の雰囲気寸断を嫌がって難色を示す人と、動機は、いろいろあるが、この女性達の共通性は、SMのプレイを前戯として、窮極は激しいセックスに感溺したがることである。

好色の私、勿論、望むところであるが、フォトを撮らないとなると、どうしても数々の緊縛が煩わしくなり、単なる束縛程度で、女体探究の方へ走り勝ちになってしまふ。それが真のSMプレイといえ、それまでだが、みすみす未知の宝の山に入りながら、そうして過ごす時間が、つい惜しくなり緊縛の様々の変化を求めながら、一方では愉悅の淵に沈んでカメラは投げやりになり果ててしまふ。このギャップ、この矛盾——。

いつもプレイとフォトとの谷間で斗いながら、私のSMカメラ・ハントは辛うじて、ギリギリ一杯の線で、何とかカメラを駆使し、反面プレイに耽溺するといった状態が続いているのである。

所詮、毀誉褒貶は世の習いで、そうした私のハントのフォトに、いろいろの御意見が、よせられ、リアルとする方。平凡、単調と難じる方。迫力なしと断じる方。プレイの生まの感じが出ていると仰



イメージ画『巨木の花』丸鬼怒又奴

有る方など、千差万別である。私はそうした御批判に対して、滅多に抵抗しないし、反撥もしない方である。何故なれば、撮るのは私一人——どうしても、辻村隆流というものが出てくる。それに対しいちいち、そうした方々の御高評通りやっているとキリがないし又Aの方むきに氣に入るように撮っても、BやCは氣に入らぬかもしれない。これで万全ということは同好者の好みが違う限り、絶対、

八方美人たり得ないからである。性倒錯の世界の、SMプレイで、谷山、渡部両女性を煩わした結果、もっと若い美人を使ったらという意見の方、ハント女性の二人を映画でみて感激したと仰有る方と、ことごとに対立する。強烈なプレイが先行するか、若い美人で、月並なプレイでお茶を濁すかそれは見る人、行なう人の自由である。とも角、私を巡っての批判は花盛りで嬉しい極みである。

増田みゆき夫人の双胎臨月蛙腹ハントのリバイバルを望む

辻村先生へお願いしたいこと

大 原 女 生

以前、一度「大原女」というペンネームで投稿したことのある者です。私は、若くて健康な男性です。傾向はサド的、特に妊娠して大きく腹が膨らんだ女のヌードに関心を持っています。奇巧誌上で妊婦ヌードが、ときどき発表されることに楽しんで眺めています。

二月号では、辻村隆先生のSMカメラ・ハント、八緊縛妊婦第一号今昔——田中美佐子の巻——を面白く拝見しました。初めての妊婦ハントの忘れられない思い出が、ワクワクする気持ちをそのまま出して、克明に書かれています。殊に一五四ページの写真が、すばらしかった。白い三角形がなければ、もっとよいのですが。奥様以外の女性の、子を孕んで丸々と膨らみ切った腹を最初に十分、眺める機会を持たれたときの感激が率直に、にじみ出ている文章です。

ところでその後、辻村先生は何かの妊婦をハントされ、カメラ・ハントに書かれたようですが、昨年の春に出た増刊号の文章に出

て来るリストには、これまでに見られた最も巨大な腹をしていた増田みゆき夫人がハントに登場したとは書かれています。妊娠七、八カ月頃から何回もハントされたはずですが、最後のころのものは書かずじまいになったようです。

七年半前の妊婦ハントをリバイバルされるのでしたら、まだ五年ちよっとにしかならない、みゆき夫人の妊婦ハントのリバイバルを是非、書いてほしいものだと思うのです。

昨年八月号の「楽我記」に山のようになり上がった腹のみゆき夫人の写真がのっていてマジックで「は、は」と目付が読めるのですが、最近、三人目のお嬢さんを亡くして悲しんでおられるという、

みゆき夫人のためにも、妙な理屈ですが、是非、臨月腹で妊婦ハントされたときの模様を詳しくのせていただきたい。年末に産れたというのですから、ほんとうに分娩直前、ものすごい膨み方だったにちがいありません。それに、珍しい双胎ということですから。妊娠中の最後に、ハントされたときの様子を是非、知りたいと思っています。

そして、出来ればのことですが次の臨時増刊号に、せめて腹だけの写真でもいいから増田みゆき夫人の妊婦フォトを一枚でも、のせてほしいと思います。

私のような者が、辻村先生に勝手なお願いをして申しわけありませんが、双胎臨月蛙腹の妊婦、増田みゆき夫人のSMカメラ・ハント・リバイバル版を、是非お願いしたいと思っています。五年以上前の時代とちがって、SMポルノが、あちこちと出廻っている今日、双胎臨月蛙腹妊婦ハントは、リバイバルとしても十分、世間をアツと言わせるものと思います。むしろ五年前に、ここまでやったという記録として、得がたいものではないでしょうか。是非、お願いいたします。



短 信 往 来

プレイへのお誘い

渡部好美様へ

野島浩より

寛大なお心と深いご理解をお持ちの御主人に恵まれて、しあわせなM生活を送ってられる渡部好美様へ申し上げます。

貴女様は、既に幾度か実現された由ですが、もっと勇気を出されて別の男性とプレイをされ、更に素晴らしい刺激を受えられるべきだと思います。貴女様はそれを享受するに足る価値をお持ちの得難いM女性なのですから、もっと新しい、御主人とはまた違った、まだ奥の深い責めをお求めになるべきではないでしょうか。

その新しい責めを、私が与えて差上げます。チャンスをお作り下さり、私にそのお体をお預けになるだけでよいのです。

エネマシリンジなどは普通で、もっと強烈な器具があります。単なる腹中めぐりや便意責めではなく、パイプ併用の筆先での責め、

ヒマラヤ杉、バラの針等もありますが、火傷のない全身ローソク責めも私の得意とするものです。

浣腸となれば、私の名付けたポーズ、まぐらの花子、人形の美津子等がありますが、おそらく実施された人はいないと思います。液は体に害を残さないよう、グリセリン、石ケン水、ドナン塩水等の普通のものを使用しましょう。

貴女様のプレイ写真を見ますと発表されたものの範囲内では、なんでもないかもしれません。なのですが、プレイである以上は、もっとたわむれがあるべきでしょう。手足の爪のマニキュア、全身の美容化粧、メーカーキャップもムード作りに重要な一役を果たすでしょうし、すぐく甘ずっぱいような、むんむんする熱気を発散する霧囀気を作り出すことも、プレイに酔いきる一方法だと思っています。私がそれら総てを引き受けて、貴女様をお迎えします。その結果は、きっと貴女様を一〇〇%以上成長したプレイ女性にすることでしょう。尚、SMプレイは、性による満足とは切り離し、あくまでプレイによる陶酔を目標とすべきだと思います。ぜひ、私のお誘いにご返事下さい。

表現の楽しみ

田尻長州さんへ

松井寛より

久しぶりの御投稿、大変なつかしく拝見いたしました。お元気でプレイを続けておいでのご様子、何よりとお慶び申し上げます。私のまづい絵が喜んで頂けたことで、投稿した甲斐があったと、



また私なりの喜びでもありました。が、夫婦交換プレイの提唱者が少なくなつたと残念がつておいでの貴方ご夫婦に、少しでもお慰めにもなればと思ひ、下手な絵を今一度お届けいたします。

絵は、先ず手が生きていなければいけないのに、今回も完全に死んでしまいました。まだまだ研究不足でお恥かしいのですが、これから、少しずつ勉強してゆきたいと思つています。

どうかお氣が向きましたらお手紙を下さい。フォートの世界と絵の世界とは、表面は違ふようでも、その底に流れるものは変わりないと思います。益々、ご夫婦ご円満に、よいフォートを発表して頂きますよう期待しております。

愛妻弘美のフォト

三浦敬一様へ

井上浩より

二月号の奇クサロンにて貴方様の掲載文を読ませて頂いた所、十二月号奇クサロンの私の意見について共感を頂き、妻弘美共々感激に耐えません。貴方様のような先輩の方にお目に止めて頂くことは夢にも思わず、全く以て光栄の至りに存じます。

奥様純子様には、辻村先生にハントされた由、これはすでに十月号にて拝見致しましたが、再度奇クを取り出し数回拝読しました。

全くお幸せな奥様だと感じつつ、私達夫婦にとっては何か羨ましいような気がしてなりません。

このように思考して行きますと私達の夫婦プレイをマンネリ化したなどと、いとも深き経験者の如く大胆に発表したこと自体が恐ろしくなっていくように思われ、果

ては、私達のプレイには、もっと奥深く研究余地大なることに反省せざるを得ません。

然しながら一人の作曲家が、何百曲と作曲しても、その曲の奥底に流

れている本質的作風は、絶対的に変化しないが如く、夫婦プレイも同様に考えられ、果ては、いつとはなし第三者の貴重な御意見の必要性に迫られるように思います。いずれにしても、妻弘美のローソク、浣腸責めのフォトを発表したいと思いますが、貴方様の

御意見を、是非とも拝聴致したく存じます。

尚、ここに妻弘美の拙い作品を十数枚同封致しましたので、もし見るべきものがありましたら誌上に掲載頂ければ幸いです。夫婦プレイ賛同者の方々の御高評を賜れば幸いです。

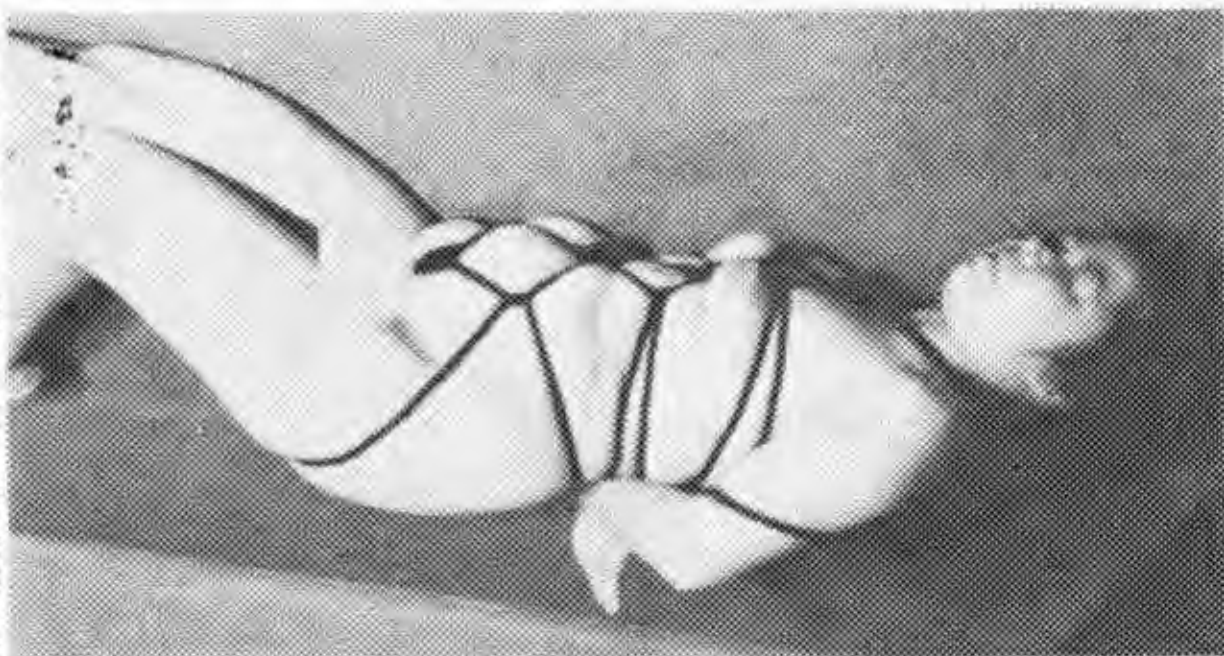


縛りと猿ぐつわ

安 木 建 一

ぼくは、奇クを読み始めてまだ一年足らずですが、以前から、S Mには大変興味を持っていて、女性を縛ることは高校時代からの夢でした。でも、まだ縛ったことはありませんし、この夢は、理解ある相手が現われるまで果たせそうにありませんので欲求不満です。ぼくが縛りを考える時、欠かせないのが猿ぐつわです。猿ぐつわは美しい女の化粧道具の一つだと思っています。何か云おうとしながら口の利けない女の目に、たまらない魅力を感じるので。ぼくの考え方は、縛りと猿ぐつわは一心同体だということです。ぼくに縛られてくれる相手が居ないばかりに、ぼくは自分に猿ぐつわをはめ、それがいつの間にか好きになってしまいました。ハンカチを口の中へ押し込む時の吐き気にも慣れて、快感と陶酔を覚えていますが、結局は道化芝居だど気がつき、淋しく思います。ぼくは、だれかを縛って猿ぐつわをはめてあげたいのです。

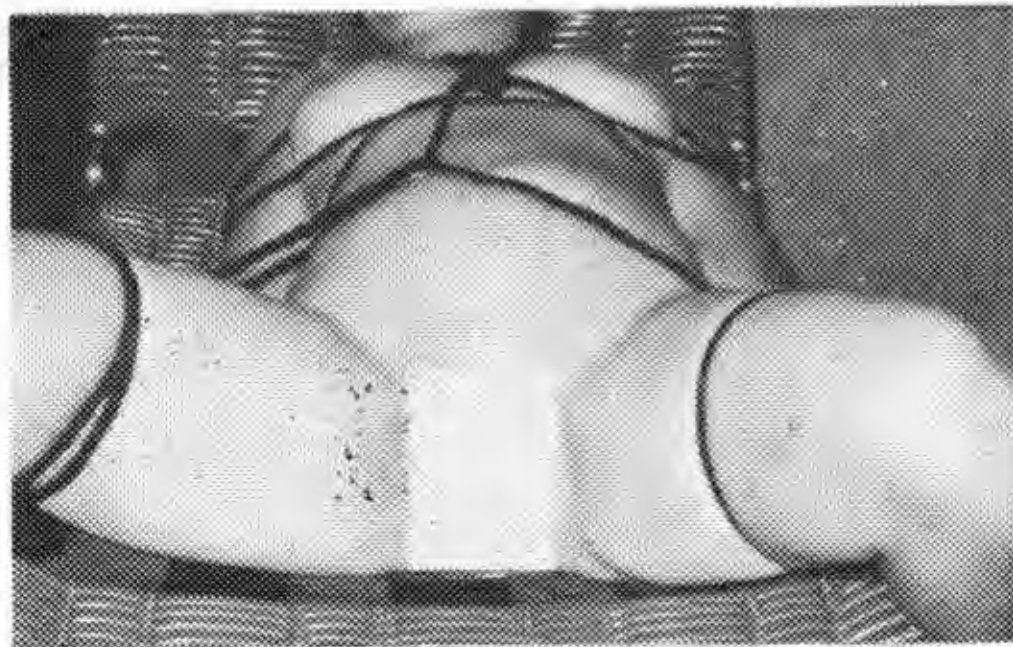
フォト通信『御指導下さい』紀 川 正 信



同好の皆様方のプレイ振りを誌上で偲ぶ度に、私達も大いに意を強くし、いろいろとフォトアングルを考えてS・M・Pを楽しんでおります。しかし、私達なりに構想を練っ

て工夫したつもりでも、フォトとして焼付けてみると、マンネリ気味のものしか感じられず、どうもいけません。何か、新鮮味を盛り込めるような良いアイデアはないものでしょうか。御夫婦でのS・M・Pをなさっていられるお方お教え下さい。三月号で呼びかけ下さった井上浩様、どうも有難うございました。出来れば、早速にでも文通やフォト交換などお願いしたいものです。が……。

現在、私達は個人的に土田氏御夫妻とお付き合いしていますが、三月号誌上で拝見した氏のフォトからは私達夫婦のたどってきた道を思い出させてくれる感じを受け、思わずニンマリとしてしまったものでした。今後のプレイフォトを楽しみにお待ちしております。



同封のフォトは、一月二日に撮ったものです。剃毛ののち引続いたのプレイでしたが、どうもうまく行かず、投稿することは少しためらったのですが、皆様の御指導をお願いする意味も含めてお送りします。どうかよろしく願います。

メンズバンドなどのこと

小 倉 悠 紀

小生もともと女性の下着、就中パンティなどに強い興味を持っておりまして、そのことで、いろいろと常識的には徒勞と思われるようなことをやって来まして。

里に元に戻ってしまつて、忽ちのうちに十数枚を買い漁ってしまった。

ですが、洋品店やスーパー等を廻つてみて淋しく思つたことは、以前のようなメンズバンドが全然なくなつてゐることです。替ゴム付で前開き式のものが、全く姿を消してしまつてゐるのです。そう

以前には、パットだけを帯ゴムで吊る様式のものや、いろいろと工夫したものがあった筈ですが、この頃のものには、外見上は普通のショーツと、全く変わらなかつた。一部分にネットなどが張つてあるだけなのです。このミニスカート時代に昔のようなダブダブのブルマー式生理帯など似つかわしくな

縛られた花嫁

山本五郎

想うだに波逆立ちぬわが心

柔肌包む輿入れの装い

汚れなき総てを捧ぐ証しなり

真白き絹の裾やかきこの艶

裾曳きて一世一度の晴れ姿

掛かりし縄にて尚更に汚ゆ

縛られし門出の姿映し見て

嫁ぎしことを肌で知るらん

生涯を託せしヒトの縄なれば

捕われ姿もうれし羞かし



いえば誌上でも、最近ではメンズバンドという活字にお目にかからなくなつたようです。小生の如きマニアにとつてこれほど甘美な言葉はないのですが、全く寂しいことです。

以前には、パットだけを帯ゴムで吊る様式のものや、いろいろと工夫したものがあった筈ですが、この頃のものには、外見上は普通のショーツと、全く変わらなかつた。一部分にネットなどが張つてあるだけなのです。このミニスカート時代に昔のようなダブダブのブルマー式生理帯など似つかわしくな

材質の進歩もめざましく、小生も当然の事、いろいろと着用してはいますが、全くその密着性は素晴らしく、ただパットを当てただけでありながら、少々激しい運動をしても、ずれる心配は殆どないくらいで、今や、メンズバンドと呼ばれるには、ふさわしくないような気がします。色も、かつては黒と決まっていたものが、今は、むしろ黒など探しても無く、ピンク、ブルーなどばかりです。それにしても、メンズバンドという言葉が消えて無くなるのは、残念で仕方が

ありません。

かろうじて産褥バンドには普通に黒で前開きの懐かしいスタイルのものがあります。しかしこれとて、前開き部分はボタンではなく、マジックテープとかいうものになつてゐるし、又、アメゴムなどではありません。小生にとつては、ボタンがついていて前開きというものが、いかにもエロチックな感じで何かゾクゾクさせられるのですが……。いったい女性下着のメーカーは、小生のような男のこの気持ちをどう考えてゐるのかと腹立たしくなるくらいです。あまり次々とマニアの夢をこわしてもらいたくないものです。

前開きの様式に惹かれて、少々高価(三八〇〇円)ですが、W社のボディスーツも購入しました。ちょうど水着のようですが、その伸縮性は驚くべき程、で何ともいえぬ感触です。これを着用した女性にトイレの中でスカートをまくり、前開きのボタンを外してゐる姿を想像するだけでも、小生は目が血走つてくる思いです。下着に関する愚行について書いてみたいこともあるのですが、今のところ、その余裕のないのが残念です。



△大西様に曳き出されて▽

お願いします

小 杉 千 恵

三月号を読んでおりまして、大西弘明様が「随想と私見」の中で私のことを採り上げて下さり、ナルシストと評された上に「自らを抑制できなくなり裸身を現わすのではないかと思う」などと書かれていられるのを発見して、本当にびっくりしてしまいました。

それは、突然に乳房をぎゅうっと握られたような、とてもいえずうな、羞恥と困惑と快感の入り混じった複雑な気持でした。そして

千恵は、エクスタシーに似た感激で思わず呆然となったのでした。その上その感激は今までに幾度も衝動を覚えながら、ついためらってしまっていたことを、思い切らせてくれる結果になりました。

編集長さま、私のヌードを誌上に掲載して下さいませ。千恵は、大西様に無理矢理、曳きずり出されるのだ、という想いに浸りながら、このネガを同封致します。

少し以前に、ひとりぼっちで私なりのプレイに浸った時、セルフタイマーで撮影したのですが、焼付けを頼む勇気が出ずに秘蔵していたものです。お手数ですが、この中から、出来るだけ顔のわからないものを、よろしくお願いいたします。

それにしても、大西弘明様というお方はどういうお方でしょう。本当にニクイおひとです。たったあれだけの文で、千恵をこれほどまでに、矢も楯もたまらぬ気持ちに追い込んでしまうなんて……。

でも私は、もっと早く皆様にこの体を見ていただきたかったのです。幾度もフォト投稿は考えていました。Mの女としてふさわしい縛られた写真がないのです。

でも、大西様に火を点けられたこの気持は、単なるヌードに見えても千恵の裸身を他人様に晒さねば納まりそうにありません。

お願いします。どなたでも結構です。私に、千恵のこの体に、縄を掛けて下さいませ。千恵は本当に責めて欲しいのです。この肌をくびれるほどに縛られて、羞恥責めとやらに悶え抜いてみたいのです。ひとりプレイの、自縛のまねごとでは味わえない被虐の陶醉に溺れさせてほしいのです。

この肌が、この肢体が、これほど憧れながらMの悦びを実感せぬままに、若さを失ってしまうなんて残酷です。

お願いします。縛って下さい。責めて下さい。浣腸して下さい。

編集部……

○毎日のように多くの原稿を投じて下され有難く思っています。編集部では目を皿のようにして佳作なきかと鋭意拝見していますが、左記のような点についていささか気づきました。最初から百枚とか二百枚とかいう長枚数のものを書いてこられる方がよくあるのですが、始めは十枚か十五枚の内容の煮つまったものを書いてこられる方が採用しよいです。長枚数のものは力量が安定していることがわかりましたら編集部より改めて、依頼させて頂きます。

○カメラとペンによる緊縛女性探訪を志される方々も多いのですが、只単に自信があるということだけでなく写真と文章の自作品を添布下さるようお願いいたします。

○沖縄の故国復帰を五月十五日に控えて那覇市からモデル志願の女性の便りが参りました。数度の航空便にての打合せの結果、二月中に来島してほしいということでしたが残念ながら特派記者の人選難のため、沖縄に於ける今回の取材は当分延期になりました。

フォト撮影がしたい 阪東太郎



一九七〇年七月号のサロン欄に「妻をM性にしたい」を採り上げて頂いて以来、私たちの夫婦プレイも、相当にエスカレートしてきたのですが、今振り返ってみても初めて妻を緊縛した時の、乳房を強調した美しさは忘れることが出来ません。もちろんこの印象ばかりではなくプレイを行なうたびに感じるのは、同じ妻の体でありながら、ただのヌードと緊縛をとまなうヌードの差が、こうも違うものかと思うほど、美しさに相違が

あることです。

あれ以来、何度か妻の緊縛フォトを掲載して頂いて、数多くの同好者からのお呼びかけを嬉しく思いながら、ペンを持つのが苦手のせいでお返事を書かず誠に申し訳なく思っています。お返事ばかりではなく、私に文才があれば妻とのプレイ経過も詳しくルポ出来るのにと、残念で仕方ありません。しかし、お陰でプレイにも熱が入り、楽しく暮すことが出来たばかりでなく、辻村先生や渡部氏、

それに谷山久美子さんまでお知り合いになることが出来ました。

数えてみますと、私達夫婦のSMプレイの記録は、現在までに八冊に亘って掲載された訳で、フォトは二十八葉になりますが、妻の妊娠により昨年九月号の「妊娠プレイ・最後の記録」を以て、一応小休止の形をとらざるを得なくなりました。

勿論、妻の出産後もプレイは時々行なってはありますが、育児が優先となつては妊娠前のようには出来ず、見るべきフォト収穫もないのが残念であります。

毎号、誌上を飾っていられる夫婦プレイ同好の方々のフォトを拝見するたびに、自分の作品がないのを淋しく思い、どなたかマゾ女性の皆様方の中で、私にフォト撮影させて下さる人は居ないものだろうかと思つてしまいます。

マゾ女性のお呼びかけを戴きたいものです。どなたか居られないものでしょうか。SMプレイも、私は妻とのプレイで研究した総てを傾けて、決して失望させないだけの自信はあるつもりです。

同好者として、土田純一様の発表フォトに大変敬服しています。ぜひ御指導願いたく思います。

○二月号のこの欄で少し触れておきました。福井桃子さんの身体的変化の件、愈々今月号ではかくされたベールを脱いで、その全貌を誌上に現わしてくれました。奔放なる彼女の妊娠腹姿態は必ずやマニアを感泣させる事でしょう。

○芸者福竜こと松本たえさんの緊縛ポーズの素晴らしさに人気を博した塚本鉄三氏が読者通信の女性に或は独自のコネによるハントにと縦横無尽に活躍、いずれ誌上に新しい女性の緊縛ポーズを氾濫させることだろうと思ひます。

○本誌の女性ファンの方々からの便りを拝見していて、よく思うのですが、自分の本名住所、その他プライバシーが冒されないかと第一に心配されています。その点につきましては十分考慮して厳重に秘匿しております故、御安心の上どしどしお便りを下さい。

○パロディ／＼花と蛇Vのアイデアとして提供されました分は一々作者の山光純氏に送付して執筆の参考に資してもらっております。提供者の方全部に編集部作成の緊縛フォトを贈呈しておりますから、何卒お気づきの点がありましたらどしどしお寄せ下さるよう、お待ちしております。

女斗美雑考

雄松比良彦



女斗愛好の皆さま、御健勝の事と存じます。江戸期の女相撲については三田村鯨魚氏の「江戸ばなし」、平井蒼太氏の「見世物女角力のかんがへ」に出ていることがらがほとんど諸家引用の基になっており、これのそのままの孫引が多い様子ですが、現在じっさいに見ることがむずかしいものが多い様です。女斗一般でその他もって時代のさかのぼったものや、外国のものになるとますますわかりません。以下のようなものは、現在市中で新古書店で求められますがその他の刊行物について、識者の御教示を賜われないものでしょうか。近松門左「関八州繁馬」興文

河三樹著「江戸時代大相撲」同「見世物の歴史」。講談社版山岡荘八「織田信長」新製版巻ノ一。名著刊行会版「平賀源内全集」中央公論社版「定本西鶴全集」全十四巻私の見たいと思っておりますのは、いわゆる黄表紙、洒落本、滑稽本、浮世草子などの女相撲の記事ですが、現在刊行されているこれらの活字本はほとんど札つきの著名本ばかりで、思わしいものはない様です。

村松梢風氏の「仇討女角力」も入手困難ですし、中国、ヨーロッパの女斗関係文献となるとさらに漠としています。スパルタの少女たちの角力や少年と少女の格闘な

社版日本名著全集近松名作集下。「嬉遊笑覧」名著刊行会版二巻本。「俳諧時津風」近世風俗研究会版復刻本。雄山閣日本風俗史性風俗Ⅲ社会篇。雄山閣版古

どは、サー・ケネス・クラークの「ザ・ニュード」によるとクセノポーンの「ラケダイモンの政治」Xenophon: Respublica Lacedaemonium やテリビデスのアンドローケ Eulipides: Andromache に出ているわけですが、国内はもとより英米訳の現在刊行書もあまりない様子です。こういった女斗文献は何といっても国文学、外国文学に造詣の深い方々の分野ですから読者の中のそういった方々の御教示をお願いしたいものです。なおこの「ザ・ニュード」(ペリカン)にはドラクロワの「角力する少女」とドガの「スパルタの少女」(少年と対峙しているところ)は出ていますが、マイヨールの小品「角力する女」や同デッサンが出てない様です。Luteneesを「角力する女」と訳したのは高村光太郎です(造型美論)。

いわゆる「女斗」とはいささか異なりますが、清朝のメロドラマ文庫作「児女英雄伝」は最近平凡社から抄訳が出版しました。これは御存知武田泰淳氏「十三妹(シーサンメイ)」の原本ですが、こういった女傑物では最近のウーマンリブの風潮ながらあまりパツとした研究も展開もない様です。江戸期

の女相撲と座頭相撲をくみ合せた梶山季之氏の「女ごろし座頭松」(オール読物、四十六年十一月)はあのころの衆知の逸話をたくみに合体したのですが、平賀源内自身が極端に女角力に力を入れていたかどうかはわからない様で田沼伝説でも源内自身が発案したかどうかは確証もないものと思えます。例の西鶴作と伝えられる「色里三所世帯」の中の女すもうの場面が「問題小説」四十六年十二月号に絵入りで出ていますが、実際女相撲をイメージとして普及したのは、先覚者としての西鶴あたりかもしれません(好色一代男)。

現在、これだけ自由な世の中になり、女相撲の興行など、易々たる事と思われるのに一向、現われないのは、やはり武張った力業であるためでしょうか。週刊誌などには時々グラビアなどに怪しげなものが出ておりますが(最近では「週刊特報」一月二十七日号)奇譚クラブが今まで女斗美を扱ってこられたのは土俵四股平氏以来の伝統でしょうが、いわゆるサディズム及マゾヒズムの立場から女斗美学を分析する労作があらわれともよい様に思います。単なるエログロではありません。

夫婦SMプレイの体験

木下恭一

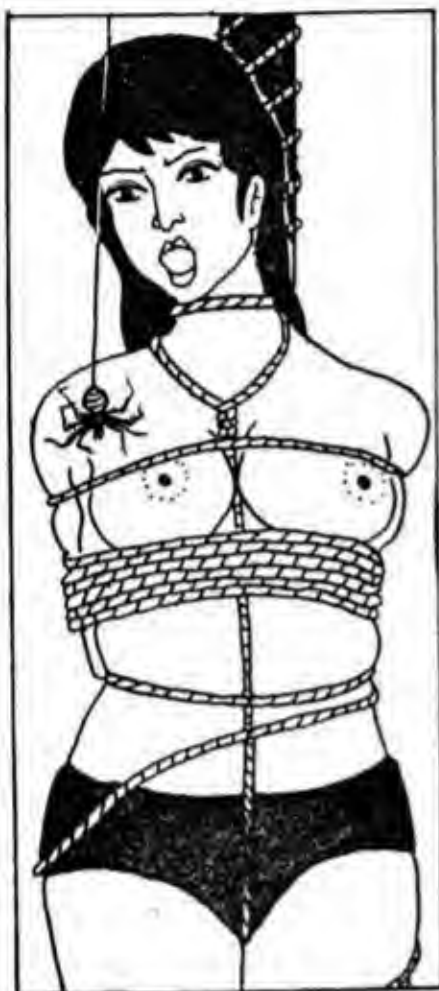
私は奇クを愛読しはじめて早くも九年目になる二十八才の建築会社の現場員です。私のS歴は先ず中学三年頃、映画の縛り場面を見て胸をときめかしたことから始まりました。そして高校を卒業して就職した十九才の秋、ふと書店で奇クを見つけ、思わず買い求めてしまいました。それ以来奇クの虜となりバックナンバーを一冊残らず揃えて、楽しんでおります。

二十六才の時、結婚しました。妻はその時二十二才、SMについては、まるで知らず、何とか飼育しようと思いましたが、新婚半年位は、とても駄目でした。二年たった今では何とか縄の喜びを覚えるようになってきましたが、そ

れでも、まだまだ誌上に発表しておられるような先輩のように、まいいりません。何とかカメラでプレイの様子をとりたいたと、目下カメラのけいこをしていゝ所です。

二月号にも載せておられる三浦敬一氏や土田純一氏のように、早く奇クサロンに発表出来るような妻の緊縛フォトをとりたいたものだと思っております。少し遠方ですが、よろしければ写真部の方や塚本鉄三氏のカメラで一度、妻の責められてゐる姿を撮って下さい。妻は二十四才、まだ子供を産んでいませんので乳房も大きく膨らんでいます。身長一六一センチ、体重五二キロ、中肉中背で細面の十人並みの容貌です。

縛られるより怖い！
…岸本勝美…



劇映画に見る

緊縛シーン

東山映史

最近の緊縛シーンを映画やテレビの画面からピックアップ・アップしてみよう。

ポルノが流行し、ベッド・シーンが多くなり、SMシーンが少なくなつたことは淋しい。

最近の緊縛シーンの随一は何と云つても「沈黙」の岩下志麻だろう。キリスト教徒迫害の文学作品遠藤周作原作「沈黙」は、これまでも映画化の話があったが、つぶれてゐた。これを篠田正浩監督が愛妻、岩下志麻を使つての映画化である。キリスト教徒の水はりつけ等、すさまじい拷問シーンがある。しかし、何といつても圧巻は若きキリスト教徒夫妻、岡田三右



衛門（入川保則）と、その妻、菊モニカ（岩下志麻）の拷問シーンだ。牢の前に白い柱が二本、立ち二人が後手に緊縛されて引かれてくると、その柱に後手に縛りつけられる。次のシーンでは男は半裸女は着物を脱がされ長襦袢の上から乳房の上下を縛られ「転べ」と打たれる。「ア、アッ」という絶叫が起こり、生き晒しの拷問は雨の中でも、続く。びしょ濡れの長襦袢の上から縛られた豊満な乳房の線が、ふるえる。それでも転ばない。しかし、男が土中に埋められ、その頭上を馬が走る。馬の足で夫の頭が、つぶれそうになるのを、鎖でつながれて見ている女の表情——しかし、ついに若き夫婦は転向する。

岩下志麻は、かつて「幕末」で清川八郎の情婦お蓮に扮し石抱きの拷問を受けるシーンがあった。彼女にはMの気もありそうだ。

テレビでは「十手野郎捕物控・大川端の女」で、お竜に扮した野川由美子が、船宿で身分がバレ、取り押えられ、猿ぐつわをはめられ縛られる。そして、納屋に投げ込まれ、縄尻を吊り上げられ、責められる。気丈な女の猿ぐつわの表情は、いただけた。

私の結婚

新聞を読んで

この投書に思う

筑紫圭男

「略——私がついさいきん、がまんしきれなくなって別れた主人ほど変態的な男性は少ないのではないのでしょうか。——略——」

日ごろは学究タイプの静かな男なのに、夜になると激しく、毎日のように私を攻めたてます。

「略——一時は私も『夫婦とはこんなものなのだ』と、ガマンもしました。でも、一度私の上半身を和服の腰ヒモでしばりつけ、結び目の痛さでもがく私を、上から犯すような感じで自由にもて遊びました。まだ、これまでは一種の夫婦の遊びと思えました。しかし最後には私たちのセックス場面を

八ミリに撮り、——略——

さらに、映写だけでは満足しきれなくなつて、自分自らがドロポウの格好をして一人住まいの主婦を犯しにやってくるという台本を作り、私に「協力しろ」と命令するのです。——略——映画女優、それもエッチな女優の演技をやれというのです。あのまま、黙っていたら、どこまで落ちるかかわかりません。私は主人が会社に行っている留守に、荷物をまとめて里へ帰ってきました。——略——」

右のものは、昨年12月29日付の「フクニチスポーツ」紙「私の結婚」欄に「変態夫に決別」と題して掲載されていた、熊本市のMX子・30才の投書文？の大意ですが、私は一読して、私なりの衝撃を受けました。

私はこの短い文面から、この夫婦の生活に破綻を呼んだ夫君の暴走ぶりを想像し、一面では、騙されたといわんばかりの夫人の若さを感じました。

おそらく、この投書夫人にはM気はない、というより、Mじみた悦びを感じさせられなかったのでしょう。残念ながら夫君のプレイ欲は、独走に次ぐ独走であったと思わざるを得ません。「プレイ」



被襲のポーズ——田尻長州——

である以上は、パートナーとその悦びを分かちあうのが前提でしょうに、この投書夫人の御主人は、飼育時間の掛け方と方法を誤られたのではないのでしょうか。

以前の奇ク誌上で、東一郎氏が「飼育の難しさ」で書かれていたように、「与え且、奪う」ことを念頭に置かれていたら……と、折角あの段階まで進んでいた、この投書夫人の夫君のために、他人事ながら惜しいと思うのです。勤め

を終え、待つ人もない寒々とした部屋に帰り、独りポツンとしておられる寂しい夫君の姿が目につくおようで、私は同好者の一人としてお手紙でも差し上げたかと思うものの、どうしようもありません。ただ一筋の可能性として考えられることは、この夫君も、きっと奇クを読んでいられるだろうと思えることです。私は力づけて差し上げたのです。同好者の一人として、また同じ九州在住者として。

好きな拷問『石抱き責め』

早木夢二

拷問プレイの内で私が一番、好きなのは石抱き責めだ。全裸で菱縄、股間縛りの慶子を、お手製の拷問台にのせて、ブロック石を二枚、抱かせ「申し上げる、申し上

げる」と責めたてていると、いかにも女囚を責めているお役人さまの心境になって、私の長い菱縄に憑かれた人生を、ここに集約しているような喜びに、ぞくぞくして

マゾ男の法悦

安田隆夫



くる。

その逆に、素っ裸で菱縄、股間縛りを受けた私が、拷問台にのつて石を抱くとき、私は少年の頃に見た囚人の石抱き責めに抱いた憧憬が今、満たされている幸福感をしみじみ感じられて、ならないのだ。

つい、うっとりして、うなだれて、じっと膝の上の石を見つめていると、お役人さまの慶子が、いらだった風に、

「ええい、しぶとい奴め。これでもまだ白状しないのなら、こうしてやる」

と私の抱いている石をゆさぶるのは、お白洲に引き出されて石抱きの拷問を受けている囚人の気持ちを一入、そそってくれる。

「日本拷問刑罰史」で、放火を犯した町娘が石抱き責めにかけてられて白状する。湯文字一枚で縛られた娘が三角山の上に坐らされ、石を二枚、抱かされたまま、半ば失心したように、うなだれている。

その場面の何ともいえない虚脱感が私は好きだった。激しい怒号と悲鳴に包まれた拷問責めの後にはこんな虚しい静けさが、ただようのではなからうかと思われた。

私は、

「お役人さま。私こと拷問に堪えかね……」

と例によって例の如く、委細白状すると、しばらく抱き石も、そのままにしてもらって、プレイとほいいながら、一応、形も整い、その形の中にはまり込んでいって責められるものの心情を、たっぶり味わうのだった。

慶子も、よく察してくれて、しばらくは、そっとしておいて、その間に、私のかけ縄の形の乱れたのや、弛んだ個処を直したりしている。

抱き石を取りのけられ、拷問台から下ろされると、私は席の上から坐って、

「お役人さま、石抱きの拷問、ありがとうございました」

と、お礼をいって深く頭を下げた。

ふと、慶子が、そんな私の体の一部に目をつけて、

「あら、濡れてるじゃないの」

深々と頭を下げた私の目にも、露のように白く光る粒が、ぷつと湧き出ているのが見えて、私はこれからかけられる拷問に思いをはせ、私の前にしゃがみ込んだ慶子の方へ体をはって、ぐっと突き出すのだった。

☆福井桃子の妊娠八カ月の緊縛熱演集

本誌の毎月号に「マダム美上代」の告白として異色あるSM身の上調書を発表し多くのファンを獲得して人気上昇中の福井桃子さんが、妊娠したと、言われても初めは信じがたいことであつたが、嘘もかくしなく、正銘の妊娠八カ月の前に、晒腹を惜しげもなく、カメラの目の前に、S.M.プレイを今疑うべきではない、彼女の見事な蛙腹をあらわに、きつい妊娠前と彼女の緊縛の深きことと、比較すれば更に一層興味深いことと思う。

メロン腹白縄縛り

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
白いロープによつて括れるように縛られた美しい太鼓腹の哀感。

正面柱縛りの蛙腹

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
柱に後手を縛られ正面に立たされた妊婦は見事な蛙腹をさらす。

開脚縛りの妊娠腹

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
真一文字に開かされた両足は、八カ月の妊婦だけに一層痛々しい。

蛙腹を晒す開股責

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
お申し込みは前金にて大阪市阿倍野郵便局私書箱14号(五五四五)第一種宛にお送りいたします。

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
両股を左右に開かせられた蛙腹は羞恥責めの汚辱にもだえぬ。

太鼓腹強調片足吊

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
大きな腹をして縛られた妊婦の片足を吊れば果してどうなるか。

妊孕緊縛美の極致

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
妊娠線を中心に丸々と膨らんだお腹の美しさを強調する細目。

美しき妊孕腹緊縛

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
妊娠という女性の異常美を最大限に誇張した縄と縛りの魔術師。

八カ月の妊婦裸身

福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円
アの手の特異資料として提供す。

◎以上の印刷紙焼付写真はマニアのコレクション用として分譲する

極鮮明な粒選りのものとして分譲する。お申し込みは前金にて大阪市阿倍野郵便局私書箱14号(五五四五)第一種宛にお送りいたします。

二人のマダムのハイライト

△印刷紙直接焼付極鮮明写真▽

開股縛りの強烈な肢体
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

逆エビ責めに喘ぐマダム
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

一直線の開脚羞恥縛り
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

菱縄縛りの種々相
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

縛って抜きとられるスロース
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

逞ましき臀部強調縛り
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

後手縛りの全裸を見せる
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

赤裸な剣貝の羞恥責め
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

悦虐涕泣のMポーズ
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

柔肌に喰い込む縄目
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

高手小手縛り女の哀感
福井桃子 三枚一組 略号 五〇〇円

江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

苦悶するエビ縛りの神秘
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

翻弄されるマダムの法悦境
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

愁いある目と猿ぐつわ
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

悦虐天国への階段
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

いたづられて燃える媚態
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

紅閨へのいざないに濡れる
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

後手高手小手縛り三態
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

開股縛りの醜態味披露
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

強烈股間縛りの点描
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

強烈足吊り縛りの苦痛
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

T字型生理帯着用フォト
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

前開型バンド着用フォト
江口淑子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

深田 菊子 三枚一組 略号 五〇〇円

〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙 (9×13種) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真は
出回っているようですが、これは
全部特殊マニアの蒐集用として一
粒選りのネガから直接印画紙に焼
付した極めて鮮明な逸品揃いばか
りです。きつとファンのアルバム
を最高に充実させると信じます。
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社
へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)
2 トイレ排泄強要(三浦 純子)
3 完全二つ折締め(三浦 純子)
4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)
5 超強烈エビ責め(三浦 純子)
6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)
7 全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)
8 ネどうでもして(高村 浩子)
9 蠟燭責後手縛り(富田由美子)

10 羞恥の源を抉る(江口 淑子)
11 妊婦縛りの庄巻(富田由美子)
12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)
13 正面の妊婦縛り(富田由美子)
14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)
15 両手挙前面晒し(福井 桃子)
16 強烈流腸ポーズ(高村 浩子)
17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)
18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)
19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)
20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)
21 柱縛り開股強要(福井 桃子)
22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)
23 本格的な麻縄責(前田真知子)
24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)
25 正面股間縛晒し(高村 浩子)
26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)
27 店での全裸縛り(福井 桃子)
28 豊満な女体開陳(福井 桃子)
29 恍惚パイプ責め(江口 淑子)
30 マダム責の哀愁(江口 淑子)
31 開股強制棒責め(前田真知子)
32 大の字片足挙げ(高村 浩子)
33 雁字搦目の女体(江口 淑子)
34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)
35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)
36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)
38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)
39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)
40 マダム全裸開陳(江口 淑子)
41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)
42 女体美を晒して(深田 菊子)
43 高々と後手緊縛(福井 桃子)
44 猿轡に悶える女(高村 浩子)
45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)
46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)
47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)
48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)
49 エビ責めの序曲(江口 淑子)
50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)
51 料理される女体(高村 浩子)
52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)
53 両手両足開責め(三浦 純子)
54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)
55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)
56 浴室での流腸責(江口 淑子)
57 股間に喰込む麻(深田 菊子)
58 流腸責めのあと(福井 桃子)
59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)
60 スナックで縛る(福井 桃子)
61 喰込む股間縄責(江口 淑子)
62 責めに呻くM女(高村 浩子)
63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)
64 菱縄悲し女泣く(江口 淑子)
65 M女を責め尽す(前田真知子)
66 引回される全裸(江口 淑子)
67 尻立蠟燭悦虐責(福井 桃子)
68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)
70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)
71 被縛者のマダム(江口 淑子)
72 縄の山と流腸器(福井 桃子)
73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)
74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)
75 両手両足吊り責(江口 淑子)
76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
77 全裸一直線開股(福井 桃子)
78 裏門を開放する(深田 菊子)
79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)
80 後手胴締股間縛(深田 菊子)
81 強烈海老責地獄(江口 淑子)
82 大の字縛り正面(高村 浩子)
83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)
84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)
85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)
86 後手吊上げ責め(三浦 純子)
87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)
88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)
90 マダム開股の図(福井 桃子)
91 がっちり後手縛(深田 菊子)
92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)
93 妊婦大の字縛り(富田由美子)
94 開脚を強要せよ(富田由美子)
95 引回される妊婦(富田由美子)
96 強烈麻菱縄掛け(前田真知子)
97 股間縛の引回し(江口 淑子)
98 正座する股間縛(荒尾 慶子)
99 荒縄後手二つ折(前田真知子)
100 椅子開股羞恥責(前田真知子)

▲最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
 十組十枚 一〇〇〇円
 二十組二十枚 一八〇〇円
 五十組五十枚 四〇〇〇円
 百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	99	98	97	96	95	94	93	92	91	100
痛苦に耐える女(三浦純子)	喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子)	正面エビ強烈責(三浦純子)	海老縛り閨責め(三浦純子)	エビ責め縄猿轡(三浦純子)	麻縄強烈柱縛り(三浦純子)	二つ折り臀挙げ(三浦純子)	尻挙げ開脚責め(三浦純子)	開股パイプ責め(三浦純子)	台上に晒す全裸(三浦純子)	全裸緊縛の愉悅(渡部好美)	閨中の股間縛り(渡部好美)	悦虐の開股縛り(渡部好美)	軋涙責めに哭く(渡部好美)	開股責めの序曲(渡部好美)	責に諦観の美貌(前田真知子)	逆反り弓吊り責(前田真知子)	光に映える白肌(前田真知子)	裸女を押込める(前田真知子)	柔肌に喰い込む(前田真知子)	条痕を尻に残す(谷山久美子)	哀憫非情な麻縄(谷山久美子)	女性自身を晒す(谷山久美子)	柱に二女の連縛(好美・叢子)	責め疲れた二女(好美・叢子)	全裸の二女陳列(好美・叢子)	椅子開股の二人(好美・叢子)	連縛双丘の珍景(好美・叢子)	羞恥に悶える女(叢子・好美)	縛った異国の女(シーラケニ)	畳の上に転がる(シーラケニ)	卓上の一輪の花(シーラケニ)	投げだした全裸(シーラケニ)	諦観白人の表情(シーラケニ)	高手小手に縛る(シーラケニ)	金髪碧眼の女性(シーラケニ)	白人の肌を縛る(シーラケニ)	碧眼に驚きの目(シーラケニ)	日本式胡坐縛り(シーラケニ)	

女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフォトは、広くファンの方々から要望されていましが、こので新しく特写の機会を持ちました。たので好事家のお目にかけます。

柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすきV
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあらわす。

麻縄高手小手首縄

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすめV
黒ずんだ麻縄が真白な柔肌に喰い込んでピンク色に染まった美しい手はカラーでまた格別である。

荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすけV
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められたば流石のM女も白肌を赤く彩る。

荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすらV
赤い絨氈の上で荒縄でぎゅうぎゅう縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

悶える強烈海老責

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすへV
高手小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

柔肌をくびる縄目

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすれV
正面と側面と横臥と、その姿態は交れども全裸の美しい女体に重に掛った縄目はむごたらしい。

緊縛女体をいびる

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AするV
身動きも出来ない縛られた裸身を目の下にして、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

羞恥を晒す女体柱

大手札三枚 一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号AすそV
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となって哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一系まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛フォト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

〔悦虐浣腸写真〕

溶液を圧入される

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみはV
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

全裸で受ける浣腸

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみふV
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で浣腸。

イルリの嘴管挿入

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみほV
二千CCのイルリガートルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみちV
百CCの硝子製ポンプの先端がズブリと突き刺さる浣腸の恐怖。

自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみそV
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

体内に奔流する液

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみやV

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

浣腸を楽しむ美女

大手札三枚 一組 四〇〇円
深田 菊子 略号AみぬV
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦の小道具となる。

〔オシメ着用写真〕

オシメからカバー

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号AみめV
浣腸のあとオシメを当てて生ゴム製のオムツカバーを装着する。

おムツに排便する

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号AみしV
オムツを当ててカバーを着けるまでの段階を順序を追って見せる。

生ゴムのオムツへ

大手札十枚 一組 一八〇〇円
深田 菊子 略号AみせV
ヌメヌメとした奇妙な生ゴムのオシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました浣腸写真とオシメ写真とは、フェチファンの要望によりまして特にこの種のS嬢に興味をもち、深田菊子嬢を煩して作成しました。郵便局私書箱第14号 天竺社宛へ、郵便局私書箱第14号 天竺社宛へ、略号記載の上、どうぞ。

〔秘蔵版写真一掃分讓品〕

昭和四十年頃より四十二年頃に
かけて天星社に於て分讓して
ましたS M資料写真は、その
譲中になつて再開を強く要され
近になつて再開を強く要され
おりますので特に希望者に限
増をいたします。御注文の方
五日間の予定で作成の上、早
御送付申上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号八〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号八〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

女王様の腎臭をかかす

大手札二枚一組 略号六〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号八〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号一五〇〇円
花田沙登子 略号八〇〇円

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号五〇〇円
大手札三枚一組 略号八〇〇円

全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

全裸の四つ這い木馬責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原清子 略号八〇〇円

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号五〇〇円
大手札三枚一組 略号八〇〇円

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

美木乃々子 略号八〇〇円

土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号五〇〇円
美木乃々子 略号八〇〇円

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号三〇〇円
大手札十二枚一組 略号八〇〇円

二女にいじめられる男

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
山原・大塚 略号八〇〇円

美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
山原・大塚 略号八〇〇円

男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
山原・大塚 略号八〇〇円

痛烈、ムチ打ちのご馳走

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
大塚・山原 略号八〇〇円

首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
山原・大塚 略号八〇〇円

汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
大塚・山原 略号八〇〇円

二女の腎臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号三〇〇円
山原・大塚 略号八〇〇円

パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号二〇〇円
大塚 略号八〇〇円

豊満な太股で首を股責め

大手札十枚一組 略号二〇〇円
大塚 略号八〇〇円

大手札十枚一組 略号二〇〇円

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号二〇〇円
大塚 略号八〇〇円

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号一〇〇円
大塚 略号八〇〇円

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号一五〇円
大手札十枚一組 略号八〇〇円

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号七〇〇円
大塚 略号八〇〇円

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号七〇〇円
大塚 略号八〇〇円

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
甘木 略号八〇〇円

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号一五〇円
大塚 略号八〇〇円

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号一五〇円
大塚 略号八〇〇円

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号二〇〇円
大塚 略号八〇〇円

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号五〇〇円
絹川 略号八〇〇円

豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号五〇〇円
長野 略号八〇〇円

長野 略号八〇〇円

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 淫涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円
- M男性を尻に敷く

- 大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円



柏木真佐男画

私は今、この本を手に何十回目かの読み返しをしています。少年期よりの妊娠腹マニヤとして、私は元来、読書が趣味でしたが、貴誌40年11月号に掲載された高野原美さんの名文「妊娠腹観賞会」を読んできて、妊娠に憧れ、美化する性癖に浸ってしまいました。それから妊娠腹に関する小説、エッセイ、文献、フォト等々、貴誌をはじめ、あらゆる書物にも食指を伸ばし、貴誌十二月号と一月号の田中夫人のカメラ・ハントを加えると、三十二冊になります。羽村京子、瀬沼五郎、高野原美、以上の三氏をビッグスリーとして多士才々のマニヤの方の麗文才筆にふれ、胸高鳴る思いです。私個人

としましては、田中夫人等は分譲フォトも持っておりませんのと以前の本を尋ねています。が古本屋でも手に入らず嬉しさ百倍でした。

(東京都・大原茂)

華麗なるフォト、まことに有難うございました。胸をときめかし乍ら開封したとき、全く他誌には見られない、すばらしい手法による解明なフォトに只々感心いたしました。江口淑子さんの双臀に深々と埋まるように喰い込む股間縄は、まことに、見事なものでした。二月号の奇巧は非常に楽しく読みました。近來にない凄じ出来ばえでした。左近麻里子さんの目次のフォトは全くすばらしく、真正面から見たらどうだろうか、うしろへ倒した場合はどうだろうか等、次から次へと空想と希望が湧いて参ります。足の長い左近さん故の緊縛スタイルでしょうが、すばらしいモデルだと思います。さらに塚本鉄三氏の作になる「縄に恋した女」は文章もすばらしく感動的ですが、松本たえさんのスタイルもフォトも、見事の

一語につきます。ここに掲載された二十四葉の写真は、どれもこれも被虐の甘さが、にじみ出ていて凄絶なショックを受けました。46頁に掲載してある後姿は新しいスタイル、緊縛方法としては好きです。縄により痛い無理をすすめるより、布による股間縛りの方が悦虐味があります。私の場合、白の晒一本だけで縛ってから、揮(六尺の型)まで出来上がるよう創意しています。晒だと、よくしまり弛まず、また、下腹部の感じは良いそうです。これは私が実際に試してみた結果です。今後とも、どしどし、こういったものの作成方よろしく願います。

(熊本市・建軍生)

最近SM雑誌の多いのに驚いています。でも内容も調べずに買うのは奇譚クラブだけ。私の妄想は時間をかけてネチネチと責めるのが好き。縛りは女が逃げられない程度で十分。足首も、かるく縛って横たおしにする。起きられないし、起こしても逃げられない様にする。完全密室の防音室、広さは三畳ぐらい。ジュパンとズロースを下着として着用する。三畳の間一杯に敷布団を敷いて、その上に

転がす。暑かったり寒かったりはいけないので、二十度位が適当。午前八時ごろ開始。十一時頃までそのままにしておく。十一時、口にハンカチをねじ込んで、風呂敷でサルグツワをする。これで四時頃まで放置しておく。四時頃、抱き起こして坐らせる。自分は後ろに回って左手で女の体を抱いて、右手はそっと下腹を押す、放す。是れを繰り返す。そして止める。しばらくして、又繰り返す。こうするとオシッコが我慢出来なくて洩れる。ズロースをはいているから飛び散らない。布団へ見事な地図が出来上がる。羞恥の極に達する。モデルは二十五、六才位の家庭の主婦が適当と思うが如何。

(和歌山県・北川某吉)

三月号、直接、講読しているおかげで二十一日に入手しました。先ず読者通信を一読して、同好者の多きに心温まる思い。自分一人ではなかった、こんなに沢山の人が、と思って知らず知らず類の筋肉が、ゆるんできます。次に奇クサロンで「夫婦プレイ」の記事や写真を見て、新刊のインクの香を思いきり楽しく吸い込みます。井上浩さん、室生雪子さん、勇気を

出して誌上を飾って下さって有難う。夫婦プレイの経歴「私たちの場合」で新しく登場された早坂信治さん。美しい夫人の顔を堂々と出して素晴らしいフォトを提供され全く、あっと感じいました。この奥様のフォトと共に体験の文章も、どうか書いて下さい。女責めは、やはり「夫婦プレイ」に限ると私は思っています。出来れば編集部でも美しい、この夫人を是非取材して下さい。お願いします。そして全国の夫婦プレイファンの方々、どうかこれからも誌上へ顔を見せて下さい。

(京都府・巻坂千也)

私は現在、武蔵野市に在住する二十二才になるフリーのショーターです。昨年の夏頃、なにげ

〇 (お知らせ)

本誌はここ数号、熱心にご支持下さる愛読者各位のご要望に応え、漸次収載写真の充実を目指してまいりましたが、更にフォト面の拡充を計るため、次号△五月号▽から若干増頁を致しますと共に、定価を△四百円▽に改訂させていただきますのでよろしくお願い申し上げます。

なく入った書店で目にふれた奇譚クラブを手にしてから、熱心な愛読者になり非常に気に入っています。SMといってもマルキ・ド・サドの名前位しか知らない私でしたが今では奇クのおかげで、SMプレイをしてもよいと思う程になっています。もとより好奇心の強い私のこととて、真似ごとにしやってみたこともあります。相手にその気がなかったのですが、余り面白くありませんでした。職業柄遠くへ旅行することも多く、東名神は自分で車を運転して今まで十数回、往復しました。時速一〇〇km以上で飛ばすスリルが、たまりません。今までで一番遠くへ行ったのは西では広島までです。奇クの発行所は大阪だそうですが、もしよろしければ東名神をぶっ飛ばして、緊縛モデルに応募してもよろしい。身長一五六cm、体重四八kg、プロポーションには踊りできているので最高に自信があります。今までCMのモデル、ヘヤーのモデル、映画出演の経験があります。フリーなので時間的にはいつでも都合つけられます。今、考えていることは、複数の男性による同時責めで、くたくたになるまでいじめ抜かれたいということ

ですが、仕事でハダカになることが多いので、肌を傷がつくようなことは困ります。年輩のS好みの男性から受ける羞恥責めプレイを一番にして欲しいと思います。縛られたりする痛さに対する耐久力は、誰にも負けないつもりです。一度、こんな私を責めの実験台として試してみませんか。明朗で研鑽心は旺盛ですから、何かのお役に立つと思います。それから、奇ク読者の方で何人がかりかで私を責めてみようと思われの方がありません。ぜひお便り下さいませんか。私は出来るだけ多くの男性の方から、同時にいじめられてみたいと思っています。直接手を下さなくても見物人になって下さっても構いません。

(東京都・鈴木千鶴子)

奇ク益々充実してきて、うれしです。小生は二年前より奇クを愛読させて戴いておりますが、特に最近のSMブームの中にあっても、さすがに長年の歴史を持つ先駆者としての貫録か、物真似で急ごしらえの他誌と違って、格段の差を感じます。やはり内容を見ると本格派としての重量感が、いつも小生を満足させてくれます。特

に二月号、三月号と小生好みに充実してきたのは、うれしいです。三月号の巻頭写真、中河恵子さんの脚をひろげた宙吊りは見事で美しいフォトでした。ほればれとするような、心をくすぐる緊縛場面の圧巻でした。美しい写真といえ、塚本鉄三氏の「水車小屋緊縛記」の中に挿入された深田菊子さんの緊縛フォトは、素晴らしいですね。勿論、深田さんの容姿やスタイルがよいのですが若々しい肌をむごたらしい麻縄で縛り上げた責めの感じが、よく出ていた。それから毎号続けて掲載している福井桃子さんの告白は、先月号の「ムチ打ちは大好き」に引き続いて今月号の「SMの好きなお姐さん」で、ますます油がのりきってきたように思います。高村浩子さんの告白「私は誘拐された」も、よかった。文章は、たどたどしいけれど何か真実味に心をうたれた。これから是非、書いてほしい人です。

〇

(東京都・黒川 守)

東京の佐野朱実様、勇気を出して投稿された事でしよう。ぜひ、一度お逢い下さいませんか。貴女の希望を、どの程度、満足させられるかわかりませんが、多少とも

満足して頂ければ幸甚です。私は二十九才になるサラリーマンです。口説くと云っても口下手で上手に話せませんが、逢って話せば、私がわかってもらえらると思います。

(東京都・中村一郎)

奇ク三月号誌上に出た砂川圭子さんのモデル志願の件、ぜひ私に名乗らせて下さい。私のような素人で不満でしょうが、私は前から読者通信に一度、出してみたいと思います、そのチャンスを、うかがっていた者です。貴女の、どのような条件でも一切、聞き入れますから、私のモデルになって下さい。一方的なお願ひ、平におゆるし下さい。

(静岡市・三島隆二)

昨春から奇クの愛読者になった者です。三月号の「水車小屋緊縛記」は実に、すばらしかった。塚本鉄三氏に敬意を表します。すばらしい記事と写真を提供下さってありがとうございます。小生は松本市に住む一SMファンです。上田市の南山孝子様、中津市の南加津子様、軽井沢の落合様など、SMプレイの相手を求めておられる方、小生とプレイしてみませんか。お願いしたいと思ひます。

(松本市・中山 高)

私は、沖繩に住む一女性です。昨年の夏、知人が本土へ出張しました折、お土産としてもらった中に、奇クと称する雑誌が入っており、そつと頁をめつて、未だかつてない驚きを禁ずることができました。あの様なショッキングな事実があることを始めて知りびっくりしているわけでございす。本当にあの様な事実がございす。本当にの様な者でも可能なのでございす。奇クの緊縛モデルとして、私の様な者でも参加することができるとございす。また、沖繩から御地へ行かずに、果して可能でございす。申しおくれましたが私は二十八才、或る商店の女事務員をしております。身長一五九センチ、体重五二キロ、胸囲八二センチ、腰周り八六センチ。自分のこんな気持は異常なのかと思ひながら、こんな不可解な思ひを一人で秘めておくわけにもいかず、勇気をふるって読者通信を書きました。今の仕事の関係で本土まで

最新版分譲フォト	
うら若き美女を緊縛する	
印刷紙直接焼付極鮮明写真	
逆エビ縛り吊り上げ	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろて▽
縄付きで愛してネ	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろせ▽
棒責め開股縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろひ▽
可愛い牝犬の珍芸披露	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろり▽
開股責めの種々相	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろみ▽
柔肌に喰い込む麻縄	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろし▽
海老責めで虐める女	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろめ▽
責め抜かれた結末	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろに▽
股間縛りにあえぐ女	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろち▽
高手小手縛り首縄悦楽	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろと▽
脚吊り柱強烈縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろも▽
白ロープの亀甲縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろへ▽
逆エビ縛りで晒す美形	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろす▽
開股開陳羞恥責め	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろは▽
白縄の強烈縛り地獄	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろそ▽
牢舎へ引き回す囚女	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろい▽
菱縄縛りで責める	大手札三枚一組 四〇〇円 深田 菊子 略号△ろふ▽
M女荒尾慶子のすべて	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふに▽
浣腸溶液受入態勢充分	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふし▽
剃毛の美女を縛る	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふん▽
私をよく観賞してね	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふな▽
ベッド上での狂態を縛る	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふは▽
強烈菱縄股間縛り	大手札三枚一組 四〇〇円 荒尾 慶子 略号△ふい▽

行けないのに御誌のモデルに応募してみなんぞ不自然ですわね。手荒なことをされるのは空恐ろしい感じがしますが、ただ、ある種の被虐意識はあります。それが、どういったものかは自分でも、はっきり言えません。痛いことをされるよりも、一人二人の異性の前に女性として耐えられそうもない恥かしい姿態にされたいという気持ち。それと密室で行われる生理的に怪奇な行為、勿論、縄を使用するいろいろな行為も想像します。同封しました写真は那覇空港の待合室で、とったものです。もし、どなたか御来島下されるのでしたら、空港まで私がお迎えにあがります。

(沖縄那覇市・新川津和子)

毎月楽しく拝見しています。ほかの雑誌と違って奇クを読んでいると、編集部と読者とが一体になっているような温かい気持ちにさせられます。雑誌全体ににじみ出ている読者の一人一人を快く迎えてくれる親切さに感じています。それに書いておられる読者の方々も心から喜びと誇りを持っておられるようで心なごむ気持ちになります。私もここ三年ばかり夫婦

プレイに励んでいる三十代のサラリーマンですが、誌上で多くの先輩の方々が書いておられるので心強く又心算しく思っております。今日はじめてのお便りを書きました。たが次回には私達夫婦の体験も書かせていただこうと思います。全国夫婦プレイファンの皆様、これからどうかよろしく。

(広島県・宮田市郎)

奇クのとりこになっっている一愛読者です。私は下着マニアでパンティがほしくてしかたありませんでした。そんな時奇クの読者通信欄で何年前かにパンティなど下着をさしあげますと言うのを見て手紙を出してゆずってもらった事があり、そのうれしさが忘れられず、私以外にもパンティなど下着をほしがっている人が多くいると思います。妻のお古でよければパンティ、メンスバンドなどの下着などさしあげたいと思います。

(徳島県・橋本一豊)

初めて連絡をとります。6年程以前より貴誌を読んでいますが内向的な性格の為か最初の手紙となくりました。貴社は地方特派員を募集されているようですが私もその

☆芸者福竜の悦虐表情の神秘を探ぐる

本誌一月号でへ全日空機で来た女として登場した芸者福竜は、ポライター塚本鉄三の開拓した類稀なM女性であるが、二月号でもへ縄に恋した女として誌上を賑わし、印画紙に焼付した極鮮明な写真を提供し謎の女性松本たえのM性を神秘を抜抉して頂きたい。

バイブ責めに呻く

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きわV
麻縄による後手の厳しい縛りでの自由を奪われた福竜は、埋没したパイプ股間責めの威力で全身を芋虫のようにしててもがき抜く。

両足挙げ柱宙縛り

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きるV
柱に後手で宙縛りの両足を頭上高く挙げさせられた福竜は、まるで赤ン坊がオシメを替えられる格好で、とめどもなく流し続ける。

強烈黒縄縛り地獄

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きるV
口を割る猿ぐつわで悲鳴の洩れをのを防ぎ黒縄が無惨にも白肌を喰い込めば縄に恋した女福竜は喘ぎ泣きながら虫のように這う。

責めに陶酔する女

猿轡と涕泣の瞬間

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きへV
松本に悶えていた福竜の口から、猿轡を解いた途端、激情は福竜の肢体をエビのように曲げさせた。

柱宙縛と逆さ責め

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きたV
完全な宙に浮かして柱に縛られた福竜の華奢な身体からは被虐のムードが溢れ頭を下にした逆さ縛りの肢体からは無惨さがにじむ。

足を吊られた悦虐

松本 大手札三枚一組 略号 五〇〇円
たえ 略号 八きほV
とめどもなく慈液を流しながら緊縛にもだえ抜く福竜の蠢めきを止めるために脚を吊り固定すれば上半身が更に激しい蠕動を起す。

◎以上は、いづれも直接ネガから印刷紙に焼付けた極鮮明な一粒選りの写真ばかりです。お申込みは前箱にて、大阪市阿倍野郵便局私書

一員にくわえてもらいたいと願っております。SMに対する理解力も場数もない私ですが、唯一のトリエとして写真だけはプロなみだと考えております。写真関係の仕事をしていするため機材も一応そろっており、車もポンコツですが所有しております。出来得れば貴社のためにつかわせてもらいたいと願っております。三月号のモデル志願（神奈川・砂川圭子）など非常に身近かに感じられるのですがよろしければ連絡仲介をおとり下されば幸いです。文章は決して美しいとは言いませんが普通には書けるつもりです。

（東京都・藤森 旭）
☆編集部より☆右のような通信がよくあるのですが是非二十枚前後の文章と数枚以上の写真の自作品をお送り下されば幸いです。それによって判断させてもらいます。

○ 私は28才の青年ですが3年程前からSMにあこがれ2、3種の雑誌を見てきました。今までのこの世の中にSMの趣味を持った人があるとは思っていませんでした。自分一人だけがこんな趣味を持っていたのだと思っていましたが今度奇クを拝見し初めて同

好者の方が沢山いる事を知り大変うれしく思いました。まだ2月号と3月号しか見ていませんが両月号とも非常に充実していて私の気持にぴったりでしたので既に発行されている号も全部買い求めて読ませてもらうと思っております。2月号、3月号とも縛り写真が多くて目を楽しませてくれました。殊に福井桃子さんの写真は白縄や黒ずんだ麻縄で後手首が高々とまるで交叉するように厳しく縛られているのは素晴らしく思わず胸がわくわくしました。3月号の50頁53頁2月号の189頁191頁の写真なんか絶妙です。後手首の縛り方がたがたのは全くだけませんが。高村浩子さんの縛り方もいいです。左右の両手首がしっかり交叉してがっちり括られています。それから2月号では塚本鉄三氏の「縄に恋した女」の松本たえさんもよかったです。特に27頁と44頁の写真なんか後手が頭近くまで挙って見事だった。この方は3月号には出ていなかったが是非引続いてルポに出てほしいものだ。47頁の陶酔の表情もふるいつきたくなる程美しいものだった。私は奇クの熱烈なファンになりたい。

（東京都・池田金三郎）

☆読者関連資料の部☆

只今読者実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気読者

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ読者

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かな)

読者責の極致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体読者シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体読者三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル読者

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い読者器で読者

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で読者をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

読者器と女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (ふい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (るは)

女体読者ブレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる読者液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大塚 啓子 略号 (ほい)

読者後の排便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円
大塚 啓子 略号 (へか)

読者される清子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
山原 清子 略号 (かる)

読者に興ずる女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円
山原 清子 略号 (かへ)

読者に悶える女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円
山原・東浦 略号 (かも)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円
山原・東浦 略号 (かて)

○ 小生三十三才になるS的男性です。思春期の頃からSにめざめ、いつとはなしに奇クの大ファンとなり今日に至っています。五年前に結婚しましたが、妻は至ってノーマルでM性は一向に発揮しません。従順な性質なので縛らせることは縛らせるのですが、まるで人形を縛っているようで、小生はいつも満足しません。誌上に載っている夫婦プレイ実行者の方々が羨ましくなりません。小生も一度でいいから熱烈な責めを女体に加えて楽しみたいと思うのですが、やはり相手がM性の女性でないと駄目なんでしょうか。それとも小生の飼育方法が下手なのでしょう。今のところは奇クを読むことで慰めています。先輩諸氏の御教示を賜われれば幸いです。

(静岡県・厚田隆二)

○ 私は三十一才のM男性です。貴誌二月号を大変、面白く拝見させていただきました。中でも淀氏のMモデル体験記を大変、興味深く拝見し、非常に羨ましく思い、ペンをとった次です。私はプレイ経験が一度もありませんが、S女性の方の御期待にそえるよう努力いたします。

私を奴隷として扱って下さる単、複数のS女性、または夫婦の方、ぜひ私の願いを、おとり上げ下さい。(愛知・麻曾男)

○ 二月号の峯田節子様。貴女はS Mに関心を持ちながら八年間も、よくガマンされましたね。ぼくも奇クなどの本を大分、以前から読んでおり、最近では誰かプレイの相手を探していますが、これだけはないなにかうまく、めぐり合うことができません。ところで、ぼくとプレイをしませんか。始めから思い切ったプレイに入らず、少しずつ貴女をM女性に飼育したいと考えています。ちょっとぐらいいの経験もあります。貴女はどんな責めを好まれるのか分かりませんが、羞恥責めを主として、色々な縛りや責め、貴女さえよければ、ムチ打ち、浣腸や剃毛なども、ぜひ、やりたいと思います。貴女がくれたになるまで責め続けたいと思います。もし、このチャンス逃がすと、もう機会がないかも分かります。よ。 (ちよっとオーバーかな) とにかく返事をお待ちします。(大阪・ふくべ)

○ 大阪の峯田節子様。お便りを拝

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円

山原・東浦

見して、矢も楯もたまらずペンをとりました。あなたの慎み深い、ひっそりした日常生活のふんいき

シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円

アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円

を、私は共感をもって理解することができました。私は二十九才の会社員です。経済的には、まづま

ずですが、独身です。私は街を歩いていても、若くてこの世で何のくったくもないといった風な女性には興味を持てません。かげのあつ、少しでも人生の苦しみを自分の胸の中にしまつて、しかも頭を上げて生き抜いているという女性が好きです。そういう貴女を開股縛りなどで責めることができればどんなに素晴らしいことでしょう。まず、浴室のタイルに貴女をころがし、うつぶせにしておいてその上、背中といわず、臀部といわず、私が重みをかけながら、くすぐります。貴女の顔に私が乗るかかって、貴女の乳首、おへそ、そして秘所をしゃぼんで洗つたりします。その後で浣腸をしてあげましょう。縛るのは、それからにします。私は日頃、つつしみや教養があつて、しかもプレイにあこがれてゐる峯田節子さんのような方にめぐり逢えたら、と思つて今まで見合いをしても全く結婚まで進む気にはなれませんでした。しかし、ぜひ峯田さんの羞恥にゆがむ表情を確かめて、あたりまえの結婚でも何でもするつもりです。貴女の目にこれがとまりましたらうれしく思います。

(大阪・山本潤治)

○ 愛知県の久保田道代様。二月号の読者通信にて貴女のことを知りしました。私は一昨年の三、四月号に「まさひすむす・てらぶていくす」というテーマで短文を掲載して頂きましたが、その後、しばらく筆をおいております。というのは、モデルであつた人がいなくなつてしまつたことと、文章のみでなく、写真をいれようとしても適当なモデル（容貌とかスタイルでなく、サディスティックな診療行為の撮影に応じて下さるという意味）が、見つからなかつたからです。二月号で貴女のことを知り、ぜひモデルを、お願いしたいと思ひます。「まさひすむす・てらぶていくす」は、すべてが実話でありフィクションではありません。今後とも筆を続けるために、ご協力をお願いいたします。

(名古屋市・泉一郎)

○ 愛知県の久保田道代様。私は二月号での貴女の文章を読み、ペンをとつたものです。貴女が縛られたり責められたりしたいと思つていられるように、私は女性を縛つたり責めてみたいと長年、思つておりました。私は常々、愛知県の

〔異色緊縛女性フォト集〕
△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高手小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女性

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をジロジロ見ないで

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔三

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しい白人緊縛の姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼藉のしとねの上で

大手札三枚一組 五〇〇円
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
座間 明子 略号△ほさ▽

女性の通信が少ないことを残念に思っております。私は、まだ学生的身であり、貴女以上に経済的にも恵まれず、従ってプレイの経験はありませんが、プレイの構想を、ひまにまかせて、いつも練っております。どうか貴女に、この夢を果たさせていただきたいと思ひます。私は時間的余裕と身軽さだけが取柄ですが、SMプレイについて貴女とともに研究して行きたいと思っております。貴女の満たされない生活に少しでも刺激を加えられればと思ひ、お便りしました。

(刈谷市・Sを好む男)

私は奇クを愛読して一年になります。毎月、発売日が待ち遠しくなりません。私は五十才で三人の父です。私は若い時から、大柄な女性に心が魅かれるのです。私は小柄な方ですので、通勤時に大きな女性が長いブーツをはき、階段を昇るのを見ると胸がときめき、一度でよいから、あの大きな尻で圧して欲しいと思ひます。二月号では今までに見なかった新しい写真を見ましたが、これで奇クも一歩、前進したと心から喜んでおります。それは川野香代様の女王様ぶりです。私も一度、女王様

の股間に入ってモデルの男性のようになりたいと思ひ、羨ましくなりました。写真のアンクルも良くとだけ残念なことは女王様のお顔が見られないのが物足りなく思われます。私は、このような写真が好きです。ぜひ、三月号にも載せて下さい。今年は日本にも、ポルノ時代が来ると思ひます。貴誌も、もっと、きわどい写真を載せて下さい。文面も大切ですが、一般の目を魅きつけるような写真も大切だと思ひます。しかし、なんと言つても二月号の写真は抜群です。浣腸写真で女性の大きい尻に器具が入っている処、または管が女性の尻より出ている処など、あるいはM男性の顔に神酒がそそがれている処は、撮れないものでしょうか。

(大阪・岸田M生)

愛知の久保田道代様。二十八才といえば、まさに、これからが女盛りですのに、一人でお悩みとは御同情いたします。SMプレイは私達、人間だけに許された深い探究の道です。このような高度のプレイは、相互の理解と信頼がなければいけません。勿論、御主人の許可も必要です。小生は、三十六才のサラリーマンで、SM画を描

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 略号△ほゆV
座間 明子 略号△ほゆV

悦慮にむせぶ美貌のひと

大手札三枚一組 略号△ほしV
渡部 好美 略号△ほしV

責められて恍惚境をさまよう

大手札三枚一組 略号△ほひV
渡部 好美 略号△ほひV

足挙げ縛りと開股縛り

大手札三枚一組 略号△ほもV
渡部 好美 略号△ほもV

超羞恥責めの極致

大手札三枚一組 略号△ほせV
渡部 好美 略号△ほせV

股間は何んでも知っている

大手札三枚一組 略号△ほすV
渡部 好美 略号△ほすV

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組 略号△ほめV
渡部 好美 略号△ほめV

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組 略号△ほみV
渡部 好美 略号△ほみV

蠟燭責めと臀部打ち

大手札三枚一組 略号△ほにV
渡部 好美 略号△ほにV

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組 略号△ほんV
渡部 好美 略号△ほんV

に縋が埋設して見えなくなるくらい緊縛し、モデルにしたり、責めて差し上げます。どんな女性でも美しくなっていくのがSMの不思議なところ。静岡と愛知では隣り合わせ、お便り下さい。

(静岡・志羽利也)

(堺市・藤田誠)

二月号の峯田節子様。大変、興味深く、お便りを拝見しました。小生は現在24才の独身者で、奇クを読みはじめてから早や三年になります。まだ一度もプレイの経験がなく、奇クを愛読して慰めております。小生は、股間縛り、あぐら縛りにして、くすぐり責め、バンプ責め、ローソク責めをするの

年々、奇ク誌発展のことは、よろこばしいかぎりであります。そして、ただそれを傍観しているばかりの私も、はずかしいというか残念な気持ちであります。冥い情念をかついたものが、語らうものもなく、心に蓄えているのは、それだけで大層、辛い仕事であります。このことを考えますれば、夫

婦プレイヤーの三浦氏等のなげきは、ずいぶん、ぜいたくな話であります。もちろん、私も婦人ととろけるようなプレイがしてみたい、と思っています。実際、塚本氏の写真、松本たえ女の快樂つきるところの顔は、えもいえず美しく、ここまですると、これは、ほんとうなのかしら、つまりつくり顔ではないのかしら、と考えたくなってしまうことです。しかし仮に今、私に一本の縄と全裸の婦人が与えられたとしても、私は恐らく、婦人が快感を感じられるような、縛りが出来るはずのものでありません。だから今、私はこう考えているのであります。同性異性の数人の、すくなくとも、この男は異常だなどと思わないですむ友人が欲しいと考えています。そして、よしんばそれが実際のプレイにまで達しなくとも、お酒でも飲みながら私たちの話を話したいと考えています。私はとうとう二十六になってしまいました。私は、できるなら二人きりというより数人で、男女入り乱れて、いたるところで結び合い、むすぶというのは、体の結合でもあり、縛り合いでもあり、いたるところで快樂を爆發させたいと願っています。どうか冥い情念を、はばかりなく話しあえる友人になっ

ていただきます。およびかけいたします。

(千葉県・利根川五郎)

二月号を拝見し、私は胸がときめいたのです。それはMモデル体験記でした。ポリニームのある川野香代嬢に責められている男性が羨ましくて仕方ありません。私に勇気があれば、私も淀真曾夫さんのように彼女に責められてみたいのであります。私は貴誌を読んでいる、いつも彼女のよう女王様で、いとも彼女のよう女王様が少なくないと思ひ、ペンをとりました。年上のSの女性を求めております。息の出来ぬぐらに女王様に責めていただきたいと思ひます。(富山・溝口成秋)

奇ク永年の愛読者ですが、初めてお便りいたします。私は三十七才で現在、五年間、同棲している一つ年下の女性がいます。私が努力してもSMプレイに興味を示しません。最初の頃は、私のすること、何とかついて来て、この分では、と私も喜んでいたのですが、一年、二年とたつうちに縛ったりするのを、いやがるよう

本誌愛読者美女緊縛姿態

膨満なる乳房責め 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひら	片足吊りにもたえる裸女 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひむ	初縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひな	縛りは大好きなのよ 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひれ	芳紀二十才の羞恥縛り 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひつ	恥かしき緊縛ポーズ 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 高村 浩子 略号 八ひよ	ローソク責めの妊娠腹 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へえ	これが妊婦縛りだ 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へふ	前手縛りの妊娠太鼓腹 大手札二枚一組 略号 三〇〇円 富田由美子 略号 八へら	臨月腹を縄で縛る 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へれ	稚妻の妊娠太鼓腹観賞 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へあ
---	--	--	--	---	--	---	---	---	---	---

メロンのような腹 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へよ	一糸まとわぬ妊婦像 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 富田由美子 略号 八へや	強烈エビ縛り地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 谷山久美子 略号 八ひあ	麻縄開股責め地獄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 谷山久美子 略号 八ひて	開股縛りの強烈さ 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひえ	白肌に喰い込む縄 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひま	後手縛り吊り上げに呻く 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひの	開股責めの醍醐味 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひこ	縄で汚す清純乙女の肌 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひふ	エビ責めに映える柔肌 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひう	捕われの美女は泣く 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 前田真知子 略号 八ひや
---	--	---	---	---	---	--	---	---	---	--

になり、近頃では「そんなこと、もういやよ」と、プレイを拒みます。そればかりか、普通の交わりすら、しかたなく私につき合っているという感じです。このままでは私の欲求不満は、つのるばかりで、五年間も同棲していながら、結婚にふみきれなかったのも、それが原因なのです。どうかSMに理解のあるM女性の方、結婚を前提として、つき合ってください。しょうか。私の特に好きなプレイは羞恥責めです。どなたか恥かしいところを私に晒け出させて下さい。

(大阪・辻川一郎)

大阪の佐藤満代女王様、徳満艶子女王様。ぜひ私を奴隷として、こき使ってください。お願い致します。私は一五八センチ、四十八キロ、三十二才、独身の小男です。年下の女性には全く興味ありません。それだけに私は年上の大柄な女性のエジキになりたいと思います。「神水、黄金、舌の奉仕」などは言うまでもありません。序の口です。女王様の強烈な臭いを持った巨大な臀部の直撃、または顔面の強烈な足げりなど、特に私は好みます。女王様の長時間、攻撃責めに堪える自信があります。私

はM百パーセントです。どうか奴隷として使ってください。

(横浜・高田保雄)

私は奇クを読み始めて五カ月しかなりませんが、本誌を読んで感激している二十八才の男性です。私は女性のスリッパ姿に魅力を感じています。スリッパ姿で緊縛、アヌス責めをすることを考えるとぞくぞくしてきます。和歌山の橋本文代様、松山の松本たえ様。私と一度、プレイしませんか。

(松山市・山本隆久)

小杉千恵さん。「パロディ」のイメージ募集に際し、最初にお便りを寄せて頂いた方に、お礼の手紙を差し上げようと思っていました。私の書くものには過褒気味ですが、大いに参考になりました。あなたのイメージにある「自分の指で自分を慰めるところを見物される」というのは、まことに結構です。昭和二桁の私の想像をこえました。これを、ふくらませ、いつか「パロディ」にまとめたいと思います。ご希望どおり、甘く切なく書くようにしましょう。ただ今、数回分の書き溜めがあります。本当のところ、女性のもつ生

惨酷海老責め胡坐縛り

大手札三枚一組 略号△ひす▽ 四〇〇円

亀甲縛りと後手柱縛り

三浦 純子 略号△ひす▽ 四〇〇円

足挙げ開股責めを拒む

大手札三枚一組 略号△ひせ▽ 四〇〇円

臀部責めの悦楽境

三浦 純子 略号△ひし▽ 四〇〇円

来的な羞恥の気持が、私に分かつているとは思えません。たぶん、こうだろう、というぐらいのところですので、少しばかり不安でないこともない。成熟した女性の、あなたに、モニターになって頂きたいものです。私は、ごく普通のいわゆるSといったところでM性なし。グロテスクは取りません。美しいものが、よろしい。そんなことより、素朴な質問を一つ——

いうところのプレイの終わりはセックスに極まるものなのでしょう。私は、そうだと考え、そのように書いていますが、もしかすると違うのかもしれない。見当違いも甚だしいのかもしれない。そうであれば、たった今、書いているものの方向を変えてゆかねばならない——これが、少しばかりの不安のゆえんです。あなたに問いか

三浦 純子 略号△ひも▽

髪を撫でていじめる

大手札三枚一組 略号△ひさ▽ 四〇〇円

化粧室とトイレ責め

三浦 純子 略号△ひん▽ 四〇〇円

股間縛りと臀部責め

大手札三枚一組 略号△ひゆ▽ 四〇〇円

けてみたい多くの事を差しておいて、このあたりで止めますが、羞恥縛り図を創り出す試みにイメージを、お貸し下さった、あなたにお礼を申し上げたいと思います。

(山光 純)

思いきって、お便りします。三月号で枝川様がSMを愛する者の気持を一人に話しかけたい、呼びかけたいという人恋しさにSMの疎外感から、うちひしがれる」というような意味のことを述べていらっしゃるようですが、私の今の気持が、そうなのです。まして私が若い女性であるだけに、一層みじめなのでございます。私がMになつてしまった原因は、大阪に田舎から出てきたのと同じ理由です。私が田舎にいた時、同じ村の若い男達七人に白昼、納屋へかつぎこ

次号(五月号)は三月二十五日に発売いたします

まれて裸にされ縛られて六時間も
廻りものにされたことなのです。
こんな不潔な女でも愛情をもって
SMの対象になさって下さる方な
ら、どんなお年寄の方でも総べて
を捧げるつもりです。可哀そうな
君子をもっと責めて下さいませ。
鞭でも剃毛でも浣腸でも、もっと
ひどいことでも我慢します。

(大阪市・石橋君子)

高村浩子様。貴女のM女通信、
とても楽しく読ませていただきました。
貴女は心底からM女性です
ね。私は貴女の大ファンです。以
前から貴女の緊縛姿を沢山、拝
見しましたが、どれもこれも素晴
しいものばかりです。貴女を自由
自在に縛り、思いのままに責めさ
いなくともできる塚本氏が、と
ても羨ましく、私も塚本氏にあや
かりたくペンをとりました。私は
貴女のような丸顔の、ふっくらし
た顔だちの女性が好きです。しか
し、なかなかM性の女性は、そう
簡単に見つかるものではなく、日
々、悶々とした暮しをしております。
私は貴女を縛ってみたい、思

いきり責めさいなってみたい。牝
犬の浩子を剃毛、浣腸、くすぐり
あぐら縛り、狸縛り、こぶつき股
間縄などを行ない、更に大人の玩
具などを使用して、いじめてみた
い、縛ったまま入浴、トイレを使
用させてみたいと思います。これ
が私の、いつわらぬ気持ちです。貴
女は狭いアパートで一人暮らしとの
こと。さぞ淋しいことだろうと思
います。そんな貴女のM心を燃え
上がらせてみたいと思います。ど
うでしょう、高村様。私とプレイ
しませんか。私は三十六才の平凡
なS男性です。

(兵庫・松岡弘生)

南加津子様。御返事うれしく拝
見いたしました。今は大きな幸福
感につつまれてペンを進めていま
す。一カ月という月日の長さに言
いしれぬ、もどかしさを感じなが
ら……。私は、きつと貴女の本当
の姿と虚像の間にある落差に心を
奪われてしまいうでしょう。純情な
貴女にハレンチな言葉を言わせて
みせます。よりよき友になりたい
と思います。

(名古屋・三宅具隆)

三月号の砂川圭子嬢。ぜひ私の
モデルになって下さい。私は三十
一才になる、まじめな独身男性で
写真撮影、DPEも出来ますので
二、三日中に写真になります。化
粧品、下着類も多少、揃えてあり
ます。いつでもよろしいので、ぜ
ひ、おねがいします。

(横浜・武田健一)

東京の佐野朱美さん。東京のア
パートで独り暮らしで大変だと思
います。ぼくも同じ独り暮らしで、淋
しさを本誌を読むことで、まぎら
わしております。貴女となら楽し
い。プレイが出来るとな気がし
ます。

(東京・長谷川 勉)

松本一彦様。十二月号の「妊婦
フォトを拾う」は興味深く読ませ
ていただきました。以来、文中に
御紹介のものを必死に探しました
が、今もって皆目見当もつかず途
方にぐれています。とくに「ア・
チャイルド・イズ・ボオン(赤
ちゃん誕生)」は、貴兄の説明によ
り何としても入手したく、あきら
めきれず悶々としています。出版
社発行年次、編集者の正確な綴り

など御教示ねがえないでしょうか

(大阪・小倉悠紀)

奇クサロンに深田菊子撮影試案
を採用下さり、ありがとうございます
ました。しかし試案は試案にすぎ
ず、菊子撮影の通知なきままに年
も改まってしまい、残念に思っ
ております。かつて、塚本鉄三氏の
技術指導のもと、全裸モデル撮影
会を開催されたことを奇クの旧号
で知り、ぜひ、緊縛モデル撮影会
が愛読者有志のもとに行なわれる
ことを願ってやみません。たとえ
まねごとであれ、菊子や慶子など
を始めとする奇クの美しいM願望
女性を全裸縛りにして、浣腸器や
オマルなどを配して写すことはマ
ニヤの夢です。なにとぞ、よろし
くおねがいたします。

(神戸市・国川栄一)

都内に住む二十三才のM的な独
身女性でございます。S男性の真
面目な方と御交際致したく存じま
す。鞭打ちのような痛みのもとに
います責めは嫌いですが、胸がド
キドキするような羞恥責めなら喜
んでお受け致します。身長百六十
一センチ、体重四十九キロ、バス
ト八十八センチ、ウエスト五十八

V

○未熟な人間の常で、そういう作品にぶつかると、ひととき思案にくれて、掲載候補分と保留分との整理棚の間をウロウロさせられたことがイマイマしく、一息ついてても未練が残る、何がタジタジウロウロの原因かと思いついた末、なんのことはない、活字にするにはじっくり検討を要するから……にすぎないことに気付くのです。つまり編集員としての臆

〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これら
 と思う作品は必ず誌上に取り
 上げます。腕試しの意味で齎
 って御投稿願います。採用篇
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したもので

ら話題の内容は問いません。
忌弾なき皆さまの御意見をお
待ちします。採用篇には二千
円以上の賞金を呈します。
△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新

單行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。
 ◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故悪しからず御諒承願います。
 ◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿△

卷末の通信欄は読

ま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

一月分(1冊)四〇〇円△送32円▽
三月分(3冊)一二〇〇円△送共▽
半年分(6冊)二四〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包は毎月二十日前後印刷完成と同時に局の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

昭和四十七年三月二十日 印刷
昭和四十七年四月一日 発行

編纂人 杉原虹児
發行人 箕田京二
印刷人 北村俊夫
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

郵便番号 558
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四二年四月二〇日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、クラヒヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各條例に指定されないうち、充分に注意して編集したてており、すが、本来成人向として發行を企図して、おります。關係上、十八才未満の方には、絶対販売さらないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。